

平成 29 年度

京都女子大学大学院文学研究科史学専攻 博士論文

戦前期ブラジル・サンパウロ州ノロエステ地方  
と日本語新聞 ―香山六郎と聖州新報―

京都女子大学大学院 文学研究科 史学専攻  
大学院特別研修者 半澤 典子

# 目 次

## 序 章 研究目的および研究課題・研究方法

|                  |    |
|------------------|----|
| 第1節 研究目的         | 1  |
| 第2節 先行研究の検討      | 2  |
| 2-1 先行研究の検討      | 2  |
| 2-2 香山六郎に関する先行研究 | 7  |
| 第3節 研究課題と研究方法    | 11 |
| 3-1 研究課題         | 11 |
| 3-2 研究方法         | 11 |
| 第4節 研究内容         | 12 |
| 第5節 本論の構成        | 15 |

## 第1章 戦前期ブラジル移民概説と時期区分

|                            |    |
|----------------------------|----|
| 第1節 戦前期ブラジル移民概説            | 16 |
| 第2節 移民送出時期区分と各時期のノロエステ沿線開発 | 18 |
| 2-1 区分方法                   | 18 |
| 2-2 各時期の概要とノロエステ沿線開発       | 21 |

## 第2章 香山六郎の移動の原点

|                  |    |
|------------------|----|
| 第1節 誕生から渡航決意まで   | 31 |
| 第2節 海・陸軍士官への夢と挫折 | 34 |
| 第3節 徴兵令と徴兵忌避     | 36 |
| 第4節 ブラジル渡航の真相    | 42 |
| 第5節 小括           | 47 |

## 第3章 渡航者意識から移民意識へ

|                     |    |
|---------------------|----|
| 第1節 皇国殖民合資会社の内部事情   | 48 |
| 1-1 遅れた出港           | 48 |
| 1-2 移民船生活           | 54 |
| 1-3 皇国殖民合資会社サンパウロ支店 | 56 |

|     |              |    |
|-----|--------------|----|
| 第2節 | 移民意識への転換     | 59 |
| 2-1 | サン・ジョアキン耕地   | 59 |
| 2-2 | サンパウロ生活      | 61 |
| 2-3 | ジャタイ耕地事件への関与 | 63 |
| 第3節 | 開拓者・その喜びと危機  | 65 |
| 3-1 | 結婚・家長の決意     | 65 |
| 3-2 | モンソン植民地での借地農 | 66 |
| 第4節 | 上塚周平との訣別     | 68 |
| 第5節 | 小括           | 69 |

#### 第4章 聖州新報創刊から廃刊まで、戦後の香山

|     |                                      |    |
|-----|--------------------------------------|----|
| 第1節 | 本章の目指すもの                             | 71 |
| 第2節 | 聖州新聞創刊(バウルー時代:1921-1934年)            | 72 |
| 2-1 | 新聞創刊の要因                              | 72 |
| 2-2 | 日本語新聞概要                              | 75 |
| 2-3 | 聖州新報概観                               | 79 |
| 第3節 | 地方紙『聖州新報』のアピールしたもの                   | 84 |
| 3-1 | 移植民文芸への特化                            | 84 |
| 3-2 | 地元直結の新聞を強調:八五低資問題                    | 86 |
| 3-3 | 年鑑類の発行                               | 87 |
| 第4節 | 『聖州新報』の発展と廃刊<br>(サンパウロ時代:1935-1941年) | 88 |
| 4-1 | サンパウロ市への進出                           | 88 |
| 4-2 | 新聞条例への対応:二世社長とポルトガル語版の挿入             | 92 |
| 4-3 | 廃刊の決断                                | 94 |
| 第5節 | 戦後の香山の動向                             | 97 |
| 5-1 | 著作への執念                               | 97 |
| 5-2 | 香山とその家族                              | 98 |
| 第6節 | 小括                                   | 99 |

|            |                                     |     |
|------------|-------------------------------------|-----|
| <b>第5章</b> | <b>ブラジル・ノロエステ地方における日本語新聞の果たした役割</b> |     |
| 第1節        | 初期移民と日本語新聞                          | 103 |
| 第2節        | なぜノロエステなのか:<br>日本人移民と日本語新聞創刊        | 104 |
| 第3節        | 1910-1930年代のサンパウロ州に<br>おける主要日本語新聞   | 107 |
| 3-1        | 主要日本語新聞とその特性                        | 107 |
| 3-2        | 主要日本語新聞総論                           | 116 |
| 第4節        | 新聞の指したものとその影響                       | 120 |
| 4-1        | 新聞の構成内容から見えるもの                      | 120 |
| 4-2        | 販路拡大から見えてくるもの                       | 122 |
| 第5節        | 小括                                  | 123 |
| <br>       |                                     |     |
| <b>第6章</b> | <b>ブラジル移民知識人香山六郎の言動</b>             |     |
|            | 一移民俳句と日本語新聞を通して                     |     |
| 第1節        | 初期移民の文芸活動                           | 125 |
| 第2節        | 初期移民俳句と移民知識人                        | 126 |
| 第3節        | 新聞俳句と新聞俳壇                           | 129 |
| 3-1        | 新聞俳句                                | 129 |
| 3-2        | 新聞俳壇                                | 134 |
| 第4節        | ブラジル俳句会の繁栄と分裂                       | 137 |
| 4-1        | 俳句会の繁栄                              | 137 |
| 4-2        | 俳句会の分裂と香山の俳句観                       | 138 |
| 4-3        | 季題収集                                | 139 |
| 第5節        | ヴァルガス政権下での日系社会と俳句                   | 144 |
| 第6節        | 小括                                  | 145 |
| <br>       |                                     |     |
| <b>第7章</b> | <b>コーヒー干害低利資金貸付問題と移民政策</b>          |     |
| 第1節        | 初期移民による請願運動と日本政府                    | 148 |
| 第2節        | 八五低資問題の発端:コーヒー干害と土地売買               | 149 |
| 第3節        | 日本人移民地側の対応—上塚周平と請願運動—               | 153 |



|                             |                  |     |
|-----------------------------|------------------|-----|
| 第4節                         | 日本政府による資金貸付とその背景 | 157 |
| 第5節                         | 貸付と償還            | 160 |
| 第6節                         | 事後処理と独立自営農民の動き   | 163 |
| 第7節                         | 小括               | 165 |
| <br>                        |                  |     |
| <b>終章 成果と意義、新たな課題と今後の展望</b> |                  |     |
| 第1節                         | 本論のまとめ           | 168 |
| 第2節                         | 本論の成果と意義         | 171 |
| 第3節                         | 新たな課題と展望         | 173 |
| <br>                        |                  |     |
| 参考文献                        |                  | 177 |
| <br>                        |                  |     |
| 初出一覧                        |                  | 188 |
| 卷末資料 香山六郎・ブラジル日本移民関係年表      |                  | 189 |

## 凡 例

1. 引用文中の旧仮名遣いや旧字体は、可能な限り新仮名遣いや新字体に改めた。
2. 年号の記載について、引用文中の元号は尊重し、それ以外は原則として西暦で記載した。
3. 頻出する人名や用語については、初回のみ正規に記入し、次回以降は、人名については「姓」のみを、用語については慣用化されている略称を使用し、文中にその旨を指示した。

(例) 『香山六郎』⇒『香山』      『上塚周平』⇒『上塚』  
『聖州新報』⇒『聖報』      『日伯新聞』⇒『日伯』  
『伯刺西爾時報』⇒『時報』

## 序章 研究目的および研究課題・研究方法

### 第1節 研究目的

1908 年以来、第 2 次世界大戦前後を除いて 1972 年の移民船廃止まで、日本とは対蹠点にあたるブラジルという遠隔地へ向けて、日本人移民送出事業は展開されてきた。その中で 1908 年から 1924 年に至る期間は、移民たちは、移民送出関連会社とブラジル・サンパウロ州との契約移民として送出されており、日本政府の直接的関与はなかった。

本論では、ブラジル日本人移民史の中で、この 1924 年以前の移民たちが、ブラジルの公用語であるポルトガル語を理解できぬまま、日本とは全く異なる政治体制・文化・習慣と遭遇し、それらとの相克、時にそれらを許容し変容しつつ次第に融和して行く過程で展開した言動を、いかなる手段をもって表現し、ブラジル日本人社会の形成・変容・発展にかかわってきたのかを取り上げる。すなわち、初期日本人移民の自主的で発展的な行動を提示し、ブラジルへの移民送出の原点はコーヒー農園の契約労働者としての越境にあり、契約労働者からの解放は、土地取得を前提としたブラジル国内での移動（*mudança*：ムダンサ：転耕ともいう）を促し、その移動行為の発現は、すべて自己責任を課された民間主導であったことを明らかにすることを目的とする。特に初期移民でノロエステ地方に生活拠点を置き、日本語新聞『聖州新報』（以後、『聖報』）を創刊した移民知識人・香山六郎の言動などをもとに香山個人史を構築し、ノロエステ地方を中心とした戦前期ブラジル日本人移民史における民間主導論を提示し、民間主導を支援してきた日本語新聞の再評価と香山像の再構築を成し遂げるものである。

論述にあたり、1910 年代半ばから日本人が集住し始めたサンパウロ州ノロエステ地方を事例にするが、展開の過程でのサンパウロ市への移動も研究の領域とする。

2012 年、日本移民学会年次大会において「共生への試行」と題する発表を行ったことがある<sup>1</sup>。筆者のブラジルでの活動「この人は誰？(Quem é esta pessoa?)」の人名の判明した写真資料を分析し、日本人移民の活動地域がサンパウロ市を中心とする、半径 300 km 以遠に偏在していたことを示したものであった(図 6-1)。このサンパウロ市から 300 km 以遠の地とは、1908 年以來、日本人移民がコーヒー園の契約労働者(コロノ:colono)として入耕したモジアナ地方、その後コロノから自耕地を所有する独立自営農民が集住したノロエステ、アルトパウリスタ、ソロカバナの各地方であった<sup>2</sup>。そのうち 1915 年以降、日本人人口の集積が著しかったのは、ノロエステ鉄道の起点・パウルー以遠のノロエステ地方であったとした。しかし、データ分析の曖昧さを指摘され深く反省させられた。この時の反省が今回の研究の原点にある。

## 第 2 節 先行研究の検討

### 2-1 先行研究の検討

移民研究会編『日本の移民研究—動向と文献目録 I (明治初期—1992 年 9 月)』によると、日本人の移民の歴史は、ハワイへの明治元年の移民、いわゆる「元年者」を嚆矢とし、その後アメリカ合衆国、カナダ、南米、オーストラリア、満州などの地域に自由移民や契約移民、さらには国策移民といった形で送出され、1960 年代には終わりを遂げたとある<sup>3</sup>。この記述では、アメリカやカナダ、オーストラリアなどは国名で表記されているが、南米は地域名での表記に留まっている。調査時の資料の量や整理の方法に依るのかもしれないが、「南米」という国家は存在しない。地域分類の正確性に欠けた表現であった。また、移民送出事業は 1960 年代で終了したと記されているが、ブラジルの場合、1973 年 3 月 27 日、最後の移民船「日本丸」が 285 名の移住者を乗せてサントス港に着岸してお

---

<sup>1</sup> 2012 年 7 月 1 日、日本移民学会第 22 回年次大会、関西学院大学。

<sup>2</sup> モジアナ地方は、モジアナ鉄道沿線地域、アルトパウリスタは、パウリスタ延長線沿線地域を指す。

<sup>3</sup> 移民研究会『日本の移民研究—動向と文献目録 I (明治初期—1992 年 9 月)』(明石書店、2008 年)、9 頁。

り、表記との食い違いが明らかになってしまっている<sup>4</sup>。資料収集・研究への疑問を持つと同時に、移民研究の多様性と複雑性を実感する。また、森本豊臣は「日本における移民研究の動向と展望」の中で、国立情報研究所の総合検索システム GeNii を用いた分析から、近年の日本における移民研究の動向を分析・紹介している<sup>5</sup>。特にさまざまな研究分野の中で歴史学からのアプローチが圧倒的に多いことを示したことには関心を抱かされた。例えば、坂口満宏には、国策移民事業の特質について詳細なデータ分析による研究「日本におけるブラジル国策移民事業の特質」がある<sup>6</sup>。この研究は、1927 年以降のブラジル国策移民に関する研究であり、本論が研究対象とする初期移民時代とは研究対象時期が異なるが、出移民の分析手法として参考になるものであった。しかし、移民送出国側からの分析であるため、移民受け入れ国側の受け入れ事情までは考慮されていない。これは、ブラジル移民研究についてのアプローチの違いによるものであり、何を目的とするかによって生ずる研究手法上の差異であると認識した。

一方、近年の日本における移民研究は、飯野によれば、歴史学や地理学、社会学、文化人類学といった一概念による研究分野の範疇から、複数の学問分野にまたがった *interdisciplinary* な研究領域への拡大が見られるという<sup>7</sup>。多文化社会論や国際移動論などがその類とされる<sup>8</sup>。

では、ブラジルにおける移民研究はどのような経緯をたどって今日に至ったのであろうか。ブラジルにおける移民研究は、1950 年、サンパウロ人文科学研究所が研究活動を開始したことからはじまったといわれている。

---

<sup>4</sup> 半田知雄『ブラジル日本移民史年表』（サンパウロ人文科学研究所、1976 年）、167 頁。なお戦後の移民は、基本的には「移住者」と表記される。外務省移住局「〔移民〕と言う呼称の代わりに〔移住者〕とするの件」『本邦移住法規並びに政策関係雑件』j0007、（外交史料館、1995 年）。

<sup>5</sup> 森本豊臣「日本における移民研究の動向と展望」『移民研究年報』第 14 号（日本移民学会、2008 年）

<sup>6</sup> 坂口満宏「日本におけるブラジル国策移民事業の特質」『史林』97 卷 1 号、2014 年。

<sup>7</sup> 飯野正子「移民研究の現状と展望」公開講座「日本人と海外移住」（海外移住資料館、2016 年 2 月）より。

<sup>8</sup> 南川文里『アメリカ多文化社会論』（法律文化社、2016 年）や米山裕・河原典史編『日系人の経験と国際移動』（人文書院、2007 年）などが事例として掲載されよう。

る<sup>9</sup>。第 2 次世界大戦後のブラジル国内における日本人同士の社会的混乱などから、ブラジルにおける日本人の移住史や日系コロニア社会史の研究がおざなりになっていることを憂えた中尾熊喜が、15 年間にわたる資材を投入していた研究会を、公的機関として設立する努力を重ねてきた結果で、「ブラジル研究叢書」と題して 4 冊の報告書を刊行していた。すなわち、第 1 集「ブラジル社会学の展望」（1953 年）、第 2 集「ブラジルの移民問題」（1954 年）、第 3 集「ノルデステの風土と社会」（1956 年）、第 4 集「南リオ・グランデの社会と産業」（1963 年）であった。これらは社会学や地理、歴史、移民政策などの分野を研究対象とした共同研究として発表されていたようで、ブラジル日系人社会に真摯に問題を提起していた。

1965 年 2 月には、サンパウロ人文科学研究所として正式に活動を開始し、毎年研究年報である「研究レポート（ANUÁRIO）」を刊行するようになった。1966 年の「研究レポート」第 1 号（ANUÁRIO 1）には、アンドウゼンパチによる『近代移民の社会的性格』と題する大論文のほか、河合武夫『“コロニア人の理想像” への試み』、半田知雄『趣味論－コロニアの趣味についての反省』、斉藤広志『ブラジル社会と出世主義』の 4 本が掲載されている。掲載論文の内容は多種であるが、戦後のブラジル日系社会における日系人像や日系社会の展望などが訴えられており、ブラジルに根付こうとする日系人へのアプローチであったと捉えられる。

同年 3 月の創立総会の議事録には、会長・中尾熊喜（熊本県出身）とあり、専門委員会員には、研究担当理事・斉藤広志を筆頭に、アンドウ・ゼンパチ、半田知雄、宮尾進、玉木勇治、佐藤常蔵、前山隆なども含まれていた。また、香山の長男・香山夫陽や長女・セリーナ・露子の夫である尾関興之助、次女・ジェニー・秋子の夫である脇坂勝則なども含まれており、第 4 章で述べる香山の家庭が、日本研究に如何に関心を寄せていたかがわかる<sup>10</sup>。設立当初は大学の付属機関でもなく、公共の予

---

<sup>9</sup> サンパウロ人文科学研究所（Centro de Estudos Nipo-Brasileiros, Rua São Joaquim, 381 Cp 30023 SÃO PAULO, BRASIL）「研究レポート（ANUÁRIO 1966, 1.）」、1 頁。

<sup>10</sup> サンパウロ人文科学研究所、前掲書 9）、102-103 頁。この設立当初から香山の長女や次女も会員として参加していたといわれる。

算もない研究所ではあったが、ブラジル社会と日本社会を繋ぐ研究所として独自の成長・発展を遂げ、現在に至っている。

以後の研究レポートを概観すると、1970年代には、社会・経済の視点からの日系社会に関する論文と日系社会に何らかの貢献をした人物の人物評伝（個人史）などが見られる。前者の例として『研究レポートⅤ』（1970－1971年）には、斉藤広志『ブラジルの都市と農村』や山田睦男『ブラジル日系人の社会経済的地位』など経済・社会をテーマにした論文が掲載されており、高度経済成長期のブラジル社会における日系人の生活の指針を反映していたといえる。一方、後者の例としては『変貌するブラジル日系社会－中尾熊喜追悼記念論集－』（1978年）、『下元健吉一人と足跡－』（1979年）などがその好例である。実はこの2冊が刊行させる前の1976年に香山六郎の自伝『香山六郎回想録－ブラジル第一回移民の記録－』（以後、『回想録』）がサンパウロ人文科学研究所から出版されていることから、1970年代のサンパウロ人文科学研究所の研究テーマの一つとして、ブラジル日系社会に何らかの貢献をした人物の個人史研究があったことがわかる。

『研究レポートⅤ』（1970－1971年）に、日本語新聞にかかわる資料ノートがある。半田知雄の現地調査に基づく「ブレジョン植民地と星名謙一郎」である。半田は、星名が創刊したという新聞の確認のため、1970年にこの地を訪れ、植民地の古参・滝川省三氏（当時79歳）から実物を見せていただき、初めて確信を得たという。半田によれば、〔それは謄写版刷りの雑誌型（16.5cm×24cm）の大きさで、30ないし40頁のものであった。週刊とは駐してあったが、やはり「南米」というのがその名であった。ポルトガル語ではO NAMBEIで、やはりその下に *Semanário* と駐してある。これを見ても週刊「南米」とするのが一番正しいということになる〕と断言している。この言葉から筆者も第5章での記述に確信を得たのであった。

1980年代には日系社会の文化に関する研究へと研究の傾向に変化が見られるようになってきた。例えば『研究レポートⅧ』では、文化伝承の問題を中心テーマとしていた。日本移民70年祭を機として、移民世代の減少・高齢化が著しい一方、後続移住者減少の状況下で、移民一世たち

が担ってきた日本文化をどのように日系後継者に伝承しブラジル社会に浸透させていくかが、日系コロニア社会における今日の重大関心事であるとの考えからであった。したがって論文にも半田知雄『戦前における文化伝承問題』、河合武夫『戦前移住の一世とその 2 代目たち』、高山直巳『試論：日本移民の文化適応』などの文化論が掲載されていた。移民史としては、ブラジル日本文化協会の『ブラジル日本移民七十年史』（1980 年）が挙げられる。縦書き表記は移民一世への配慮であろう。新聞に関しては、「第Ⅱ部—Ⅳ その他の文化」に刊行文化として清谷益次の分析が掲載されている。その中で清谷が刊行物のなかでの日本語新聞の功績を詳述しているばかりでなく、ブラジルに関する日本での刊行物についても詳述しているところに特徴がある。日本とブラジルの交流が経済の発展と共に活発化してきた証ともいえよう。

1990 年代になり、文化論も多様となり、食文化論、教育論、メディア論などが登場するようになった。メディア論については、清谷益次がその中心で、彼は、戦前は『聖報』、戦後は『サンパウロ新聞』の記者として、また短歌の愛好者として活躍した人物であったことから、1927 年当時から香山との関わりをもっていた。そのことから『聖報』をはじめ当時の日本語新聞について、詳述した論文を著わすようになっていた。この件については次項で詳述する。

この時期の移民史としては、ブラジル日本文化協会の『ブラジル日本移民八十年史』（1991 年）が挙げられる。この時期の日系人は 1 世から 5 世まで含めて 120 万人を越えていたといわれている。その日系人をブラジル国を構成する一員として温かく迎え入れてくれたブラジルに対し感謝の意をこめて、日本語とブラジル語（ポルトガル語）の両言語を用いて編纂されており、日本語版も横書きとなった点に特徴がある。内容は 2 部構成で、第 1 部「日本移民 80 年の歩み」、第 2 部「日本移民のブラジルに及ぼした影響」となっており、第 1 部第 2 章に、自立への動きとして清谷益次による新聞発行に関する文章がある。また、第 2 部では農・商・工業分野での貢献と教育・文化・宗教について記述され、日本とブラジル間の経済・文化交流を通しての結びつきの強まりを強調しているところにその特徴を認める。

2008 年のブラジル移民 100 年を契機に、ブラジル移民研究の傾向が次第に変化し、森幸一<sup>11</sup>によれば、近年の研究は、言語研究と文化研究が半数を、宗教研究が約 4 分の 1 を占めるという<sup>12</sup>。このことは、ブラジルの日本人社会が移民一世の時代・すなわちブラジル日本人社会から、二世や三世が主流となった今日のブラジル日系社会への確かな変化を諸論文等も反映してきている証といえよう。この時期には移民 100 年に関する多種の刊行物が生れた。ブラジル日本移民百周年記念協会・ブラジル日本移民百年史編纂・刊行委員会編の『ブラジル日本移民百年史』全 5 巻(2010 年－2013 年にかけて順次刊行)は、歴史に残るものである。第 3 巻「生活と文化編(1)」の第 2 章に深沢による「日系メディア史」(80-116 頁)がある。戦前戦中・戦後に分けた日本語新聞の分析がなされている。

## 2-2 香山六郎に関する先行研究

ブラジル移民研究の中で香山論、もしくは日本語新聞に関する先行研究はどのようなであろう。香山は、第 1 回伯刺西爾行移民船「笠戸丸」の一乗船者・自由渡航者であった<sup>13</sup>。香山は契約移民と共に 1908 年ブラジルに渡り、1976 年に 90 歳で死去するまで、ブラジル日本人社会の中で『聖報』の創刊、『のろえすて日本人年鑑』をはじめとする各種年鑑、移民史、インディオの研究、聖報俳壇の創設など多面的に活動をしてきた初期移民知識人の一人であった<sup>14</sup>。

ブラジル日本移民史研究の中で、戦前の日本語新聞についての研究は多いとは言えない。戦前の日本語新聞に関する記述としては、香山六郎

<sup>11</sup> 森幸一：栃木県宇都宮市生まれ(1955 年～)。明治大学大学院政治経済学研究科修了。1987 年海外開発青年としてサンパウロ人文科学研究所に派遣され、日系人人口調査のコーディネーターに従事。1993 年、カンピーナス州立大学大学院社会人類学専攻修了。サンパウロ大学哲学・文学・人間科学部教授。『目で見えるブラジル日本移民の百年』(共著)、(風響社、2008 年)他多数の論文あり。

<sup>12</sup> 森幸一「ブラジル日本移民・日系研究の回顧と展望」丸山浩明編『ブラジル日本移民百年の軌跡』(明石書店、2010 年)、52-61 頁。

<sup>13</sup> 皇国殖民合資会社「明治 41 年 4 月 27 日、笠戸丸、6 月 18 日サントス港着 第 1 回伯刺西爾移民渡航者名簿－非移民名簿」、(アジア歴史研究所マイクロフィルム、2013 年検索)。

<sup>14</sup> 1886 年 1 月 5 日生～1976 年 4 月 6 日没、熊本県熊本市出身、サンパウロ市グアラシ街にて死没(享年 90 歳)。



自身が 1949 年に刊行した『移民四十年史』<sup>15</sup>が嚆矢とされる。同史「第 8 章の 1 新聞及び雑誌」の中で香山は、1916 年以降創刊された『南米』や『日伯新聞』（以下、『日伯』）、『伯刺西爾時報』（以下、『時報』）、『聖報』、『日本新聞』、『アリアンサ時報』、『ノロエステ民報』などについて暦年式に簡便に記述している。その後は、永田稔の『ブラジルに於ける日本人発展史』下巻などに香山に関する言及があるが、その手法は香山の手法に加えて多少の新聞間の比較検討文を記載しているに過ぎない<sup>16</sup>。近年では前山隆や、清谷益次、深沢正雪、飯田耕二郎などの研究がある。前山は『日伯』社主であった三浦鑿について、ライフヒストリーの手法で『風狂の記者－ブラジルの新聞人三浦鑿の生涯－』を詳述しているが、ブラジル日系人の精神史は三浦を抜きにしては語れないとも述べているほどである<sup>17</sup>。

清谷は戦前の日本語新聞の社主や新聞の記述上の特徴についての詳細な比較研究論を、サンパウロ人文科学研究所研究論集『人文研』の中で「新聞は移民にとって何であったか」と題して 2 回シリーズで詳述している<sup>18</sup>。その中で清谷は、週刊『南米』、『時報』、『日伯』、『聖報』、『日本語新聞』の 5 紙について、①生活指導、②子弟の教育、③排日問題、④移民問題と官憲への提言の 4 項目について比較論評をしている。この論評からは日本語新聞が社主の主観に左右されているため、時に競争相手である他紙の記事を酷評することで自紙の宣伝としていたことなど、興味深い分析が見られ、本論作成上の貴重な資料となった。

<sup>15</sup> 香山六郎『移民四十年史』（私家本、1949 年）、407-410 頁に「第 8 章 コロニア出版史、新聞及び雑誌」として体系的に記述されている。この形式は改良を加えられながら後の移民 70 年史や同 80 年史、年鑑類等に踏襲されてゆく。

<sup>16</sup> 永田稔『ブラジルに於ける日本人発展史』下巻（ブラジルに於ける日本人発展史刊行会、1953 年）、257-268 頁。ブラジルで調達してきた本誌の編者は、一般に言われている青柳郁太郎ではなく、永田稔であることを確認しておく。青柳郁太郎は、本誌の上巻の編者だけのようだ。

<sup>17</sup> 前山隆の『非相続者の精神史－或る日系ブラジル人の遍歴』（お茶の水書房、1980 年）、『ドナ・マルガリータ・渡辺－移民・老人福祉の五十二年』（お茶の水書房、1996 年）、『風狂の記者－ブラジルの新聞人三浦鑿の生涯』（お茶の水書房、2002 年）は、前山ライフヒストリー三部作と云われている。

<sup>18</sup> 清谷益次「新聞は移民にとって何であったか」『人文研』第 2 巻（その 1）、第 3 巻（その 2）（サンパウロ人文科学研究所、1998 年・1999 年）。

深沢は戦後ブラジルに渡った新聞人で、積極的な取材に基づく記事を書いている。『ブラジル日本移民百年史』に「日系メディア史」の全般論として、戦前・戦後を通した新聞業界の趨勢をも含めた記述を展開している<sup>19</sup>。

飯田は 1916 年創刊の週刊『南米』の創刊者の一人である星名謙一郎のブラジル時代について、「移民の魁・星名謙一郎のブラジル時代」について『大阪商業大学論集』の中で述べるなど、それぞれ個人史的研究を展開している<sup>20</sup>。

各新聞の記事内容の比較分析研究は清谷や深沢を除いて見当たらず、日本語新聞研究は、その研究の余地を残した分野といえる。これらの著書はブラジルの日本語新聞の盛衰を知る上で貴重であるが、新聞創刊者に関する記述そのものは少なく、前述の前山の三浦鑿個人史が突出しているといえよう。香山六郎に関する出版物は、サンパウロ人文科学研究所が 1976 年に発刊した前述の香山六郎『回想録』のみといってもよい程である。前山はこの『回想録』の編集責任者であったが、『回想録』には三浦の個人史ほどの文章構成の精細さは感じられない。むしろ前山の前述したライフヒストリー三部作の構成は、『回想録』の編集経験値が生かされたものということもできよう。

香山の俳句論に関する先行研究には、宮尾進の「コロニア散文学の不毛性（試論）」がある<sup>21</sup>。俳句や短歌などの短詩系文学が、なぜ日本移民の間に爆発的に拡散して行ったのかについて、移民の教育水準が初等教育卒業率 69%という高い数値に着目して論ずるなど興味ある分析であった。日本を離れてからの自己表現手段として、日本時代の国語教育で触れてきていた短詩系文学をもっとも身近に感じ、それを表現することが、日本人としてのアイデンティティの証しであったという理論である。筆者の第 6 章作成にかかわるものであり、共鳴するものがあった。

---

<sup>19</sup> 深沢正雪「第 2 章 日系メディア史」『ブラジル日本移民百年史』第 3 巻 生活と文化編(1) (ブラジル日本移民百年史編纂委員会、2010 年)、風響社、80-250 頁。

<sup>20</sup> 飯田耕二郎「移民の魁・星名謙一郎のブラジル時代」『大阪商業大学論集』第 151・152 号 (大阪商業大学、2009 年)、437-451 頁。

<sup>21</sup> 宮尾進「コロニア文学の不毛性について（試論）」『研究レポートⅦー日本移民 70 年記念論集ーブラジル日系社会のいぶき』(サンパウロ人文科学研究所、1978 年)、172-177 頁。

近年、香山の俳句について詳細に分析しているのは細川周平であろう。彼は『日系ブラジル移民文学 Iー日本語の長い旅[歴史]』の中で、香山毒露と名乗った戦後の俳句から、香山の純粹で直情的な感情表現に不可解さを示しながらも、俳句はブラジル俳句でなければならない。日本俳句の模倣であってはならぬとする香山独特の俳句観を賞賛している<sup>22</sup>。

香山たちノロエステ地方の初期移民による「コーヒー干害低利資金貸付問題」についての論評はないに等しい。なぜなら、日本国内にあっては詳細なデータや帝国議会の速記録などの確認は、一般的には非日常的行為であったことと、情報公開制度の恩恵がなければ資料収集は困難であったと考えられるからである。当時のブラジル日本語新聞が、確証のないまま読者受けする記事を書かざるを得なかった事情に疑念をもつ。

近年ではブラジル在住の外山脩が『百年の水流』を日本語版とポルトガル語版で発刊したが、香山に関する記述は「コーヒー干害低利資金貸付問題（八五低資）」について間接的に記述しているが、詳しいとはいえない<sup>23</sup>。香山の功績を讃える賞罰・記述は、『在伯熊本県人発展史－実態調査－』によれば、1972年9月19日、在外県人を対象とした第1回功勞者表彰を、香山は中尾熊喜、栗津金六等とともに受賞したのみで他には見当たらない<sup>24</sup>。また、香山のブラジル渡航以前の足跡についての記述は皆無に等しい。この点、笠戸丸に同船し後に「移民の父」と称賛された同郷人であり熊本済々黌の同窓生でもある上塚周平(以下、上塚)に関する記述に比べて明らかに少なく、日本語新聞、年鑑類、移民史類を遺した人物にしては、その功績の影は薄いと言わざるを得ない<sup>25</sup>。そのような

<sup>22</sup> 細川周平『日系ブラジル移民文学 Iー日本語の長い旅[歴史]』（みすず書房、2012年）、362-365頁。

<sup>23</sup> 外山脩は、1965年同志社大学法学部政治学科卒業後ブラジルに渡り、サンパウロ新聞記者、コチア青年農業誌「アグロ・ナセンテ」創刊・編集。1987年以降、フリージャーナリスト。戦後のブラジル日系社会に発生した勝ち組負け組問題や農村社会問題などに詳しい。著書『百年の水流』（トッパンプレス社、サンパウロ）は、2006年初版、2012年改訂版、2009年にはポルトガル語版『Cem anos de águas corridas』を出版している。

<sup>24</sup> 熊本県人会『在伯熊本県人発展史－実態調査－』（熊本県人会、1984年）。

<sup>25</sup> 最近では江頭隆生『海を跳んだキナセン：伝録－上塚周平』（上塚周平済々黌顕彰会、2008年）がある。その「あとがき」に、済々黌出身者でありながら香山六郎に関する資料が皆無であると記されており、熊本県にも香山に関する情報がなかったことがわかる。熊本県立図書館には『四十年史』とグアラニー語研究に関する書籍が1

ことから香山にかかわる書籍は、現在も戦前における日本人のブラジル移民史研究に不可欠の史料となっている<sup>26</sup>。

### 第3節 研究課題と研究方法

#### 3-1 研究課題

本研究を進めるにあたって、以下のような課題を設定した。第1に、『回想録』のはしがきによると、香山が書き溜めてきていた自叙伝の原稿の多くが、特に後半部分において削除されているという。それはどのような理由によって削除されたのかを、自叙伝の原稿の清書版『清書原稿A』による確認が必要となるのではないかと。第2に、そのためには、『回想録』と『清書原稿A』との整合性を追求することはできないか、また、これらの分析を通して新たな香山像を構築できるのではないかと。第3に、1908年から1924年頃までの契約移民時代の移民について、彼らの渡航後の言動を追跡すれば、個人史的な時系列的分析に加え、初期移民社会への何らかの集団的行動や貢献の実態を発掘・評価できるのではないかと。さらに、自己責任性の強い初期移民の言動を通して、移民社会を構築するためには、自然災害などの艱難辛苦をものともしない忍耐と協調の精神による民間主導の協力体制を必須とすることなどを導き出せるのではないかと。

#### 3-2 研究方法

課題解決に向けて、本論においては以下のような研究方法を試みる。

1. 史実確認のため、香山六郎の自叙伝『回想録』の分析を試みる。『回想録』原本である『清書原稿A』を、著作権者であるジェニー脇坂氏の許諾を得て写真資料とし、原本と『回想録』との整合性、カット部分の理由などを探る。

---

冊のみであった（2013年11月、筆者確認）。2016年11月再訪したが、それ以上の香山関係誌を探し当てることはできなかった。

<sup>26</sup> 永田稔、前掲書4）、アンドウ・ゼンパチ「日本移民の社会史的研究」『研究レポート』第2号、（サンパウロ人文科学研究所、1967年）、65頁。アンドウ・ゼンパチの「日本移民の社会史的研究」は、研究レポートに2回シリーズで掲載されていた。半田知雄『移民の生活の歴史』（サンパウロ人文科学研究所、1970年）、鈴木譲二『日本人出稼ぎ移民』（平凡社、1992年）。

2. 一次史料として外務省・内務省・拓務省の関係資料や帝国議会記録などの公文書や、二次史料としての外部論文や書籍などを収集分析し、史実の確認と論文内容の充実・客観化に努める。
3. 移民の目線を大切にした香山の言動と日本語新聞の役割を確認するために、一次史料として戦前の貴重な新聞の記事内容をメディアとして尊重し、ほぼ同時期に発刊されていた主要な日本語新聞である『日伯』と『時報』の記述も参考に内容の深化を図る。
4. 図表化することで認識度が高まると思われる統計資料は、現地調査に基づく写真やインタビュー・現地資料等も参考にして図表化を試みる。
5. ブラジル関係者には、文書の交換や国際電話インタビューを通して史実の確認に努める。
6. 移民に関する用語については、ブラジルの公用語であるブラジル・ポルトガル語に準じる。

#### 第4節 研究内容

第1章では、ブラジル・サンパウロ州ノロエステ地方とはどのような地方なのか、また、その地域で日本人初期移民たちがどのように集住するようになったのかを概観すると同時に、日本とブラジルとの国内事情と移民政策との関係を一覧表に表示し、視覚による理解を促す。

第2章～第4章では、ノロエステ地方で創刊した日本語新聞『聖報』とその創刊者・香山六郎に視点を当て、香山の自伝『回想録』をもとに、香山のブラジル移住までの経緯と『聖報』発刊の遠因、香山を取り巻く人々などについて、『清書原稿A』をはじめ各種史料を分析・論証し、香山六郎の個人史的側面を探り、香山像を描き『回想録』を越えた香山論の展開を試みる。特に第2章では、香山の出自を中心に香山がなぜブラジル行を決行したのかについての要因を探る。第3章では、ブラジル到着後の香山が、渡航者意識から一人の移民としての自覚を持つに至る契機は移民輸送会社での経験にあったと考えられることから、同会社の存廃を外務省史料などから分析し、打算的移民送出の実態と香山の対応を明らかにする。また、開拓農民から新聞人への意識の転換に大きく関わっていたのが上塚植民地建設問題であったことを探る。第4章では、

日本語新聞『聖報』発刊から廃刊に至るまでの香山の言動を分析するとともに、香山の社員や家族たちとの人間愛、戦後の香山の文筆活動への執念の根源にあったものは何であったのかを探る。

第 5 章から第 7 章では、伝達手段としての日本語新聞を発行又は購読する行為を通して、初期移民たちの言動を分析し、日本語新聞の果たした役割と初期移民たちの試行錯誤の行為が、日本政府に頼らない民間主導の行為であり、その民間主導の行為がノロエステ日本人社会を変容させてきた原動力であったことを明らかにして行く。ラジオ放送などない初期移民社会では、日本語を介して移民自身の意志を伝達できるのは日本語新聞でしかなかった<sup>27</sup>。そのような社会において日本語新聞は、もっとも重要なメディアであったばかりでなく、新たな人間の意識や移民社会を構築する際のメディアそのものであり、日本人としてのアイデンティティを認識させる根源であったことを、文芸活動と移民政策の視点から分析する。特に、第 5 章では、前章までの香山の個人史的分析から、香山六郎の出自とブラジル生活の概要をつかみ、さらに、香山の初期移民としてのノロエステ地方を基盤とした社会的言動がどのようなものであったかについての分析を試みる。すなわち、移民の増加が新聞の創刊を可能にしたとの前提で、香山のノロエステでの中心的活動は日本語新聞の刊行にあったとし、香山が日本語新聞を通して何を訴え行動し、ノロエステ地方の移民社会にどのような影響をもたらしたかを分析することで、前章までの時系列的研究とは視点を異にした分析を試みる。

第 6 章では、日本語新聞の販路拡大策は、購読者に新聞の特徴を見極め納得させることにあり、そのポイントは文芸欄の充実にあったことを、探る。文芸欄でもっとも充実していたのが俳句や短歌などの短詩系文芸欄で、中央紙も地方紙もこぞって文芸欄に苦心するのはなぜなのか。移民側は新聞を創作活動の精神的支柱と捉え、新聞社側は移民の創作活動を後方から支援をすることで、販路拡大につなげていたという移民側と新聞社側の関係を論証する。

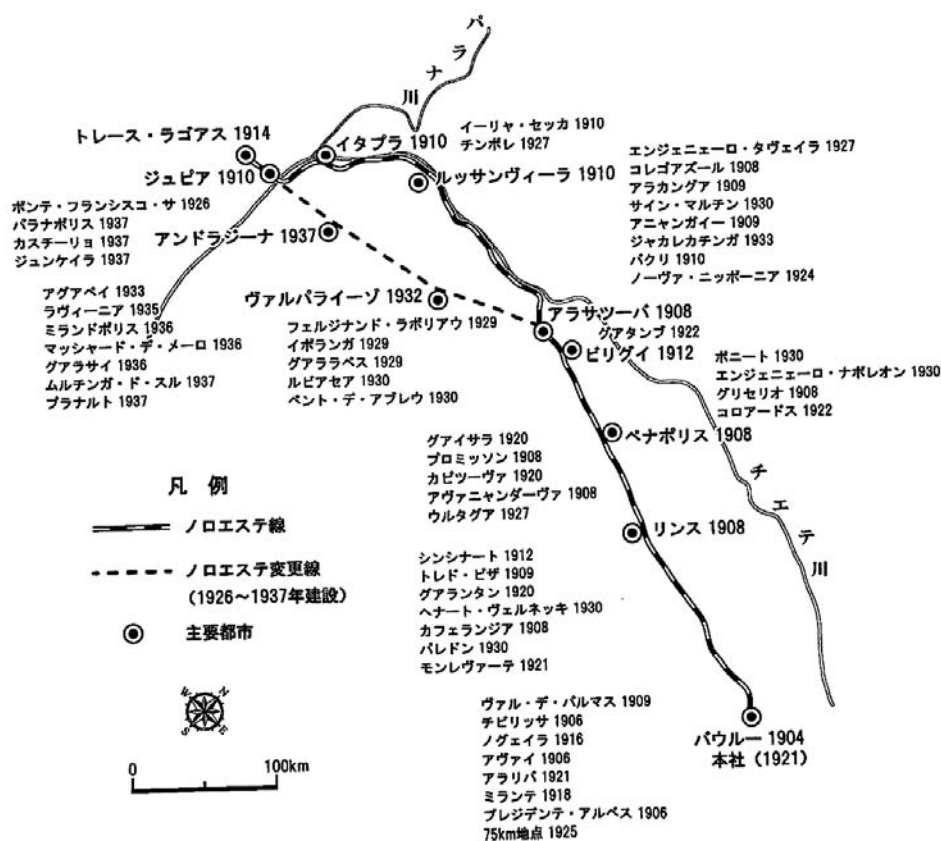
---

<sup>27</sup> 日本からラジオ東京の南米向け日本語放送が開始されたのは、1937 年 1 月、ブラジル向けポルトガル語放送が開始されたのは 1938 年 1 月からである。

第 7 章では、ノロエステ地方を中心とした日本人移民社会の形成と発展のために果たした日本語新聞の役割を、『聖報』記事「伯国在留民干害貸付(いわゆる八五低資)問題」を通して論証し、同時に「八五低資」問題に対する日本政府の対応について、議会調書や衆議院会議録を通してそれぞれ確認する。それらの確認を通して、ブラジルへの初期移民送出の歴史の原点は、国家主導ではなく民間主導でありうることを論証する。

なお、ノロエステ地方理解深化の参考資料として、戦前期のノロエステ鉄道沿線各駅名図を添付する(図序-1)。

図序-1 ノロエステ鉄道沿線駅名図(戦前)



出典：Caio SHIOMI『勇気のある者 DAITAN NA』。  
 Associação Assistencial Cultural e Esportiva de Andradina,  
 Associação Cultural Nipo-brasileira de Guaraçai。  
 (APC .2007 年) 63 頁より作成。

## 第5節 本論の構成

本論を序章と本章（第1章～第7章）、終章とで構成する。

序章 研究目的および研究課題・研究方法

第1章 戦前期ブラジル移民概説と時期区分

第2章 香山六郎の移動の原点

第3章 渡航者意識から移民意識へ

第4章 聖州新報創刊から廃刊まで、戦後の香山

第5章 ブラジル・ノロエステ地方における日本語新聞の果たした役割

第6章 ブラジル移民知識人香山六郎の言動

ー移民俳句と日本語新聞を通してー

第7章 コーヒー干害低利貸付資金問題と移民政策

終章 成果と意義、新たな課題と今後の展望

参考文献

初出一覧

巻末資料 香山六郎・ブラジル日本移民関係年表



## 第 1 章 戦前期ブラジル移民概説と時期区分

### 第 1 節 戦前期ブラジル移民概説

1908 年 6 月 18 日、ブラジル行第 1 回笠戸丸移民が、ブラジル・サントス港に着岸してから本年度 109 年の時が流れた。戦前の移民数は、第 1 回笠戸丸移民から 1941 年 8 月 12 日着の戦前最後の移民船ぶえのすあいれす丸まで、輸送船 33 隻が 322 回にわたって輸送した結果 18 万 5,000 人以上となった（表 1-1）。1952 年に再開され 1985 年に終了した戦後の日本人移住者約 5 万 3,000 人を含めて、約 23 万人がブラジルに送出された。現在の在ブラジル日系人は 190 万人に達する<sup>1</sup>。移民・移住者総数と比べて現在のブラジル日系人数は 8 倍強に増大したことになる。ブラジルと日本との国家間交流は、1895 年の日伯修好通商条約調印を契機に 1897 年、両国が相互に公使館を開設し国交が樹立した時点で始まった。本年は日本ブラジル外交関係樹立 120 周年の記念すべき年にあたる<sup>2</sup>。国交樹立当時のブラジルはオリガーキー(oligarquia:寡頭政治)の時代で、州政府・特にサンパウロ州政府が第一共和政の中心にあり、その経済的基盤はコーヒー栽培と欧米社会へのコーヒー輸出にあった。しかし、1888 年の奴隷解放宣言によるコーヒー農園労働者不足と 1880 年代最大の移民送出国であったイタリアからの移民が 1890 年代には移民総数 73.5 万人の 59%に減少してしまった<sup>3</sup>。サンパウロ州政府は同年代にアジアへの門戸開放として中国人移民の導入を試みていたが、1895 年の日清戦争での日本の勝利を契機に日本への関心を高め、コーヒー農園労働者（コロノ：corono）として日本人移民導入に意欲を示した。当時の日本は、民間移民輸送会社の手によりハワイ・アメリカ本土、南洋諸島等へ移民を送出していたが、その目的はあくまでも出稼ぎであった。

---

<sup>1</sup> ニッケイ新聞「日系人口は 190 万人で統一を」2016 年 4 月 23 日。なお、1958 年に外務省移民課が設置されると、従来の「移民」は「移住者」と公称されるようになった。

<sup>2</sup> 日本ブラジル交流誌編集委員会『日本ブラジル交流史—日伯関係 100 年の回顧と展望—』（日本ブラジル修好 100 周年記念事業組織委員会、1995 年）、428-429 頁。

<sup>3</sup> 斉藤広志『新しいブラジル—新版』（サイマル出版社、1983 年）、93 頁。

表 1-1 戦前期ブラジル移民輸送船一覧  
および移民数

| 番号 | 輸送船名          | 活動期<br>(ブラジル着岸時) | ブラジル日本移民史料<br>館(2011年)B |        |
|----|---------------|------------------|-------------------------|--------|
|    |               |                  | 輸送回数                    | 輸送移民数  |
| 1  | 笠戸丸           | 1908・6           | 1                       | 780    |
| 2  | 旅順丸           | 1910・6           | 1                       | 921    |
| 3  | 神奈川丸          | 1912・4-1931・6    | 17                      | 6993   |
| 4  | 巖島丸           | 1912・4           | 1                       | 1410   |
| 5  | 第二雲海丸         | 1913・5           | 1                       | 1493   |
| 6  | 若狭丸           | 1913・5-1930・7    | 16                      | 14565  |
| 7  | 帝国丸           | 1913・10-1914・5   | 2                       | 4064   |
| 8  | 伏見丸           | 1917・1           | 1                       | 13     |
| 9  | 河内丸           | 1917・8-1931・4    | 15                      | 5787   |
| 10 | 志あとり丸         | 1917・8-1924・11   | 7                       | 698    |
| 11 | たこま丸          | 1917・12-1924・9   | 3                       | 302    |
| 12 | はわい丸          | 1918・5-1935・2    | 20                      | 12003  |
| 13 | 博多丸           | 1918・9-1930・6    | 9                       | 6324   |
| 14 | 讃岐丸           | 1918・10-1919・12  | 3                       | 2411   |
| 15 | 鎌倉丸           | 1919・7-1931・2    | 14                      | 4836   |
| 16 | 土佐丸           | 1920・5-1920・12   | 2                       | 765    |
| 17 | ばなま丸          | 1921・3-1925・5    | 4                       | 545    |
| 18 | 志かご丸          | 1922・2-1925・8    | 5                       | 1168   |
| 19 | めき志こ丸         | 1923・3-1925・7    | 5                       | 961    |
| 20 | かなだ丸          | 1924・7-1925・11   | 3                       | 790    |
| 21 | 阿波丸           | 1924・12-1926・1   | 3                       | 895    |
| 22 | まにら丸          | 1925・2-1935・10   | 20                      | 13807  |
| 23 | らぶらた丸         | 1926・6-1939・11   | 32                      | 18404  |
| 24 | さんとす丸         | 1926・7-1939・4    | 26                      | 16913  |
| 25 | もんでびで<br>お丸   | 1926・10-1941・7   | 27                      | 16166  |
| 26 | 備後丸           | 1928・9-1930・9    | 5                       | 2458   |
| 27 | ぶえのすあ<br>いれす丸 | 1929・12-1941・8   | 23                      | 14835  |
| 28 | りおでじゃ<br>ねいろ丸 | 1930・7-1939・11   | 22                      | 14046  |
| 29 | あらびあ丸         | 1932・5-1941・5    | 9                       | 6001   |
| 30 | あふりか丸         | 1932・7-1936・9    | 11                      | 6869   |
| 31 | ありぞな丸         | 1933・3-1935・8    | 7                       | 6300   |
| 32 | あるぜんち<br>な丸   | 1939・8-1940・8    | 4                       | 1053   |
| 33 | ぶらじる丸         | 1940・2-1940・10   | 3                       | 703    |
|    | 合 計           |                  | 322                     | 185279 |

注1：鎌倉丸の1932年2月とあふりか丸の1936年4月便は、  
リオ・デ・ジャネイロ港着。それ以外はサントス港着。

参考資料：  
海外移住事業団「海外移住者名簿(戦前)」、1965年。  
ブラジル日本文化福祉協会他『戦前活躍した移民船』  
(ブラジル日本移民史料館、2011年)

特にアメリカ合衆国では、ハワイやカナダ・メキシコなどからの日本移民の再流入などにより日本人は増加し、アメリカ人との間に低賃金労働環境を巡って対立するようになっていた。この利害対立はアメリカにおける黄色人種排斥運動・排日運動へと発展していった。その結果、アメリカと日本は1908年「日米紳士協定」を結び、アメリカへの移民は再渡航者と肉親に限るとし、新規の労働移民の入国を禁止した<sup>4</sup>。

このようなアメリカ社会における日本人排斥運動高揚の中で、日本の移民輸送会社はブラジルへの移民送出に方向転換せざるを得なくなった。同時期、劣悪な環境で半奴隷的なサトウキビ栽培労働を強いられ、死亡者や耕地逃亡者を出す悲惨な状況にあったペルー移民(1899-1941年)は、戦前だけで5万人余りいたが、1923年に契約移民制度が廃止されたことから、移民数は2万人に留まっていた。契約移民制度廃止の反動は、1924年以降のブラジル移民増加の一因と

<sup>4</sup> 石川友紀『日本移民の地理学的研究』(榕樹書林、1997年)、112-113頁。

もなった<sup>5</sup>。

ブラジル・サンパウロ州への日本人移民送出は、皇国殖民合資会社とサンパウロ州政府との間に契約された向こう3年間に3,000人の家族移民をサントス港まで輸送すること、第1回は1908年5月までに1,000人を輸送することの移民輸入契約が基盤であった<sup>6</sup>。日本人移民にはコーヒー園労働者不足の補填的要素を担わされていたのである。皇国殖民合資会社無限責任社員・水野龍は、1907年11月、サンパウロ州政府との移民輸入契約締結後ただちに帰国すると、沖縄・鹿児島・熊本・山口・岡山・兵庫・滋賀・愛媛・新潟・宮城・福島の11県に移民斡旋所を開設し、移民募集を開始した<sup>7</sup>。

一方、日本政府は1894年、移民保護規則(明治29年・移民保護法)を制定し、ハワイや南洋諸島への集団移民事業に関与していた民間の不良移民会社を排除するために、移民会社を外務大臣の許可制として取り締まっていたが、移民そのものへの関与はしなかった。皇国殖民合資会社もこの規制により1903年外務省の許可を得ていた<sup>8</sup>。すなわち、日本とブラジルとの移民事業のスタート時点において、その事業は民間主導であり日本政府は直接、サンパウロ州政府との労働契約に関与することはなかったのである。

## 第2節 移民送出時期区分と各時期のノロエステ沿線開発

### 2-1. 区分方法

ノロエステ地方を視野に入れた移民史の時期区分を進めるにあたって、日本とブラジルの双方から状況把握をする必要がある。そこで、両国の国内事情、対ブラジル日本移民政策、ブラジルの対日本人移民政策、ブラジル国内における日本移民の活動、土地所有と自然災害、ノロエス

---

<sup>5</sup> 原口邦紘「移民の歴史—日本人海外発展の展開」『歴史と地理』430(山川出版社、1991年)、24頁。

<sup>6</sup> 外務省通商局「皇国殖民合資会社伯刺西爾国移民取扱1件 明治41年」3.8.2.0-243、(外交史料館、1908年)。

<sup>7</sup> 外務省通商局「出張所設置移籍廃止等届出の件」3.8.2.0-196、(外交史料館、1903年)。

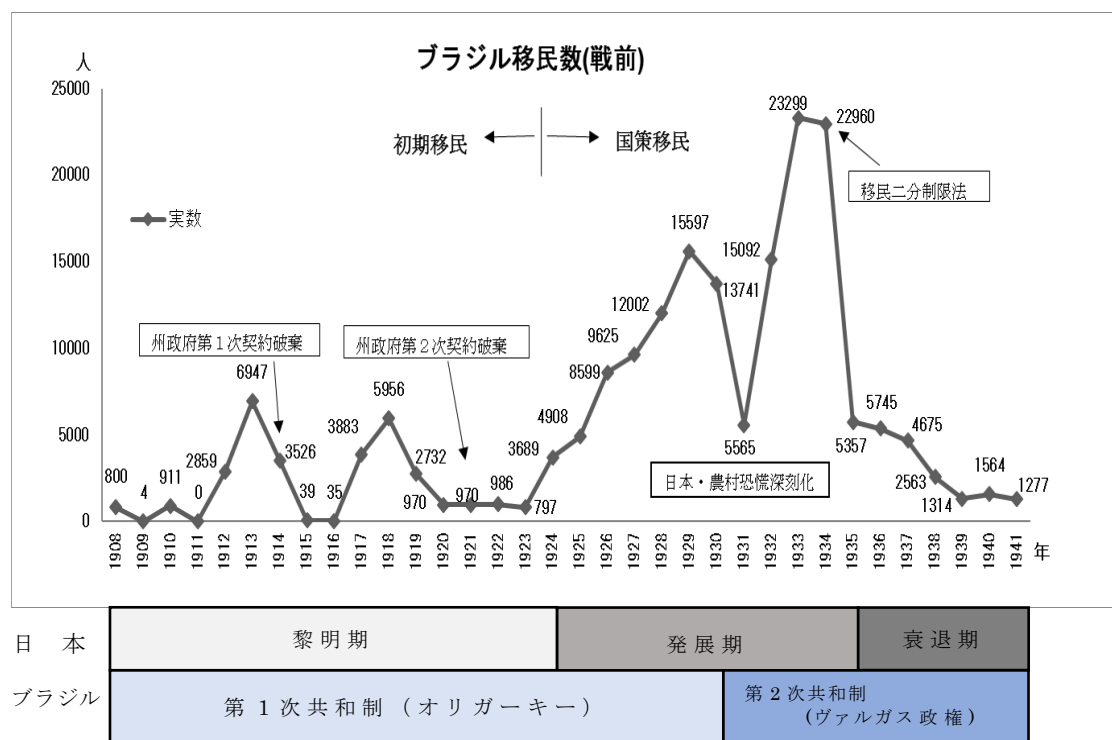
<sup>8</sup> 外務省通商局「皇国殖民株式会社業務関係雑件」3.8.2.0-196、(外交史料館、1903年)。

テ鉄道主要駅開設年などを指標に、戦前期の日本とブラジルとの関係について一覧表にまとめた（章末の表 1-2）。

明治初期から 1908 年までに移民の先鞭を切ったのは、単発的自由移民であった。すなわち「移民の草分け」と称される山形県出身鈴木貞次郎をはじめ、京都の銭湯屋・三宅栄次郎、熊本の元弁護士隈部三郎一家、貿易商社藤崎商会関係者・明穂梅吉他 3 名など 10 数名にすぎない。彼らは、在ブラジル日本帝国公使館関係者 6 名とともに、来るべく集団移民の受け入れ準備の関係者や、自己の理想とする移民観を達成しようと志した人々であった<sup>9</sup>。

集団的ブラジル移民は 1908 年、皇国殖民合資会社による契約移民（家族移民）と自由渡航者からなる笠戸丸移民を嚆矢とした（図 1-1）。

図 1-1 ブラジル移民数（戦前）



参考資料：外務省領事移住部『わが国民の海外発展 移住百年の歩み（資料編）』（外務省、1972 年）

<sup>9</sup> Museu Histórico da Imigração Japonesa no Brasil, *OS IMIGRANTES JAPONASES PRECURSORES* (MUSEU, 2007 年)、48 頁、78 頁。

図 1-1 より、移民数は 1923 年を境に 2 分割することができる。すなわち、1908 年から 1923 年までの初期移民、以後 1941 年までの国策移民である。その相違は契約先の相違に起因する。初期移民は州政府の補助金による契約移民で、州政府が渡航費の一部を補助し、移民の雇用農園主が一部を支払うという、イタリア人移民推進のために開発されたシステムを踏襲したもので、1923 年までに約 3.3 万人に達した。一方、国策移民は日本政府の補助金による移民が主体で、1941 年までに 15.5 万人余りであった。

初期移民の時代をさらに細分すると、1915-1916 年と 1920-1923 年に変動のない時期のあることに気づく。1915 年は、第一次世界大戦後の好景気に沸いていた時であったことによる移民送出減少で、日本政府は、同年 7 月サンパウロ市に在サンパウロ帝国領事館を開設し、送出事業の継続を模索していた。1920 年は第 1 次大戦後の不況と農村部の慢性的不況による移民送出の減少で、1922 年、内務省は社会局を新設し移民及び移住奨励策を打ち出していた。しかし、もっとも重要な要因は、サンパウロ州政府による一方的な移民契約破棄によるものであった。サンパウロ州政府は、日本人移民導入にあたって 1907 年 1 月に新移植民法を公布し、その第 20 条に基づき同年 11 月、州農務長官ドクトル・カルロス・ポテーリョと皇国植民合資会社水野龍との間に、日本移民輸送条件に関する契約を正式に調印し、12 歳以上の成人には 10 ポンド、12 歳以下 7 歳までにはその 2 分の 1 の 5 ポンド、7 歳以下 3 歳までには成人の 4 分の 1 以下の 2 ポンド 10 シリングの補助金を支給したのである<sup>10</sup>。そのうちの 40%分は、移民の雇用農園主が立て替えるシステムであったから、移民が契約期間終了前に脱耕すると、その立て替え分の残金を農園主に返還しなければならなかった。この契約を理解困難だった農民たちが入耕後の不満から農園主とトラブルを起こし、脱耕時に契約不履行問題に巻き込まれていたのだ。このように初期移民時代には、日本国内の経済変動に伴う外務省や内務省の移民政策の不確定さとブラジルの移

<sup>10</sup> 青柳郁太郎『ブラジルに於ける日本人発展史 上巻』（ブラジルに於ける日本人発展史刊行委員会、1941 年）、265-267 頁及び土井権大『南米伯国の富源』（南米協会、1908 年）117 頁によれば、円換算にして 106 円に相当することから、当時の 1 ポンド≒10 円となる。

民受け入れ策への不理解などが、移民の移動に大きな影響を及ぼしていたことになり、移民個々人の力量や運氣も問われる時代であった。この点、1924 年以降の国策移民と相違するところであった。

以上のような状況を考慮して、戦前期ブラジル日本人移民の送出変動の時期区分は、多くの先人たちによって異なる指標により試みられてきていた。例えば、青柳は、1)戦争と日本の国力伸展、2)日本国内における経済事情と国民生活、3)移住相手国・その他海外事情一般、4)海外発展に関する指導助言機関及び指導者など4つの指標を用いて5期に区分している<sup>11</sup>。また原口は、日本国政府の移民政策の視点から1)第1期を1908-1923年、第2期を1924-1941年と大別している<sup>12</sup>。一方、移民80年祭典委員会は、清谷・内山・田尻・宮尾らによって初期移民から国策移民時代、さらには移民空白時代といった区分をしており、この区分は原口と同様の概念であった<sup>13</sup>。これらの区分は、基本的に移民送出国側の指標から分類されていることから、筆者は日本とブラジルの関わりを考慮して、移民送出側（日本）の時期区分を黎明期（1908-1923年）、発展期（1924-1935年）、衰退期（1936-1941年）及び空白期（1942-45年）の4期に、移民受入（ブラジル）側はブラジル国内事情から、主としてサンパウロ州とミナスジェライス州知事を中心にほぼ交代で大統領となっていた第1次共和制（オリガーキー：1888-1929年）と第2次共和制（ジェツリオ・ヴァルガス政権：1930-1945年）の2期に区分して併記し、当事国の国内事情と移民政策との関わりを考慮した区分を策定した(図1-1)。さらに、本論の研究地域がサンパウロ州ノロエステ地方であることを考慮し、1904年以降のノロエステ鉄道建設に伴う各駅の開設時期を記した「ノロエステ鉄道主要駅開設状況」を付記し、地域発展史的視野をも包含した(表1-2)。

## 2-2. 各時期の概要とノロエステ沿線開発

<sup>11</sup> 青柳郁太郎、前掲書10)、50-51頁。

<sup>12</sup> 原口邦紘、前掲書5)、20-31頁。

<sup>13</sup> ブラジル日本移民80年史編纂委員会は、1989年3月結成された。清谷益次、内田勝男、田尻鉄也、宮尾進たちはその委員会メンバーで、会長は香山六郎の次女の夫・脇坂勝則であった。

## 2-2-1 黎明期（1908－1923 年）

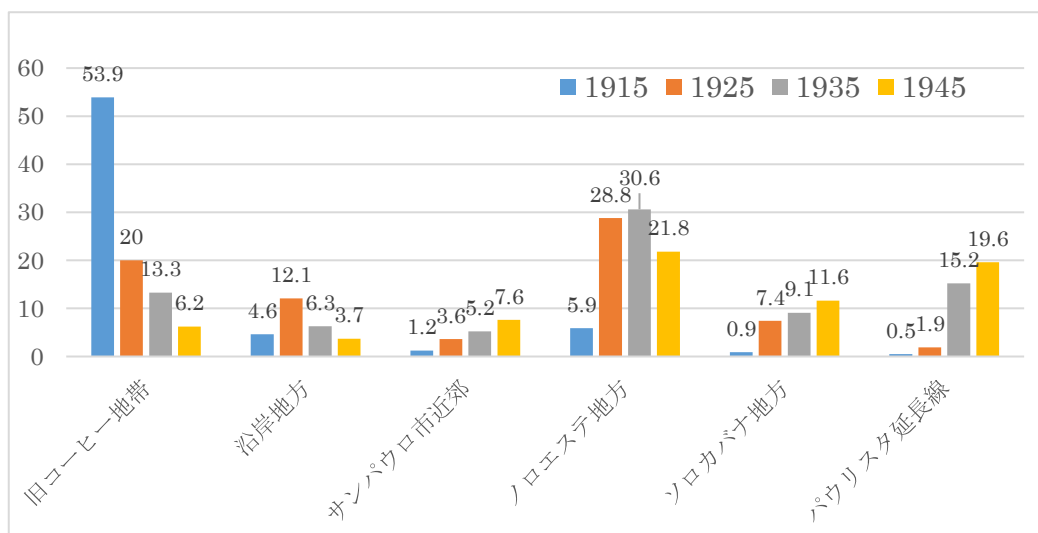
ブラジルへの個人的移民から集団移民が計画的に創出された時期の、いわゆる初期移民送出期を指す。サンパウロ州政府からの渡航費補助を得ていた契約移民が大部分であるが、中には理想を求めて自費で移民した人たちも存在した時期を指す。時期区分に関して、石川は 1885 年から 1972 年までの世界各地への日本人出移民時代を 3 期に大区分している<sup>14</sup>。すなわち、第Ⅰ期：契約移民時代（1885-1898 年）、第Ⅱ期：自由・契約移民時代（呼び寄せ移民を含む）（1899-1945 年）、第Ⅲ期：自由移民時代（呼び寄せ移民を含む）（1946-1972 年）である。さらに第Ⅱ期を第Ⅰ期から第Ⅳ期に小区分するなど煩雑ではあるが、筆者の区分した黎明期は、石川の第Ⅱ期・第Ⅱ期に一致し、南米に関してはこの時期を「南米移民前期」と位置づけている。この時期には、日本人のコーヒー農園定着率の悪さから、サンパウロ州政府より一方的に契約破棄された第Ⅰ次契約破棄時期（1914-1916 年）と、第Ⅰ次世界大戦終了に伴うヨーロッパ移民の再入国などによる第Ⅱ次契約破棄時期（1921-1923 年）とが存在した（図 1-1）。第Ⅰ次契約破棄時期（1914-1916 年）には、すでにブラジル在住の移民たちは、コロノからの脱却を図ろうと耕地通訳などの指揮のもと旧コーヒー地帯のモジアナ沿線からノロエステ沿線へと南下を始めていた。グアタパラ耕地通訳の平野運平率いるノロエステ線カフェランジャ駅・平野植民地建設（1915 年）やエイトール・レグール駅（1920 年、プロミッソン駅と改名）の上塚第一植民地（イタコロミー植民地、1918 年）はその好例といえよう（図 6-1）。第Ⅱ次契約破棄時期（1921-1923 年）には、ノロエステ地方には独立間もない自営農民たちがさらに集積し、大小の植民地がノロエステ沿線に建設されていた。リンス駅奥の上塚第二植民地建設は、その典型例であった。このノロエステ地方をアンドウゼンパチは「シチアンテ（sitiente:小農園主）」地帯と称し、サンパウロ市 300km 圏内の大ファゼンダ（fazenda:農場）地帯と区分している（図 1-2、図 6-1）。このシチアンテ地帯が日本人の

<sup>14</sup> 石川友紀、前掲書 4)、134. 135. 145. 148 頁。第Ⅱ期（自由・契約移民時代）の第Ⅰ期は 1899-1907 年、第Ⅱ期は 1908-1923 年、第Ⅲ期は 1924-1934 年、第Ⅳ期は 1935-1941 年。

民間主導による言動の基盤となっていたといえよう<sup>15</sup>。

日本国政府は、民間移民会社間の競争や悪質契約を忌避し、移民事業を国家政策として促進させるためには輸送事業の統一が重要として、

図 1-2 サンパウロ州における地域別日本人移民の推移（戦前） 単位：％



参考資料：Teiichi Suzuki, *Mobilidade dos imigrantes japoneses no estado de São Paulo, 1915-1955: IMIGRAÇÃO JAPONESA NO BRASIL* (São Paulo, ブラジル日系人実態調査委員会、1964 年)。

1917 年以来、移民輸送会社の一本化を推し進めていた。すなわち同年 12 月、前年に組織されたブラジル移民組合を海外興業株式会社（以下、海興）に包含し、1920 年には森岡移民株式会社をも傘下に収め、日本政府はブラジル移民輸送を海興に一本化することに成功した<sup>16</sup>。海興の株主には、移民輸送会社の日本郵船（株）や大阪商船（株）が参加し、ブラジル移民送出の先鞭を切った元皇国殖民合資会社の水野龍も同会社の専務取締役役に名を連ねていた<sup>17</sup>。翌 1921 年、内務省社会局は海興に対し移植民保護奨励費 10 万円を下付し、移民送出事業へのテコ入れを行った。しかし、第 1 次大戦後の好景気に支えられ、移民応募者は減少していた（図 1-1）。

<sup>15</sup> アンドウ・ゼンパチ『ブラジル史』（岩波書店、1983 年）、266 頁。

<sup>16</sup> 青柳郁太郎『ブラジルに於ける日本人発展史上巻』（ブラジルに於ける日本人発展史刊行委員会、1941 年）、174 頁。

<sup>17</sup> 今野俊彦・藤崎康夫『移民史 I 南米編』（新泉社、1984 年）、53 頁。



この時期をもってブラジル移民の国策化と評する文もあるが、この時期はあくまでも民営の移民送出機関を一本化したにすぎず、移民そのものに対する国家からの継続的補助事業が進展したわけではなかった。1922年8月1日、内務省社会局は、人口・失業問題の解決策として、ブラジルは外国からの移植民に対し厚い保護を与えているので、日本としては移民奨励には好適地であるとした移植民奨励策を打ち出した<sup>18</sup>。結果、1923年9月の関東大震災による国内失業対策として、震災移民100名に対し1人当たり200円の渡航費補助を給付したのである。これが日本国政府として初めて送出移民に補助金を支給した事例であり、この施策が次なる国策移民送出事業への試行となっていたのである。

#### 2-2-2 発展期（1924－1934年）

1924年のアメリカにおける排日移民法の実行とペルーのサトウキビ農園労働者の送出禁止などがあり、内務省の社会事業としての移民送出事業は重要性を増していた。同年7月、皇太子ご成婚記念事業として、大阪毎日新聞社はブラジルへ渡航費を全額支給してブラジル行移民267名を送出している。この例は渡航費の全額補助はあっても渡航準備金や、さしあたっての現地生活費などの補助はなかったから、これらを工面できる移民しか対象となりえなかった点で、積極的な移民送出事業の展開には至らなかった。内務省社会局の人口・貧困問題解決策としての移民奨励と、外務省の対外的民族問題を考慮した消極的移民送出策に多少の相違があったことになる。

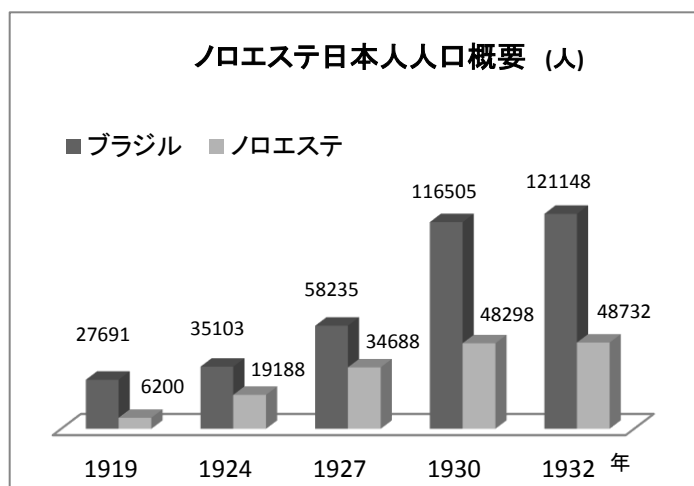
日本国政府による国家事業としてのブラジル移民送出事業は、1925年に本格化した。日本政府は移民の渡航費(200円)の全額支給と移民会社への手数料(35円)も負担した。完全な国策移民送出の始まりである。この年には、ノロエステ線奥のルッサンビーラ駅を中心にアリアンサ移住地が信濃移住組合主導で開設されている。アリアンサ移住地は従来の初期移民たちが建設した植民地とは異なり、農業者だけではなく異業種集団が入植する企業移民であった(図6-1)。

---

<sup>18</sup> 内務省社会局「移植民保護奨励に関する内務省案」(外交史料館、1922年)。

1923 年まで年間 1,000 名足らずのブラジル移民は以来、農村恐慌が収まらなかったこともあり国策化は進捗し、年間 3,000 人を越えるようになった(図 1-1)。結果、サンパウロ州ノロエステ地方の日本人人口は、1919 年に在ブラジル日本人人口 27,691 人中の 6,200 人・22.4%足らずであったが、1924 年は 19,188 人・54.7%、1927 年には 34,688 人・

図 1-3 ノロエステ日本人人口概要



出典：領事移住部『わが国民の海外発展(資料編)』(外務省、1972 年)、通商局『移民地事情』2 巻(通商局、1922 年)、通商局『在外本邦人国勢調査職業別人口票』(通商局、1931 年)。

59.6%と急増し、1930 年の世界恐慌直後には、48,298 人・41.6%と全ブラジル日本人人口のほぼ半分近くを占めていた(図 1-3)。1930 年以降、世界恐慌の波は日本にも深刻な影響を及ぼし、1931 年には移民数は年間 5,000 人足らずに激減した。政府が 1932 年に渡航費および渡航準備金も完全支給をすると、ブラジルへの移民送出は復

活し、1933 年には 23,000 人を超す戦前期のピークを形成した(図 1-1)。石川によれば、この方策により日本全国各地から家族移民が続出し、特に沖縄・熊本・福島・広島・北海道など日本列島の両端に位置する道県が送出数第 5 位までに含まれていたという<sup>19</sup>。この事実は、坂口の悉皆調査を基にした研究によっても実証されている<sup>20</sup>。

一方、ブラジルでは、1930 年に革命を起こしたジェツリオ・ヴァルガスが、1934 年には州政府に代わって連邦政府による国家の統一をめざす新国家体制(エスタード・ノーボ: Estado Novo)のもと、移民の同

<sup>19</sup> 石川友紀、前掲書 4)、148-149 頁。

<sup>20</sup> 坂口満宏「日本におけるブラジル国策移民事業の特質」『史林』97 巻第 1 号、(史学研究会、2014 年)、142 頁。

化政策を推進させた。しかし、日本人は同化しにくい民族として、サンパウロ州遠隔地における日本人植民地の繁栄を危険視する動きが強まり、1934年には移民は過去20年間の入国総数の2%まで許容するという「移民二分制限法」が発せられた(図1-1、表1-2)。

### 2-2-3 衰退期(1935-1941年)および空白期(1942-1945年)

「移民二分制限法」によるブラジル政府の移民入国制限は、アジア大陸に進出を始めていた日本政府にとっては、移民送出先転換の決定打となっていた。1932年に満州国への武装移民送出が始まると、移民の本流は満州国への農業移民へと転化し、1936年には満州国への分村移民「20カ年100万戸送出計画」による国策移民は隆盛期を迎えていた(図1-1)。一方、日本人のブラジル移民数は、ピーク時の4分の1の5,000人レベルにまで激減した。以後、戦前期における日本人のブラジル移民数は低迷し1941年8月には1,200名にまで減少した(図1-1)。

1941年12月8日、太平洋戦争の勃発とともに連合国側にあったブラジルへの移民送出事業は、翌1942年の日本とブラジルの国交断絶に伴い完全に遮断された。この史実から移民送出時代区分も80年祭典委員会では、1941年から1945年までを「空白時代」と設定しているが、戦前の実質的移民送出は1941年8月で終了し、翌1942年1月29日には、日本とブラジルの国交が断絶したので、それを基に筆者は1942年以降1945年までを空白期と設定した。

表1-2 戦前期日本とブラジルとの関係(ノロエステ地方中心)

|       | 日 本  |   | ブラジル                                       |   |   |  |
|-------|--|---|--|---|---|--|
|       | 国内事情                                       | 対ブラジル移民政策   | 国内事情                                       | 対日本人移民政策  | 日本人移民の活動  | ノロエステ鉄道主要駅開設状況   |
| 黎明期   |  |   |  |   |   |  |
| 1888  |  |   | 5月：奴隷解放令。                                  |   |   |  |
| 1889  | 大日本帝国憲法発布。                                 |   | 第1次共和制(オリガーク)                              |   |   |  |
| 1890  |  |   | 11月：ブラジル共和国宣言。                             |   |   |  |
| 1891  |  |   | 6月：アジア人の入国禁止。                              | 6月：アジア人の入国禁止。   |   |  |
| 1892  |  |   | 2月：ブラジル共和国憲法発布。                            |   |   |  |
| 1894  | 日清戦争勃発。                                    |   | 10月：アジア移民への門戸開放(法律第97号)。                   | 10月：中国および日本移民の自由入国許可。   |   |  |
| 1895  | 日清戦争終結。                                    | 11月：日伯修好通商航海条約調印、国交成立。  | コーヒーモノカルチャー経済。                             | 11月：日伯修好通商航海条約調印、国交成立。  |   |  |
| 1897  |  | 2月：日伯修好通商航海条約公布。8月：リオデジャネイロ州ペトロポリスに日本公使館開設、同時に在リオデジャネイロ帝国領事館開設・初代代理公使兼総領事・珍田捨巳。 | コーヒー価格大暴落。                                 | 2月：日伯修好通商航海条約公布(対日本人移民促進)。公使館開設(初代公使：エンリケ・カルロス・リベイロ・リズボア)。  |   |  |
| 1904  | 2月：日露戦争開戦(～1905年)。                         |   | ノロエステ鉄道会社設立。パウルーはパウリスタ鉄道の終点、ノロエステ鉄道の起点となる。 |   |   | パウルー   |
| 1905  |  | 4月：駐伯日本弁理公使杉村濬、公使館通訳官三浦荒次郎氏着伯。  |  |   |   |  |
| 1906  |  | 4月：移民輸入目的で水野龍、東洋汽船グレンファー号で鈴木貞次郎とリオ・デ・ジャネイロ着。                                    | 2月：タウバテ協定(コーヒー価格維持策)。                      | 7月：鈴木貞次郎モジアナ線チビリッサ駅でコーヒー園コロノ実践(移民の草分け)。藤崎商会職員・野間貞次郎、後藤武夫、佐久間重吉、田中俊夫の渡伯、サンパウロ市内に貿易商・藤崎商会開店。11月：隈部三郎一家、熊本県より渡伯。 | チビリッサ、アヴァイ、プレジデント・アルヴェス   |  |
| 1907  | 日露戦争後の恐慌。                                  | 3月：内田定槌公使、リオ着任。11月：水野龍、聖州政府・アンツォネス・ドス・サントス社との移民輸送契約成立(3年間に3,000人導入)。            |  | 4月：植民法・大統領令6,485号制定、連邦植民地・モンソン植民地の具体化。11月：対聖州政府日本人移民輸送契約。   | 12月：隈部三郎一家、リオデジャネイロ州サン・アントニオ耕地入植。   |  |
| 初期移民期 |  |   |  |   |   |  |
| 1908  | 2月：日米紳士協定(アメリカによる日本移民の入国制限規定・新規労働移民の入国禁止)。 | 6月：第1回笠戸丸移民781人、自由渡航者13人サントス港着(皇国殖民合資会社)。                                       |  |   | 〔コーヒー園への積極的介入〕<br>8月：サンパウロ州内6農場にコロノとして入植。ジャタイ耕地事件。10月ノロエステ線トレード・ピザ駅サンジョアキン農場に、最初の日本人移民9家族27人が監督兼通訳の香山六郎と共に入植し、ノロエステ沿線日本人入植先駆者となる。 | カフェランジア、リンス、プロミッソン、アバニャンダーバ、ペナポリス、グリセリオ、アラサツバ、コレゴ・アズール |
| 1909  |  |   |  |   |   | バル・デ・バルマス、トレド・ピザ、アラカンガア、アニャンガイ                         |
| 1910  |  | 5月：第2回旅順丸移民神戸出航。10月：東洋移民会社は竹村移民会社と同条件で聖州政府と移民導入契約締結(竹村・東洋両社併存)。                 |  |   | 6月：第2回旅順丸移民(906名)・自由渡航者(3名)サントス入港(竹村第1回移民)。   | バクリ、ルツサンヴィーラ、イーリャセッカ、イタブラ、ジュビア                         |
| 1911  |  | 1月：藤田敏郎臨時代理公使ペトロポリス着任。  |  | 2月：聖州政府の第1モンソン植民地に日本人移民導入(5家族)。12月：東京シンジケートとの植民契約権限を聖州政府に与える州法第1,299号発令。                                      | 〔借地農、自営農民の発生〕<br>2月：聖州政府の第1モンソン植民地に日本人5家族入植、借地農、自営農民として日本人初の綿花栽培者となる。   |  |
| 1912  | 7月：明治天皇崩御。                                 | 3月：厳島丸移民。   |  |   | 〔計画的日本人植民地建設開始〕<br>3月：聖州政府との植民地建設契約(イグアッペ植民地、青柳郁太郎)。4月：厳島丸移民(1432名)サントス入港。  | シンシナート、ビリグイ  |

|      | 日 本                                       |   | ブラジル  |                              |   |                    |
|------|---|---|---|------------------------------|---|--------------------|
|      | 国内事情                                      | 対ブラジル移民政策   | 国内事情  | 対日本人移民政策                     | 日本人移民の活動  | ノロエステ鉄道主要駅開設状況     |
| 1913 | 東北・北海道の大凶作による農村不況。                        | 3月：東京シンジケート、桂太郎首相承認のもとで、ブラジル拓殖株式会社（資本金100万円）設立し、植民地開設準備を進める。  |   |                              | 〔独立自営農民による近郊型農業集団の発生〕5月：第3回移民のコロノ契約終了者10家族（代表秋村長寿、熊本・福岡県出身者）、サンパウロ郊外ジュケリーに50アルケールの土地を購入、ジャガイモ中心の近郊農業を開始。<br>〔永住前提の計画的植民地の発生〕11月、イグアッペ植民地入植開始、入植者はサンパウロへ進出した在伯日本人30家族程。医師や農業技師の指導により、サトウキビ栽培中心農業開始。出稼ぎ移民から永住者への意識変換をはからせる。 |                    |
| 1914 | 8月：第一次世界大戦参戦（中国進出）。                       | 3月：若狭丸移民（1,688名）と帝国丸移民（1,809名）神戸出港。   | 8月：第1次世界大戦によるヨーロッパ系移民の帰国。<br>10月：ノロエステ鉄道貫通（パウルーヘルツサンビラートレースラゴアス）。 | 3月：聖州政府第1回移民送出契約破棄（補助金中止）。   | 4月：若狭丸移民と帝国丸移民サントス入港。5月：リンス駅バルボーザに藤永力蔵他14家族入植、130アルケールを購入。10月：サンパウロ郊外のコチアに鈴木貞次郎の仲介で日本人3人入植。   | トレース・ラゴアス（パラナ川岸）   |
| 1915 | 大戦景気。                                     | 7月：在サンパウロ帝国領事館開設（初代総領事松村貞雄）。10月大阪商船南米航路開始。  |   |                              | 8月：独立自営農民による植民地建設（ノロエステ線カフェランジアの平野植民地）。同時にピリグイ植民地にも入植。10月：第1モンソン植民地に飛蝗の大群襲来、大蝗害発生。  |                    |
| 1916 |   | 3月：ブラジル移民組合結成（竹村、東洋、森岡各移民組合の合併）。サンパウロ支店は1917年開設。  |   |                              | 1月：星名謙一郎、週刊『南米』創刊。8月：金子保三郎・輪湖俊牛郎『日伯新聞』創刊。10月：リンス駅バルボーザ、日本人6家族入植（熊本県人）。人口24,633人のパウルー市に日本旅館開業。   | ノゲイラ               |
| 1917 |   | 6月：ブラジル移民組合による聖州契約移民再開、4年間に2万人の輸送協定（若狭丸移民1,351人）。12月：ブラジル移民組合を包含した海外興業株式会社設立（南米植民、東洋移民、日本移民、日東植民の4社併合）。 |   | 6月：聖州政府契約破棄解除、聖州政府補助移民再開。    | 8月：黒石清作『伯刺西爾時報』創刊、10月：星名謙一郎ソロカバナ線バイベン植民地とアルバーレス・マッシャード駅プレジジョン植民地を売り出す。ノロエステ線、エイトールレグール駅（プロミッソン）イタコロミー植民地に日本人8家族入植。小学校建設・7月：朝日小学校（カフェランジア駅平野植民地）、8月：アグア・リンバ小学校（アラサツバ）。   |                    |
| 1918 | 8月：米騒動は富山県から1道3府37件に拡大。<br>11月：第一次世界大戦終結。 | 7月：在サンパウロ帝国領事館リベイロン・プレット分館開設（初代主任は副領事三隅業蔵）。10月：公使館がベトロポリスからリオ・デ・ジャネイロに移転（特命全権公使堀口久万一）。                  | 11月：第一次世界大戦終結。  | 12月：聖州政府、州令13325号により海興に営業許可。 | 〔20年来の大霜でコーヒー大被害〕5月：上塚周平、ノロエステ線プロミッソン駅イタコロミーに植民地建設、建設協力者：鈴木貞次郎、香山六郎、間崎三三、坂本留次郎。6月：ノロエステ線リンス駅ウニオン植民地に香川県人4家族入植。第1回移民着伯10周年記念。7月：上塚周平、エイトール・レグール駅土地売り広告（時報社）。   |                    |
| 1919 |   | 4月：海外興業株式会社とブラジル拓殖会社の合併成立。レジストロ植民地は海興の所管となる。7月：横浜正金銀行リオ・デ・ジャネイロ支店開設。9月：野田良治総領事「各自一人づつ呼び寄せよ」発言。          |   |                              | 4月：リンス市誕生。10月：ノロエステ沿線に飛蝗の大群襲来し、大蝗害発生。小学校設立・5月：ボア・ビスタ小学校（グアイサーラ）、8月：ボン・スセッソ小学校（プロミッソン）、12月：プレジジョン小学校（ソロカバナ線アルバーレス・マッシャード）。   |                    |
| 1920 |   | 海外興業株式会社のブラジル国内営業開始。<br>9月：藤田敏郎サンパウロ総領事着任。12月：伯刺西爾移民組合解散。業務一切を海興が引き継ぐ。                                  |   |                              | 1月以降：小作地・売地広告頻出（時報社）。2月：ゴンザガ小学校（プロミッソン）、4月：コレゴ・エリージオ小学校（ピリグイ）、6月：上アグア・リンバ小学校（アラサツバ）、9月：リンス駅カンベストレ植民地に熊本県人5家族入植、リーダーは農田源行。鈴木貞次郎、プロミッソン駅コレゴ・アズール植民地建設。12月：バイベン小学校（ソロカバナ線バイベン植民地）。   | グアランタン、グアイサーラ、カピツバ |

|       | 日 本                             |   | ブラジル  |   |  |  |
|-------|---------------------------------|---|---|---|--|--|
|       | 国内事情                            | 対ブラジル移民政策   | 国内事情  | 対日本人移民政策  | 日本人移民の活動   | ノロエステ鉄道主要駅開設状況   |
| 1921  |                                 | 1月：在パウルー帝国領事館開設（初代領事代理は副領事多良間鉄輔）。   |   | 1月：外国移民入国取締法制定。4月：聖州政府第2回移民送出契約破棄（補助金中止）。                               | 2月：プロミッソン連合青年会結成。9月：パウルーに日本語新聞『聖州新報』創刊、社主香山六郎。   | アラリバ、モンレヴァーデ   |
| 1922  |                                 | 8月：内務省社会局による移住民及び移住奨励策、9月：ブラジル独立百周年祭・万国博覧会参加。   | 7月：テネンティズモ（tenentismo）：第一共和制を倒壊させた下級将校たちによる暴動。9月：ブラジル独立百周年大祭典（リオ・デ・ジャネイロ）。  |   | 5月：ノロエステ日本人会創立（プロミッソン、初代会長上塚周平）、以後各地に日本人会成立。   | コロアードス、グアタンブー  |
| 発 展 期 |                                 |   |   |   |  |  |
| 1923  | 9月：関東大震災。                       | 5月1日：日本公使館、大使館に昇格、堀口久万一臨時大使に就任。28日には野田良治臨時代理大使就任。8月：在ブラジル帝国特命全権大使・田付七太着任。11月：内務省、関東大震災移民100名に1名あたり200円の補助金支給。 |   | 8月：聖州政府、正式に補助金廃止決定。10月：レイス法案による黒色人種排斥と黄色人種の入国制限（現在者の3%のみ毎年の入国許可）機運高まる。  | 〔7月：2回の大霜による大霜害、8-9月：豪雨被害、12月：干害〕。6月：リンス奥グアインペーに第2上塚植民地開拓開始、協力者は山根寛一。9月：パウルー市に平田旅館と日本旅館が開業。                                      |  |
| 1924  |                                 | 2月：青木新在ブラジル帝国大使館参事官着任。3月：在サンパウロ帝国領事館サントス出張所開設。7月：皇太子御成婚記念大阪毎日新聞移民267人、渡航費全額支給で渡伯、自由渡航者（アンドウゼンバチを含む）4人渡伯。      | 6月：コーヒー凶作。7月：イジドロ革命（サンパウロ市、イジドロ・ジ・アス・ロベス將軍蜂起）。                              | 4月：レイス移民法案下院提出。植民法・大統領令6,485号制定、連邦植民地・モンソン植民地の具体化。11月：対聖州政府日本人移民輸送契約成立。 | 〔9月：雨不足、年末-25年頭初：大干害（約6カ月）〕4月：蝗害大発生、棉作者に大被害。7月：イジドロ革命軍、ノロエステ線沿線に進軍、日本人移民に被害。10月：アリアンサ植民地建設（ノロエステ線ルッサンビーラ、企業移民の導入計画）。             | ノーバ・ニッポニア  |
| 1925  |                                 | 1月：外務省の移民事業担当は同省通商局第三課。9月：国策移民送出（帝国政府が1人に対し200円の渡航費補助と35円の移民会社手数料を負担）。  |   | 7月：反レイス移民法案（オリベイラ・ポテーリョ議員の現地視察報告、日本移民を賞賛）。                              | 〔1-3月：大干害、6月：豪雨被害〕1月：リンス青年クラブ創立。7月：上塚周平を中心としたコーヒー干害救済請願運動始まる。  | ポスト km75   |
| 1926  | 12月：大正天皇崩御。                     | 3月：コーヒー干害低利貸付資金85万円支給決定（「八五低資」）。5月：神戸に日伯協会設立。海外移住組合法公布。   |   |   | 1月：田付大使によるノロエステ・奥ソロカバナ訪問。8月：第2アリアンサ移住地1,200アルケール、鳥取海外協会購入。12月：「八五低資」資金貸出し開始、翌年6月までに貸出終了。   | ボンテ・フランシスコ・サー  |
| 1927  | 3月：金融恐慌、海外移住組合法制定・公布。           | 6月：サントス出張所主任着任（副領事浜口光雄）。  |   |   | 〔独立農民による農業の協同化・組合化の推進〕2月：第3アリアンサ移住地（3,000アルケール、信濃・富山両海外協会合同）。5月：ソロカバナ線列車衝突事故、アリアンサ行国策移民死傷。10月：プロミッソン青年連盟成立。12月、コチア産業組合成立組合員数83名。 | ウルターグア、エンジェニエロ・タベラ、チンボレー                                       |
| 1928  |                                 | 2月：神戸市に移民収容所完成、3月開所。南米拓殖会社設立（社長・水野龍）。   |   |   |  |  |
| 1929  | 10月：世界大恐慌（～1934年）。              | 5月：拓務省設置（移住民関係事務、海外拓殖事業指導奨励関係事務、初代拓務大臣田中義一首相兼任）。  | 9月：世界大恐慌、コーヒー輸出途絶による不況。   | 3月：海外移住組合現地組織のブラジル拓殖組合設立（法律3708号持分会社法規定による）。                            | 9月：コーヒー豊作によるコーヒー滞留   | フェルジナンド・ラボリアウ、イボランガ、グアララベス                                     |
| 1930  |                                 |   | 第2次共和制（ジェツリオ・ヴァルガス政権）   |   |  |  |
|       |                                 |   | 11月：ゼツリオ・ヴァルガス・政権掌握（ヴァルガス革命）、共和国憲法停止。                                       | 国民国家建設開始。   |  | ヘナート・ウエルネッキ、パレドン、ボニート、エンジェニエロ・ナボレオン、サイント・マルチン、ルビアセア、ベント・デ・アブレウ |
| 1931  | 12月：東北・北海道の冷害で農村恐慌の深刻化。         |   | 8月：改正新内国人雇用令。   | 1月：移民入国制限令（日本人移民のみ1.2万人の入国許可）。  |  |  |
| 1932  | 9月：満州国承認（日満議定書）。10月：満州国武装移民団送出。 | 4月：日伯中央協会設立、日伯親善交流開始。6月：渡航費補助・渡航準備金（満12歳以上1人当たり50円）支給。11月：日伯中央協会設立、総裁は高松宮殿下）。                                 | 7月：サンパウロ護憲革命。9月末カンピーナスの東山農場が最後の激戦地となる。10月2日連邦軍の勝利。12月：産業組合法発布（大統領令22,239号）。 | コーヒー価格の大暴落による経済の混乱。11月：コーヒー植付禁止令、向こう3年の植付禁止）。                           | ノロエステ・ソロカバナ地方のコーヒー栽培農民の農業経営転換（多角化、綿花へのシフト）。11月：ノロエステ線カフェランジアの平野植民地に組合創立。   | バルバライゾ   |

|       | 日 本                        |   | ブラジル  |  |  |   |
|-------|----------------------------|---|---|--|--|---|
|       | 国内事情                       | 対ブラジル移民政策                                   | 国内事情  | 対日本人移民政策   | 日本人移民の活動   | ノロエステ鉄道主要駅開設状況  |
| 1933  |                            | 年間移民総数24,493人（日伯移民史上最高の送出数）。                |   | 外国語学校の規制強化。経済不況打開のための生産者階級救済策として、4月：支払猶予並高利取締令（第22,626号）、12月：農債半減令（第23,533号）を公布。 | 6月：日本移民渡伯25周年記念祭、8月：コチア・パタタ生産組合はコチア産業組合と改称。12月：登録産業組合数は1,997、未登録組合数924。        | ジャカレカチンガ、アグアベイ  |
| 衰 退 期 |                            |   | 7月：新憲法発布、ヴァルガス立憲政府樹立。   | 7月：外国移民二分制限法公布。  | 2月：ブラジル移民功労者叙勲式（水野龍と上塚周平に勲六等単光旭日章伝達）。10月：聖州新報社のサンパウロ市移転。                       |   |
| 1934  | 3月：満州国帝政（皇帝溥儀）。米の大凶作。      | 8月：在ベレン帝国領事館開設（領事浜口光雄）。                     |   |  |  |   |
| 1935  |                            | 5-6月：日伯通商使節団派遣（平生ミッション）、経済交流の道を探る。          |   |  | 綿花生産量の増加、コーヒー生産農家の起死回生策。   | ラビニア  |
| 1936  |                            | 11月：在サントス出張所、領事館に昇格（領事代理、副領事・南条栄）。          |   |  | 2月、綿花時代が始まる。7月：日伯綿花株式会社、サンパウロ支社「プラスコット」創設。日本人集団地に綿棉工場操業開始。                     | ミランドポリス、マッシャー・デ・メーロ、グアラサイ   |
| 1937  | 7月：日中戦争。                   | 1月：ラジオ東京の南米向け本放送開始。                         | 11月：ヴァルガス独裁政権、エスタード・ノーボ（新国家体制）樹立。   | 7月：外国語新聞・雑誌発行取締り令。11月：14歳未満の子女の外国語教授禁止（外国人入国法第85条、第87条）。                         | 9月：帝国総領事館調：主要日本人会45団体。10月：在伯同胞の国防献金運動盛ん。帝国陸海軍への国防献金230コント。銃後婦人会、青年会による献金活動活発化。 | ムルチンガ・ド・スル、ブラナルト、アンドラジーナ、バラナポリス、カステリーヨ、ジュンケイラ。ノロエステ変更線はポンテ・フランシスコ・デ・サーで旧線と連結、ルッサンビーラ経由ノロエステ旧線は廃止。 |
| 1938  |                            | 11月：ブラジル向けラジオ放送開始（日系二世アナウンサー：香山夫陽）。         | 8月：新移民法実施。1930年の移民法の改正版。移民の文化的・教育的活動への大幅な制限。ブラジル政府のラジオ放送「HORA DO BRASIL」開始。 | 12月：外国語学校の閉鎖命令（対象：全ブラジルのドイツ人・イタリア人、日本人）小学校476校、サンパウロ市内294校封鎖。                    | 9月：ブラ拓商事部（Casa Bratac Ltda）設立。登記終了。  |   |
| 1939  | 日米通商航海条約廃棄、翌40年1月失効。       |   | 第2次世界大戦（ブラジルの中立）。   |  | 4月：日本人諸団体数（日本人会・青年会・処女会など260）。日本病院落成式。5月：日伯新聞発刊停止。                             |   |
| 1940  |                            |   |   |  | 10月：南米銀行営業開始（サンパウロ市）。  |   |
| 1941  | 12月8日：太平洋戦争勃発。             | 8月：戦前最後の移民船ブエノスアイレス丸サントス入港。                 |   | 5月：在外外字新聞・雑誌発行禁止令。   | 7月：聖州新報廃刊。8月：伯刺西爾時報一時休刊。   |   |
| 空 白 期 |                            |   |   | 1月：伯日国交断絶、敵性国民取締り令。2月：枢軸国側資産凍結令。サンパウロ市内日本人立退き命令。                                 |  |   |
| 1942  |                            | 1月：日伯国交断絶、7月：在外公館閉鎖、公館員帰国。11月：拓務省廃止、大東亜省設置。 | 8月：対ドイツ・イタリア参戦。   |  |  |   |
| 1944  |                            |   |   |  | 4月：ハッカと蘭生産農家（敵性産業農家）の焼き討ち事件発生。農村地区から都市への日本人移民およびその子孫の移動顕著となる。                  |   |
| 1945  | 8月：第二次世界大戦終結、食糧難とインフレーション。 |   | 6月：日本への参戦。8月：第二次世界大戦終結。10月：ヴァルガス独裁政権崩壊。                                     |  | 8月：日本国敗戦に関する混乱・デマニュース。10月：勝ち組中心に臣道連盟結成、勝ち組負け組問題発生。                             |   |

#### 参考文献

KAIO SHIOMI.『勇気のある者 DAITAN NA』（アンドラジーナ文化体育協会他、2007年）  
 青柳郁太郎『ブラジルに於ける日本人発展史』（ブラジルに於ける日本人発展史刊行委員会、1941年）  
 アンドウゼンパチ『ブラジル史』（岩波書店、1983年）  
 石川友紀.『日本移民の地理学的研究』（榕樹書林、1997年）  
 清谷益次・宮尾進他『ブラジル日本移民・日系社会史年表』（サンパウロ人文科学研究所、1996年）  
 佐藤常蔵『ブラジル全史』（トッパン・プレス、サンパウロ、1986年）  
 伯刺西爾時報.1921年.11月4日.第171号「広告」

## 第2章 香山六郎の移動の原点

### 第1節 誕生からブラジル渡航決意まで

本節では、香山六郎の移動の原点である出自について考察する。香山は、1886年1月5日、熊本県玉名郡高瀬町本町二丁目で、父・俊久(1900年12月12日没)と母・伊喜(1891年8月2日没)の二男として生まれた。香山誕生当時、両親は熊本県山崎町での『不知火新聞』経営に失敗し、玉名郡高瀬町で「松ノ屋」という田舎宿屋を始めていた<sup>1</sup>。家族は両親と長女・志乃、次女・米、長男・俊雄、次男・六郎の6人であった。『不知火新聞』については「一番親密になった上通町のキリスト教書籍店の有馬源次君の家で、父がやっていた熊本最初の『不知火新聞』の文献を初めて見た。」と記されており、香山はこの文献を父親の活動の証として誇らしく思っているようであった<sup>2</sup>。香山が後に『聖報』を立ち上げる素地は、この頃既に形作られていたといえよう。

香山5歳の1891年8月2日、心臓の悪かった母親伊喜が死没した<sup>3</sup>。また父の死亡は16歳の時とされる。『回想録』の14歳の記述と明らかに異なるが、これは総務省法令で、年齢は満年齢で数えると定まっていたことによる<sup>4</sup>。記憶を辿って記述する回想録の欠点が明らかになった。

さらに分析すると、1888年、父親が福岡県庁の官吏になったのを契機に福岡県福岡市へ一家転住するが、その転住地「福岡市東中津町」は当時の行政区に存在しない<sup>5</sup>。福岡市中洲町は県庁舎西方の那珂川の中洲であったので、香山の記述する「東中津」とはこの「福岡市中洲町」(現、福岡市博多区中洲)を指しているのではないかと考えられ、これも『回想録』の誤記の一つといえる。

母の死以降、父の退職、再婚と離婚、失職、姉・兄たちの就職・結

---

<sup>1</sup> 香山六郎『回想録』(サンパウロ人文科学研究所、1976年)、11頁および熊本日日新聞・新聞博物館「新聞の歩み」によれば、1869年政府が新聞発行を進んで許可した記述はあるが、『不知火新聞』については不明。

<sup>2</sup> 香山六郎、前掲書1)、89頁。清書原稿A(以下、清A)343頁。

<sup>3</sup> 香山六郎、前掲書1)、22頁。清A51頁。

<sup>4</sup> 法令番号『明治35年12月2日法律第50号』の『年齢計算ニ関スル法律』第1項に「年齢ハ出生ノ日ヨリコレヲ起算ス」とある。

<sup>5</sup> 香山六郎、前掲書1)、12頁。清A6頁。



婚・離婚と家庭状況はめまぐるしく変化し、結果、香山は 1899 年 3 月までに福岡市(現、博多区、中央区)に 6 回、若松市(現、若松区)と小倉市(現、小倉区)に 1 回ずつ、熊本市(現、中央区、西区)に 6 回と計 14 回も転居し、小学校だけでも 7 回入学・転校・卒業を繰り返していた<sup>6</sup>。このように、香山の幼年時代は、父親の退職以降は貧困生活を余儀なくされ、学齢期に達していながら転居に伴う転校を繰り返して学業も振わなかった。特に 1898 年当時は、家計貧窮のため『九州日日新聞』の活字工となっていたほどだ<sup>7</sup>。香山のブラジル渡航以後も常に付きまとった貧困生活、貧困にめげぬ精神の鍛練、頑なな人生哲学を心に秘めるようになった原点は、既にこの時代に存在したといえよう。

1899 年、香山は兄の俊雄とともに京都の叔父・土屋員安宅に身を寄せている。土屋が京都第一中学校校長へ栄転したことによるもので、父俊久は存命ではあったが病気と無職という貧窮状態に置かれていたため、生活力もあり社会的知名度も高かった員安叔父が後見人になっていた<sup>8</sup>。これを機会に、兄俊雄には正規の中学校教育を、香山には小学校教育を受けさせようとの員安叔父の善意から、香山は京都市中立売高等小学校 3 年生に入学している。

1900 年 3 月末、京都市中立売高等小学 3 年を修業。同年 4 月から、文部省学制改正令により京都府立第一中学校に入学し、そこで香山の無二の親友となる木下道雄に出会っている<sup>9</sup>。彼の父は京都帝国大学初代総長木下広次であった。京都府立第一中学校学友会編『学友会誌』第 8 号に

<sup>6</sup> 香山六郎、前掲書 1)、24-52 頁、清 A55-173 頁によれば、福岡県立師範学校附属小学校入学(1892 年)、若松市内の小学校 1 年に転入(1892 年)、1893 年小倉の小学校 2 年となった。その後、1894 年夏までは福岡、小倉と転居続きであったことから小学校に行った気配はなく、1894 年 8 月熊本に戻った時、姉に読本の勉強を教えてもらっていた。熊本市瀬台尋常小学校 3 年入学・修業(1895 年)、熊本市春日小学校 4 年入学・卒業(1896-1898 年)、飽田高等小学校入学(1898 年)、大江村託麻高等小学校 2 年転校・卒業(1898-1899 年)。清 A55-173 頁。

<sup>7</sup> 1882 年 8 月創刊の『紫溟(シイ)新報』が 1888 年 10 月『九州日日新聞』と改称したものの。熊本日日新聞・新聞博物館(2013 年 10 月調)。

<sup>8</sup> 1899 年 7 月 29 日～1911 年 6 月 8 日。第 5 代校長就任。京一中洛北高校同窓会事務局確認(2013 年 8 月)。

<sup>9</sup> 1886 年 4 月 10 日公布「明治 19 年勅令第 15 号 第 1 次中学校令」および 1899 年 2 月 7 日公布「明治 32 年勅令第 28 号 第 2 次中学校令」により確認。修業年限 5 年とする。5 年を 1 級～5 級に分け、毎級の授業年限を 1 年とする。入学資格は 12 歳以上の中学校予備の小学校、またはその他の学校の卒業者とするなどの規定があった。

よれば、香山の出身地は「肥後国玉名郡高瀬町」、木下道雄の出身地は「京都市聖護院町」となっている。また、同『学友会誌』第10号では、木下道雄の出身地は「京都市聖護院町一番戸」と同じであるが、香山六郎の出身地は「肥後国飽託郡春竹村」と書き換えられており、1900年12月12日の父俊久の死後、飽託郡春竹村大字春竹の香山本家に移籍されていたことがわかる。なお、2冊の『学友会誌』から無二の親友であった木下道雄は、成績優秀者名簿に2回も記載されていたが香山の名前は見当たらないことから、香山の成績は抜群ではなかったようだ。なお、同窓会誌第9巻および第11巻は資料そのものが存在しないため、香山の4年級までの在籍・成績等の確認は不可能であった。後に香山がサンパウロでの放浪生活中にリオ・デ・ジャネイロを訪問し、その時の印象を「リオ首都の山の手街は私にふと京都の街々を思いおこさせた。サンパウロ市のパウリスタ大通りのブルジョア趣味よりも、閑にして古びた街の落ち着きがそこには染みついたようにあった。」と述べている<sup>10</sup>。この一文は『清書原稿A』にもあり、香山の京都での生活を証明する貴重な一文となっている<sup>11</sup>。

1903年、4年に進級した香山は脚気を患い、員安叔父の奨めで転地療法を兼ね熊本済々黌に転校するため帰省している。京都を去る時、員安叔父宅で『南米事情』に関する地理書を発見し、香山は初めてブラジルという国の名前を知ったとある<sup>12</sup>。「ブラジル移住をいつ頃から考え始めたのか。」の遠因の一つはこの時点にあったといえよう。ただし、この『南米事情』は1908年の出版なので、香山の記述との時間的整合性を欠く。香山が当時読んだとされる冊子は現時点では不明である。

熊本済々黌へは1903年8月、土屋の依頼により井芹経平熊本済々黌校長が保証人となって、香山の入学を許可している<sup>13</sup>。学校長を保証人とし

<sup>10</sup> 香山六郎、前掲書1)、212頁。清A800頁。

<sup>11</sup> サンパウロ人文科学研究所「香山六郎自伝」刊行委員会所蔵、ジェニー脇坂『清書原稿A』800頁参照。同一文コピーをジェニー脇坂氏の許諾を得て半澤取得。

<sup>12</sup> 白石元治郎「第五編伯刺西爾共和国」東洋汽船『南米事情』（東洋汽船株式会社、1908年）、305-386頁と考えられるが確証はない。

<sup>13</sup> 熊本県教育委員会『熊本県近代文化功労者顕彰』（1947-1955年）によれば、井芹経平は熊本県上益城郡出身、慶応元（1865）年生れ、済々黌長、新進の青年教育者とある。熊本済々黌同窓会名簿委員会『済々黌100周年記念済々黌同窓会会員名簿』（熊

での入学は、当時としても稀有なことであつたに違いない。

1903 年秋、済々黌修学旅行で広島海軍兵学校を見学し、日露戦争直前の軍艦に香山は驚きと凄味を感じている<sup>14</sup>。これは以前から海軍士官を夢見ていた香山には貴重な体験で、その道への決断を促した誘因であつた。しかし、この夢は実現していない。

1903 年末の済々黌火災の後、香山は翌年 3 月の修業試験に落第し動揺する。しかし員安叔父の「脚気症、転校、下宿の転々、教科書不足などで致し方ない。今年から一層勉強してくれ」との手紙を受け取り再奮起している<sup>15</sup>。

## 第 2 節 海・陸軍士官への夢と挫折

香山は海軍士官への夢実現に向けて、以下のような努力をしていた。

先ず第 1 点は、落第という苦い体験から再奮起して学力向上に努め、1905 年 3 月、中位の成績で熊本済々黌 5 年生に進級したこと。第 2 点は、満 19 歳に達していたことから海軍兵学校受験資格が備わっていたので、更に猛勉強をして 5 年級の 1 学期の成績を向上させていたこと。第 3 点は、受験のためにと熊本市渡鹿練兵場(現、熊本市中央区渡鹿 2 丁目)近くの間借りでの自炊生活を止め、同市新屋敷(現、同市中央区新屋敷町)の民家での下宿生活を始めている。香山の転居歴は 1903 年の済々黌入学から 1905 年 3 月までに、熊本市内だけで 6 か所にのぼっている。これらは全て海軍士官になるための移動、すなわち済々黌を優秀な成績で卒業することにあつたといっても過言ではない。それほど香山は、将来軍人になることに執着していたといえる。

徴兵に関しては、1872 年、太政官による「徴兵告諭」の布告と明治憲法により、当該年齢の男子は徴兵の義務が負わされていた<sup>16</sup>。香山はその

---

本済々黌同窓会名簿委員会、1982 年)によれば、同校は 1879 年 12 月 5 日、熊本市高田原相撲町(現、下通一丁目)に「同心学舎」として創立。創立の中心人物は佐々友房。1882 年、私立済々黌となる。1899 年、熊本県中学済々黌、1901 年、旧制熊本県立中学済々黌と改称とある。

<sup>14</sup> 香山六郎、前掲書 1)、83 頁。清 A319 頁。

<sup>15</sup> 香山六郎、前掲書 1)、87 頁。清 A333 頁。

<sup>16</sup> 法令全書によれば、「(略)故ニ今其ノ長スル所ヲ取り、古昔ノ軍制ヲ補ヒ、海陸二軍ヲ備ヘ、全国四民男児二十歳ニ至ル者ハ尽ク兵籍ニ編入シ、以テ緩急ノ用ニ備フヘ

義務を全うすべく 1905 年 7 月下旬、熊本県庁公会堂で行われた海軍兵学校の身体検査に出向いた。しかし、痔疾の疑いと基準値以下肺活量であったため不合格となってしまった。翌年(1906 年)の再受験は、痔疾と 1 月生まれで満 20 歳になるため受験資格が危ないと悲観し、不合格となった翌日早朝、県立の痔専門医を受診しているが、「痔の気なし」と言われ軍医に対してひがんでいたことがわかっている<sup>17</sup>。この不合格は人生設計上の大きな番狂わせであったことには違いない。香山の少年時代からの海軍士官への夢は、この時点で打ち砕かれてしまったことになる。

1906 年 3 月、香山は熊本済々黌を卒業した<sup>18</sup>。その時の状況を香山は「役員室の板壁に張り出された紙の卒業生の姓名の中に香山六郎の文字を見出した時、私の不安は心臓のとまりそうな胸騒ぎにかわり、次の瞬間私は蘇生した。卒業生 94 名中 73 番で卒業している。全身の血がたぎりだした。よかった。」と、述べている<sup>19</sup>。熊本済々黌の卒業名簿は、小学校、中学校と卒業生名簿の確認が不可能であった香山の学歴を示す貴重な手掛かりとなるものであった。

卒業後の同年 4 月、香山は陸軍士官候補生を受験するため、戸籍謄本取得目的で春竹村に出かけ、第六師団の連隊司令部にも出かけているようだ。このような行動をしているところを見ると、海軍士官への夢こそ破れはしたが、陸軍士官への夢が残っていたのだろう<sup>20</sup>。その年の陸軍士官候補生募集は、日露戦争終結後で南満州と北カラフトの防備戦に備えるためであったのか、例年 300 名位だった募集人数が 2,000 名と大幅に増員されていたため、応募すれば大抵のものは合格するだろうと言われていたからである<sup>21</sup>。この裏付けとなる文書類に 1904 年 9 月 28 日の徴兵

---

シ」とあり、明治憲法第 20 条の兵役義務の明示により、全国民の 17 歳から 40 歳までの男子を兵籍にのせ、20 歳に達した者は徴兵し、国家の緩急に備えなければならないとされた。

<sup>17</sup> 香山六郎、前掲書 1)、91 頁。清 A349 頁。

<sup>18</sup> 熊本済々黌同窓会名簿委員会『済々黌 100 周年記念済々黌同窓会会員名簿』(熊本済々黌同窓会名簿委員会、1982 年)、71 頁。

<sup>19</sup> 香山六郎、前掲書 1)、94 頁。清 A359 頁。

<sup>20</sup> 徴兵検査不合格の書類が存在を地方行政資料の確認を熊本県立図書館に問い合わせたが、1907 年出版「第十八師管徴兵事務取扱手き」のみ確認を得たにとどまった。

<sup>21</sup> 加藤陽子『徴兵制と近代日本 1968-1945』(吉川弘文館、1996 年)、145 頁。

令改正、帝国憲法第八條(緊急勅令)による改正(勅令第 212 号)がある<sup>22</sup>。それによれば、「日露戦争による第 1 回旅順総攻撃や、遼陽の会戦による日本側の死傷者が予想を上回るものであったため、要員の迅速な確保が急務とされ、兵役年限の延長策や補充兵の大量採用が認められた」とある<sup>23</sup>。この改正令が発行された最中での香山の陸軍士官候補生志願であったから、熊本第六師団における 2,000 名募集は当然のことだったといえる。しかし、この事態が逆に香山の士気を削ぐ結果となり、香山は「受験日最初の体格検査の日が来たが、私は急に軍人になるのがつまらなくなった」として出頭せず、「私の思想は転向した。」と述べている<sup>24</sup>。

なぜ香山はこの場に及んで思想転換を打ち出してきたのか。その根拠として、先の『万朝報』紙の日露戦争に対する社主・黒岩涙香の会戦擁護論への転換への疑問や、社主の理論に反発し非戦論を唱えて同社を退いて行った内村鑑三、幸徳秋水、堺利彦たちへの傾倒が考えられるのではないか。

また、1906 年夏、台湾の文官であった兄が熊本に一時帰省した時の姿を見て、「私はぞっとした」との一文があるが、この文には明らかに植民地支配者側に立った兄への羨望心が現われている<sup>25</sup>。その後も香山は台湾渡航希望に関して兄と激論を戦わせている。その際、台湾成金で紳士気どった兄を激怒させ、やり込めたことへの通快感と満足感、自由主義へ傾倒し始めていた自分自身の存在などを明確にアピールしている。これらの行為の中に、国家権力への反抗心と軍人への憧れを完全に遮断し、新たな進路を模索している青年・香山を見る。見方を変えれば、現実からの逃避策を講じようとしていた香山も併存していたということにもなる。

### 第 3 節 徴兵令と徴兵忌避

<sup>22</sup> 徴兵制は 1873 年発布の徴兵令に始まる兵役制度。「徴兵令改正ノ件」、「公文類聚 1904 年」(2. A. 11. 976) . 国立公文書館デジタルアーカイブ。

<sup>23</sup> 加藤陽子、前掲書 21)、145 頁によれば、1904 年 8 月 19 日：死者 15,860 人、8 月 28 日：死者 23,533 人とある。

<sup>24</sup> 香山六郎、前掲書 1)、97 頁。清 A374 頁。

<sup>25</sup> 香山六郎、前掲書 1)、98 頁では、「パナマの台湾帽子、台湾上布の浴衣、兵児帯に金時計の金ぐさをだらりと下げた兄の姿」と描写している。清 A378 頁。

1906 年 8 月の兄との激論を端緒として、香山は「短剣を下げる思想が塵埃のごとくなり、生命はペンにありと思う自分に独りほほえむ」ようになっていった<sup>26</sup>。この香山の文人としての決意表明は員安叔父との意見の相違を生み出し、員安叔父との別れを促した。その例を挙げると 1906 年 8 月、員安叔父が満州視察から帰国し、香山を伴って京都大学総長木下広次宅を訪問した際、視察報告をする員安叔父と木下総長との会話を聞き、木下総長が日露戦争勝利に湧く大陸進出を是とする員安叔父の姿勢へ疑問を投げかけ始めていたこと、香山の西洋かぶれを「それも良かろうと」是認していたことなどに表出していた。さらには、員安叔父の視察旅行中、香山が留守番役として京都の叔父宅に居候していた時、叔母が香山の日記を隠し読みして帰国後の員安叔父に報告し、叔父から思想悪化したとして勘当され、京都を去る事態にも表出していた。勘当された時の事を香山は「員安叔父の声の中に、私は不合理を隠しているような響きを感じた。」と表現し、員安叔父が癩癩に振えながら香山の日記を破ってしまった行為にも冷静に対処している<sup>27</sup>。香山自身も気付いているように、員安叔父の勘当の理由が単に日記事件への関与だけであったとは考えにくい。なぜならこの時すでに香山は 20 歳であったからだ。軍人への夢が消失した香山の将来を員安叔父が心配しないはずはない。何らかの機会を与えようとしていたが、その機を逸していたのかもしれない。香山が 13 歳の時から員安叔父は後見人として教育する義務を果たしつつ、香山の成長する姿を見つめてきていた。だからこそ員安叔父は、香山の自立を促す機会を囑望していたのではないだろうか。勘当という形で後見人の役割を閉じようとしたのは、員安叔父の演技ではなかったか。現に叔父の声の中に不合理を隠しているような響きを感じた香山は、この出来事を契機に「これからが俺の一本立ちだ。東京に行って苦学しよう。そうだそうだ、東京へ行こう」とその決意を述べていることで証明される<sup>28</sup>。それは真夜中の京都七条駅での香山の決断であった。

『回想録』での表現をその時点での状況論や人情論として捉えては危

---

<sup>26</sup> 香山六郎、前掲書 1)、100 頁。清 A 382 頁。

<sup>27</sup> 香山六郎、前掲書 1)、101 頁。清 A 385 頁。

<sup>28</sup> 香山六郎、前掲書 1)、101 頁。清 A 388 頁。

陰すぎる。員安叔父の勘当は、香山に次の時代のステップを踏ませるための計画的実践であったとも受け止められはしまいか。幼児時代に福岡で員安叔父を初めて認識して以来、香山が好印象をもっていた員安叔父との繋がり、香山のブラジル渡航前生活の太く強い絆となっていたからだ。

東京に出た香山は、早稲田大学経済学部出身・関力夫たちの学生相手の雑誌社の下周り記者に雇われている。この関力夫との再会が、後に聖州新報を立ち上げる際の強力な支援者、第二代サンパウロ総領事藤田敏郎との出会いに繋がる<sup>29</sup>。藤田総領事は聖州新報創刊時の新聞名の揮毫者である。現存する『聖報』最古の記事である 1923 年 2 月 23 日第 71 号の揮毫がそれと判断できる<sup>30</sup>。

香山は「月給五円もらえるようになったので、神田区日本大学予科に入学した。大学に席をおけば、来年の徴兵にも延期の恩典が得られた。週に 2 度ほど学科時間に出席していた。」と述べ、さらに、「日本大学予科では、その頃新設された殖民科に在籍し、週 1 度は出席していた。主に徴兵延期願いの便宜上大学に席をおいていたので、そこを卒業してなどという意志は私にはまったくなかった。」と断言している<sup>31</sup>。この一文から香山は、1906 年 4 月に開講した日本大学・大学部商科付属殖民科に入学したことがわかる。ところが『回想録』では、この辺の記述が非常に曖昧である。神田区日本大学予科とは、1903 年 4 月に開講した日本法律学校高等予備科が、同年 8 月に校名を日本大学と改称した際に改称した「大学予科<sup>32</sup>」のことで、1905 年 9 月、大学部商科が開講され、その

<sup>29</sup> 関力夫の妻・関チカは藤田敏郎の姪御で、チカの父親・関当純は藤田敏郎の実兄。関力夫(旧姓太田)は、京都の叔父・土屋員安宅の書生をしており、香山をよく知っていた。藤田敏郎「海外在勤四半世紀の回顧」石川友紀監『日系移民資料集南米編』第 17 巻(日本図書センター、1999 年)、161-171 頁には「サンパウロ州日本人の発展」あり。

<sup>30</sup> 柳下宙子「外交館所蔵ブラジル日本移民関係史料の概要と今後の研究の可能性」丸山浩明編『ブラジル日本移民百年の奇跡』(明石書店、2010 年)、283 頁表 4 によれば、藤田敏郎は、1911 年 1 月から 1913 年 6 月までは、在ブラジル公使館臨時代理公使・公使館一等通訳官として、1920 年 9 月から 1922 年 12 月までは、在サンパウロ総領事館総領事としてブラジルに赴任しているので、聖州新報創刊時に新聞名の揮毫者となったことは証明される。

<sup>31</sup> 香山六郎、前掲書 1)、107 頁。清 A417 頁。

<sup>32</sup> 日本大学百年史編纂委員会『日本大学百年史』第 1 巻(学校法人日本大学、1997 年)、

商科の付属として修業年限 2 か年の特殊講座殖民科が設置された。正式講座名は「大学部商科付属殖民科」で、1906 年 2 月に認可され 4 月に開講している<sup>33</sup>。

ところが、香山が入学したと思われる時期は明らかに 1906 年 8 月以降である。その時点では既に大学部商科付属殖民科は開講していた。従って『回想録』文中の「1906 年 4 月に開講した予科では、その頃新設された殖民科に席を置いていた。週に一度くらいは出席していた<sup>34</sup>。」という表現は、日本大学予科と日本大学・大学部商科付属殖民科を混同していることになる。大学予科に殖民科が新設されたわけではないのである。しかも香山は日本大学予科では週 2 回、私立日本大学・大学部商科付属殖民科には週 1 回講義に参加していたという。肝心なところで非常に曖昧な自伝の表記となってしまう。これらのことは徴兵延期が目的であった香山にとっては、何ら留意する必要のなかったことだったのだろう。修業年限 2 か年の大学在籍は本人がいうとおり、大学在学は徴兵延期願いを提出しつつ徴兵から逃れるための隠れ蓑であったにすぎなかったことが、根拠となる資料の存在により判明した。大学在籍は判明したが、同窓会誌には卒業についての掲載はなく、香山が卒業したかどうかは未解明である。

香山は「大学に席をおけば、来年の徴兵にも延期の恩典が得られた<sup>35</sup>。」と述べているのだが、徴兵延期の恩典とは何であったのか。加藤は「1889 年 1 月の徴兵令改正(法律第 1 号)で、20 歳になり身体検査で合格すれば籤を引き、常備兵・補充兵に当たった者は読み書き算術の試験を行ない合格なら兵士になる。このような簡単な手続きで 12 年もの義務を負うのであれば、理不尽に感ずるのも無理はない。まして、その義務が等しくかかってくるならまだしも、30 分の 1、20 分の 1 の確立で当たる貧乏籤なのである。」と記している<sup>36</sup>。さらに加藤は福沢諭吉の『全国徴兵

---

496-497 頁。

<sup>33</sup> 日本大学百年史編纂委員会、前掲書 32)、525-529 頁。

<sup>34</sup> 香山六郎、前掲書 1)、107 頁。清 A416 頁。

<sup>35</sup> 香山六郎、前掲書 1)、103 頁。清 A397 頁。

<sup>36</sup> 加藤陽子、前掲書 21)、131 頁。



論』を引用して、「福沢は官立の学校の生徒にのみ免役があるのはおかしいと述べ、軍部は直ちに 1889 年の改正で私学と官学の差を撤廃し、陸軍省の認定した私立学校生徒も免役にした。」と述べている<sup>37</sup>。この「陸軍省の認定した私立学校生徒にも免役」の一文が日本大学・大学部商科附属殖民科にも該当し、それが故に香山は日本大学を選んだ。ここがもっとも重要な点であった。さらに加藤の指摘する 1895 年の徴兵令改正(法律第 15 号)の改正のポイント 6 つのうちの 3 点目の特徴が、香山の徴兵忌避に関わっていたと考えられる<sup>38</sup>。その文を引用すると

在外中の猶予の上限を今までの 28 歳から 32 歳に上げ、在外を理由とする猶予の理由を留学に限らないことにしたことである。1889 年の徴兵令では第 21 条第 2 項で「學術修業ノタメ外国ニ寄留」する者のみを許していたが、それを単に「外国ニ在ル者〔朝鮮国ニ在ル者ヲ除ク(割注)]」というように改正した<sup>39</sup>。

と書かれ、さらに続けて

この立法の趣旨は文面だけを読むと、32 歳までに帰ってくれば、抽選の方法によらず徴集するとあって、国家がしつこく帰国者を兵役に取り込もうとしているようにも取れるが、そうではない。陸軍側の内部資料では「外国旅行は寧ろ之を奨励するの利益あると同時に、幸に壮丁に余りあるを以って姑く本項を修正し、凡そ外国にある者は徴集を猶予することと為さんと欲する」(陸軍省「明治 28 年 3 月 式大日記」<sup>40</sup>)。

---

<sup>37</sup> 加藤陽子、前掲書 21)、131-132 頁。『福沢諭吉全集』とは、福沢諭吉『福沢諭吉全集』第 5 巻(慶応大学、1959 年)、397 頁をさす。

<sup>38</sup> 加藤陽子、前掲書 21)、139-143 頁。この法律について、国立公文書館アジア歴史資料センターでレファレンスコード A3032008600(画像数 331)を検索したが、1999 年 1 月「式大日記」坤陸軍省しか見当たらず。

<sup>39</sup> 加藤陽子、前掲書 21)、141 頁。

<sup>40</sup> 加藤陽子、前掲書 21) より引用。ただし、国立公文書館アジア歴史資料センター、レファレンスコード A03032008600(画像数 331)を検索しても 1899 年 1 月「式大日記」坤陸軍省しか見当たらず。

もしかして香山や員安叔父は「學術修業ノタメ」だけではなく、「外国ニ在ル者〔朝鮮国ニ在ル者ヲ除ク(割注)〕」と書かれているこの資料の意図するところを知っていたのではないだろうか。また「凡そ外国にある者は、徴集を猶予することと為さんと欲する」とする条文を加味すると、32 歳まで帰国せずそのまま外国生活をしていれば、日本の徴兵令から解放される。また 33 歳以降帰国すれば徴兵令から免れられるということになる。それが故に員安叔父は日記を理由に香山を勘当し、香山は日本大学・大学部商科殖民科に在籍したのではないだろうか。

その根拠と思われる事項が 2 つ考えられる。第 1 に、1906 年 8 月、員安叔父が満州視察からの帰国挨拶に、京都大学木下総長宅を訪問した際の香山の感想である。香山は二人の会話の中に何らかのヒントを得ていた。特に員安叔父とそのことを確認し合った訳ではないが、員安叔父も総長との会話の中で意見の違いを感じていたようだ。これらの要素が加わって、員安叔父の香山に対する見方が変化しつつあったと考えられはしまいか。第 2 に、ブラジルの日本国サンパウロ総領事館では、ブラジル移民に対する「徴集延期に関する告示」を日本語新聞に掲載している点である。例えば日伯新聞 1924 年 10 月 1 日付第 395 号第 2 面には、サンパウロ総領事館からの記事が、1 年後の聖州新報 1925 年 10 月 30 日付第 202 号第 6 面には、在バウルー帝国総領事館名の「徴集延期に関する告示」が掲載されている<sup>41</sup>。『聖報』の残存する紙面中では、この時の記事が告示記載の最初であった。

日本大学・大学部商科殖民科に在籍中は、徴集延期願いを提出するだけで徴兵を忌避することができ、また、ブラジル滞在中の者には、徴集延期願と在留証明書を出願すればブラジル在留が保証されたのである。

以上から、香山には大学在学と海外渡航は、徴兵忌避のための必要条件となっていたといえる。1908 年 2 月、員安叔父からの手紙で海外渡航を勧められ、歓喜する香山像も描かれてはいるが、香山にとっては当然の成り行きであったのだ。したがって『回想録』では「員安叔父から海

---

<sup>41</sup> 「第 1、明治 37 年 12 月 2 日より同 38 年 12 月 1 日迄に生れたる者及び現在徴集延期中の者は大正 14 年度徴集延期方及び在留証明方を出願すべし 但し大正 14 年 4 月 15 日迄に満 37 歳に達する者は大正 14 年度の徴収延期願を差出すに及ばず」。

外雄飛を勧められ」とあるが、香山にとっては「海外雄飛」というほどの大義名分は立ちにくく、単なる「徴兵忌避の一手段」にすぎなかったという解釈が妥当ではなかろうか。

#### 第4節 ブラジル渡航の真相

香山には、海外のどこの国に行きたいのか、どこの国でなければならないとか言った限定はなかったようだ。員安叔父から勧められるままに一刻も早く日本を脱出せねばならぬという焦燥感に囚われた香山の姿がそこにあったにすぎない。しかし、実際どこの国に行くかについては、多少悩んでいたようだ。それらのことを「北米に行けば言葉に不自由はしないが、英語を覚えて日本で英語の先生になるのが落ちだ。」「農園に働いた処で北米では日本人に土地所有権を与えないし、人種偏見の激しい所でいやな思いをするよりも、南洋か南米に行って椰子の実やバナナ栽培の方がましだ。」「男子志を立てて郷関を出ず、学若しならずんば死しても帰らず。俺は今、海外に出たら、学成ったとしても二度と日本に帰らぬ覚悟で出かけよう。南米ペルー行き移民の記事を近頃新聞で見かけた。南洋もインドもいいが、俺は南米に行ってみよう。」などと書き記している<sup>42</sup>。

これらから香山の南米行は深い意味もなく決定されていることがわかる。しかも最初はブラジルではなく、ペルーのゴム採取移民であった<sup>43</sup>。外務省外交史料館飯倉分館所蔵の「海外旅券下付表」（明治41年4月13日口受 保第281号 受第6403号）によれば、「進達 3月中ノ外国旅券下付表別紙1通及進達候也 明治41年4月9日 熊本縣 外務省御中」には、以下のように記されている。

旅券番号 第115377号、身分 非戸主、本籍地 飽託郡春竹村、年齢 22年2ヶ月、保証人又ハ移民取扱人ノ人名若クハ社名 無記入(斜線)、旅行地名 秘露國、旅行目的 労働者副監督、下付月日 三月三十日（図2-1）

<sup>42</sup> 香山六郎、前掲書1)、111頁。清A432頁。

<sup>43</sup> 外務省「外務省記録 海外旅券下付表 明治41年3月分 熊本県」（外交史料館飯倉分館）。

図 2-1 外国旅券下付表および進達

| 明治四十一年三月分 外国旅券下付表 |    | 熊本縣 |    |
|-------------------|----|-----|----|
| 氏名                | 生年 | 本籍  | 備考 |
| 内田次一              | 丁未 | 熊本  |    |
| 寺本ト               | 丁未 | 熊本  |    |
| 川上阿三              | 丁未 | 熊本  |    |
| 加藤清               | 丁未 | 熊本  |    |
| 川村佐平              | 丁未 | 熊本  |    |
| 尼山則康              | 丁未 | 熊本  |    |
| 香山六郎              | 丁未 | 熊本  |    |

出典：外務省「外務省記録 海外旅券下付表 明治 41 年 3 月分 熊本県」外務省  
外交史料館、受第 6403 号

この表から、旅券下付年月日の 1908 年 3 月 30 日時点で香山の年齢は徴兵対象の満 20 歳をはるかに越えていたし、保証人または移民取扱人または移民取り扱い会社もなく、熊本県飽託郡春竹村からペルーのゴム農園の労働者副監督として出航することになっていたことがわかる。一般的には移民の保証人または取扱い移民会社は、移民契約上存在するはずであるがそれもなく、ペルーへのゴム採取移民の労働者副監督という名目で旅券が下付されていたということ自体不自然であり、単なる移民ではないことが歴然とした。香山にとっては徴兵逃れであるから、完全な契約移民でなければどのような形でも良かったのだ。結果、労働者副監督という肩書になった。ところが香山の行き先はブラジルであった。なぜブラジルへ行くことになったのか。

1908 年 3 月、員安叔父の仲介で南米ペルー行きの船の出航を知り、香山は東京深川にあった東洋汽船会社伊藤専務を訪ねている。伊藤氏から明治移民会社のペルー行き単独ゴム採取移民が 4 月上旬笠戸丸で出航することを知らされ、同会社岩本善治社長を紹介された。ここでペルー行

きゴム採取単独移民 300 名のうち、明治移民会社扱いの移民 50 人の代表者として渡航することに決まった。しかし旅券下付表には「代表者」という表現はない、あくまでも「労働者の副監督」という名目であった。このような形の渡航者が他に存在したかどうかは不明であるが、その場凌ぎの名目による下付であったことは間違いないようだ。ついでには旅券を手に入れなくてはならず、明治移民会社の添書を持って本籍地熊本県へ出かけている。熊本では当時県庁主席官吏だった香山本家の豊喜叔父を介し、縁戚にあたる旅券係の原田氏を通して手続きは迅速に処理された。身元調査も 4 日後に済んだ<sup>44</sup>。その時の熊本県から外務省への旅券下付表願い出は 1908 年 4 月 9 日となっている。香山に旅券が発給されたのは 1908 年 4 月とのみ記載されているが、日付は不明である。ただ、皇国殖民会社調べの非移民名簿には「4 月 22 日調」との付記がある(図 2-2)。

図 2-2 第 1 回伯刺西爾移民渡航者名

皇国殖民会社  
明治四十年四月廿二日  
第 1 回伯刺西爾移民渡航者名簿

出典：国立国会図書館「ブラジル日本移民史料館所蔵伯刺西爾移民名簿（乗船名簿）内容一覧」より抜粋

ところが、ペルーから帰港した笠戸丸は明治移民会社のペルー行き移民ではなく、皇国殖民会社のブラジル行家族移民をアフリカ周りで運ぶことになってしまった。ペルーに行くのは 7 月に帰航する厳島丸になっ

<sup>44</sup> 香山六郎、前掲書 1)、113 頁。清 A 438 頁。

たとのことから、5月頃までに日本を出発しなければ徴兵令に係ってしまうのを危ぶんでいた香山は、急遽ブラジル行に変更することになった。早速、事情を読み取った明治移民会社の岩本社長から皇国殖民会社の水野龍に紹介され、水野の快諾を得ることができた。その時点では笠戸丸は4月16日に神戸港を出航する予定であったから、香山は旅券下付願提出から旅券取得まで2週間足らずで済ませたことになる。当時としては迅速な対応であったと思われる。このように難解な手続きが、いとも簡単に処理されていたことから、香山は東京でも熊本でも員安叔父を介した人的関係に恵まれていたということになろう。一方、皇国殖民会社としては、格好の渡航者を獲得できたのであった。

ペルーからブラジルに変更になった香山は、ペルー行きであれば不必要であった旅券手数料がかかることになり、明治移民会社に旅券手数料10円を支払っている<sup>45</sup>。一方、皇国殖民会社には、ブラジル渡航費用として特別3等(特3)で200円のところを165円にしてもらい、京都の員安叔父からの電報為替で4月8日に支払っている。出港予定の僅か8日前のことだった。皇国殖民会社発行の「明治41年4月27日笠戸丸 第1回伯刺西爾移民渡航者名簿」によると、香山に関する事項は非移民名簿の中にあり、以下のものであった。

旅券番号：第115377号、出身：熊本県、身分：平民

生年月日：明治19年1月5日生、旅券下付月日：明治41年3月30日

渡航目的：農事労働、渡航先：伯刺西爾國

出航年月日：明治41年4月 半々年

この記述から、渡航先はブラジルで、渡航目的も単なる農事労働とされていることがわかる。このように、香山は自己の意志によってではなく移民会社の都合によって、いとも簡単にブラジルへ行き先が変更になっていた。これが香山のブラジル行の真実だった。これまでの経緯から、論題の問題点となっていた「① なぜブラジルへ行ったのか、行か

---

<sup>45</sup> 香山六郎、前掲書1)、115頁。清A444頁。

なければならなかったのか」、「② いつ頃からブラジル移住を考え始めたのか」が解明された。

以上のような経過を経て香山は、ブラジル行笠戸丸に契約移民としてではなく非移民として乗船したのである。この事実から香山のブラジル行きは、渡航費用 165 円を支払っての「非移民」としての渡航であったことが判明した。しかも特 3 室の渡航費は本来 200 円なのだが 165 円で済んだところに、香山というより員安叔父の人脈が香山に有利に反映されたとみるべきであろう。非移民であったことから、多くの資料等では香山は「自由移民」として書かれている。とにかく海外へ渡航することが本人には先決であって、移民という意識は全くなかったにもかかわらずである。船賃を支払っての単なる渡航者と、移民会社との移民契約を交わしながらも渡航費を自己負担する自由移民とは意味的にも異なっているはずである。日本側の解釈からすれば、香山のブラジル行移民名簿の扱いは「非移民」であるが、ブラジル側からすれば、どのような形であってもブラジルへ入国した異国人である以上、単なる移民としか把握されていない。そのことは外務省通商局、1908 年 1 月 8 日発行『通称彙纂』明治 41 年第 1 号「伯國殖民条例ノ制定」に記されている<sup>46</sup>。すなわち、

「伯国殖民条例の制定 国土殖民条例 第一編 単章 凡例」

第二条 連邦、各州又ハ第三者ノ出資ヲ以テ三等船賃ヲ支払ヒ伯国港ニ到着シタル六十歳未満ノ外国人ニシテ伝染病患者ニアラサルモノ不正ノ業務ニ従事セサルモノ犯罪人、秩序破壊者、乞食、浮浪人、狂人又ハ廢疾者ト認メラレサルモノ及ヒ之ト同一状態ニ在リテ船賃ヲ自弁シ新来者ニ許与セラルヘキ恩典ヲ享有セント欲スルモノハ移民トシテ之ヲ取扱フヘシ(以下略)

であり、外務省は「1907 年 7 月 2 日、在伯会議公使館報告」として、「同条実行ノ上ハ勿論日本移民ニモ適用セラルル筈」としていた。要は、香

---

<sup>46</sup> 外務省「伯國殖民条例ノ制定」『通商彙纂』明治 41 年第 1 号（通商局、1908 年）。

山自身は徴兵逃れの「一渡航者」としてブラジルに渡ったという意識であったが、ブラジル側は、あくまでも「一移民」として扱っていたのであった。

## 第5節 小 括

第二次世界大戦前のブラジル日本人社会から生まれた日本語新聞の一つ『聖州新報』の創刊者・香山六郎について、本章では、香山の幼少年時代とブラジル渡航に至るまでの経緯を、サンパウロ人文科学研究所発行の『香山六郎回想録ーブラジル第一回移民の記録』を端緒として、『清書原稿A』や一次史料の分析により論証・展開することを試みてきた。

本章では、香山が『聖州新報』を創刊するに至った遠因は、少年時代から既に備わっていたこと、ブラジルへの非移民としての渡航は、青年時代の徴兵検査に起因することなどを論証してきた。すなわち、香山は徴兵検査不合格により海軍士官への夢は破れ、陸軍士官への道も自ら閉ざし、徴兵忌避のための模索を続け、遂には海外渡航による徴兵回避を達成した。これらのことから、香山のブラジル渡航の最大の原因が徴兵制にあったことが理解できたのではなかろうか。その経緯の中で、幼少期より常に香山を支えてきた叔父・土屋員安の存在を忘れてはならない。ブラジル渡航までの香山の生活史は土屋員安を除いては語れなかったのである。



### 第3章 渡航者意識から移民意識へ

#### 第1節 皇国殖民合資会社の内部事情

##### 1-1. 遅れた出航

香山を乗せた笠戸丸は 1908 年 4 月 28 日神戸港を出航し、太平洋・インド洋・大西洋を経由し、52 日かけてブラジル国サンパウロ州サントス港へ同年 6 月 18 日到達している<sup>1</sup>。予定より 12 日も遅れていた。この遅れは移民たちのブラジルでのコーヒー収穫作業の遅れへと繋がり、収入に関わる重大問題となり、最悪の事態である移民の入耕地でのトラブル発生の原因の一つになってしまった。その遅れた理由を以下に論証する。

外務省通商局史料『皇国殖民株式会社業務関係雑件』によれば、皇国殖民株式会社は 1903 年 8 月 27 日付、斎藤修一郎以下 8 人発起人により「移民取扱業許可申請書」および「皇国殖民株式会社定款」ほかを外務大臣小村寿太郎に提出・許可され、1904 年 3 月 31 日「開業届」の提出、営業保証金 3 万円の納入後、東京市京橋区鎗屋町 10 番地に開業していた。取締役会長は澤 宣量、資本金 20 万円、本社株式総数 8000 株、1 株 25 円であった。発起人の一人であった水野龍は 500 株分を出資し、発起人総代として「総代届」を外務大臣に提出している<sup>2</sup>。1905 年 7 月皇国殖民株式会社の営業権及び業務代理人を引き継ぎ、8 月には合資会社に変更した。業務代理人 19 人の中に上塚周平の名前も見られた<sup>3</sup>。

移民輸送会社としての体裁を整えた皇国殖民合資会社は、熊本県を初め全国 11 県に出張所を開設し移民募集活動を展開している。1908

<sup>1</sup> 水野龍「笠戸丸航海日記」内山勝男『日本移民 50 周年記念 かさと丸』（日本移民 50 年祭委員会、1958 年）、19-23 頁。

<sup>2</sup> 外務省通商局「移民取扱業願ニ関スル件第 798 号」（1903 年 10 月）、「移民取扱業許可申請書」、「総代届」（1903 年 8 月）、「皇国殖民株式会社定款」、「開業届」（1904 年 3 月）、「保証金納付ノ件」（1904 年 4 月）『皇国殖民株式会社業務関係雑件』単巻、3.8.2.0-196（外交史料館）。以後外務省通商局は通商局と略す。

<sup>3</sup> 通商局「業務代理人許可出願之件」『皇国殖民合資会社業務関係雑件（二）』3.8.2.0-217（外交史料館、1908 年）。水野龍が業務担当社員を代表し桂太郎外務大臣に提出した。

年 2 月から 1909 年 1 月までに同届を提出した県は、熊本、山口、鹿児島、沖縄、新潟、宮城、福島、愛媛、滋賀、岡山、兵庫の 11 県であった<sup>4</sup>。1907 年 9 月、水野龍はブラジルへ出向き翌 1908 年 1 月 3 日帰国している。その目的は、1907 年 11 月 6 日、サンパウロ州政府と皇国殖民合資会社との間での向こう 3 年間に日本移民 3,000 人の輸送に関する移民契約書の正式調印にあった。調印文書には

サンパウロ州統領ドクトル・ジョルジ・チビリッサ、農商工務長官ドクトル・カルロス・ジ・ポテリョ、日本東京皇国殖民会社社長ニシテ該会社ノ代表スル全権ヲ有スル水野龍諸氏列席ノ上(略)会社ヲ代表シテ各契約当事者ノ承認セル左記条件ニ依ル所ノ日本移民輸入契約ニ調印センカ為ニ渡来セシコトヲ宣言シタリ(略)<sup>5</sup>

とある。本契約の第 1 条には、移民とは農業労働に適する者 3 人～10 人から成る家族移民 3,000 人のことで、12 歳以上 45 歳までの男女で上記労働に適する者と見なし、会社は彼らをサントス港まで運送する義務を有すとある。第 2 条では、石工大工又は鍛冶のような農業以外の移民も受領するが、その数は移民総数の 5%を超過してはならないと規定。第 3 条には、移民の輸入は 1908 年より始め毎年 1,000 人を限度として輸送する。第 1 回移民は本年 5 月中、当州に到着することなどある。水野はこの契約書を持って急ぎ帰国し次の対応を迫られていたのだった<sup>6</sup>。

条約締結文中における「皇国殖民会社」という表現は非常に曖昧である。この会社は 1903 年開業当時は「株式会社」組織であった。その当時の会社設立発起人代表は水野龍であったが、取締役会長は澤宣量であった。1905 年、株式会社から合資会社へ転換し移民取扱営業権を譲渡されたが、その時点での水野龍の役職は無限責任社員であった。

<sup>4</sup> 通商局「出張所設置移籍廃止等届出ノ件」『皇国殖民合資会社業務関係雑件(二)』3.8.2.0-217(外交史料館, 1908 年)。

<sup>5</sup> 通商局「伯国サンパウロ州政府ト本社トノ間ニ締結セル契約書譯文」『皇国殖民合資会社伯刺西爾国移民取扱一件』3.8.2.0-243(外交史料館, 1908 年)。

<sup>6</sup> 通商局、前掲書 5) に同じ。

1908 年には無限責任社員並びに業務執行社員として松井淳平が加わり、水野は業務執行社員の肩書だけとなった。以後、諸書類末筆に記載される名前は業務執行社員の松井淳平がほとんどである。また既版のブラジル移民関係書などには、「皇国殖民会社社長水野龍」の名前が頻出するが、外務省や警視総監と皇国殖民合資会社との文書中にはそのような役職名は登場しない。社長名は前出の「日本東京皇国殖民会社及ヒサンパウロ州政府間ニ締結シタル日本移民三千人ヲサンパウロ州ニ輸入スル契約書」の文頭と文末に「皇国殖民会社社長水野龍」とあるのみである。しかし、皇国殖民会社は前述のとおり 1905 年以降合資会社であったから、1906 年のブラジルとの移民輸入契約時には、「皇国殖民合資会社」でなければならず、合資会社であれば社長・水野龍は存在せず、あくまでも無限責任社員の一人にすぎなかったはずである。ところが締結文には「社長」と記され、締結時の会社名も「皇国殖民会社」とのみ記され、合資会社とも株式会社とも明記していない。正式名称と通称とが混同された契約書であったことになる。

帰国した水野は早速、東洋汽船株式会社から同社の汽船「笠戸丸」を 4 月 10 日に横浜港から出港させる契約を交わすと同時に、安楽警視総監に報告する一方、地方の出張所を通じて契約移民 1,000 人を募集している<sup>7</sup>。「伯刺西爾移民募集地方別予定表（1908 年 3 月）」によると、前記の全国 11 の出張所等から募集した移民内訳は予定数 1,000 人、予備員 200 人の合計 1,200 人で、大工左官等の農業以外の移民割合も移民総数の 5%を超過せず、この時点では契約予定人数を上回った募集が行われていたことがわかる<sup>8</sup>（表 3-1）。表 3-1 によれば、州政府との契約履行のため、1 カ月足らずの間に移民を全国から募集していたが、特に 4 月 11 日と 14 日との募集数の変動が大きいことに気づく。沖縄県の場合、僅か 1 カ月足らずで 100 人もの応募者が増減し、石工左官な

<sup>7</sup> 通商局、前掲書 5）より、「契約書」は東洋汽船株式会社社長浅野總一郎から皇国殖民合資会社宛書簡。「御請書」は皇国殖民合資会社業務執行社員松井淳平から警視総監安楽兼道宛て書簡（外交史料館、1908 年）。「笠戸丸」とは、日露戦争時バルチック艦隊所属の病院船「カザリン号」のことで、東洋汽船株式会社が払下げ移民船に改装していた。

<sup>8</sup> 通商局、前掲書 5）より「伯刺西爾移民募集地方別予定表御届」（外交史料館、1908 年）。東京朝日新聞 1908 年 2 月 26 日付 4 面「伯西移民開始」など。

表 3-1 伯刺西爾移民募集地方別豫定者数の変動(1908 年)

| 府 県 名 | 3 月 18 日 現 在 |                         |             | 4 月 11 日 現 在 |                         |             | 4 月 14 日 現 在 |                         |             |
|-------|--------------|-------------------------|-------------|--------------|-------------------------|-------------|--------------|-------------------------|-------------|
|       | 予 定<br>数     | 大 工 ・<br>左 官 ・<br>石 工 等 | 予<br>備<br>員 | 予 定<br>数     | 大 工 ・<br>左 官 ・<br>石 工 等 | 予<br>備<br>員 | 予 定<br>数     | 大 工 ・<br>左 官 ・<br>石 工 等 | 予<br>備<br>員 |
| 沖 縄   | 250          |                         | 50          | 400          | 30 ≤                    | 80          | 400          | 9                       | 80          |
| 鹿 児 島 | 170          | 20 ≤                    | 34          | 270          | 7 ≤                     | 54          | 250          | 20                      | 54          |
| 広 島   | 180          | 20 ≤                    | 36          | 33           | 5                       | 6           | 47           | 13                      | 6           |
| 山 口   | 100          | 5                       | 20          | 39           | 4                       | 7           |              |                         | 7           |
| 熊 本   | 100          | 5                       | 20          | 80           | 4                       | 16          |              |                         | 16          |
| 福 島   | 50           |                         | 10          | 105          |                         | 21          |              |                         | 21          |
| 新 潟   | 45           |                         | 9           | 9            |                         | 2           |              |                         | 2           |
| 宮 城   | 25           |                         | 5           | 6            |                         | 1           |              |                         | 1           |
| 高 知   | 30           |                         | 6           | 30           |                         | 6           |              |                         | 6           |
| 山 梨   | 30           |                         | 6           | 0            |                         | 0           |              |                         | 0           |
| 愛 媛   | 20           |                         | 4           | 21           |                         | 4           | 27           | 0                       | 4           |
| 東 京   | 0            |                         | 0           | 7            |                         | 1           |              |                         | 1           |
| 合 計   | 1000         |                         | 200         | 1000         |                         | 198         | 724          | 42                      | 198         |
| 総 数   | 1200         |                         |             | 1198         |                         |             | 922          |                         |             |

通商局『皇国殖民合資会社伯刺西爾国移民取扱一件』3.8.2.0-243  
 (外交史料館、1908 年) より作成

ど農業移民以外の予定数も予定数の 3 分の 1 に激減しているなど不自然である。また、出港時の 1 家族の平均人数は 6.9 人となり、出港時総数 781 人と 165 家族平均人数 4.7 人を大きく超えている。サンパウロ州政府との移民契約第 1 条では「農業労働に適する者 3 人～10 人により成る家族を組織」とあるので契約違反ではないにしても、いわゆる構成家族ではないかとの疑問は残る<sup>9</sup>。結果、4 月 14 日現在の渡

<sup>9</sup> 内山勝男「笠戸丸便第一回伯刺西爾行移民名簿」『かさと丸』（日本移民 50 年祭委員会、1958 年）73 頁によれば、沖縄県島尻郡大里村の照屋堅喜を家長とする一家族は、家長夫婦と夫婦の従兄弟 16 人で、その姓は照屋以外に宮城、仲本、大城、知念、新里、伊良、安谷の 7 姓が記されており、構成家族であることが明らかであった。

航者予定数は 724 人、予備員数 198 人を加えても総数は 922 人にとどまり、サンパウロ州政府との契約条件の一つである移民数 1,000 人を下回ってしまった。契約条件を満たせず資金調達に翻弄された皇国殖民会社は、出港予定日遅延に伴う移民たちの神戸での宿泊代金の工面にも困惑し、その保障をめぐって外務省との交渉が行われており、予定日の 4 月 10 日に出発できなかったことが判明した<sup>10</sup>。皇国殖民合資会社は、4 月 21 日神戸港出航への変更認可を願った「移民出発期日延期願出之件」と「期日延期ノ為ニ生スル移民費用ニ関スル件」などを安楽警視総監宛に提出し、総監は石井通商局長に宛て「移民取扱人皇国殖民合資会社ヨリ南米伯刺西爾国行移民出発期日延期ノ件ニ附別紙ノ通申出候ニ就テハ至急御意見承知致度此段及照会候也明治 41 年 4 月 7 日」という文書を送り、経営難に陥っていた皇国殖民合資会社の経営確認をしていたことも判明した<sup>11</sup>。また、総監から同通商局長宛てによれば、皇国殖民合資会社が移民より神戸滞在中の宿泊費を徴収するとの聞き込みに対し、会社側にそのような事はしないよう外務省へ内報する通信もあり、これらについて皇国殖民合資会社側は「答申書」を安楽警視総監に提出し、宿泊料は負担することを誓っている<sup>12</sup>。

#### 答申書

今般本社取扱舞樂而留国渡航移民止宿料負担方ノ儀ニ付御尋問の処右ハ  
本月二十一日出帆予定期日ニ有之候間二十二日以後出帆迄延期中ノ移民  
止宿料ハ当然本社ニ於テ負担ノ心得ニ有之候右御尋問ニ付答申候也

明治四拾壱年四月二十五日

東京市麹町区八重洲町一丁目一番地

皇国殖民合資会社業務執行社員 松井淳平

警視総監安楽兼道殿

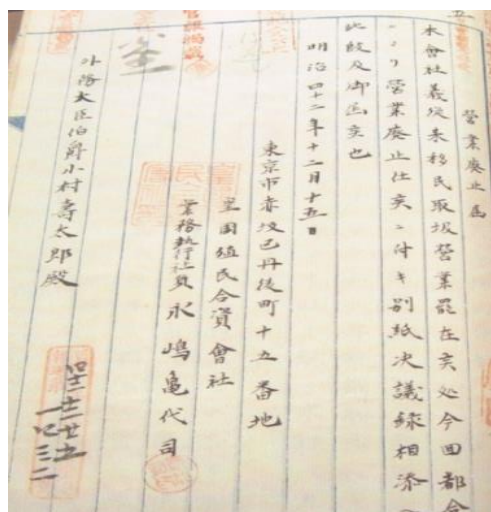
<sup>10</sup> 通商局「移民出発期日延期願出之件」『皇国殖民会社伯刺西爾国移民取扱一件』3.8.2.0-243、(外交史料館、1908 年)。香山『回想録』(サンパウロ人文科学研究所、1976 年) 118 頁によれば、宿泊料 1 日 1 円 50 銭とある。

<sup>11</sup> 「移民出発期日延期願出之件」と「期日延期ノ為ニ生スル移民費用ニ関スル件」は、1908 年 4 月 6 日付で安楽警視総監宛提出されている。前掲書 10)、(外交史料館、1908 年)。

<sup>12</sup> 通商局「答申書」、前掲書 10)、3.8.2.0-243、(外交史料館、1908 年)。

この答申書にも皇国殖民合資会社・社長水野龍の名前は見られない。これらを総合してみると、皇国殖民合資会社はサンパウロ州政府との移民契約を結んだものの、募集移民数の不足、日露戦争後の経済不況下での資金調達困難による資金不足などにより、出航困難であったこ

図 3-1 営業廃止届



出典：通商局『皇国殖民合資会社関係雑件(二)』(外交史料館、1908年)

とや、会社の本社所在地の移動歴を見ても、創立から廃業に至る間の6年間に5回も移動していたことから、その困窮さが判然とした<sup>13</sup>。

これらの諸事情を香山はどのように受け止めていたのだろうか。出航延期に伴う宿泊代増加に困った香山が、大阪朝日新聞記者鳥居赫雄の下に金策に行った際、鳥居から笠戸丸出航の遅れている原因は船室改造ではなく、移民会社と外務省とのトラブルによるもので、船は以前から神戸沖で待機してい

ることや、移民の皆が宿賃に困りつつあること、新聞社ではその発表時期を考慮中であることなどを聞いていた<sup>14</sup>。この文から、移民たちには出航遅延の真相は全く知らされず、香山自身もさほど深刻に受け止めていなかった様子が伝わってくる。ブラジル渡航後、移民たちによる移民会社への不満の鬱積はこのあたりから始まっていたのである。

出航後、皇国殖民合資会社は1909年12月、移民保護法並びに同施行法細則に従い本社解散手続きをし、15日に「営業廃止届」を外務大

<sup>13</sup> 皇国殖民合資会社は創立から廃業に至るまでに本社を以下の様に移転していた(カッコ内は移転年月日の略表示)。東京市京橋区鎗屋町10番地(1904.3.31)、業務執行社員松井淳平→同市麴町区八重洲町一丁目一番地(1907.1.21)⇒同市赤坂区丹後町15番地(1909.7.21)⇒同市麻布区新堀町7番地(1909.12.8)、整理事務所設置(廃業)、業務執行社員永嶋亀代司⇒同市芝区三田四国町2番地1号(1910.8.25)。通商局『皇国殖民株式会社業務関係雑件』単巻(1903年)、『皇国殖民合資会社業務関係雑件(一)』3.8.2.0-196(外交史料館、1905年)および『同(二)』3.8.2.0-217(外交史料館、1908年)より。

<sup>14</sup> 「伯国移民出発延期」、東京朝日新聞1908年4月8日第2面。

臣に提出している(図 3-1)。これによって皇国殖民合資会社は營業利権などを竹村殖民商館へ移譲した。高知県の富豪・竹村與右衛門の個人名義となった移民取扱業は、1910 年 6 月の第 2 回旅順丸移民から 1914 年 5 月の第 3 回帝国丸移民まで 7,600 余人を渡航させたのち、業務一切を水野に譲渡し、1914 年 11 月 24 日、水野は南米殖民株式会社を設立し社長に就任した。この会社も 1917 年廃業し、以後の事業は移民会社の大合同により、同年 10 月 18 日設立を許可された海外興業株式会社に統合された<sup>15</sup>。

## 1-2 移民船生活

4 月 28 日午後 5 時、笠戸丸はようやく神戸港を出航した。その乗船者ブラジル行契約移民が全国 11 府県から 165 家族 781 人、非移民が全国 8 県から 17 人の 798 人となる。従来の書籍等では「自由移民」という概念を用いるものもあるが、『第 1 回伯刺西爾移民渡航者名簿』には、その概念は見当たらない<sup>16</sup>。「皇国殖民合資会社との間に契約を取り交わした家族移民がいわゆる契約移民であって、彼らは三等船室の渡航者で、特別三等(特三)船室以上の船賃を支払っての渡航者とは異なっていた。船賃を支払う渡航者は移民送出会社と移民契約をしていないので非移民扱いとなった。単にこの 2 種類にしか分類されていない。ブラジルとしてはサンパウロ州政府との移民契約内容に該当する移民だけが必要だったわけで、「自由移民」という概念は生まれていなかったと考えるのが妥当であろう。日本とブラジルとの移民の概念規定の相違が表出していたといえる。また、サンパウロ政府との移民契約第 1 条では「農業労働に適する者 3 人～10 人により成る家族を組織」とある他に、第 2 条では「石工大工又は鍛冶(略)数は移民総数の 5%を超過してはならない」と規定されているにもかかわらず、渡航者名簿

<sup>15</sup> 坂口満宏「誰が移民を送り出したのか」『立命館言語文化研究』21 巻 4 号(立命館大学、2010 年)、53-66 頁。通商局「開業届」(1914 年 12 月)、「廃業届」(1917 年 12 月)『南米殖民株式会社業務関係雑件』3.8.2.0-292、『移民取扱人関係雑件』海外興業関係、3.8.2.0-300。

<sup>16</sup> 皇国殖民合資会社作成の『第一回伯刺西爾移民渡航者名簿』によれば、「契約移民(家族移民)名簿」と「非移民名簿」に大別され、非移民名簿には 1908 年 4 月 22 日調とも記されている。

には職業の記載はなく、渡航者全員が「農事労働者」に分類されている。石工・大工等は何を以て区別しようとしたのか分類が曖昧である。非移民で熊本県出身の香山は移民船の特三船室に入室しており、長野県出身の矢崎節夫や、山形県出身で鈴木貞次郎の従弟の高桑治兵衛のほか、東京府と兵庫県の2家族7人などが香山と同様の船室で渡航している<sup>17</sup>。このほか非移民としての乗船者でブラジル以外への渡航者は、アルゼンチン行3人とウルグアイ行1人であった<sup>18</sup>。なお、一等船室の水野や三原、2人の通訳夫人たちは、移民契約第13条第2項の「移民運送用の船舶においてサントスより日本まで往復とも一等船客6人までを政府のため無賃搭載すること」により無賃であった。出航日の様子は、当時の大阪朝日新聞に取り上げられていた。大阪朝日新聞は「巴西移民の有望」との見出しで、ブラジル政府から大人1人当たり60円の補助金が与えられた移民であると報道している<sup>19</sup>。

52日間の航海中、香山は上塚代理人、布施事務長の許可を得て『航海新聞』を発行している。週1回、洋野紙1枚の裏表にペン書きとし、同室の高桑治兵衛や矢崎節夫、片岡技師等に執筆を依頼したようだ。しかし、彼らは新聞発行に賛成はしたが執筆には協力しなかったため香山は孤軍奮闘せざるを得なくなっていた。結果、プライバシーに関わることなど書き立てて乗船者からの輦蹙を買い、ネタ切れと上塚からの忠告もあって発行意欲を失い、3号で廃刊となったという<sup>20</sup>。香山と上塚氏との感情的不具合はこの頃から燻っていたのかもしれない。この航海新聞はブラジル移民最初の日本語新聞といわれてはいるが、1908年5月10日頃発刊されたという確証はない。

香山の「大阪朝日新聞社のブラジル通信員の卵となった<sup>21</sup>。」という一文から、同社の鳥居赫男との口約束とはいえ、香山は通信員として

<sup>17</sup> 高桑治兵衛については、香山の『回想録』のように「高桑治平」と記している書物もある。拙稿では非移民名簿に従って「高桑治兵衛」と記す。香山、前掲書10)、122-123頁。清A472-477頁。

<sup>18</sup> 皇国殖民合資会社『第1回伯刺西爾移民渡航者名簿』と香山六郎『25周年記念鑑』（聖州新報社、1934年）を突き合わせた結果。

<sup>19</sup> 「伯西移民出発（神戸）」大阪朝日1908年4月29日付2面。

<sup>20</sup> 香山、前掲書10)、126-127頁。清A489-492頁。

<sup>21</sup> 香山、前掲書10)、119頁。清A458頁。



の自覚を持ち記録することの重要性を認識していた。どのような内容も詳細に書き留めようとした香山には、純真で前向きな姿勢があったとも解釈できる。この姿勢は香山が晩年、聾啞者となりながらも『回想録』を書き上げた強い意志と姿勢にまで貫かれていたといえる。また、自分を見つめる時間の多かった移民船内生活の中で、香山の胸中には父親が発行していた『不知火新聞』への想いと、香山 10 歳当時、貧困のため『九州日日新聞』の活字工として働いていた経験、さらには大学時代の雑誌社での記者活動など、過去の経験を通した新聞発行への思いが覚醒し始めていた。さらに移民船という閉鎖された階層社会の中で、三等船室の契約移民と特別室の一般客との待遇の相違を目の当りにし、一渡航者であった香山の内部に、移民の視点から物事を捉えようとする意識、いわゆる移民目線、言い換えれば、階層社会における労働者の目線が構築され始めていたのである。香山の一渡航者から移民意識への変換点がそこに存在したといえよう。

移民船生活の中でもう一つ人生の転機となる事例が見られた。航海中、熊本県出身の橋口重正の妻タニの弟で、橋口家の構成家族員であった村崎豊重（当時 19 歳）を医務室に見舞いに來た橋口夫妻と出会い、橋口から妻タニを紹介された時、橋口がタニに香山を「弟重雄と濟々黌 4 年の折、寄宿舍で同室だった方」と説明していた<sup>22</sup>。同県人である安堵感もあり、この一言がその後の香山とタニの精神的距離を縮めたとも考えられる。橋口重正が病没後、香山と結婚することになるタニとの出会いは、タニの弟・村崎の発熱見舞いの船内医務室であった<sup>23</sup>。

### 1-3 皇国殖民合資会社サンパウロ支店

1908 年 6 月 18 日午前 9 時頃、笠戸丸は 52 日の航海の後サントス港に入港し、午後 5 時頃着岸した<sup>24</sup>。出迎え人は駐伯日本公使館一等通訳官・三浦荒次郎と移民の草分け・鈴木貞次郎、サンパウロ市の藤崎商会副支配人・後藤武夫、皇国殖民会社事務代理人・モンティロの 4 人

<sup>22</sup> 香山、前掲書 10)、126 頁。清 A487 頁。

<sup>23</sup> 橋口重正は 1911 年 2 月 16 日、リオデジャネイロ州イグアス移住地でマラリアにより死没。同年 2 月 21 日、タニは次女静子を出産している。

<sup>24</sup> 水野龍、前掲書 1)、23 頁。

だけだった。淋しい出迎えではあったが、その時出迎えの鈴木貞次郎から「日本人によく似た土人がいる」という話を聞き、香山はその土人の話す言葉をブラジルでの自分の生涯の研究にしたいと決心している<sup>25</sup>。後に香山はグアラニー語の研究に傾倒して行く。ここには香山の新聞人としての顔とは異なる民族学研究者の一面がのぞいていた<sup>26</sup>。

初めての日本人移民を、ブラジルの人々はどのように受け止めたのであろうか。ブラジルの新聞の一つ『CORREIO PAULISTANO』紙は、1908年6月25日の第一面に“Os Japoneses em São Paulo”の見出しで、日本人の礼儀正しさ清潔感溢れる身だしなみなどを賞賛すると報じ、『Comércio de São Paulo』紙は、ヨーロッパ移民と比較して下記のように絶賛していた。

本州内地ノ耕地労働ニ従事センカ為先頃到着セル日本植民ヲ移民収容所ニ訪問セル人ハ其清潔ナル其熟練セル其如何ニモ熱心ニ学ハントスルカ如キ風采ヲ見テ感嘆ノ辞ヲ発セサルヲ得サリシナルヘシ<sup>27</sup>。

1908年6月27日、沖縄県人の約半数が嶺昌通訳と共にモジアナ線カナーン耕地へ出発したのを契機として、7月6日、山口・愛媛両県の4家族が仁平高通訳と共にソロカバナ線ソブラード耕地へ出発するまで、契約移民は通訳に伴なわれて6耕地にそれぞれ配耕されていった(表3-2)。上塚は皇国殖民合資会社サンパウロ支店を香山とともに立ち上げ、香山は事務所に寝起きしながら、配耕先別移民名簿作成を始めるなど、上塚の書記として職務を遂行していた。

しかし、日本人移民を礼賛した新聞内容とは裏腹に、厳しい現実が移民たちの前に突き付けられた。1908年7月17日、ズモーン耕地か

<sup>25</sup> 香山、前掲書10)、136頁。清A518頁。これが香山のインディオ研究の契機となっている。鈴木貞次郎は1905年12月、東洋汽船会社の南米航路第1回船グレンファーク号でチリに行く予定であったが、船内で水野龍と意気投合し、行き先を変更してブラジル移民の先駆となった人物。著書に『日本移民の草分け』(非売品、1967年)他がある。

<sup>26</sup> 「グアラニー語五つ六つ」『聖報』1925年5月8日第177号などその現れである。

<sup>27</sup> 通商局「本邦移民ニ関スル伯国サンパウロ市発行新聞紙ノ評論(1)」『通商彙纂』(博文館、1908年)、51頁。

表 3-2 笠戸丸移民配耕地

|   | 耕地名       | 沿線鉄道名  | 通訳者名  | 該当県名           | 家族数 | 配耕者数 |
|---|-----------|--------|-------|----------------|-----|------|
| 1 | カナーン      | モジアナ線  | 嶺 昌   | 沖縄             | 21  | 155  |
| 2 | フロレス      | イツー線   | 大野 基尚 | 沖縄             | 26  | 183  |
| 3 | サン・マルチーニョ | パウリスタ線 | 鈴木貞次郎 | 鹿児島            | 27  | 104  |
| 4 | グアタパラ     | パウリスタ線 | 平野 運平 | 鹿児島、新潟、高知      | 14  | 51   |
| 5 | ズモン       | モジアナ線  | 加藤順之助 | 福島、熊本、広島、宮城、東京 | 52  | 207  |
| 6 | ソブラード     | ソロカバナ線 | 仁平 高  | 愛媛、山口          | 15  | 50   |
|   | 合 計       |        |       |                | 155 | 750  |

香山『在伯日本移殖民25周年記念鑑』聖州新報1934年、14頁-24頁より作成  
笠戸丸乗船者数と異なるのは、都市労働者等として残留した人物は除いているため。

ら間崎三三一を含めた青年4人がサンパウロの事務所に逃亡してきた事件を発端にズモン耕地事件は紛糾した<sup>28</sup>。ズモン耕地に配耕されたのは、福島県、熊本県、広島県、宮城県、東京府からの52家族207人であったが、契約書内容とは大違いの条件に彼らは激怒していた。

『25周年記念鑑』では、その紛争の発端を以下のように述べている。

駅頭より耕地の楽隊で歓迎された日本移民であったが、耕地に着いてみると、移民の宿泊所に与えられたコロニア(colonia:移民長屋)の空には、土間に枯草が薄く敷いてあっただけだった。「俺達は馬じゃない…」という不平が移民の頭にムラムラと湧いた<sup>29</sup>。

人間としての人格を踏みにじるような待遇に加えて、移民の代弁者であるはずの加藤通訳が移民監督と移民との関係を保つ器量を備えていなかったことなどから、耕主と移民間の労働争議は、皇国殖民会社の水野・上塚と通訳の宮崎信三等の調停も空しく決裂し、8月25日、東京の1家族3人を残して全員がズモン耕地を撤退しサンパウロに戻

<sup>28</sup> 間崎三三一、高知県幡多郡出身。ただし『25周年記念鑑』ほかでは広島県又は原戸籍不明となっている。その原因は第2回竹村移民の広島県人と渡航し、ブラジルでも広島県人52家族とサンタ・コンスタンセ耕地に総支配人として入耕したことに起因するようだ。上塚周平がイタコロミー植民地創設時にはプロミッソンに転居し上塚を支援し続けた。間崎の死去にあたりプロミッソン市はその功績を讃え、上塚周平の真向かいに墓地を提供した(2006年筆者現地踏査確認)。なお、間崎ら4人をプラス駅から事務所へ連れてきて最初に面倒を見たのが香山だった。以後、イタコロミー開拓まで香山は間崎と関わりを持つことになる。香山、前掲書10)、148頁。清A562頁。

<sup>29</sup> 香山『25周年記念鑑』(聖州新報社、1934年)、28頁。

ってしまった<sup>30</sup>。入耕が6月28日であったから2カ月にも満たない耕地生活であった。似たような状況が他耕地にも出現したため、これらの事情が決定打となって資金不足に悩んでいた皇国殖民合資会社は、外務省との信頼を失墜し廃業せざるを得なくなったのである<sup>31</sup>。

## 第2節 移民意識への転換

### 2-1 サン・ジョアキン耕地

香山は上塚代理人の依頼により、ズモーン耕地脱耕組27家族中、広島県と熊本県の合計9家族27人の新たな契約労働地となったノロエステ線サン・ジョアキン耕地へ通訳兼監督として同年9月3日出発した。

表3-3 サンジョアキン耕地入耕者一覧（1908年9月）

|                       | 県名  | 郡市名 | 氏名     | 続柄 | 入耕先 |
|-----------------------|-----|-----|--------|----|-----|
| 1                     | 広島県 | 山縣郡 | 山田 勘一  | 家長 | 分耕地 |
|                       |     |     | 〃 オリエ  | 妻  |     |
|                       |     |     | 〃 実蔵   | 弟  |     |
| 2                     | 広島県 | 広島市 | 神田 寅三  | 家長 | 分耕地 |
|                       |     |     | 〃 シツノ  | 妻  |     |
|                       |     |     | 須山 勘一  | 従弟 |     |
| 3                     | 熊本県 | 飽託郡 | 大村 千太郎 | 家長 | 本耕地 |
|                       |     |     | 〃 さが   | 妻  |     |
|                       |     |     | 〃 貞男   | 子  |     |
| 4                     | 熊本県 | 飽託郡 | 宮部 弥平  | 家長 | 本耕地 |
|                       |     |     | 〃 トフ   | 妻  |     |
|                       |     |     | 〃 シツエ  | 娘  |     |
| 5                     | 熊本県 | 飽託郡 | 中川 仁蔵  | 家長 | 本耕地 |
|                       |     |     | 〃 トキ   | 妻  |     |
|                       |     |     | 〃 五百樹  | 子  |     |
|                       |     |     | 〃 坤一   | 子  |     |
| 6                     | 熊本県 | 八代郡 | 上田 豊喜  | 家長 | 分耕地 |
|                       |     |     | 〃 ジュギ  | 妻  |     |
| 7                     | 熊本県 | 八代郡 | 本嶋 儀男  | 家長 | 分耕地 |
|                       |     |     | 〃 ミト   | 妻  |     |
| 8                     | 熊本県 | 天草郡 | 橋口 重正  | 家長 | 分耕地 |
|                       |     |     | 〃 タニ   | 妻  |     |
|                       |     |     | 〃 敏信   | 子  |     |
|                       |     |     | 村崎 豊重  | 妻弟 |     |
| 9                     | 熊本県 | 飽託郡 | 井手 喜平  | 家長 | 本耕地 |
|                       |     |     | 〃 ツキ   | 妻  |     |
|                       |     |     | 樫本 源蔵  | 甥  |     |
| 合 計：9家族27名(男17名、女10名) |     |     |        |    |     |

香山六郎『在伯日本移植民 25周年記念鑑』（聖州新報社、1934年）より作成

この出来事は香山にとって、一渡航者の意識から移民事業に直接かわる移民の指導的立場にある自分を認識した一瞬であったと捉える。

サン・ジョアキン耕地とは後のトレド・ピザ駅のトレド・ピザ耕地のことで、駅舎は1909年建設のため、当時の列車は林間に止まった。9家族は熊本県飽託郡出身者をまとめて本耕地へ、その他の熊本県人と広島県人を分耕地に分散させた（表3-3）。香山は監督業務上、本耕地と分耕地を往復する生活の中で動植物の名前を覚え、日本人以外の

コロノたちとも会話をするうちに、自然に逆らわない耕地生活

<sup>30</sup> 香山、前掲書10)、148頁。清A564頁。いわゆるズモーン耕地事件。残留家族とは、東京出身の僧侶・茨城友一郎一家。

<sup>31</sup> 通商局「廃業届」『南米殖民株式会社業務関係雑件』3.8.2.0-292。（外交史料館、1917年）。

に充実感を覚えている。

この体験は第 6 章のブラジル俳句の季題収集にかかわる原点となつて行く。コーヒーの収穫量は、1 日家族 3 人の労働でズモーン耕地の 5 倍以上収穫できたことから、移民の心も落ち着き始めていたことも、香山を単なる渡航者意識から乖離させる要因となっていた。サン・ジョアキン耕地入植者 27 人がノロエステ日本人移民のピオネイロ (pioneiro: 先駆者) であったから、香山も彼ら同様、その先駆者の一人となったことを意味する。

この貴重な経験は、1921 年にバウルーに新聞社を創設する際の要因の一つになった。なぜなら、香山は非移民としては第 1 回の渡航者であり、ブラジル語の解らない初期農業移民の通訳・耕地監督者、さらにノロエステ日本人移民のピオネイロでもあったからである。これらの要素が香山に初期ブラジル日本人社会の移民知識人であり、他の農業移民とは異質であるという潜在的意識を自認させ、そのプライドが以後の香山の行動を常に支えていた。新聞創刊の地をノロエステの玄関口にあたるバウルーに定めたのも偶然ではなかったのだ。極端に言えば「ノロエステは俺の第二の故郷。誰にも簡単に踏み込まれたくない」といった心理が、新聞創刊地を自ずと決定させたといえる。サン・ジョアキン耕地の体験は、香山を単なる一渡航者からブラジル開拓の先駆者と自認する意識に完全に転換させたのである。反面、単なる農業移民にはなりたくないという意識も強めた。それは「私は日本移民の一員としてこの耕地のコロノとなる気は毛頭なかった。耕地生活も好きだったが、私の血は都会生活、サンパウロ市を欲していた」の一文に凝縮されている<sup>32</sup>。香山の目的確認と意志表示が明確になった瞬間であったといえよう。

サンパウロからサン・ジョアキン耕地に出発当時、3 家族の主婦が妊娠していた。熊本県出身中川仁蔵氏長男・坤一 (コンイチ) は、出発の前日に収容所の病院で生まれ、ノロエステ日本人移民の二世第 1 号となった<sup>33</sup>。名付け親は水野龍。アカンパメント (acampamento: 野営地) の橋

<sup>32</sup> 香山、前掲書 10)、157 頁。清 A599 頁。

<sup>33</sup> 内山勝男『かさと丸』(日本移民五十年祭委員会、1958 年)、93-95 頁。しかし、

ロタニも 1908 年 10 月 14 日、長女ローザ・芳子を出産、同耕地で 2 番目の二世誕生となった。中川夫婦がサン・ジョアキン耕地に合流すると、香山は上塚にサンパウロへ呼び戻されている。僅か 1 カ月ばかりの耕地通訳・監督であったが、香山にとって移民意識の芽生えた貴重な時期でもあった。香山はその時の様子を次のように述べている。

終点リンス駅より来たノロエステ線の汽車に乗った。(略)サン・ジョアキンの破れ小屋が今のトレード・ピザ駅となったのだ。サン・ジョアキン耕地がノロエステ線における日本人の発祥地である(図序-1)<sup>34</sup>。

## 2-2 サンパウロ生活

サンパウロに戻った香山は、上塚の下で移民業務に専念していた。10 月下旬、モジアナ線カナーン耕地の沖縄県人たちが脱耕し、サントス港へと集まり出していた。港には貨物船の荷揚げ作業や埋め立て工事などの現金収入を得やすい仕事があったことと、職を求めて隣国アルゼンチンへ再渡航しようする人々が出航船を待っていたからだが、彼らの多くは路頭生活者であったため、移民会社員として香山はその対応を迫られていたのだ<sup>35</sup>。香山も宮崎通訳官や水野、上塚、藤崎商会の後藤武夫らと脱耕者・沖縄県人の就職斡旋をしていた。ところが、皇国殖民合資会社からの送金が途絶えたため失業状態となり、香山と矢崎たちはビスケット工場働くことになった。その後も香山は果物店、家庭労働、玩具製造などさまざまな仕事を体験していた。

その頃、日本の皇国殖民会社は破産状態にあって、サンパウロ支店の上塚代理人に支払う給与も途絶えていた。この窮状に対し在伯特命全権公使内田定槌は、外務大臣小村寿太郎宛書簡を送り、皇国殖民合資会社への厳達を説いていた<sup>36</sup>。

---

中川一家は 1918 年に帰国してしまい、2 番目とされた男児も生後 2 週間足らずで死亡していたため、戦前の在伯日系二世第 1 号は橋口ローザ・芳子さんとなった。

<sup>34</sup> 香山、前掲書 10)、158 頁。清 A601 頁。トレード・ピザ駅は、現在のシンシナート駅とグアランタン駅の中間に存在した。

<sup>35</sup> 香山、前掲書 10)、160 頁。清 A607-609 頁。

<sup>36</sup> 通商局「皇国殖民会社伯国代理人ニ関スル件」公第 47 号『皇国殖民合資会社業務

サンパウロ市ニ在留中ナル皇国殖民会社代理人上塚周平ハ本年二三月以来同社ヨリ支給スベキ筈ナル俸給及手当ヲ毫モ送金シ来ラザル為メ近来非常ノ窮地ニ陥リ(略)移民会社代理人タル体面ヲ維持シ移民保護ノ職分ヲ完フスルコト出来難キ現状(略)付テハ本公信着次第右皇国殖民会社ヨリ同代理人ニ支給スベキ数月分ノ俸給及手当ヲ一纏メトシテ至急同人ヘ宛テ伝送スル様同社ヘ厳達方可然御取計相成候様致度候(以下略)

この一文には皇国殖民合資会社の窮状が明確に反映されていたことがわかる。なおこの件に関し皇国殖民合資会社は、約束不履行のため9月に外務大臣小倉寿太郎に「始末書」を上伸している<sup>37</sup>。この時点で皇国殖民合資会社はその業務一切を竹村與右衛門に譲渡していた訳で、その後も警視總監亀井英三郎から通商局長萩原守一宛「再三督促をしているが猶予願が出ているのでご承知願いたい」旨の書簡が交わされており、皇国殖民合資会社の経営破綻状態が浮き彫りにされていた。結果、1910年2月21日付けで「御届」書が、皇国殖民合資会社業務執行社員永島亀代司と上塚の代理人石塚御音弥太との連署で、外務大臣小村寿太郎に届けられ決着し、上塚には1909年8月までの手当金の内金1,000円が送金されたに留まった<sup>38</sup>。本社破産により上塚まで失職した。上塚は一介の労働移民と化し、玩具製造を始めている。香山も仲間入りし、玩具の製造と行商をしていた<sup>39</sup>。

皇国殖民会社の権利一切は、水野の同郷者高知県の竹村與右衛門に譲渡され、竹村植民商館としてサンパウロ州政府の許可の下、第2回移民船旅順丸が1910年6月28日サントス港に着岸した。笠戸丸以来移民船の入港がなかったことから、在伯日本人たちは棄民となった悲哀を感じていたが、この朗報で「蘇生の想に有之候」と喜んだのだっ

---

関係雑件(二)』3.8.2.0-217(外交史料館1909年)。

<sup>37</sup> ただし、「始末書」の上申者は同社業務執行社員松井淳平となっていた。

<sup>38</sup> 通商局「御届」『皇国殖民合資会社業務関係雑件(二)』3.8.2.0-217(外交史料館、1909年)。

<sup>39</sup> 香山、前掲書10)、167-168頁。清A633-637頁。

た<sup>40</sup>。移民者内訳は 16 県 247 家族 909 人、水野と竹村植民商館番頭山地土佐太郎が同行していた。移民達は 14 耕地に配耕され、香山は再び耕地監督兼通訳人としてグアリローバ耕地に富山県 3 家族と熊本県 1 家族を引き連れて入耕している<sup>41</sup>。香山はわずか 4 家族 14 人の耕地監督兼通訳となったが、10 月末には耕主側から解雇宣告を受け、サンパウロに戻り再び失業状態となっていた<sup>42</sup>。

### 2-3 ジャタイ耕地事件への関与

モジアナ線サン・シモン駅より分岐するジャタイ支線のジャタイ駅・ジャタイ耕地には、第 2 回移民熊本・福岡県人 21 家族 84 人が通訳の大野基尚夫妻に伴われて入耕した。耕地は小石だらけでコロノ泣かせのコーヒー園として人気がなかった。しかし、この耕主の娘婿がサンパウロ州政府農務長官の次男であったことから、上塚は第 1 回移民配耕での教訓を忘れて 21 家族も送り込んでしまった。その年のコーヒーは収穫できたが、除草期に入って石山の除草が進まなかったことから移民の不満は募りだした。同時に、隣接する牧場との境の間作地に栽培した稲が、牛に食い荒らされたことから、損害補償をめぐって耕主と移民側が対立した。大野通訳が耕主側に立ったこともあり、移民の不満は更に強まり、脱耕者は続出し、遂には大野通訳もサンパウロに引揚げてしまった。上塚は大野の後任に香山を指示した。この時から香山は、ジャタイ耕地紛争事件に巻き込まれて行く<sup>43</sup>。その時の様子を在サンパウロ臨時代理公使藤田敏郎は『伯国サンパウロ州巡回報告書』の中で、以下のように述べている。

移民中松原某なるもの深夜便通の為め外出したるに(当国耕地には便所の設備無く、移民は皆山野に行き用便する慣習なり。)番兵(略)突然

<sup>40</sup> 香山『25 周年記念鑑』(聖州新報社、1934 年)、40 頁。ガビロバとも表記する。

<sup>41</sup> 香山、前掲書 10)、178 頁。清 A678 頁。グアリローバ耕地は、モジアナ線グアタパラ耕地の隣接地(図 6-1)。

<sup>42</sup> 香山、前掲書 10)、183 頁。清 A691 頁。東京朝日 1910 年 10 月 7 日付 2 面に、香山の通信と思われる「日本農民歓迎(伯国近信に拠る)」の記事あり。

<sup>43</sup> 香山、前掲書 10)、184 頁。清 A696 頁。香山、前掲書 39)、52 - 56 頁。



出現、松原を拘ふ。同人抵抗せしに(略)松原を取圍み乱打せんとしとき、本邦人移民は(略)之に対抗せんとせしかば、香山某(通訳)現場に赴き鎮撫しつつありしに耕主も武器を携へ出て来りて松原に向へり。香山の尽力にて双方共血を流すには至らざりき<sup>44</sup>。

事件と脱耕の原因はいくつか挙げられた。すなわち 1) 石山の耕地で除草がはかどらないこと、2) アルマゼン(armazen:食料雑貨店)の豆類買取代金が、隣地のアルマゼンより 1 俵につき 3 ミルも安かったこと、3) アルマゼンの物品販売価格が高く、移民たちの負債がなかなか抜けないこと、それ以上に 4) 移民たちを人として認めない耕主側の対応に、移民たちが激怒したこと、5) リオデジャネイロの公使館の対応の甘さと遅さに、上塚と香山は不満を持っていたことなどが複雑に絡み合っていたのである。

結果、移民たちは耕主宅の新築を請負っていた熊本県出身の段村卯七大工一家だけを残し、1911 年 1 月 30 日、20 家族全員が退耕した。移民たちが耕地のアルマゼンに残した負債は、香山がコロノ各家族の青年を引率し、ノロエステ線マット・グロッソの鉄道工夫に就働させ、その賃金を向こう 3 カ月間で償還させることで決着した。なお移民たちの総負債は 17 家族分で 1 コント 827 ミル余(日本円換算、約 1,200 円)。「竹村移民会社伯国代理人法学博士上塚周平」と裏書きしたレトラ(letra:為替手形)を発行して、日本人コロノのジャタイ耕地引揚は完了した<sup>45</sup>。この時の香山には公使館等の対応の遅れと甘さに激怒し、その権力に対する反抗心が表出し、常に移民の側に立って行動する積極的姿勢が著しかった。

一方、香山は「ジャタイ事件は、日本初期移民と初期移民会社代理人と初期通訳の、コーヒー耕地に対する全く無理解なところより起る

---

<sup>44</sup> 通商局、在伯臨時代理公使藤田敏郎『伯国サンパウロ州巡回報告書』『移民調査報告 第 9 回』ブラジル移民の百年(外務省、1911 年)「ジャタイ耕地」より抜粋。この事件に関する藤田敏郎報告に初めて香山の名が登場する。香山と藤田は日本の友人関係から間接的に繋がり、1921 年、香山が『聖州新報』を創刊する際、新聞の題字を藤田が揮毫している。

<sup>45</sup> 通商局、前掲書 44)。香山『25 周年記念鑑』(聖州新報社、1934 年)、57 頁。

滑稽劇で、ブラジルコーヒー耕主側にとっても、日本移民取計らい不慣れの喜劇の代表的なものであった。」とも記している<sup>46</sup>。

ジャタイ耕地脱耕独身青年たち 13 人は、家長連と別れてマット・グロッソ州鉄道工夫として旅立ち、引率者となった香山も遅れて同行している。ジャタイ青年組も香山も同耕地の雑貨店に未払いになっていた負債返済のために、同州トレスラゴアスで暑さとマラリアにめげず働いた<sup>47</sup>。マット・グロッソ州生活に慣れ始めた頃、上塚からジャタイ移民の借金督促状が届き、香山は移民契約第 7 条に基づきジャタイ青年組に借金返済方を承諾させ、月末の工夫給金より各人の借金額を差し引くことを納得させていた。香山は現金 2 コントス 800 ミルと上塚宛の手紙をサンパウロの竹村商館へ届け、上塚から現金受領の音信を受けた。香山は、ジャタイ耕地移民引揚げの負債支払いの義務責任を青年たちとともに果している<sup>48</sup>。

なお、1911 年末における第 2 回移民配耕 16 耕地の耕地残留数は 668 人、退耕者は 235 人で退耕率 26.0%であった。第 1 回移民の退耕率 48.2%に比べれば定着率は高くなったと言えるが、ジャタイ耕地の退耕率は 96.4%となり、第 2 回移民配耕地の中でもっとも定着率の悪かった耕地と言いつた<sup>49</sup>。

### 第 3 節 開拓者・その喜びと危機

#### 3-1 結婚・家長の決意

香山が橋口重正夫人タニを意識したのはノロエステ線サン・ジョアキン耕地のアカンパメント時代からであった。1911 年 2 月、夫をマラリアで亡くした彼女が 3 人の幼児を連れて帰国かブラジル残留かで迷っていた時、ブラジル残留を薦め、ルス駅裏通りのコーヒー店で結婚の約束をしている。1913 年の 5 月、タニ 32 歳、香山 29 歳であった。

---

<sup>46</sup> 香山、前掲書 45)、56 頁。

<sup>47</sup> 香山、前掲書 45)、52-58 頁。

<sup>48</sup> サンパウロ州との移民契約第 7 条(部分)によれば『金額支払の責任は各家族全員に帰し、家族全員は家長の負債に対し連帯責任を負う』とある。香山、前掲書 10)、191 頁。清 A721-722 頁。

<sup>49</sup> 香山、前掲書 45)、56 頁。青柳『日本人発展史』上巻(日本人発展史刊行委員会、1941 年)、293-295 頁。香山、『四十年史』(私家本、1948 年)、80 頁。

香山は人の子の父となった自分に大きな責任を感じる一方、タニの器量・健康・気質、また香山を夫として信頼する気配りに満足していたようだ。結婚当時、玩具売りの生活で生計を立てていたが、収入は妻に渡すことにしており、タニへの信頼感、家族愛などが素直に表現されている<sup>50</sup>。

1914 年 8 月、第一次世界大戦が勃発。移民青年知識人の間ではブラジルは参戦するか、日本はどうするかなど話題となった。香山はここで初めて「移民青年知識人」という言葉を使っている。彼の心理の中には、「自分は単なる移民ではない」といった区別意識が潜在し、彼自身「移民」という言葉を使っているが、いわゆる「契約移民」ではないという自意識も明確に表出させていた。この段階での香山には、まだ一渡航者とはいえ、移民であることに相違なかった事実を 100% 自己認識する勇氣はなかったのだ。この論文の課題の一つ「いつから移民を意識始めたか」の答えがここに隠されていたといえる。

### 3-2 モンソン植民地での借地農

1914 年、水野社長の南米殖民株式会社には関わらなかった香山とタニとの結婚生活は楽ではなく、タニの産後の肥立ちを待って香山は、モジアナ線バタタエス支線ブロードスキイ駅・ファルツラ耕地・日本人コロニア総監督でタニの実弟・村崎豊重を頼って移動していた。村崎宅ではタニの長男・敏信と長女・芳子が待っていた。久し振りの母子対面は、香山には結婚当初の苦労と小さな喜びに満ちた時だったといえよう。これで香山の家族は、故橋口重正との 3 人の子、敏信、芳子、静子と香山との長女・露子の 6 人家族となった。

1915 年 3 月、香山たちは村崎のリードでソロカバナ線モンソン植民地へ一文無しで集団移動した。モンソン植民地は 1911 年に開設されたサンパウロ州政府直轄の植民地で、建設当初に鈴木貞次郎の誘導で長崎県人 3 家族が入植していた。彼らこそサンパウロ州における日本人コロノの殖民生活への転向第 1 号「殖民の嚆矢」であった<sup>51</sup>。藤田敏郎

<sup>50</sup> 香山、前掲書 10)、238、244 頁。清 A の該当頁は、欠損につき不明。

<sup>51</sup> 香山、前掲書『25 周年記念鑑』67 頁によれば、「殖民の嚆矢」は、淵清治、坂口

総領事は、1 家族 25 町歩 (25ha=1 ロッテ)、地代農具等は 8 年賦で、4 年目より償却開始し 8 年目に償却完了するシステムであったと報告している<sup>52</sup>。

ロッテ (lote: 土地の一区画) には板壁白ペンキ塗りの家、近くを流れるリオ・パルド河での河魚釣り、気候もモジアナ線より涼しい。さらにサン・ジョアキン耕地・第 1 回移民が多かった。橋口さんにはアカンパメント時代に随分お世話になった、入植されるならどんな便利でも計ります。ポルトガル語のわかる人たちが入植してくれると心強い、と皆に喜ばれたという。香山は 4-5 日稲刈りの手伝い・落穂ひろいをして「植民者の一階段を昇ったような自信に満ちていた」と述懐している<sup>53</sup>。この時を香山が移民を実感した瞬間と捉える。

しかし良いこと尽くめではなかった。耕作条件は良かったが、蝗 (バッタ) の害が酷く移民の定着率が低かったのである。アルゼンチン方面から黒雲の如く飛来するバッタは、1 日でトウモロコシなどの収穫物を食い尽くし、沃野を枯野化してしまう凄まじさだったのだ。さらに飛び去る際には幼虫になる卵を地中に産んで行くので次の実りの保証はない。バッタの襲来区域は、シャヴァンテス驛より北はボツカツ地方まで東西に 30 km の幅に限られているという。結果、バッタの襲来に耐えかねて植民地住民は再び耕作適地を求めて移動して行くしかなかったのだ。香山たちも同様であった。人間には不可抗力である自然現象により、土地がいかに肥沃であっても将来性に不安を持ち、移動せざるを得なくなる状況が発生することがあるものである。自然災害が人の移動の動機となることをモンソン移民たちは実感していたのだ。

バッタ襲来の情報に関する鈴木貞次郎と金子保三郎からの被害見舞いの手紙の中に、大阪朝日新聞社の稲垣治編集部長から、正式に朝日新聞のブラジル通信員に任命する辞令があった。差出人は大朝の編集長鳥居赫雄で、ブラジル通信は 1 か月 3 回、1 回 1 段半位の文で 5 円の

---

仁四郎、山本治三郎の 3 氏であった。

<sup>52</sup> 藤田敏郎「海外在勤四半世紀の回顧」『日系移民資料集・南米編 2』第 17 巻 (日本図書センター [1931 年] 1999 年)、223 頁。

<sup>53</sup> 香山、前掲書 10)、252-255 頁。清 A : ページ不確定。

支払いと新聞無料の配布であった<sup>54</sup>。正式に大阪朝日新聞のブラジル通信員になったことは、香山が一移民から新聞人になる大きな契機であったといえる。朝日新聞は、日伯新聞（以下、『日伯』）創刊者・金子保三郎の配慮でサンパウロからモンソンに送付されるようになり、この頃から香山は新聞人になったと述懐していることから、本論の課題④「一移民として開拓農民になりながら、なぜ聖州新報を立ち上げようとしたのか。その根拠は何で、どこにあったのか」の根拠をここに見出すことができた。親族や知人、地縁集団による呼寄せ・勧誘が、人の移動の動機となる事例の具現化といえよう。

#### 第4節 上塚周平との訣別

上塚周平は同志を容易に信じようとしない性格であったようだ。やがてそれは香山の上にももたらされた。1917年、上塚氏の再渡伯により、香山は1917年10月頃、鈴木貞次郎とともに上塚の要請で新植民地の土地探しとして、ノロエステ線イタコロミーの土地を下見していた。豊かな林相の原始林地帯、これが上塚植民地の原始の姿であった。この地域はその後ノロエステ沿線開拓の模範的植民地となって行く。

1918年6月中旬、エイトール・レグール駅に着いた香山は、山伐り請負師になった。山伐りの仕事が始まると香山は敏信と森林伐り倒しにかかり、長さ10m、幅5mの小屋を建て、井戸を掘り、水が出るのを待って移り住んだ。モンソンからイタコロミーへと香山一家は移転し、借地農から自営農へと転換を遂げた<sup>55</sup>。

1919年、上塚の知人の資本家菊池恵次郎が「新日本村建設」に出資するため資金持参でノロエステを訪れた。これからはイタコロミーも本格的な事業が始まるというので香山も鈴木も期待していたが、上塚からは、これまでのお互いの協同事業は打ち切り、今後はイタコロミー植民地と本格的に命名する。組織換えするにあたって、香山は植民

---

<sup>54</sup> 永田稗「南米一巡」『日系移民資料集南米編第4巻』（日本図書センター、1998年）、116－117頁、永田は香山が朝日新聞の通信員であったことについて「朝日が南米の記事に異彩を放ち得るは、君がある為であろう」と称賛している。

<sup>55</sup> 香山『回想録』の300頁には、1918年6月、新築した家の前の香山一家の写真が掲載されている。

地小学校の教員として働くことを上塚から依頼された。香山は上塚が香山を植民地経営の一員として依頼したのではなかったことに落胆し、上塚の欺瞞を見抜きその元を去った。この「新日本村建設」の後援者は菊池恵次郎と三隅棄蔵副領事で、田付七太大使はこの計画に助力を与えていた。菊池氏は当時の金で 35,000 円〔70 コントス〕を拠出していた<sup>56</sup>。上塚のもくろみを見破った香山の、上塚と訣別の時(1921 年元旦)の状況は、『回想録』に鮮明に記述されている<sup>57</sup>。

## 第 5 節 小 括

移民船笠戸丸の一渡航者に過ぎなかった香山は、皇国殖民合資会社の水野龍の指示により、サンパウロ到着後、移民会社代理人の上塚周平の下で書記として通訳・耕地監督など諸事に対応していた。これらの行為を経験値として蓄積しながら香山は、徴兵忌避の一渡航者から開拓に勤しむ一移民へとその心境を転換させて行った。さらに、開拓への挑戦と挫折を経験するなかで、社会の情報に飢えていた移民たちに、初期移民知識人としてブラジル国内や日本の情報を伝達する仲介者になりたいと奮起する新たな香山像も見えてきた。

課題③のなぜ、いつ、単なる渡航者から一移民へと意識の転換を図ったのかについては、ズモーン耕地からの脱耕者を引き連れて、通訳・監督としてノロエステ線サン・ジョアキン耕地に入植し、自然の中での生活に喜びを見出し始めた時であったが、その時点では一移民となることを自認していなかった。モンソン植民地に入植し、旧知の移民たちとともに開拓に従事する中で、「植民者の一階段を昇ったような自信」を感じ、移民としての自己を容認するようになっていた。

課題④の一移民として開拓農民になりながら、なぜ聖州新報を立ち上げようとしたのか。その根拠は何で、どこにあったのかについては、その根拠を 2 つ挙げる事ができた。その第 1 は、1908 年 10 月、ズモーン耕地脱耕者 9 家族を率いてノロエステ線トレド・ピザ駅サン・

<sup>56</sup> 永田稔、前掲書 54)、119 頁。竹崎八十雄『上塚周平』(上塚周平伝刊行会、1940 年)、279-293 頁。

<sup>57</sup> 香山、前掲書 10)、309-310 頁。清 A518-521 頁。

ジョアキン耕地に出向いた時、「ノロエステで集団就労をスタートさせたのは自分である、自分こそノロエステ線のピオネイロなのだ」という自負心、すなわち日本人としてのプライドとアイデンティティの具現化に気付いた時点にあった。この気付きには、笠戸丸の同船者・元橋口重正夫人タニとの結婚、家族の増加による平穏な生活を獲得できた香山の、戸主としての責任感の増幅とも関わっていた。第2は、大阪朝日新聞のブラジル通信員になったことにある。このような観点からも『聖報』は、サンパウロではなくノロエステ地方バウルーで創刊して当然であった。さらに、地方都市バウルーでの新聞創刊の決定的誘因として、1921年1月のバウルー領事館の新設が挙げられる。一地方都市であってもブラジル国内外の情報を瞬時に入手・伝達することが可能となったこと、さらには地方の出来事をいち早く情報伝達できる地方紙ならではの優位性が、サンパウロ市に拠点を持つ『日伯』や『伯刺西爾時報』（以下、『時報』）とは異なった購読者確保に繋がり、地方紙の果たす役割の拠点形成が可能となったことにあった。

## 第4章 聖州新報創刊から廃刊まで、戦後の香山

### 第1節 本章の目指すもの

前章では「一渡航者」から「一移民」としての自覚が高まる中で、「一移民」から「一新聞人」として立ち上がろうとした背景には、香山の移民に対する意識の変換が存在したことを論証してきた。

本稿では香山が「一新聞人＝情報提供者」としての意志を固めた後、日本語新聞・『聖報』を立ち上げ、1) 地方紙としてどのような特徴を持たせ、何をアピールしようとしたのか（バウルー時代）。また、2) なぜバウルーからサンパウロ市に進出したのか（サンパウロ時代）。3) 第二次世界大戦後、再刊しなかった背景には何があったのかなど、『回想録』から抹殺された多数ページに及ぶ『清書原稿A』を注視し、従来の『回想録』を越えた新たな香山像を描くことを試みる。

香山研究、特に初期の新聞を分析した研究は、『聖報』社員として香山と接点のあった清谷(1998)に顕著である以外ほとんどなく現在に至っている。清谷は戦前は『聖報』の記者として、戦後はサンパウロ新聞記者として、ブラジル短歌界における歌人・香山との接点を持っていた人物であったことから、香山を「終生文学青年的心情を持っていたのではないか」と評し、『聖報』は文学的要素の多い新聞と特徴づけている<sup>1</sup>。また、深沢(2010)は、日本語新聞の時系列的・総論的記述はしているが、新聞人・香山論を展開するまでには至っていない<sup>2</sup>。近年、「ブラジル移民 100 周年」を記念して、香山の母校・熊本済々黌同窓会が、藤崎康夫ニッケイ新聞東京支社長を講師に、香山を再認識する講演会を開いたのは、香山研究上の明るいニュースといえよう<sup>3</sup>。

---

<sup>1</sup> 清谷益次「新聞は移民にとっての何であったか」『人文研』No.2（サンパウロ人文科学研究所、1998年）、8頁。

<sup>2</sup> 深沢正雪「日系メディア史」ブラジル日本移民百周年史編纂・刊行委員会編『ブラジル日本移民百年史』（ブラジル日本移民百周年史編纂・刊行委員会、2010年）、93-95頁、101-102頁。

<sup>3</sup> 日本フェアトレード委員会特別講演「1908年第1回伯刺西爾笠戸丸移民」、講師：ニッケイ新聞東京支社長・藤崎康夫氏、2005年6月。



## 第2節 聖州新報創刊（バウルー時代：1921－1934年）

### 2-1 新聞創刊の要因

『聖報』は、主要日本語新聞がサンパウロに拠点を置いていたのに対し、ノロエステ地方のバウルーという地方都市に根拠を置いていたことから、サンパウロ州内の日本語新聞の中で最古の地方新聞といえる。『聖報』の創刊要因を、香山自身の生活史から浮上してきた要因、および生活環境から派生してきた要因に分類すると以下のようになる。

香山自身の生活史から浮上してきた要因については、第2章において、1) 父親・香山俊久の『不知火新聞』発行、2) 9歳の時の九州日日新聞の植字工の経験、3) 大学時代の雑誌編集・出版の経験、第3章において、4) 移民船「笠戸丸」内での船内新聞発行、5) 大阪朝日新聞ブラジル通信員としての実績など5つの要因を分析し、香山には幼少時より新聞づくりの素地があったことを論証してきた。

一方、生活環境から派生してきた要因としては、以下の8項目を列挙した。すなわち、第3章において、

第1に、香山にはノロエステ開拓のピオネイロとしての自負があり、日本人移民の実態、すなわちブラジルの主流言語であるポルトガル語の新聞がまったく読めず、日本語の情報に飢えていた彼らに、いち早く対応したいとの強い願望と使命感があったこと。

第2に、ノロエステ地方への日本人の集住が進み、地域情報を即時に伝達すれば購読者を獲得できるのではないかと香山の経営試算があったこと。事実、香山が最初に『聖報』を起ち上げたビラ・ファルコン地区は、バウルー駅南部、バウルー川岸のノロエステ線とソロカバナ線の間位置し、両線の離発着を容易に知り得る場所であった。

第3に、1921年1月のバウルー領事館開設により、日本からの情報を迅速・的確に購読者に提供できると判断したこと<sup>4</sup>。

第4に、香山が、ブラジルの独立記念日である9月7日を『聖報』創刊日とすることで、新聞創刊の意義を見出そうとしていたこと。

第5に、1917年、第一モンソン移住地で借地農をしていた時、在

---

<sup>4</sup> 在バウルー領事館には副領事多良間鉄輔、書記生古関富弥、別井元女が配属されていた。外務大臣官房人事課『外務省年鑑』（外務省、1922年）、161頁。

サンパウロ総領事館・三隅棄蔵通訳官からの、植民地実態調査依頼を完遂したことなどがあげられる。三隅は熊本県下益城郡杉合村生まれで、東京帝国大学法科大学政治学科を卒業後、サンパウロ総領事館に勤務し、1918 年、同領事館副領事としてリベイロンプレート分館勤務となっていた<sup>5</sup>。香山は調査内容を 1 ヶ月ばかりで一覧表に作成して三隅に送付し、彼からすぐ謝意を表す返事を受け取っていた<sup>6</sup>。この作業の完遂が香山に以後の新聞発刊や年鑑作成などへの自信を持たせたと考えられること。

第 6 に、香山は「ブラジルにおける大和民族の植民地」と題し、ペンネーム「聖州子」で大阪朝日新聞(通称：大朝)に通信していた。この記事は、当時文部省派遣でロンドンにいた土屋員安叔父からの手紙にも好評と記されていた。三隅からの調査依頼を完遂した充実感だけでなく、大朝新聞のトップ記事に掲載されたことが、新聞発刊に一步を踏み出す要因の一つとなった。後見人・叔父からの通信は、叔父に香山のブラジルでの活躍が認められたことを示すものであり、香山にとってこれ以上嬉しい出来事はなかったといえよう。しかし『清書原稿 A』の筆者ジェニー脇坂は、大阪朝日新聞から送られてきた新聞には、香山の名もペンネーム(聖州子)も出ていなかったという。内容を読めば父親の書いたものと分かるが、名前が出ていなかったことは非常に残念であったと述懐している<sup>7</sup>。『回想録』の中には香山は大満足をしていたと書かれているが、その家族はそうでなかったことも事後判明したことになる。

第 7 に、創刊直前、当時のサンパウロ総領事館総領事藤田敏郎と奇遇な縁があったことである。香山が東京で苦学を強いられていた 1906 年当時、その援助を惜しまなかった友人・関力男(旧姓・太田)の妻チカの叔父・関当純が藤田敏郎の実兄であることを知っていた<sup>8</sup>。香山が京都在住の折、関力男は員安叔父の家の書生だった関係で、藤

<sup>5</sup> 外務大臣官房人事課『外務省年鑑』(外務省、1923 年)、316-317 頁。

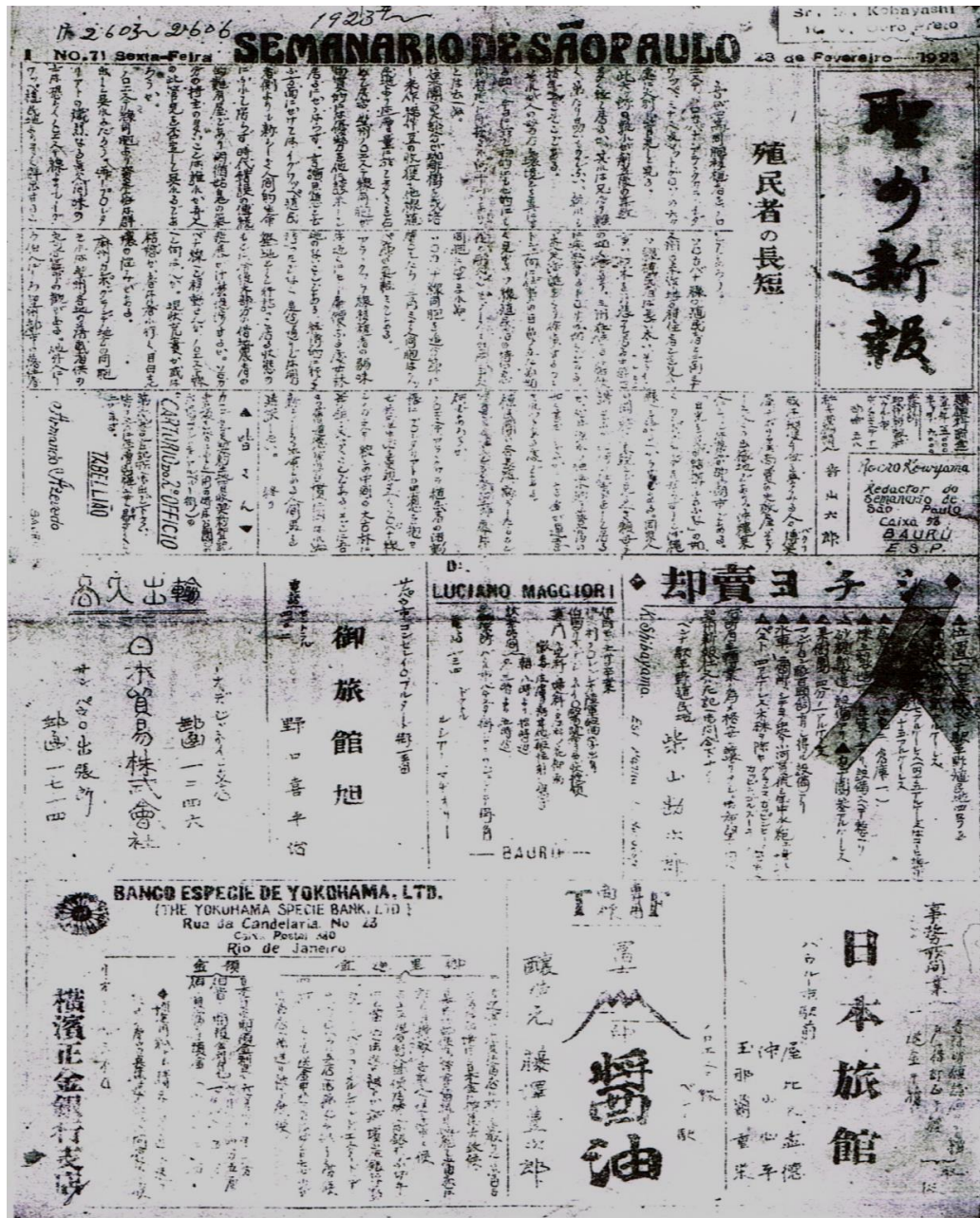
<sup>6</sup> 香山六郎『回想録』(サンパウロ人文科学研究所、1976 年)、281-282 頁。

<sup>7</sup> 香山六郎の次女、ブラジル国籍名ジェニー脇坂(旧香山)、日本国籍名ジェニー秋子香山(2017 年 10 月現在 92 歳)との国際電話インタビューにより確認。2015 年 10 月 22 日。2017 年 12 月 9 日。

<sup>8</sup> 香山、前掲書 6)、102 頁。

田総領事は香山の門出を危ぶみながらも祝儀を忘れず、新聞名『聖州新報』の揮毫を快諾していたこと(図4-1)。

図4-1 藤田総領事の揮毫とさまざまな広告 1923年2月23日第71号



第8に、香山はエニックメディアであるはずの既存の日本語新聞が、日本国民の生活と移植民生活の真相を伝えないことに不満を抱く移民

の一人になっていたことである<sup>9</sup>。香山は、既存紙ばかりか領事館員や海興の役員たちからも、移民蔑視の臭気を嗅ぎ分けていたのだ。ブラジル社会に内在する階級差別意識を、移民を統轄する在ブラジル日本人たちも甘受していたことへの不満が香山を揺り動かし、移植民生活に即した新聞を発行する決心をさせたといえよう。

これら諸要因から、移民の目線で移民たちに情報を提供するのには香山にとって当然の行為であり、その意味で香山は移民との共生を常に心掛けた新聞人であったといえる。

## 2-2 日本語新聞概要

### 2-2-1 ノロエステ地方の発展

1910年代後半からコーヒー園のコロノとしてサンパウロ州のコーヒー園に入植した日本人移民たちは、自営農を目指して、コーヒー適地と云われていたノロエステ地方に進出するようになっていた。この移民たちの移動と定着は、エスニックメディアとしての日本語新聞の創廃刊を左右した。主流言語であるブラジル・ポルトガル語の新聞の読めない日本人移民にとって、ブラジルのエスニックメディアとしての日本語新聞は、不可欠の情報源であったのだ。新聞には情報伝達の即時性・俊敏性・公平性などが要求されるが、新聞社側には購読料や広告料収入を経営財源としなければならない事情があるため、新聞は購読者の増大によって組織や技術強化を図りつつ、購読者とともに発展してゆく流動性あるメディアでなければならなかった。

1958年の移民50年祭を期したブラジルの日系人実態調査や、1964年の同調査から推定された1925年当時のサンパウロ州の日本人人口は37,222人、そのうちノロエステ地方には28.8%が集住し、1935年には148,280人のうちの30.6%ともっとも高い集住率を示していた(図1-2)<sup>10</sup>。これらのデータから、当時の日本語新聞各社がノロエス

<sup>9</sup> エスニックメディアについて白木繁彦は、「当該国家内に居住するエスニック・マイノリティの人々によって、そのエスニシティの故に用いられる情報媒体」と規定している。白木『エスニックメディア研究』(明石書店、2004年)、3頁。

<sup>10</sup> Teiichi.Suzuki, *Mobilidade de dos Imigrantes Japoneses no Estado de SãoPaulo, 1915-1955:IMIGRAÇÃO JAPONESA NO BRASIL*(ブラジル日系人実態調査委員会:資料編、1964年)。

テ地方を購読者獲得のターゲットとするのは当然であったといえる。現に『聖報』が経営軌道に乗る前に、『時報』は1924年、奥ノロエステの中心地リンスに支社を開設していたし、『聖報』が1930年1月15日リンス支社を、同年4月8日にルッサンビーラ支社を開設すると、『日伯』は1930年3月にバウルーから200 kmも北西に開設していたアラサツバ支社を、翌年10月にはリンスに移転させていた。結果、リンスには『時報』、『聖報』、『日伯』3紙の支社が集積する事態となった(図4-2)。このように日本語新聞各社は、ノロエステ地方に集住するようになった日本人移民に、自社の新聞を購読させるために凌ぎを削っていた。

## 2-2-2 1910-1930年代の日本語新聞

『日伯』に掲載されたブラジル連邦統計局1930年統計によると、ブラジル国内における新聞発行数は2,959種に達し、1912年に比べて1,582種も増加していた<sup>11</sup>。サンパウロ州の新聞数は1930年までに706種発行されており、そのうちポルトガル語以外のエスニックメディアとしての外国語新聞は総数の7% (181種) であった。外国語新聞のうちもっとも多かったのはドイツ語新聞69種で、日本語新聞は4種であった(表4-1)。『聖報』がバウルー市よりサンパウロ市へ移転する1934年頃までに発刊された日本語新聞は6社であった<sup>12</sup>。なお『日伯』と『時報』、『聖報』とのノロエステ地方における詳細は第5章で論述する<sup>13</sup>。

日本語新聞としてブラジルで最初に発刊されたのは、1916年初頭の週刊紙『南米』であった。ただし、社主・星名謙一郎(以下、星名)の主張が当時の読者層には難解であったことと、星名自身が開発した奥ソロカバナ地方の植民地の売却広告的要素が強かったため、言論機

<sup>11</sup> 「ブラジルには新聞がどれ丈?」『日伯』1931年7月30日第739号3面。

<sup>12</sup> Satomi Miura, "La presencia de la prensa de los Nikkei en el contexto de México antes de la Segunda Guerra Mundial" *Asociación Latinoamericana de Estudios de Asia África XIII*. (Congreso Internacional de ALADDA, 2010)。清谷益次、前掲書1)、3-10頁。

<sup>13</sup> 半澤典子「ブラジル・ノロエステ地方における日本語新聞の果たした役割」『立命館言語文化研究』26巻4号(立命館言語文化研究所、2015年)、87-101頁。

関としての使命は短く、2 年余りで廃刊となった<sup>14</sup>。とはいえ、『南米』の創刊は、移民たちに情報発信の重要性を知らせた点において、エスニック・メディアの嚆矢といえよう。その後、日本語新聞の多くはサンパウロ市で発刊されており、地方に拠点を置いた新聞は『聖報』、『アリアンサ時報』、『ビリグイ民報』の 3 社にすぎない。創刊後経営者が変更したのは『日伯』で、創刊者は金子保三郎(以下、金子)と輪湖俊午郎(以下、輪湖)であったが、輪湖は翌年に退社し、金子が創刊 3 年目の 1919 年、三浦鑿(以下、三浦)に譲渡している。『南米』、『日伯』、『時報』の各創刊者がハワイやアメリカでの新聞作成経験者であったのに対して、『日伯』・三浦と『聖報』・香山は、ほぼ同時にブラジルに到着し、三浦は星名から、香山は金子からそれぞれ新聞作りの手ほどきを受けていた。香山は 1908 年 6 月 18 日に笠戸丸でサントス港から上陸したが、三浦は同年 12 月 8 日、ブラジル海軍練習艦ベンジャミン・コンスタント号でレシーフェ港から上陸している。上陸当初は海軍兵学校の柔道教師をしていたと、前山(2002)は述べている<sup>15</sup>。彼らは互いに新聞創刊以前の個人的事情を知っていることなどから、何かと紙面上での論戦を起こし、特に第 7 章のコーヒー干害低利貸付資金問題での対立は激しかった。『時報』は、『南米』や『日伯』への対抗意識をもって、移民の教育を掲げて発刊されたこともあり、特に『時報』社主・黒石清作(以下、黒石)は『日伯』社主・三浦と常に対立し、徹底的に三浦追放策を完遂させた人物であった。なお、主要紙の中で社主が一度も変更しなかったのは、『時報』・黒石と『聖報』・香山の 2 人だけである。特定の機関や特定の目的によって創刊されたものは週刊『南米』のほか、力行会アリアンサ植民地機関紙『アリアンサ時報』、ビリグイ青年連盟機関紙『ビリグイ民報』など

<sup>14</sup> 『南米』(O Nambei) は週 1 回 (Semanário: セマナーリオ) 土曜日の発刊であった。1920 年代初期までに創刊された日本語新聞は全て Semanário で、金曜日発刊が主流であった。サンパウロ市西部のサンターナに社屋を構えた。『南米』は、菊版で 30~40 頁の雑誌風の謄写版印刷の新聞であったようだ。永田稔『ブラジルに於ける日本人発展史 下巻』(ブラジルに於ける日本人発展史刊行委員会、1953 年)、258-259 頁。

<sup>15</sup> 前山隆『風狂の記者ーブラジルの新聞人三浦鑿の生涯』(お茶の水書房、2002 年)、114-115 頁。



で発行部数も 5,000 部足らずであった。また、二世を購読者に取り込む工夫をしていたのが『ビリグイ民報』と『日本新聞』であった。『ビリグイ民報』社主・梶本明はカリフォルニア生れだが、家族とブラジルへ移住しビリグイ植民地で、ポルトガル語版 1 ページを挿入するなど、一世ばかりでなく二世も購読者のターゲットとしていた<sup>16</sup>。また『日本新聞』は、二世を見据えた「伯主日従」を掲げた内容を盛り込むことで、他社との差別化を図っていた<sup>17</sup>（表 4-1）。

表 4-1 1910 年-1930 年代のブラジルの日本語新聞一覧

| 番号        | 新聞名            | 創刊年                    | 創刊地   | 創刊者名           | 特筆事項   | 発行部数   | 廃・終刊年                 |
|-----------|----------------|------------------------|-------|----------------|--|--------|-----------------------|
| 1         | 週刊『南米』         | 1916/1/1               | サンパウロ | 星名謙一郎<br>鹿野久一郎 | 日本語新聞の先駆け。ソロカバナ線、ブレジヨン植民地分譲売買のための広告的要素大。                   | 週刊・500 | 1918/12/4             |
| 2         | 日伯新聞           | 1916/8/31              | サンパウロ | 金子保三郎<br>輪湖俊午郎 | 1919年三浦鑿三社長。伯刺西爾時報との競合。日本国及びブラジル政治批判による三浦のブラジル国外追放事件により廃刊。 | 24000  | 1939/5/27             |
| 3         | 伯刺西爾時報         | 1917/8/31              | サンパウロ | 黒石 清作          | 日伯新聞への明確な対抗意識。当初ブラジル移民組合機関紙で、移民のための新聞を標榜。1922年から黒石による個人経営。 | 8200   | 1941/8/9              |
| 4         | 聖州新報           | 1921/9/7               | パウルー  | 香山 六郎          | 地方創刊の日本語新聞の先駆け。移民の立場、移民目線での報道。ノロエステ地方の日本人移民の支持大。           | 10000  | 1941/7/30             |
| 5         | 南米新報           | 1928/6/00              | サンパウロ | 坂井田善吉          | 1923年創刊の月刊『南米評論』を週刊新聞化。評論・雑誌風で社会的融和性の欠乏により、経営上の進展を見ず。      | 3500   | 1931/12/19            |
| 6         | 日本新聞           | 1932/1/14              | サンパウロ | 翁長 助成          | 1932年『南米新報』を買収し解明したもの。社主翁長の日本の精神に囚われない二世を見据えた記事内容。         | 7500   | 1941/8/0              |
| 7         | アリアンサ時報⇒日伯共同新聞 | 1930/4/9<br>1937/5/12  | アリアンサ | 宮尾 厚           | 日本力行会アリアンサ支部青年会機関誌。アリアンサ発展を図るための記事に異彩を放つ。                  | 5500   | 1941/0/0              |
| 8         | ビリグイ民報⇒ノロエステ民報 | 1932/6/25<br>1934/4/25 | ビリグイ  | 梶本 明           | ビリグイ青年連盟の機関紙であったが、1933年の同連盟の解散により、1934年梶本が単独再刊。ポルトガル語版を挿入。 | 4500   | 1933/12/0<br>1941/7/0 |
| 各紙等より筆者作成 |                |                        |       |                |  |        |                       |

購読者数や発刊年数などから日本語新聞の代表とされるのは、中央紙の『日伯』、『時報』と地方紙の『聖報』の 3 紙といえよう。この 3 紙は社主同士の個人的対立の構図が描けるほど、紙面上で厳しい論戦をしている。もっとも長期間新聞を発刊していたのは『時報』であった。『日伯』は社主三浦の個性の強さから国外追放により、廃刊を余

<sup>16</sup> 香山『のろえすて日本人年鑑』（聖州新報社、1928 年）、103 頁。父梶本菊次郎他の名前あり。

<sup>17</sup> 「悲しき退社」『聖報』1932 年 3 月 15 日第 644 号第 3 面。

儀なくさせられた。その点『聖報』は、バウルーから 1934 年末にはサンパウロに進出し、中央紙の 2 社を凌ぐ勢いで日刊紙発刊をするなど、着実に発展していたといえる<sup>18</sup>。

## 2-3 聖州新報概観

### 2-3-1 創刊時情勢と発刊状況

戦前のブラジルの日本人社会には、前述のような日本語新聞が独自性を持って競合していた<sup>19</sup>。『聖報』発刊に当り香山は、黒石の好意により『時報』紙上に以下のような「聖州新報発行予告」文を掲載し、9 月 7 日に創刊している<sup>20</sup>。

今般バウルー市に於きまして『聖州新報』と呼ぶ邦字週刊新聞を発行致します。(略)『聖州新報』は私一個の独立経営で何等覇絆に囚はれぬ新聞であります。何者にも媚びず何物にも惶れず恒に同胞の味方となり相談相手となる新聞であります。同胞の深刻なる実生活に触れ、実際問題の記事を以て満たされ居る処に趣味と実益との旺溢(シタ)新聞であります。晩くも来五月末頃までには初版を発行致します。(略)

( )内は筆者加筆。

大正 10 年 4 月 21 日      バウルー市    聖州新報社    香山六郎  
同胞諸兄姉

香山は、ノロエステ地方のバウルー市に活動拠点を置き、創刊から終刊まで、ただし終刊はサンパウロ市内であったのだが、一貫して編集に従事していた。『聖報』創刊期は手書きでしかも印刷技術はジン

<sup>18</sup> 各社を調査するにあたり、以下の資料を参照した。①永田稔「伯刺西爾に於ける日本人発展史下巻」(同史刊行会、1953 年)、258-268 頁。②香山六郎『在伯日本人移植民 25 周年記念鑑』(聖州新報社、1934 年)。③サンパウロ人文科学研究所編・発行『ブラジル日本移民・日系社会史年表』(1996 年)。④移民 70 年史編纂委員会『ブラジル日本移民 70 年史』(ブラジル日本文化協会、1980 年)、251-273 頁、284-292 頁。⑤ブラジル日本移民百年史編纂・刊行委員会『ブラジル日本移民百年史第 3 巻』(風響社、2010 年)、83-104 頁。⑥細川周平『日系ブラジル移民文学 I・II』(みすず書房、2012 年、2013 年)。⑦清谷、前掲書 1)、3-10 頁。

<sup>19</sup> 永田、前掲書 14)、258-268 頁。

<sup>20</sup> 「聖州新報発行予告」『時報』1921 年 4 月 29 日第 186 号第 2 面。



コ版(A zincogravura:亜鉛版)で、手書きの読みにくさ、欠号の多さ、編集技術の未熟さ、印刷機器の不備などのマイナス条件があった。1921年9月7日が創刊第1号で、1934年11月13日の第905号がサンパウロ市移転直後の発刊第1号となり、1941年7月30日の第2,336号で廃刊となっている。しかし、全紙面が現存するわけではなく、1921年9月7日の創刊号から1923年2月23日以前の新聞は見当たらない。また1933年3月から1934年3月までの、ほぼ1年間の新聞もほとんど存在せず、欠損版は100号分を超えている。

創刊にあたり、香山はバウルー市役所に新聞名の登録を済ませ、発行許可を得ている。登録名は *Semanário de São Paulo, Jornal Japones*、購読料は年間 15 ミルで、当時の『日伯』の購読料の年間 18 ミルより安く、『時報』とは同額であった<sup>21</sup>。

発行当初は週刊 (*Semanário*) で、毎週金曜日発行であった。中央紙も金曜日発行ではあったが、輸送手段の未発達のためノロエステの奥地では1週間の遅配となり、移民たちには旧聞しか伝わらなかったことを見越しての香山の発行策であった<sup>22</sup>。ジンコ版は枚数を重ねるとインクが染みて文字がぼけてしまうため多量の印刷はできず、何日かけて印刷したものを集め、明瞭なものを200部発行するのが精一杯だったようだ。この発刊に関する資金繰りに香山は苦心しているのであるが、強力なスポンサーのない『聖報』を支援したのは、各地で苦労を共にした旧知や、ごく僅かなバウルー駅前の商業者たちであった。彼らは香山の姿勢に哀れみではない同情と支援の気持ちを示したのだった。このようなところに香山の人徳が表出されていたといえる。

当初、領事館関係者やサンパウロ市の各日本語新聞は、香山の新聞創刊を軽んじていたようだが、創刊号をバウルー領事館の多良間鉄輔領事代理に寄贈すると、祝儀に200ミル紙幣を差し出したというように、次第に香山の行為に理解を示すようになっていった。

『聖報』の発行部数は創刊時の200部から、翌年には800部にも増

---

<sup>21</sup> 年間購読料については、『日伯』1924年2月22日第361号(現存の最古版)、『時報』1921年9月2日第204号により確認。

<sup>22</sup> 香山、前掲書6)、317-318頁。

大している。広告は香山自身が「お情け広告」と自白しているように、サンパウロ市やノロエステ沿線およびソロカバナ沿線の商店や日本旅館などの案内、土地売り広告などであった。原稿は香山が書き、筆記は細字の綺麗だった畑山伸太郎が担当した(図 4-1)。畑山はリンスの農田源行のコーヒー請負農の契約切れと共に職を求めてバウルーへ出てきていた青年で、彼は『聖報』社員第一号であった<sup>23</sup>。

1921 年 11 月には同じビラ・ファルコンのバウルー駅 1 km に移転したことで、駅情報の取材を遅くまですることができるようになった<sup>24</sup>。さらに 1923 年、軌道に乗り始めた『聖報』社は、ビラ・ファルコンからバウルー駅近くのノロエステ街 11 番地に移転している。当時ノロエステ沿線は、独立を目指す農民による土地買いが盛んだった。土地売りの広告料は通常広告料の 1.5 倍であったので、絶好の収入源であった。この収入増大が『聖報社』の発展を示していたともいえる。この頃、平野植民地の開祖平野運平の実弟・榛葉彦平が『聖報』の社員として編集を担当していた。香山以外に社員は畑山伸太郎、大山幸平、佐藤静、榛葉彦平の 4 名となった<sup>25</sup>。

1923 年 9 月 14 日の『聖報』は創刊 100 号目を迎えた。本来なら何らかの記念行事を催すべきところだったが、活字印刷のための活字を注文していた日本の販売所が関東大震災で灰燼に帰し、他の注文先を探さねばならない状態になっていたこと、さらには、震災被害で苦しんでいる幾百万同胞の不幸な記事類を、記念すべき 100 号に掲載することは、人道的に差し控えたいとの香山の願望により、特別記事もない通常の 4 面紙を発行していたのは、香山らしい弱き者への思い遣りとも受け止められる。「本紙百号に就いて」と題した社説は「本紙百

<sup>23</sup> 香山、前掲書 6)、326 頁。『聖報』1931 年 9 月 7 日第 591 号、創刊 10 周年の特別記事 27 面に写真掲載あり。

<sup>24</sup> Mapa Bauru S. Paulo Brasil. Estação Ferroviária de Buru によれば、Vila Falção はバウルー駅南部にあり、バウルー川沿いのソロカバナ鉄道沿線に位置する。ノロエステ街道との結節点で、情報収集には好適地であった。ノロエステ街 11 番地は、現在のセントロに位置する。

<sup>25</sup> 香山、前掲書 6)、357 頁。伊丹金蔵『在伯同胞発展録』(非売品、1931 年)、181 頁。榛葉彦平は『聖報』社で 1 年半程編集を担当していた。1930 年ブラ拓チエテ移住地支配人、1939 年トレスバラス支配人などの経歴を持つ。ブラジル力行会名鑑(ブラジル力行会、1992 年)によれば、榛葉も伊丹もブラジル力行会員であった。

号記念は不幸であります。だが、忘れられぬ記念となるでしょう。」と締めくくっている<sup>26</sup>。

しかしこの香山の社説を率直に受け入れるのは疑問である。活字が届かないことと関東大震災での同胞への気遣いを最大の理由とすることで、実際は経済的裏付けのない無資本の小企業の無力さをカモフラージュしていたにすぎなかったのではないか。1925 年 5 月、ジンコ版から活字への転換を契機に、購読料の年払いを前金 20 ミル、後金 23 ミルと差をつけることで、購読者へ前金払いのお得感をほのめかし購読者増大を狙っていたと考える方が妥当ではないだろうか<sup>27</sup>。

『聖報』は 1931 年 9 月 7 日第 591 号から、創刊 10 周年を記念して週 2 回 (Bi Semanário) 5,300 部発行するようになっていた<sup>28</sup>。『日伯』や『時報』の週 1 回発行を尻目に週 2 回ゼルマニア版で発行し、12 月には 10,000 部に達していた。さらに、サンパウロ市に本社を移転した後の 1935 年 10 月 1 日第 993 号より、工場拡張事業によるバウルー分工場開設を契機に、週 3 回 (Tri Semanário) 発行するようになった。

## 2-3-2 内容構成

紙面構成はどのようであっただろうか。現存する『聖報』最古の紙面である 1923 年 2 月 23 日第 71 号で確認すると、基本的には 4 面構成であった。第 1 面は社説欄をトップに掲げて社主の姿勢を表現し、残りの紙面は広告で埋めている。その広告の内容はノロエステ地方の土地売りブームを反映したコーヒー栽培適地の分譲案内、バウルーに所用等で滞在する人たちのための旅館案内、ノロエステ沿線の日本食製造所 (醤油工場と醤油名) やリオデジャネイロやサンパウロの輸出入業者、横浜正金銀行リオデジャネイロ支店案内など、時にはサンパウロ総領事館やバウルー領事館からの諸届の提出方法案内や海興の案内など、移民にとって必要性の高い企業の広告が中

<sup>26</sup> 「本紙百号に就いて」『聖報』1923 年 9 月 14 日第 100 号第 1 面。

<sup>27</sup> 1924 年 9 月 9 日当時の 1 円=4 ミル 300 レイス。1 ミル=25 銭。横浜正金銀行リオ支店調べ。

<sup>28</sup> 「先端的報道機関として本誌は断然週 2 回発行」『聖報』1931 年 9 月 7 日第 591 号第 1 面。

心であった。特に新聞社側として歓迎したのは土地売買広告で、一般の広告の 1.5 倍の広告料は新聞社側には重要な収入源だった。また、土地売り広告は人の動きを察知してその情報を記事化するのに最適だったから、『聖報』の記者たちは、バウルー駅前での情報収集には特に力を入れていた。社屋を創刊当初のバウルー駅奥 2 km のビラ・ファルコンから、わずか半年で同地区の 1 km 地点まで前進させてきたのは、時間をかけて駅での情報収集量を増加させ、刷り上がった新聞を一刻も早く購読者に提供しようとした香山の、業務の機能性促進と移民中心の姿勢が突出していたからに他ならなかった。

第 2 面は海外電報や母国通信が中心で、移民たちは特に母国通信を楽しみにしていた。日本からの情報は移民たちがもっとも知りたがったものだけに、母国の新情報をよりの確に掲載することは、エスニックメディアの生命線であった。広告欄も日本製の常備薬や生活必需品・書籍などの広告が紙面を賑わせていた。広告欄の拡大は事業費獲得手段の外に、購読者に生活への示唆を与えるものでもあったから、一石二鳥の効果を発揮していたことになる。

第 3 面は地方欄で、ノロエステ地方はじめ各地の日本人会や青年会などの活動状況、人物往来、医者・司法書士・薬局案内、結婚・出産・死亡通知など、身近な生活情報が満載されていた。例えば、香山六郎の家族のニュースでは、1926 年 4 月 9 日第 224 号に「去る 7 日午前 10 時、本社主宅香山谷子、7 年目の出産、女の子分娩、母子共健在。」が掲載されている。この記事の内容から、香山の次女・ジェニー秋子のお産時の記事であることがわかる。

第 4 面は教養欄で、読み物をメインに各種広告、後には短歌・俳句・創作詩など読者からの文芸作品が掲載されるようになった。文芸欄が充実したのは、それだけノロエステ地方の日本人移民社会が拡大・安定し、生活上の精神的余裕が生れてきたことを示していたといえよう。このように紙面の約半分は広告が占有していたが、日本語新聞は日本人移民社会の変容を静かに見つめていたのである。

### 第3節 地方紙『聖州新報』のアピールしたもの

#### 3-1 移植民文芸への特化

『聖報』の使命は、移植民の新聞たることを忘れずにペンを執ることにあると香山が述べているように、生来、文学青年であった彼は、地方紙としての特徴を文芸に力を入れることで特化させようとしていた。事実、香山は1925年頃「移植民文芸」を推奨した。創刊初期は経済的基盤が不安定だったこともあり、文芸欄への投書者や寄稿者に原稿料を払えず、僅かに購読料と年賀状広告料を無料にするに留まっていたようだが、事情を知る仲間たちは協力を惜しまなかったというから、香山に対する移民たちの信頼性の高かったことがわかる。移民たちにとって自己の文芸活動の表現場所を提供してくれるのであれば、金銭の有無は問題外だったのかもしれない。文芸欄寄稿者には、上塚周平、星名謙一郎、坂井田善吉など日本人移民社会をリードする人たちも名を連ねていた<sup>29</sup>。

新聞俳壇の先駆は1916年創刊された星名の週刊『南米』、新聞歌壇の先駆は1920年6月の「日伯歌壇」とされている<sup>30</sup>。香山は『聖報』としての特徴を「俚謡」に見出した。熊本県出身の香山は、ノロエステ地方には同郷者が多いことにヒントを得て、彼らが日常親しんでいた熊本俚謡の掲載を考えついたのだ。1931年9月11日第592号第4面には『聖報』創刊10周年記念の特集記事として、文芸部が新たに設定した文芸欄への懸賞金付き募集を行っている。同年9月15日第593号第4面には、「植民情緒豊かな俚謡正調を募ります」とした記載がある。すなわち、

本紙は(創刊)10周年記念号を一期として此の欄を毎週約一段宛植民情緒豊かな〔植民俚謡正調〕を募り掲げます。一等当選10ミル、二等当選5ミル、三等当選郵券代2ミルの賞を呈します。大和民族殖明文芸俚謡正調の玉成と大成を期する為であります。選者は当分公孫樹が担当致します。聖州新報文芸部。寄稿される創作や随筆詩歌等は臨時

<sup>29</sup> 香山、前掲書6)、376頁。清A947頁。

<sup>30</sup> 細川周平『日系ブラジル移民文学I』(みすず書房、2012年)、297頁、308頁。

増刊の折、選り発表する事に致します。平素は殖民俚謡正調一点張りで臨みます<sup>31</sup>。( ) は筆者挿入。

殖民俚謡正調の一例を掲げる。七七七五調のリズムが美しい。

我が家うしろに坂道上りゃ花も盛りの珈琲園      高木臥牛  
春か秋かも知らない顔で珈琲育てる十余年      三澤妙珍

香山は『回想録』79 頁に「時事問題の他に文芸欄の俚謡が好きだった」と記しており、殖民俚謡正調の掲載は、彼の常に移民の立場に立つと云う姿勢の具現化ともいえよう<sup>32</sup>。これらは 1931 年から 32 年に掛けて掲載されたが、『聖報』の文芸特化策の一つといえる。

1936 年 10 月、『聖報』は文芸欄に聖報俳壇・聖報歌壇を設け移民の俳句や短歌を募集していた(第 6 章に詳細あり)。聖報俳壇は当初、日本俳壇の一派ホトトギスに属する佐藤念腹を選者としていた。聖報歌壇は日本歌壇を真似て日本の生活情緒を模擬したものではなく、日本人移民のブラジル生活の香と色と味をその中に秘めた生命の表現そのものであった。1937 年、それらを纏めて歌集『移り来て』が発刊された<sup>33</sup>。女性社員須田富美子(雅号:貞女)が選者で、その他の女性社員と女性投書家たちの努力が実って 500 部が刊行され、戦前期ブラジルにおける最初の歌集となった。1938 年、サンパウロ州内の歌人が結集して短歌誌『椰子樹』が創刊されるが、この原動力となったのは『聖報』の殖民短歌編集部の木村茅里選者と香山公孫樹であったという。これらから『聖報』は日本人コロニア女性文芸の祖であったのではないかとの香山の論も理解できる。文学青年香山の夢が現実となったといえよう。文芸活動で香山は「公孫樹」や「素骨」、「毒露」などと云った雅号を使用していた。「公孫樹」は熊本城の城門広場にあった公孫樹の古木からとった雅号であった。

<sup>31</sup> 「殖民俚謡正調」『聖報』1931 年 9 月 25 日第 596 号第 4 面。

<sup>32</sup> 香山、前掲書 6)、79 頁。清 A 264 頁。

<sup>33</sup> ブラジル日本移民 70 年史編纂委員会『ブラジル日本移民 70 年史』(ブラジル日本文化協会、1980 年)、254 頁。

### 3-2 地元直結の新聞を強調：上塚周平と八五低資問題

1921 年頭より上塚周平との関わりを断っていた香山は、9 月に『聖報』を創刊したものの、その経営困難に直面していた。1924 年、上塚の植民地建設も軌道に乗り分譲区画は完売していた。入植間もない移民たちは独立を急ぐあまり、次のコーヒー収穫予測をもとに、高利の年賦払い資金を借り土地買いに焦っていた。ところが 1923 年末から天候不順となり、大洪水と旱魃、1924 年 6 月の霜害、10 月末の旱魃と、激しく変化する自然災害に彼らは完全に打ちのめされた。日本語新聞各社はこぞってその危機状態を書き立てた<sup>34</sup>。

その頃の香山は、上塚を表面上先輩として付き合っていた。あるいは新聞経営上、上塚の大衆的人気を利用しようとしたのかもしれない。同様に上塚も、香山のメディアネットワークを活用することで、自己の植民地開発を宣伝したとも考えられ、相互共存共栄の関係にあった。

土地所有者でありまた土地ブローカーでもあった上塚は、1925 年『聖報』へ「各駅における日本人土地所有面積等申出」を掲載し、各鉄道沿線の日本人移民に救済請願のための調査を実施させ、田付七太特命全権大使に訴えた<sup>35</sup>。この請願運動に参加したのは、ノロエステ線各駅の請願団とソロカバナ線アルバーレスマッシュード駅の星名謙一郎の一団だけであったため、中央紙である『日伯』や『時報』は、不平等な請願運動だと上塚や『聖報』を各紙上で責め立てた。その典型例が『日伯』の「低資問題の経緯」・4 回シリーズと、『時報』の「同名異質の低利資金」・3 回シリーズである。これらの批判に対して『聖報』は、中央 2 紙に動じることなく、逆にそれらの反論をバネにして、地の利を生かした詳細な情報を掲載し、地元の購読者に冷静な判断と行動をアピールした。

この事例は地元有力者であった上塚と協力し、地方紙の威力を如何なく発揮させたものであり、ノロエステ日本人移民の結束力と決断力の強さを中央紙に示した好例であった。また、これによって『聖報』

<sup>34</sup> 「旱害」『聖報』1923 年 12 月 14 日第 112 号。「霜害予防は刻下の大急務」『時報』1924 年 5 月 9 日第 343 号。「ソロカバナ線と田付大使」『聖報』1924 年 5 月 23 日第 134 号。

<sup>35</sup> 「各駅に於ける日本人土地所有面積の申出」『聖報』1925 年 7 月 10 日第 186 号第 3 面。

は、ヒト・モノ・情報すべてが活気づいた地方紙としての基盤を確立していったともいえる。1926 年 3 月末、日本政府はこの請願運動に対し「珈琲旱害被救済者低利貸付資金」85 万円の貸付を決定した<sup>36</sup>。いわゆる「八五低資問題」である。同年末から対象となったノロエステ線各駅とソロカバナ線の一部に対し資金が振り分けられた。この問題については、第 7 章で詳述する。

### 3-3 年鑑類の発刊

香山は単に新聞人に留まらず、戦前ノロエステの日本人の活動を 3 種の年鑑にまとめ発刊している。すなわち『のろえすて日本人年鑑』（1928 年）、『ノロエステ・ソロカナバ・パウリスタ三線邦人年鑑』（1930 年）、『在伯日本移植民二十五周年記念鑑』（1933 年）である<sup>37</sup>。年鑑作成に当たっては、社内に「年鑑部」を置き、社員、出張社員などを総動員して移住地をくまなく歩く悉皆調査を行った。いわゆる「足で稼いだ」年鑑であり、その購読者もノロエステ線ばかりでなくソロカバナ線・パウリスタ延長線沿線各駅に存在した。特に『在伯日本移植民二十五周年記念鑑』の編纂に当たっては、社員も盛り上がりを見せた。『聖報』紙上にはサンパウロ州内の開拓鉄道全線に社員の出張を知らせる「社告」と「社員募集」が頻出した<sup>38</sup>。発刊時には主要駅に代表者や代表機関を設定し、まず彼ら宛に大量に発送し、そこから周辺地域の購読者が受領できる流通システムを整えていた。1934 年 9 月 28 日付『聖報』によれば、上記 3 つの鉄道沿線に少なくとも 21 個所の配本所を設定し、その配本所には個人だけでなく青年会や日本人会も協力していたことが記されている。香山と『聖報』社員たちは、地域住民と一体となって新聞・年鑑事業を推進していたのだ。

<sup>36</sup> 「第 51 回帝国議会衆議院予算委員会議録(速記)」第 17 回(1926 年 3 月 19 日)及び第 19 回(同月 22 日)に経緯と決定事項掲載あり。

<sup>37</sup> 『在伯日本移植民二十五周年記念鑑』の「記念」の文字であるが、実際の本の背表紙と表紙、奥付けで表記が異なっている。筆者は香山が序言で使用している「記念」を尊重し、その漢字を使用した。「のろえすて」も同様である。

<sup>38</sup> 1931 年から 32 年末にかけて社告に掲載された巡回員には、中村健児、壺内一、伊丹金蔵、山下寛人、遠藤直治、岡村勇式、港盛吉、駒井重俊、矢田部亮一など。また、伊丹智津枝、中村豊子、安楽岡美津子など女性の採用も多かった。



例えばノロエステ沿線には、ノロエステ変更線の一部を含めて当時 53 の駅が設置されていることになっているが、すべての駅に『聖報』の取扱所が設定されていた訳ではなく 12 駅のみであった<sup>39</sup>。これは駅とは名ばかりで、掘っ立て小屋程度の駅舎やアカンパメントなどがあるだけで、日本人住民が存在しないか、『聖報』を必要とする日本人がいないことによるものと思われる(図 4-2)。地域住民と一体化して行動をすることができるのは、地方ならではの優位性であり特徴であったといえるのではないか。

これらの年鑑発刊は、他社に劣らない成果として評価されるべきものである。また、1933 年 6 月刊行の『時報』社の『ブラジル年鑑』とともに、戦前期日本移植民の生活状況を知るうえで、今日の移民史研究に不可欠な史料となっている。したがって、それらの著作・編集・発刊に関与してきた香山の功績は、歴史的に高く評価されるべきものであると考える。香山は『回想録』の中でこの 3 つの年鑑に共通した特徴として、調査者名欄に家長名だけでなく主婦の名前も表記したことだといっている。移植民生活での主婦の役割は、家長半々であるからだというのがその理由であった<sup>40</sup>。移民の苦労を妻のタニとともに体験してきた香山らしい着想であったといえよう。

## 第 4 節 聖州新報の発展と廃刊（サンパウロ時代：1935－1941 年）

### 4-1 サンパウロ市への進出

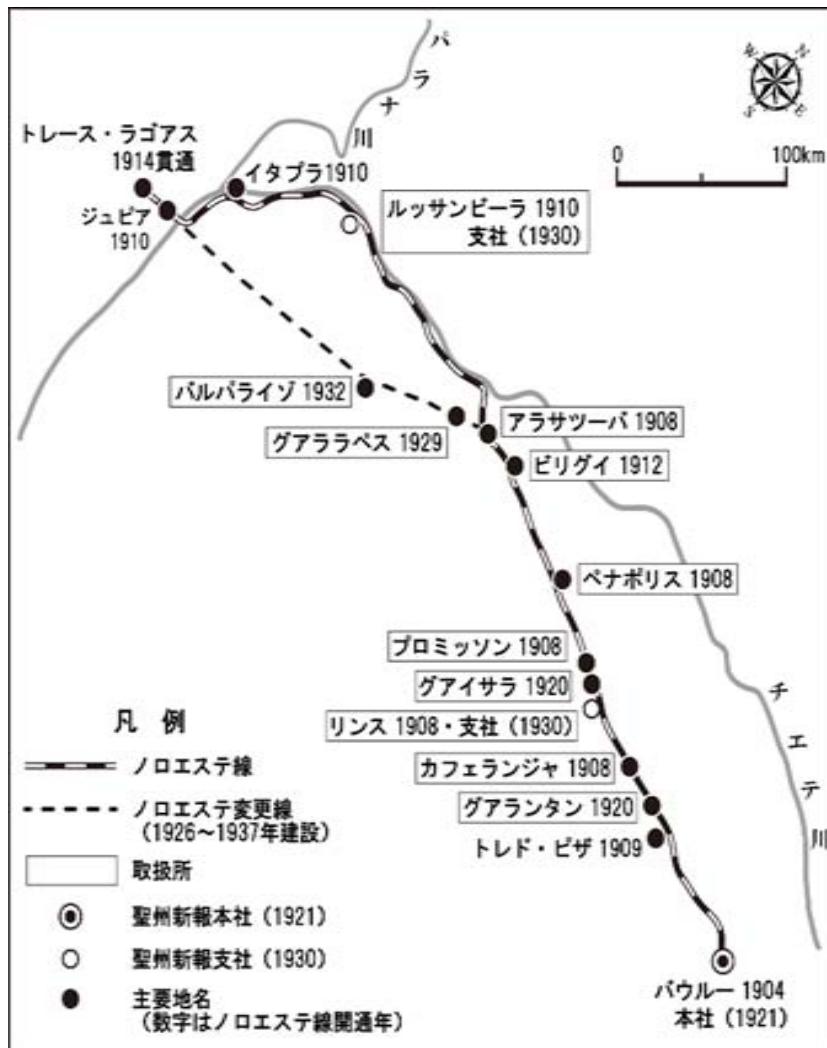
1930 年 10 月、ブラジルにジェツリオ・ヴァルガス革命が勃発した。11 月にヴァルガスが政権を掌握すると、多民族による国家を統合するために 1934 年 7 月新憲法を發布し、さらに 1937 年独裁政権を樹立し、国民国家の建設を目指した新国家体制（Estado Novo）を打ち出した<sup>41</sup>。1930 年当時の日本国内は、世界大恐慌の波及による経済困難

<sup>39</sup> 「社告」『聖報』1934 年 9 月 28 日第 897 号によれば、パウルーを含むノロエステ線 12 駅以外では、ソロカバナ線 5 駅（ブ・ベンセスラウ、セルケーラ・セザール、モンソン、アヴァレー、バストス）、パウリスタ延長線 4 駅（ベラクルース、ボンペイア、ソアルチーナ、マリリア）であった。

<sup>40</sup> ジェニー脇坂、清 A912 頁。香山、前掲書 6）、370 頁。

<sup>41</sup> 亜米利加局「4 新憲法ノ特徴」『第 67 会帝国議会説明参考資料』、帝国議会関

図 4-2 ノロエステ鉄道沿線聖州新報取扱所分布図  
(1934 年)



CAIO SHIOMI. *DAITANNA*. (2007 年)63 頁より作成

状態に陥っており、日本国政府はブラジル移民に対し、渡航費補助以外に、満 12 歳以上には渡航準備金(50 円)をも支給するなどの対応策を打ち出し、ブラジル移民は年間 2 万人を超す勢いだった。ノロエステ地方には日本人移民の 30% 弱が集住していた。

この流れとブラジル政府との諸政策は逆行するものであった。1934 年、ブラジル政府は「1934 年憲法」を公布し、同憲法第 151 条補頁第 6 号により「外国移民二分制限法」を公布した<sup>42</sup>。過去 50 年間の

係雑件説明資料関係第 1 巻(調書)(通商局、1934 年)、325 頁。A. 5. 2. 0-1-3。

<sup>42</sup> 亜米利加局、前掲書 40)、368-369 頁。

移民数の二分、すなわち 2%に入国を制限するもので、日本の場合、過去の入国数 124,457 人により、その割り当て数は 2,489 人と算出された。同憲法第 151 条補項第 7 号で「移民の集中の禁止」も公布した。移民の集中はブラジルのいずれの地点においてもこれを禁ず、というものであった。

一般に、日本人移民の減少を「外国移民二分制限法」に限定する解釈が多いが、香山は同憲法第 151 条補項第 7 号の方が、すでにブラジルに生活基盤があった一世を拘束すると解釈した。ノロエステ地方の日本語新聞を購読する一世の移動が制限されれば、新聞需要の減少を招く事態に繋がる一大事だというのだ。香山のノロエステ地方からサンパウロへの進出の背景には、このような日本とブラジル双方の動きを察知した香山の的確な判断があったと考えるべきであろう。

香山は、これらの察知事項を伏せて、バウルーでの業務上の地理的・物理的マイナス条件を指摘し移転決意を公言した。このような行為に香山の知見の広さを見る。すなわち、需要増大に対応できる紙屋や写真版製作工場のないこと、印刷関連部品類のサンパウロへの調達上の時間的ロスにより、非常事態に対応できないこと、さらに移民関連ニュースもノロエステ・パウリスタ・ソロカバナ三線の生活情報を取材していただだけでは、在ブラジル日本人全般からの購読者獲得は難しいこと。時代のニーズに合わせるにはラジオの利用は不可欠だが、その修理屋の不在は情報収集に不便をきたす。日本国内の情報量が増大する現実を受け止め、在ブラジル日本人の発展とともに新聞も日刊紙にまで変換して行かねばならないなどを掲げたにとどまったのであった。

1934 年 11 月 13 日、『聖報』はサンパウロ市へ進出した<sup>43</sup>。社屋はタバチンゲーラ街 96 番地。新聞名も Notícias de São Paulo と改名。週 2 回発行とし、創刊第 905 号目がサンパウロ発刊第 1 号となった。この本社移転を案内した同年 10 月 23 日の『聖報』第 904 号には、時代の趨勢を認識し、日本国内の情報量増大に伴う週 2 回発行の必然性、

---

<sup>43</sup> 人文研『日本移民・日系社会史年表』（サンパウロ人文科学研究所、1996 年）、78 頁。香山、前掲書 7）、379 頁。ジェニー脇坂、前掲書 23）、952-956 頁。

新聞条例による行政区移転時の新聞名の新たな登記、社長をブラジル人としなければならない理由、移転に伴う購読料金及び広告料金変更なしなど詳細が記載されている<sup>44</sup>。この社屋には営業認可が下りなかったため、1 カ月後、アセンブレア街 16 番地に移転している。サンパウロ市の中心街で、セ教会やブリガデイロ・ルイス・アントニオ通りのサンパウロ総領事館にも近接していた<sup>45</sup>。

1936 年末、香山の長男夫陽が日本に留学した。夫陽は早稲田国際学院に入学し、帰米二世を中心とした世界各地からの日系留学生とともに学んでいた<sup>46</sup>。その留学生生活を『聖報』紙上に「祖国便り」として掲載したことも、在ブラジル日本人に祖国の様子を知らせる貴重な紙面となり、購読者確保の一因となっていたようだ。「祖国便り」には、日本の親族や学院生活の様子などを丁寧な日本語で書き送っていた。また、作文が上手になり、学芸会では日本語でスピーチするほどになったが、英語が苦手だったため友達ができないとその淋しさも綴っていた<sup>47</sup>。香山も父兄として早稲田国際学院校舎建築費寄付金を 2 回にわたり、各回 10 円ずつ寄付していた<sup>48</sup>。夫陽が一番ショックを受けたのは、1937 年 12 月末に父・香山六郎の後見人であった土屋員安叔父の死と、1938 年 1 月、入隊を希望していたにもかかわらず、再検査の結果、脚気が原因で不合格となったことであった<sup>49</sup>。その悔しさとブラジルの両親および関係者への申し訳なさを切々と綴っている紙面は、多くの『聖報』購読者の心を揺るがす記事だったのであろう。入隊不合格により学院近くに下宿するため、費用がかさむがよろしく願いますといった文面もあることから、早稲田国際学院終了後、

---

<sup>44</sup> 「社告」『聖報』1934 年 10 月 23 日第 904 号第 3 面。

<sup>45</sup> 「社告」『聖報』1934 年 12 月 11 日第 912 号第 3 面。詳細な地図入りの社告である。

<sup>46</sup> 早稲田国際学院は、1908 年早稲田大学創始者・大隈重信の依頼により、アメリカ・バプテスト教会の宣教師ベニンホフが開設したキリスト教主義学生寮「友愛学舎」を創始とする。1935 年、早稲田大学と協力して国際学院を開設した。1937 年修了生学籍簿第 36 番目に、ブラジル・サンパウロ市アセンブレア街・香山夫陽の名前が掲載されている。ブラジルからは夫陽一人だった。

<sup>47</sup> 「祖国日本から：在東京早稲田国際学院 夫陽」『聖報』1937 年 3 月 30 日第 1219 号第 4 面。

<sup>48</sup> 早稲田国際学院新校舎建築資金寄付金は、1937 年 12 月 10 日と 1938 年 3 月 5 日発行の学院便りに掲載されている。

<sup>49</sup> 「祖国便り」『聖報』1938 年 3 月 8 日第 1435 号第 4 面および 3 月 15 日第 1441 号第 4 面。

夫陽がアルバイトをしながら生活していた様子がわかる。1938 年 12 月 26 日、突然召集を受け、熊本第 6 師団歩兵連隊へ入隊した夫陽が、その様子を知らせると『聖報』には、「日本男児此処に在り、挙る二世の意気、香山夫陽君勇んで応召」のタイトルで大々的に取り上げていた<sup>50</sup>。夫陽は除隊後東京に戻り、ブラジルコーヒー宣伝本部に勤務する傍ら、「東京ラジオ」の南米向け放送のアナウンサーとなった。これを契機に『聖報』社は母国ニュースを一手に報道するラジオ部を設置した。東京ラジオ通信を開始すると購読者数は 1 万人と倍増した。『聖報』はバウルー生まれの田舎新聞を自負しつつも、都会派新聞へと自らの力で脱皮しつつあったのである。

1937 年 7 月、外国語・新聞雑誌発行取締り令が出されたが、『聖報』は同年 8 月 23 日第 1279 号から日刊紙(Um diário)へ移行している。この移行は中央紙 2 紙に先駆けて実施されており、東京ラジオ通信以来、『聖報』の情報伝達量の多さと、その俊敏なる伝達のための工夫と努力が具現化されたとみることができる。

日本語通信を開始したことで『聖報』は新鮮さを加味し、購読者を増加させたので、『日伯』は『聖報』への商売怨恨からか、『聖報』社編集部の切り崩し作戦を始めた。すなわち、編集長であった内山勝男と活字部の田中三郎が『日伯』に引き抜かれてしまったのだ。彼らは『日伯』で相当優遇されたようだったが、程なく二人とも解雇されていた。この『日伯』による『聖報』切り崩し作戦は三浦らしい策略であったが、香山はそのことを何ら問題にしなかった<sup>51</sup>。これらの点に、香山の新聞人として生きようとする信念の強さを見る。

#### 4-2 新聞条例への対応：二世社長とポルトガル語版の挿入

1931 年 8 月、ブラジル政府は 1 月に公布した失業対策としての移民制限令に続いて「改正新内国人雇用令」を公布した。個人、企業団、組合、会社は雇用従業員中職分の如何を問わず、3 分の 2 のブラジル

<sup>50</sup> 「日本男児此処に在り、挙る二世の意気、香山夫陽君勇んで応召」『聖報』1938 年 12 月 28 日第 1678 号第 3 面。

<sup>51</sup> 香山、前掲書 6)、395-396 頁。ジェニー脇坂、清 A1036-1038 頁。

人を使用する義務があるといった内容のもので、ブラジル人労働者の優先的保護を表明した労働政策であった<sup>52</sup>。さらに第 67 会帝国議会説明参考資料(以後、『議会調書』)1934 年によれば、二世社長擁立の根拠となった新憲法 131 条には以下のようなことが記されていた。

新憲法ハ（略）、（三）無記名株券株式会社及外国人ハ政治的若ハ報道的新聞業ヲ営ムコトヲ得ス、此ノ種法人及外国人ハ右事業ヲ経営スル株式会社ノ株主タルコトヲ得ス、又政治的若ハ報道的新聞ノ主要責任及智的事務的統制ハ生来ノ伯國人ノミ之ニ当ルコトヲ得（略）。右ノ中最モ重要ナルハ自由職業、新聞業及外国語教育ニ関スル規定ナルガ其本邦人ニ及ボス影響ノ範圍ヲ考察スルニ概要左ノ如シ（略）。（二）新聞業規定の結果伯国ニ於ケル新聞社ノ社長、主筆、編集主任等ハ生来ノ伯國人タルコトヲ要ス<sup>53</sup>

外国人による政治的・報道的新聞業営業の禁止、その企業の責任者や事務統制者、さらに新聞社社長、主筆、編集主任などは、生粋のブラジル人でなければならないことを規定したものであった。香山は法律遵守の建前から、サンパウロに移転した時点で、社長を養女橋口静子の夫のブラジル人ダリオ・P・アルメイダに変更し、香山は発行人となった。同年 11 月 13 日の『聖報』サンパウロ第 1 号紙(通算 905 号)には「NOTÍCIAS DE SÃO PAULO, Director:Dario P Almeida, Proprietário:Rocro Kowyama」と記載されている。しかし、ダリオはこの仕事に興味を示さず、1939 年香山の長女・露子にその席を譲ってしまった<sup>54</sup>。露子は廃刊になるまでその職を全うした。移転当時の『聖報』社員は 23 人にも増加しており、『聖報』社の隆盛期であっ

<sup>52</sup> 「3 分の 2 は伯国人を使え」『日伯』1930 年 12 月 18 日第 702 号第 2 面。移民 70 周年編纂委員会『ブラジル日本移民 70 年史』（ブラジル日本文化協会、1980 年）、73-77 頁。

<sup>53</sup> 亜米利加局『第 67 回議会調書』（外務省、1934 年）、325 頁。新憲法 131 条「二世社長の擁立」A. 5. 2. 0. 1-3。

<sup>54</sup> 『聖報』1939 年 9 月 25 日第 1959 号第 1 面には、Diretora:Selina Tsuyuko Kowyama とある。

たといえよう<sup>55</sup>。

ポルトガル語の挿入に関して、ヴァルガス政権下での新国家体制建設は進み、日本人移民たちには次第に生活しにくくなっていた中で、『聖報』にも徐々にポルトガル語表記の記事が散見されるようになってきた。ブラジル国内では、特に外字新聞（ポルトガル語以外の言語で書かれた新聞）に対するポルトガル語記事の掲載の厳しい糾弾が始まっていた<sup>56</sup>。その結果『聖報』も 1939 年 9 月 21 日第 1957 号から、第 1 面の 6 分の 1 程度がポルトガル語の記事欄へと変更された。1941 年 1 月からは第 1 面は完全にポルトガル語版となり、第 2 面が従来の第 1 面の機能を持つようになった。この体制は『聖報』廃刊時まで変わらなかった。

#### 4-3 廃刊の決断

1937 年 7 月 18 日、ブラジル新体制が外国語（日本語）学校の禁止や、日本語新聞・雑誌発行禁止令を打ち出した頃の日本人移民社会では、その規制をさほど深刻には受け止めておらず、『日伯』・『時報』・『聖報』の主要日本語新聞は、むしろ日刊紙への転換を進めていたほどだった。同年 7 月 7 日、日支事変が始まったため、その詳細を購読者に届けるには週 2 回発行では補えなかったのだ。特にラジオニュースを新聞情報に取り込んでいた『聖報』は、同年 8 月 23 日、中央紙 3 社の中でいち早く、しかも突然、日刊紙へ移行した（第 1279 号）。『時報』も同日、日刊紙へ移行している（第 1376 号）。

この突然の日刊紙移行も、新聞各社の購読者獲得競争戦術の一つであった。『聖報』の場合、1932 年当時から常にリオデジャネイロ通信（リオ通信）を掲載しており、首府情報獲得手法は他紙より優れていたようだ。『日伯』は他の 2 社に出遅れて同年 8 月 25 日（第 1187 号）から日刊紙へ転換した。『聖報』がいち早く日刊紙に転じたことから

<sup>55</sup> 香山、前掲書 6)、383 頁。ジェニー脇坂、清 A970-972 頁に、リベルダーデ区アセンブレア街 363 番地、『聖報』社前での記念写真の掲載あり。

<sup>56</sup> 外務省「桑島大使より有田外務大臣宛、第 133 号」1939 年 7 月 20 日付、『各国に於ける新聞雑誌出版物取締関係雑件伯国の部』単巻 A. 3. 5. 0. 6-16。以後、「新聞取締 関係」と略記す。

も、サンパウロ進出を果たして更に発展を遂げていた『聖報』の市場戦略が読み取れる。また、ヴァルガス新体制下で、むしろ日本語新聞は当時の日支事変の戦況など多くの紙面を割いて報道するなど、日本の情勢を伝達しなければならない使命があったため、新聞社間の熾烈な情報作戦が展開されていたのだった。

一方、ブラジル政府は枢軸国新聞の検閲、主要記事へのブラジル語添付義務、ブラジル語欄の併設指示など次々と規制を強めて日本語新聞を廃刊へと追い詰めていった<sup>57</sup>。『聖報』はこれに抵抗しようとしたのか、『聖報』発行人は露子であったはずが香山六郎と書き換えられ、新聞社住所欄は消されたりしていた。また 1939 年 9 月 25 日第 1959 号から突然、住所欄にコンデ・デ・サンジョアキン街 93 番地と表記され、発行人は再び香山露子(Celina Kowyama)と書き換えられたりしていた。ヴァルガス政権下での外国語新聞・雑誌への規制策が厳しくなる中で、新聞の継続を願うが故の混乱であったと判断できよう。1941 年 5 月、遂にブラジル政府は正式にブラジル国内の外国語新聞・雑誌等の発行禁止令を公布した<sup>58</sup>。

この間、外務省と在リオデジャネイロ日本大使館の間では、移民の混乱を想定し、ポルトガル語に日本語訳を付することなどを掲げた廃刊延期願をヴァルガス大統領に請願するなどの善後策を講じていた。一時は枢軸国側の要請を受け入れた形で同年度末中の延期も考慮されていたが、30 日間の延期に留まってしまった<sup>59</sup>。そこで外務省は、関係新聞社に対して 8 月 31 日以降ポルトガル語版が発行できるよう準備を進めることを促していたが、日本語版廃止以後の在留民に対する報道方法については研究中としただけに留まっていた。この外務省と在リオデジャネイロ日本大使館の対応に対し、アメリカ系新聞「ザ・ニュース」は、「今回の措置によりもっとも困るのはポルトガル語を解せぬ日本移民であろう」と皮肉った見方をしていた<sup>60</sup>。

<sup>57</sup> 外務省「新聞取締関係」、1939 年 7 月 20 日付第 133 号。A. 3. 5. 0. 6-16。

<sup>58</sup> 外務省、前掲書 57)、1941 年 5 月 30 日付第 178-1 号。A. 3. 5. 0. 6-16。

<sup>59</sup> 外務省、前掲書 57)、1941 年 5 月 30 日付第 178-1 号。7 月 14 日付第 255 号。7 月 17 日付第 267 号。7 月 31 日付第 305 号。A. 3. 5. 0. 6-16。

<sup>60</sup> 外務省、前掲書 57)、1941 年 8 月 2 日第 314-2 号。A. 3. 5. 0. 6-16。



『聖報』は即刻この状況を報道することはなかった。紙面は欧州戦線やアメリカと日本の緊迫状態の報道で溢れていた。さらにブラジル在住日本人有志たちによる「母国出征軍人慰問団」なるものが結成され、5カ年の月掛献金を募っていたほどであった<sup>61</sup>。このことから、ブラジル日本人社会には迫りくる緊迫状況を何ら疑う気配はなかったといえよう。しかし香山は「在伯日本人の行末」と題した『聖報』記事の中で、移民開始から30年以上経過したブラジル日本人社会に存在したブラジル社会への同化・不同化に触れ、「ブラジル社会に不同化の移植民は、東亜民族共栄圏内に環住すべきである。」と論じた<sup>62</sup>。メディアとしての公正報道をしたつもりなのか、香山の本音なのか、あるいはブラジルの日本人排斥論へのポーズであったのかは疑問であるが、香山はヴァルガス独裁政権下の異邦人としての日本移民に対し、将来的な危機感を暗示していた。

事実、日本語新聞はすべて1941年中に廃刊もしくは休刊を余儀なくされたのだった。『聖報』も同年7月30日「廃刊宣言」を掲載した<sup>63</sup>。香山は社屋と印刷機械類の整理にかかり、その売却益で社員に最後の給料を支払っている。『聖報』を最後まで支えてきた社員は、営業部の小林清松・八重子夫妻、活版部の大谷姉妹、編集部の園田新など14名に減っていた<sup>64</sup>。

1942年1月28日、日本とブラジルの国交断絶により、日本人移民を母国と結び付けてきた大使館、領事館、商社、移民会社などは閉鎖され、外交官や企業の駐在員他370余名が交換船で帰国してしまった<sup>65</sup>。ブラジル国内に日本人社会を構築してきた移民は、ブラジルの敵性外国人として残されたのである。棄民意識（キスト）はここから増

<sup>61</sup> 「母国出征軍人慰問団」『聖報』1941年7月12日第2231号。

<sup>62</sup> 「在伯日本人の行末 公孫樹」『聖報』1941年7月12日第2231号。

<sup>63</sup> 「廃刊の辞 香山六郎」『聖報』1941年7月30日第2236号。『ブラジル日本移民70年史』77ページに写真掲載あり。

<sup>64</sup> 香山、前掲書6)、698頁。ジェニー脇坂、清A1045-B-1046頁。

なお、「1045-B」の表記は刊行委員会が書き直した「清書原稿B」を指す。

<sup>65</sup> 日本ブラジル交流史編集委員会『日本ブラジル交流史』（日本ブラジル中央協会、1995年）、70頁。

幅されていったといわれる<sup>66</sup>。

1945 年 8 月 15 日の終戦宣言のラジオ放送を聞いた翌日、香山は今まで発行してきた新聞すべてを、息子の夫陽と敏信に手伝わせて、自宅裏庭で焼却処分してしまっている<sup>67</sup>。貴重な歴史資料は、いとも簡単に灰燼に帰してしまったのである。

## 第 5 節 戦後の香山の動向

### 5-1 著作への執念

本論は、戦前のノロエステ地方の日本語新聞をテーマとし、サブテーマに「香山六郎と聖州新報」を掲げているのだが、戦後の香山について少し述べることで、戦前の香山理解の深化に繋がるものとの発想から記述することとした。戦後、香山は昔の新聞仲間からの誘いを受けて、長男の夫陽とともに新設された新聞社を訪問している。しかし、釈然とせず結果的に新聞界には一切関与しなかった<sup>68</sup>。新聞再刊の資本を持たなかった香山は、新たな未来をツピー語研究や俳句などの文芸活動に生き甲斐を求めている。

研究欲旺盛な香山は、1949 年には仲間の支援を受けながら『移民四十年史』を、1951 年にはツピー語研究の集大成としての『ツピー語単語集』も発刊している<sup>69</sup>。しかし、このもっとも楽しく研究していた項目について、『回想録』には、わずか 1 ページしか記述されていない。『清書原稿 A』では 10 ページに亘って詳細に記述されており、『回想録』が香山の思いを十分に伝えていないのではないかとの疑問が残る。戦後の香山の活動を知る重要な手掛かりは、この時点で『回想録』から抹消されてしまっていたのだ。

香山は、1953 年 4 月 28 日頃から両眼を患い治療を受けたが、逆に症状を悪化させ両眼とも盲目となってしまった。さらに治療ミスによ

---

<sup>66</sup> キストは、ヴァルガス政権の新体制から発生したと云われている。

<sup>67</sup> 香山、前掲書 6)、398 頁。ジェニー脇坂、清 A1047 頁。

<sup>68</sup> ジェニー脇坂「パウリスタ新聞新築落成」『清書原稿 A』(1962 年)、1567-1569 頁。

<sup>69</sup> ジェニー脇坂「ツピー語の研究」『清書原稿 A』(1962 年)、1553-1564 頁。香山、前掲書 6)、434-435 頁。

って聴力も失い盲聾啞者となってしまった<sup>70</sup>。

1956 年、70 歳を迎えた香山は、笠戸丸出帆 48 年目の記念日に『回想録』の執筆を開始している。執筆にあたって香山は毎日規則正しい作業日程を立てていた。ある日の香山の作業予定を残存する筆跡コピーから確認すると、「今日のプログラムマ 十二月十一日」とあり、3 つの作業内容が箇条書きされているが、定規をあてて書いた字でといわれても、一般人にはほとんど読めない筆跡である。そこには、たどたどしくもキチンと表記しようとしていた香山の意志が表出していた<sup>71</sup>。これを関係者たちは「香山象形文字」と呼んでいたようだ。この文字を解読できたのは次女のジェニー秋子と 1971 年 7 月以来、香山の秘書を務めていた桜庭マス江以外ほとんどいなかったという。

盲目になっても書き続けたのが、今日の『回想録』の原本である。香山にとって『回想録』は香山自身の 50 年史である。香山は 50 年史を書く際「移民史は労働史だ。真の闘争史だ。俺はありのままの歴史を、自然物の闘争史を書こう。」と決心している<sup>72</sup>。凄まじいばかりの闘争心を掻き立てていたことが十分に伝わってくる名言である。その意味で香山は後世にまで貴重な資料を残した初期移民知識人であったといえよう。

1968 年、叙勲対象者となったが自らの意志で辞退している。笠戸丸前後の移民で叙勲を辞退したのは「移民の草分け」と称された鈴木貞次郎と香山の二人だけである。政治的形式に囚われない、自由な意志で執筆活動を続け生き続けた香山らしい決断であった。

## 5-2 香山とその家族

『清書原稿 A』で 50 ページほど削減されていたのは、家族や友人たちとの思い出や文芸活動の部分であった。『回想録』では、ブラジル時代の香山と日本の親族との通信は、幼少時の後見人であった土屋員

---

<sup>70</sup> ジェニー脇坂「体調の崩れ」『清書原稿 A』(1962 年)、1501-1505 頁が、香山、前掲書 6)、435-43 頁では「盲目」というタイトルに書き直されている。

<sup>71</sup> 香山、前掲書 6)、表見返しの挿入写真に「筆者の筆跡」あり。

<sup>72</sup> ジェニー脇坂、清 A1392-1395 頁。香山、前掲書 6)、434 頁。

安叔父がロンドンからあてた手紙の一文しか記述されていない<sup>73</sup>。しかし、『清書原稿A』には、米姉と俊雄兄が戦後、台湾から帰国し、米姉が82歳の時、癌で死亡したこと、肺結核を患う兄からの依頼で、日本では購入できない高価なアメリカ製結核治療薬を送っていたが、その兄も79歳で死亡したことなどが詳述されていたことも判明した。夫陽の日本留学に対しても、『聖報』の「祖国便り」を通して、親族との交流が適切になされていたことも判明した。香山の日本脱出原因が徴兵忌避であったことから、結果的に香山は一度も帰国することはなかったが、1964年の東京オリンピックの時には一時帰国にこだわっていた。逆にそのこだわりが、日本との通信を欠かさなかった姿勢に繋がっていたのである。日本人としてのアイデンティティを持ち続けようとした香山の心理が読み取れる事例である。

香山はひたすら家族を愛し、妻タニの前夫である故橋口重正との3人の子供たちも養子として育て上げ、ブラジルでの生活基盤を堅固にする努力を惜しまなかった。1958年現在、妻タニの前夫との子供3人を含めて、子供7人と孫19人曾孫2人というグランデ・ファミリー (grande família:大家族) を構成していた (表5-2)<sup>74</sup>。

香山はブラジル移住当初の一渡航者気分からブラジルの大地に完全に根を張り、子孫を繁栄させた移民に変容していた。このことは香山が如何に人々との関わりに恵まれ、その関わりを大切に繋ぎ通して、ブラジル社会に根付いた移民であったかを知る証となろう。

香山は社員の人格も尊重していた人物と捉えられる。社員との陰悪なイメージは『回想録』を読む限りにおいては殆ど表出しない。「来る者は拒まず去る者は追わず」の精神を心得ていたのだ。三浦が香山の『聖報』発刊に当って「チョウチョトンボも鳥のうち」と徹底的に揶揄した時も、香山がサンパウロに進出してきた時の『聖報』壊滅作戦で社員2人を引き抜いた時も、集金員の伊丹金蔵が、集金作業の傍ら三浦の『日伯』社から著書を出版していたことなどにも激怒しなかったところに、常に社員を信頼し社員との一体感を共有する姿勢を崩

<sup>73</sup> 香山、前掲書6)、282頁。ジェニー脇坂、清A299頁。

<sup>74</sup> ジェニー脇坂「吾兄等の成長」『清書原稿A』(1976.年)、1007-1114頁。

さなかった香山の信念を窺い知ることができる。

## 第6節 小括

香山が「一新聞人＝情報提供者」としての意志を固め、ノロエステ地方に『聖報』を起ち上げた理由の根底にあったものは、香山自身の「ひたむきさ」であったと纏める。如何なる誹謗嘲笑も心の奥に押し込め、新聞へひたむきに情熱を傾けていたことが、同じ辛苦を積んできた移民たちに共感と賛同を得て受け入れられていたからだ。地方紙としての特徴を持たせるために、俚謡など移民にとって身近な生活の歌を文芸欄に掲載し、八五低資問題では、地域住民と一体化して行動できる、ノロエステ地方人の結束力をアピールしていた。この移民の目線で移民に情報を提供しようとする香山の姿勢が、エスニック・マイノリティとしてブラジル社会に生き続ける人々に受け入れられたことは、香山の本望ではなかったか。

サンパウロに進出する際は、社会の趨勢を鋭く捉え、本音を見せずに達成していた。戦後、新聞を再刊しなかった理由は意外に簡明で、将来を見据えた楽しい人生計画をクリアしたかったことにあったことも判明した。

香山をそこまで駆り立ててきた背景には、家族の存在の重みが感じられる。家族愛、社員愛、同胞愛の存在とその全てに通ずるものは、清谷が発したように「青年のようなひたむきさ」であったといえる。1973年11月2日、香山の妻タニが91歳で冥界入りし、1976年4月6日、香山も90歳で死没した。その香山の告別式に、ジェニー・秋子・脇坂の夫の脇坂勝則が「あなたはいつも頑ななまでに移民であることに固執しました<sup>75</sup>。」と弔辞を述べているが、この一文にこそ香山の人間性が高く評価され凝縮されているといっても過言ではない。しかし、『回想録』には『清書原稿A』の肝心な家族愛や同胞愛の部分が大幅に削除されていたことが明確となり、『回想録』は香山の闘

---

<sup>75</sup> 香山、前掲書6)、まえがきI頁。

表 4-2 香山六郎の家族（1958 年、笠戸丸移民 50 周年記念当時）

| 番号 | 親子関係        | 子・配偶者       | 孫・配偶者       | 誕生        | その他(曾孫・一部戦後状況)   |
|----|-------------|-------------|-------------|-----------|--|
| 1  | 戸主：<br>香山六郎 |             |             | 1886/1/5  | 1913年11月結婚、1976年4月6日死亡(享年90歳)  |
| 2  | 妻： タニ       |             |             | 1882/7/11 | 1913年11月再婚、1973年11月2日死亡(享年91歳)   |
| 3  | 養子1         | 敏信          |             | 1903/8/2  | 熊本県天草郡深海村生   |
| 4  | 配偶者         | 鶴子          |             |           | 日本人  |
| 5  | 孫(女)1       |             | ラウラ・一枝      |           |  |
| 6  | 孫(男)1       |             | 敏雄          |           |  |
| 7  | 孫(男)2       |             | 敏政          | 1942/0/0  | 双生児1   |
| 8  | 孫(男)2       |             | 敏幸          | 1942/0/0  | 双生児2   |
| 9  | 孫(男)3       |             | 智俊          |           |  |
| 10 | 養女1         | ローザ・芳子      |             | #####     | ノロエステ線サンジョアキン植民地生  |
| 11 | 配偶者         | パーシー・W・ジョンズ |             |           | イギリス人  |
| 12 | 孫(男)1       |             | W・J・重政      |           | 曾孫(男：W・J・3世)あり   |
| 13 | 配偶者         |             | ノルマ         |           | イタリア系ブラジル人   |
| 14 | 孫(女)1       |             | ネイリー・栄子     |           |  |
| 15 | 孫(女)2       |             | ドロシー・恵子     |           |  |
| 16 | 養女2         | フランシスカ・静子   |             | 1911/1/21 | リオ・デ・ジャネイロ州イグアッペ植民地生   |
| 17 | 配偶者         | ダリオ・P・アルメイダ |             |           | ブラジル人  |
| 18 | 孫(男)1       |             | ドルバル・敏信     |           |  |
| 19 | 孫(男)2       |             | ジゼウ         |           |  |
| 20 | 孫(女)1       |             | エレナ・ミドリ     |           | 曾孫(男：セジオ2世)あり  |
| 21 | 配偶者         |             | セジオ         |           | スペイン人(カナリア島)   |
| 22 | 長女          | セリーナ・露子     |             | 1914/1/2  | サンパウロ市生、1944年結婚、土曜会員。  |
| 23 | 配偶者         | 尾関興之助       |             | 1912/0/0  | 日本人1925年6月、しかご丸、土曜会員、コロナ文学貢献者  |
| 24 | 孫(女)1       |             | 稲子          | 1942/0/0  |  |
| 25 | 孫(男)1       |             | ハジメ         |           |  |
| 26 | 長男          | 夫陽          |             | 1917/4/20 | ソロカバナ線モンソン移住地生、1939年結婚、土曜会員、1998年死亡(享年81歳)。  |
| 27 | 配偶者         | 実子          |             |           | 日本人(台湾生)、旧姓富田  |
| 28 | 次男          | エイトール       |             | #####     | ノロエステ線エイトールレグール植民地生、1943年結婚  |
| 29 | 配偶者         | 季子          |             |           | 日本人(バストス移住地)   |
| 30 | 孫(女)1       |             | アリセ・美保      | 1944/0/0  |  |
| 31 | 孫(女)2       |             | モエマ・アケミ     |           |  |
| 32 | 孫(男)1       |             | エイトール・J・以和男 |           |  |
| 33 | 孫(女)3       |             | エレニーニャ      |           |  |
| 34 | 孫(男)2       |             | 功           |           |  |
| 35 | 配偶者         |             | 日系伯人女性      |           |  |
| 36 | 次女          | ジェニー・秋子     |             | #####     | ノロエステ線パウルー生、1955年5月20日結婚(29歳)、サンパウロ大学文学部教授、土曜会員  |
| 37 | 配偶者         | 脇坂勝則        |             | 1923/0/0  | 広島県生、1927年父母と共に移住、ブラジルに帰化、コチア組合、土曜会員、君塚慎在伯日本大使秘書、人文研理事長(1996-1999)。2017年11月15日死亡(享年94歳)。 |
| 38 | 孫(女)1       |             | ターニャ        | 1956/0/0  | サンパウロ生まれ、土木建築技師  |

香山六郎関係戸籍謄本および香山『回想録』、ジェニー脇坂『清書原稿 A』、ジェニー脇坂へのインタビューと事後確認により作成。誕生月日不明は 0/0 で表記。

争心を持って書き終えた労働史としての自伝の価値を減殺した作品となってしまったと『清書原稿A』を分析した結果、言わざるを得ない。2014年の拙稿で投げかけていた疑問、すなわち、『回想録』の自伝としての限界を証明してしまったといえよう。今回追究できなかった戦後の香山の文化的活動に関しては、今後の研究課題としたい。なお、香山六郎・ブラジル日本移民関係年表を纏めとして作成し、巻末資料とした（巻末資料参照）。

本稿を通して、他者とは異なる経験の持ち主であることを自己容認しつつ、戦前は独力で『聖報』発刊に邁進し、戦後はブラジルに骨を埋める覚悟で、文化活動と『四十年史』作成にひたむきに全精力を傾けていた移民知識人香山の、純粹で誠意ある新聞人としての真の姿を発見した。第1回ブラジル行移民船笠戸丸の自由渡航者であった香山六郎は、ノロエステ地方のブラジル日本語新聞発展の礎となった、ノロエステ地方のピオネイロ（Pioneiro：先駆者）であったのである。

## 第5章 ブラジル・ノロエステ地方における 日本語新聞の果たした役割

### 第1節 初期移民と日本語新聞

前章までの香山六郎の個人史的・時系列的分析から、香山六郎の出自とブラジル生活の概要を把握したが、香山の初期移民としてのノロエステ地方を基盤とした社会的言動がどのようなものであったかについては詳述していない。戦前期、彼のブラジルでの中心的活動は日本語新聞の刊行にあったから、香山自身の言動は日本語新聞に表象されていると考えてよいのではないか。その日本語新聞は、1910年代半ば以降、メディアとして日本人移民社会に浸透し始めていた。移民たちは、メディアとしての日本語新聞を媒介にして移民自身の意識を変革させ、日本人移民社会を変容させ、対ブラジル社会における日本人移民の評価を変化させてきた。言い換えるならば、日本語新聞が、ブラジル日本人移民社会を変容させてきた原動力の一つであったことを明らかにして行く必要がある。なぜなら、日本語放送など存在しなかった初期移民社会において、日本語新聞はもっとも重要なメディアの伝達手段であったばかりでなく、伝達機能としての俊敏性・正確性・公平性、隠蔽性をも兼ね備えることで、新たな人間の意識や移民社会を構築する際のメディアそのものであったからである<sup>1</sup>。

本章では、戦前期ブラジルサンパウロ州ノロエステ地方に焦点を当て、1920年代のノロエステ地方に活動拠点があった日本語新聞『聖州新報』を視座に置きつつ、1910年代よりサンパウロ市に拠点を置いた『日伯新聞』及び『伯刺西爾時報』などの特性を踏まえ、当時の主要日本語新聞が、情報をどのような立場で報道し、初期日本人移民社会にどのような影響をもたらし、その社会を変容させたかなどについて比較考察する。

<sup>1</sup> 日本からラジオ東京の南米向け日本語放送が開始されたのは1937年1月、ブラジル向けポルトガル語放送が開始されたのは1938年1月からである。

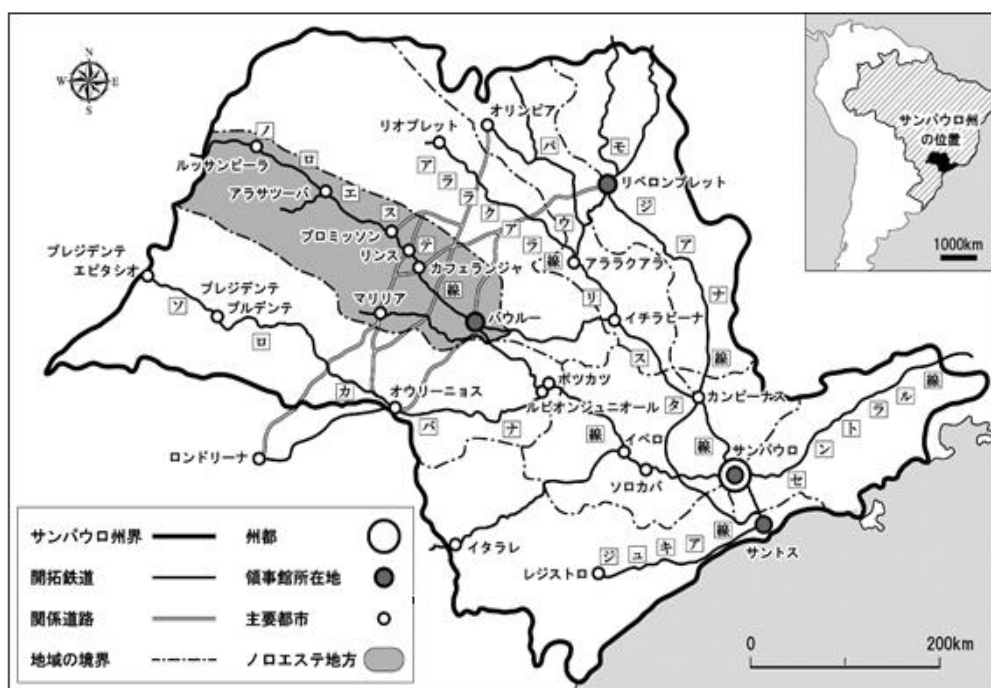


## 第2節 なぜノロエステなのか：日本人移民と日本語新聞創刊

日本の対蹠点に位置するブラジルでは、気候や土壌の相違、ブラジル国内情勢・言語・生活習慣の不理解、母国日本の情報欠如などが、初期移民の精神的不安材料そのものであった。ブラジル生活の不安解消に役立ったもっとも身近な媒体物は日本語新聞であった。

サンパウロ州における初期日本人移民は、コーヒー園労働者（コロノ）としての入植をその前提とした。コーヒー園は19世紀末以来、サンパウロ市を起点に主要鉄道沿線、すなわち、セントラル線沿線からモジアナ線、パウリスタ線、アララクワラ線、ノロエステ線さらにソロカバナ線沿線へと、時計とは逆回りにサンパウロ州内に拡散していた(図5-1)。

図5-1 サンパウロ州の開拓鉄道（1933年当時）



伯刺西爾時報社『ブラジル在留邦人分布図』（伯刺西爾時報社、1933年）、  
氏原彦馬『北パラナ英国シンジケートの土地図』（北パラナ土地会社、1932年）、  
GIS などより作成

1900年代初期のコロノとしての入植は、州東部から北部の主としてセントラル線からモジアナ線・パウリスタ線沿線が中心であった。1910年代半ば頃から州北西部のノロエステ線沿線に、コロノからの脱却を図り、

借地農や独立自営農を目指す人々が集住するようになった。彼らにとって移動地域やその周辺地域の土地情報や日本人の活動情報は重要となり、土地売買情報や移民生活関連情報を内包した記事の掲載された新聞を求めている。結果、いわゆる政論紙よりコミュニティ紙の性格の強い新聞が創刊されるようになった<sup>2</sup>。

ノロエステ地方とは、現在のバウルー以西、パラナ川河岸までの一帯を指すが、1910 年代のノロエステ地方では、バウルーからアラサツバに至る一帯が、日本人移民がコロノから借地農や独立自営農民に転換する過程で入植した地域となる。ノロエステ地方の玄関口であるバウルーは、サンパウロ市からおよそ 320 km 程北西に位置し、ノロエステ線、パウリスタ線（アルト・パウリスタ線）、ソロカバナ線などの開拓鉄道の発着地として栄えていた。すなわち当時のバウルーは、サンパウロ方面からノロエステ地方へ、さらにはパラナ川以西のマットグロッソ地方から国境を越えてボリビアへ、南部はパラナ州へ、北部は当時米作の盛んだったミナスジェライス州米作三角地帯へと通じる文化・経済活動の結節点（ハブ）だったのである。

1923 年の「通商公報」によれば、サンパウロ州における日本人農場主の保有農場は 1,167 地点で、全サンパウロの農場数 79,196 の 1.5%、農場面積は全サンパウロの農場面積 10,748,987ha の僅か 0.4%に過ぎない 43,239ha であった<sup>3</sup>。また、1923 年 7 月 6 日の『聖報』によれば、当時の在伯同胞総数約 4 万人、約 8,000 家族の 3 分の 1 が独立自営農民で、残りが借地農とコーヒー園労働者で折半していたという<sup>4</sup>。このことに関しては、外務省『別冊伯国之部 本邦移民ニ関スル外国官民ノ言動並新聞論調』の中で、ブラジルのエスタード紙に掲載された南アメリカ通商局長赤松談話として「日本移民総数ハ四万人ヲ超ヘサルベシ」とあることから根拠づ

<sup>2</sup> 日比嘉高「北米日系移民と日本書店-サンフランシスコを中心に-」立命館言語文化研究所編『立命館言語文化研究』20 巻 1 号(立命館大学、2008 年)、161 頁。

<sup>3</sup> 外務省通商局「外国人農場所有状況」『通商公報』第 41 巻第 1,050 号（不二出版、〔1923 年〕1997 年）、42 頁。

<sup>4</sup> 「雑信」『聖報』1923 年 7 月 6 日第 90 号 1 頁。

けられる<sup>5</sup>。すなわち、ブラジルに移民して 15 年足らずの日本人移民の農業状況は、農場数・農場面積ともに少なく、農業基盤が確立していたとは言い難かったのである。

1924 年当時のノロエステの日本人人口は、3,705 家族 19,188 人、地主 1,131 人であった<sup>6</sup>。さらに 1932 年 8 月当時のサンパウロ州内在伯邦人総人口は、121,148 人(男：64,552 人、女：56,596 人)で、うち、ノロエステ鉄道沿線人口は 48,372 人、ソロカバナ線沿線人口は 18,408 人、パウリスタ線沿線は 10,799 人などとなっており、ノロエステ鉄道沿線に在ブラジル日本人移民が最も多いことがわかる(表 5-1)。彼らの生業はノロエステ線ではコーヒー栽培、ソロカバナ線やパウリスタ沿線では棉花生産が他地域より卓越していた。着実に拡大発展しつつあったノロエステ地方の実態が新聞の需要を増大させ、日本語新聞各社による購読者獲得競争を高めた大きな要因となったのである。

表 5-1 サンパウロ州内在伯日本人概況 (1932 年)

| 鉄道線名   | 在伯邦人数(人) |        | 所有地面積  | コーヒー樹数     | 綿花生産高     |
|--------|----------|--------|--------|------------|-----------|
|        | 男        | 女      | アルケール  | 本          | アローバ      |
| ノロエステ線 | 25,731   | 22,641 | 44,956 | 36,085,850 | 199,443   |
| ソロカバナ線 | 9,805    | 8,603  | 23,021 | 11,073,336 | 749,792   |
| パウリスタ線 | 5,745    | 5,054  | 8,873  | 3,513,900  | 313,046   |
| その他    | 23,271   | 20,298 | 12,109 | 4,793,215  | 328,184   |
| 合計     | 64,552   | 56,596 | 99,421 | 55,466,300 | 1,620,465 |

聖州新報社編『在伯日本人移植民 25 周年記念鑑』同社発行、1933 年、各線別統計表より抜粋。所有地面積及び所有地珈琲樹数には、資本家その他団体の所有するものは含まない。

アルケール：サンパウロ州では 1 アルケール=2.4ha、

アローバ：サンパウロ州重量単位、1 アローバ=15 kg

<sup>5</sup> 南亜米利加通商局長赤松氏談話「南亜米利加諸国ト日本移民」『別冊伯国部 本邦移民ニ関スル外国官民ノ言動並新聞論調』移民課公第 21 号、外務省外交史料 3.8.2.285.5-5。(外交史料館、1992 年)。

<sup>6</sup> 香山六郎『のろえすて日本人年鑑』(聖州新報社、1928 年)。見開き「サンパウロ州北西部日本人発展統計表」より抜粋。

### 第3節 1910年－1930年代のサンパウロ州における主要日本語新聞

#### －『日伯新聞』、『伯刺西爾時報』と『聖州新報』－

##### 3-1 主要日本語新聞とその特性

ブラジルにおける日本語新聞の創刊は、1910年代半ばから始まったことはすでに述べている。コロノから独立自営農民への転換期に当たる1916年1月には、早くも星名謙一郎と鹿野久一郎の共同による週刊『南米』(O Nambei)が発刊された。発行地はサンパウロ市だったが、その内容は自己の所有するソロカバナ線奥地の土地分譲広告を主としたコミュニティ紙で、1918年12月までの刊行という短命だった。清谷(1998)によれば、現存するのは1918年1月12日(第103号)から1918年12月24日(第150号)までとある<sup>7</sup>。

週刊『南米』創刊以後、『日伯新聞』(1916年。以下、『日伯』)、『伯刺西爾時報』(1917年。以下、『時報』)、『聖州新報』(1921年。以下、『聖報』)など、次々と日本語新聞がサンパウロ市ばかりでなく地方都市に呱呱の声を上げた。『南米新報』(1928年)、『アリアンサ時報』(1930年)、『日本新聞』(1932年)、『ノロエステ民報』(1932年)などがそれで、『アリアンサ時報』と『ノロエステ民報』はノロエステ地方で創刊されている<sup>8</sup>。とはいえ、ノロエステ地方全域に購読者を獲得していた主要紙は『日伯』および『時報』、『聖報』の3紙であった。以下、この3紙についてその特性を述べることにする。

##### 3-1-1 『日伯新聞』

1916年8月31日の天長節を機に、金子保三郎による『日伯』が、元『ロッキー時報』記者であったアメリカからの再移住者・輪湖俊午郎との

<sup>7</sup> 清谷益次「新聞は移民にとっての何であったか」『人文研』第2巻(サンパウロ科学研究所、1998年)、3頁。

<sup>8</sup> 『アリアンサ時報』: 1930年4月9日創刊。創刊者は力行会アリアンサ支部宮尾厚。編集長は中川権三郎。1937年5月12日、ノロエステ線アラサツーバ市に移転し『日伯協同新聞』と改称。1945年5月の発行部数は5500部。『ノロエステ民報』: 1932年6月25日、ビリグイ中央青年連盟の機関紙としてビリグイで創刊。創刊当初は『ビリグイ民報』と称す。1933年末、同連盟の解散に伴って廃刊となり、1934年梶本明によって再刊され『ノロエステ民報』と改称。1938年、本社をリンスに移転。発行部数4500部。サンパウロ人文科学研究所『ブラジル日本移民・日系社会史年表』(同人文研、1996年)、66頁、そ70頁。

共同で創刊された<sup>9</sup>。しかし、輪湖は、金子との意見の相違から 1 年足らずで金子と別れ、『日伯』は日本人のブラジル定着を前提とした金子の考えを根底に置くようになった。「邦字新聞はブラジル邦人に目と口を与えるもの」をスローガンに、サンパウロ市エルネスト・デ・カストロ街に拠点を置き、領事館情報を中心とした移民生活を報道することにその特色を見出していたが、発刊当初は石版刷りであった<sup>10</sup>。社主の金子は体調不全と印刷技術向上に関わる資金造りのため一旦帰国したが、念願叶わず 1919 年 9 月、三浦鑿造（以下、三浦）にその全てを売却した<sup>11</sup>。三浦は政論紙的報道に長じており、日本政府判を強めたばかりでなく民衆の醜態を記述して、かえって良識ある民衆から反感を買うようなことを平然とやってのけていた。この公私を問わず歯に衣着せぬ政論、コミュニティ論は、移民の目線以上の視点を持ち、時に報道の公正性、信憑性が懸念されるような記事を掲載したため、購読者や記事内容該当者、特に母国関係者など公人からの疑心暗鬼を生じさせた。そのためか 1931 年と 1939 年の 2 回、日本政府及ブラジル政府からも国外追放の憂き目にあわされた。結果、再追放を機に『日伯』は廃刊となった。現存する最古の新聞は、1924 年 2 月 22 日(第 361 号)で、6 ページ 7 段組みの活字版であった。しかし、創刊時から 1919 年 11 月 14 日までは石版刷りで、その後ルビなし活字版となった。活字版になってからの購読料は年間 18 ミル前払い制で、他の 2 社に比べてやや割高であった。創刊当初は週 1 回金曜日に発刊していた。現存する最古紙の一面記事は、三浦による「同胞自決」と題した政論で、「日本移民が渡伯以来十有七年、移民政策の成績は上がらず。移民奨励など政府の眼中にはない。」との鋭い報道をしている(図 5-2)。

『日伯』の歯に衣着せぬ報道姿勢は、厳しく余裕のない生活を強いられていた移民たちや都市の知識人たちから支持され、日本移民 25 周年に当た

<sup>9</sup> 輪湖俊午郎（1890～1965）、長野県出身、1906 年、英文学研究のため渡米、『ロッキー時報』記者、1913 年、カリフォルニア州議会での排日法案通過に憤慨、ブラジルに再移住。1916 年、金子保三郎とともに『日伯新聞』を創刊したが意見の相違により退社、翌 1917 年、黒石 清作の『伯刺西爾時報』創刊時に編集長として参加し 1921 年退社。パウリスタ新聞『日本ブラジル交流人名事典』（五月書房、1996 年）、282 頁。

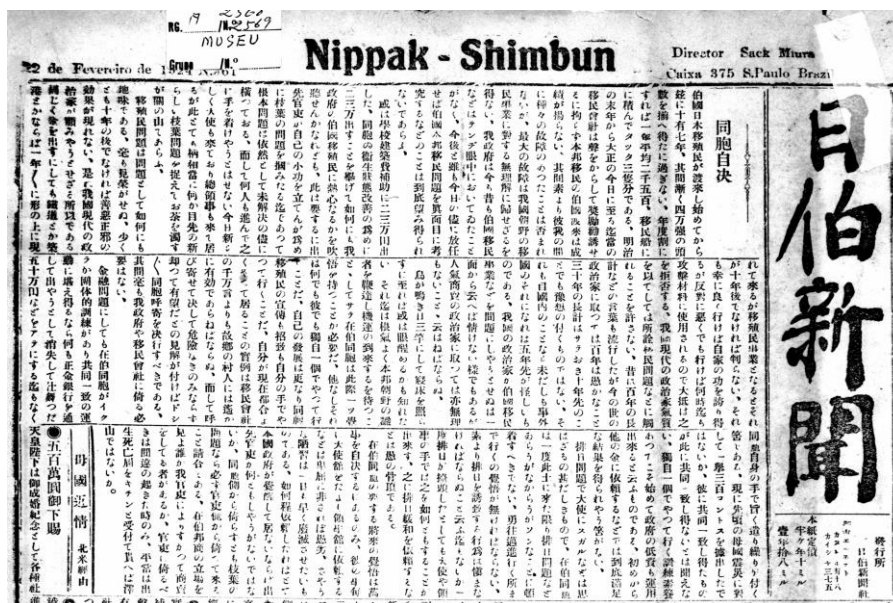
<sup>10</sup> 香山六郎『回想録』（サンパウロ人文科学研究所、1976 年）、320 頁。

<sup>11</sup> 戸籍上の姓名は三浦鑿蔵、通称三浦鑿。1882-1945 年、高知県出身、『日本ブラジル交流人名事典』（五月書房、1996 年）、235 頁。

る 1933 年当時の発行部数は約 7,000 部で、ノロエステ地方に多くの購読者を抱えていた。1936 年 4 月から週 3 回発行、1937 年 8 月には『聖報』や『時報』に一步遅れを取って日刊紙に移行している。1939 年 5 月 27 日第 1716 号をもって廃刊となったが、この背景には社主三浦の国外追放事件が関与していたことは誰もが認めるところとなっている。

図 5-2 現存する『日伯新聞』の最古版の「同胞自決」

1924 年 2 月 22 日付第 361 号第 1 面



日本人移植民社会が 20 年も経過し、二世の子供たちの教育や、出稼ぎ移民から定着移民へと、その思考の変換を遂げようとしていた移植民のポルトガル語への関心を高めるという観点から、1928 年 12 月 21 日(第 607 号)の 8 面に「NOTAS E INFORMAÇÕES」というポルトガル語の記事が登場するようになった。二世の子供の教育を考慮した『日伯子供新聞』も、1939 年 1 月 1 日から同年 5 月 27 日まで週 1 回、21 号まで発刊されている。

### 3-1-2 『伯刺西爾時報』

1917 年 8 月 31 日、伯刺西爾移民組合代理人・神谷忠雄の招聘により渡伯した黒石清作によって創刊された。神谷は、既に発刊されていた『週刊南米』や『日伯』による移民会社批判に危機感を感じ、北米新聞の記者だ

った黒石を移民教育部長として呼び寄せた。渡伯時には日本から最新の活字と印刷機械を持ち込み、印刷工を同行させていた。ブラジル日本移民の教養高揚と倫理道德的教育を目指していたので、移民の目線を超えた説得調の文体に特徴がある。サンパウロ市コンセリェーロ・フルタード街に社を構え、1年前、金子と『日伯』を立ち上げたばかりで訣別してきた輪湖俊五郎が編集長となっていた。黒石と輪湖の両人はアメリカでの新聞作りの経験を活かし、読み易いルビ付き活字新聞を発刊した。また、移住者にいち早く現地の言葉を理解してほしいとの意図が明確に見られ、ポルトガル語講座を連載するなど、斬新なアイディアを盛りこんでいた<sup>12</sup>。1917年9月7日の創刊第2号が現存し、その第1面記事には「目的を達する方法は簡易」と題して、「一旦、農と目的を立てた上は終生この目的のために努力することを決心し、事業の発展を図らねばならぬ。」と移民たちへのブラジル定着と農業への心構えを説いている。また、主要な一面記事にはそれに関わる写真を紙面中央に掲載するなど、紙面構成に工夫を凝らしていた(図5-3)。

ポルトガル語の導入も他紙に比べて早く、1928年6月22日(第558号)の20面に「O SOLO É A PATRIA, CULTIVALO É ENGRADECÊLA(田園はわが故郷、耕すは国の栄え)」と、移民を啓蒙する記事を掲げている。発刊当初からの4ページ7段組みのルビ付き活字で印刷された紙面と洗練された内容は、当時ブラジル最大の発行部数を誇っていたエスタード紙に「ブラジルにおける活字日本新聞の嚆矢」といわせしめる程インパクトを与えていた<sup>13</sup>。その要因は、第1回移民以来、日本移民のコーヒー園労働者の不定着性という悪評を払拭し、移民送出を推進しようとしていた伯刺西爾移民

<sup>12</sup> 「社告」『時報』1917年9月14日第3号第5面。内容は「10月5日発行の本紙より伯刺西爾語講習欄を設け語学の通信教授を開始するので、この際(新聞の)購読申し込みをしていただきたい」というものであった。

<sup>13</sup> 「エスタード紙上の伯刺西爾時報」『時報』1917年9月14日第3号第5面。ここには「伯刺西爾時報の発刊を伯国における活字日本新聞の嚆矢と推賞、その主宰者を黒石清作と告げ、(略)」と記載されている。なお、同ページに「伯国最大新聞の発行紙数」と称してエスタード紙の8月の発行高が表示されている。それによれば、発行総高: 1,604,995部、内訳、サンパウロ市内: 552,150部、田舎方面: 268,789部、一日平均発行高: 約53,000部となっている。日本語新聞の規模とはまったく比較にならないことは一目瞭然であった。



図 5-3 現存する『伯刺西爾時報』の最古版、1917 年 9 月 7 日第 2 号

組合の意図にあった。ところが、1917 年サンパウロ州契約移民の再開に伴い、日本国内の人口問題・食糧問題、さらに、世界の情勢に対処するためには日本国民の海外発展の必要性が強調され始め、寺内内閣の勝田主計大蔵大臣の主導によって 1917 年 12 月 1 日、伯刺西爾移民組合傘下の東洋移民合資会社と南米殖民株式会社・日本殖民株式会社・日東殖民株式会社などが合併し、「海外興業株式会社(以後、海興)」が創設された。海興には国策遂行のミッションが課され、国策移民送出の代行機関としての地位が与えられたのである<sup>14</sup>。この過程で伯刺西爾移民組合は、その業務一切を海興に引き継ぎ解散した。このため『時報』は、以後の発刊に関して「海興の機関紙」として機能したため「海外興業のお抱え新聞」と揶揄されるようになった。

週 1 回金曜日に発行していた創刊時の購読料は、年間 10 ミルと他紙に比べて割安で見応えがあったことと、第一面は毎回、移民社会への教示を与えるような内容の記事で埋まっていたことなどから、購読者層は安定

<sup>14</sup> 青柳郁太郎『ブラジルに於ける日本人発展史』(同刊行委員会、1941 年)、174 頁。



していたようだ。発行部数も 1500 部と他紙に比べて多く、移民 25 周年の 1933 年には、8200 部に達していた。日刊紙への変更は、他紙とほぼ同時の 1937 年 8 月 23 日(第 1376 号)からだった。このことに関しては、『聖報』が以前より該紙に 8 月 23 日に日刊紙とすることを公言していたので、『日伯』共々その波に遅れまいとする競争心があったと思われる。上から目線の『時報』ではあったが、中央では『日伯』と競合し、地方では『聖報』の発刊を歓迎しつつも警戒する姿勢を取らざるを得なかったといえる。

二世の教育の視点からは、1934 年に子供新聞『子供の園』を創刊している。しかし、1941 年の外国語新聞禁止条例により、8 月 9 日(第 2550 号)をもって休刊せざるを得なくなった<sup>15</sup>。第二次世界大戦後の 1946 年 12 月 21 日(第 2545 号)、8 ページ目にポルトガル語版を挿入して復刊したが、戦後の勝ち組負け組問題の中で勝ち組系新聞と化したことから、認識派グループからの信頼を逸し、1952 年 12 月 18 日(第 3340 号)をもって廃刊となった<sup>16</sup>。

### 3-1-3 『聖州新報』

1921 年 9 月 7 日、ブラジルの独立記念日に焦点を合わせ、ノロエステ地方の結節点バウルーで創刊されたのが、香山六郎を社主とする『聖州新報』であった。香山は『時報』の黒石の好意により 1921 年 4 月 29 日の『時報』紙上に、4 月 21 日付で同胞諸兄姉宛て以下のような「聖州新報発行予告」を掲載している<sup>17</sup>。

今般バウルー市に於きまして『聖州新報』と呼ぶ邦字週刊新聞を発行致します。鮮明なる振仮名つきの金属版刷であります。『聖州新報』は私一個の独立経営で何等覇絆に囚はれぬ新聞であります。何者にも媚びず何物にも惶れず恒に同胞の味方となり相談相手となる新聞であります。同胞の深刻

<sup>15</sup> 外務省「各国ニ於ケル新聞・雑誌取締関係雑件 伯国ノ部 外字紙禁止問題」『外務省記録目録戦前期第 2 巻』A 門 3 類 5 校 0 目 6-16、1941 年 5 月 31 日、石射大使より松岡外務大臣宛書簡第 178 号-1。

<sup>16</sup> 新聞の発刊号数は、時として前後することがある。この記事においてもそれが伺えるが、記事通りとした。

<sup>17</sup> 「聖州新報発行予告」『時報』1921 年 4 月 29 日第 186 号第 2 面。

なる実生活に触れ、実際問題の記事を以て満たされ居る処に趣味と実益との旺溢（スル）新聞であります。晩くも来5月末頃までには初版を発行致します。其暁は同胞諸兄姉の御愛読御購求を希上げます。

大正 10 年 4 月 21 日      バウルー市      聖州新報社 香山六郎  
同胞諸兄姉

文中より 1921 年 1 月、バウルー市に領事館が新設されたことを契機として、在伯日本人のもっとも多いノロエステから、一個人による独立経営で同胞の味方となる新聞であり、また、移民の目線で日本語により移民の声をいち早く報道する重要性を強調し、趣味と実益溢れる新聞であると宣言していたことがわかる。社主の香山は上塚周平(以下、上塚)とは同郷であり、着伯後は上塚の書記として移民業務に携わっていたという縁があった<sup>18</sup>。予告時の「鮮明なる振仮名付つきの金属版刷り」との説明とは裏腹に、創刊当初の印刷技術が石版やジンコ版であったため、インクが紙に染み込んで文字が非常に読みにくいといった欠点があり、年間購読料も 15 ミルと他紙との差もあまりなかったことなどから、購読者層を拡大させるのは至難の業であった。創刊当初の発行部数は 200 部、その年の暮れでも 270 部程度だったが、翌年の発行部数は 800 部にまで伸び、そのうち 150 部程はソロカバナ線沿線の購読者になっていた。現存する最古紙面の第一面には「殖民者の長短」という題で、「吾 4 万同胞移植者をノロエステ、ソロカバナ、アララクワラ、イグアッペ及マツグロッソの 6 ケ所に大別し、管見してみる。」との比較地方論を掲載し、ノロエステの良さをアピールしている<sup>19</sup>。すなわち、ノロエステ同胞は物質的には優勢を他に誇示しているにもかかわらず、言論・思想という方面にかけてはイグアッペ殖民者側よりも新しき人間的生命に触れておらず、時代錯誤の伝統的難有屋であり。(略) ノロエステ線同胞より資本家は群出してくれるだろう。但しプロレタリアートの熾烈なる新人間味の士は恐らくノロエステ線より

<sup>18</sup> 上塚周平(1876 年 7 月～1935 年 7 月)。熊本県下益城郡杉上村赤見出身。熊本済々黌校、旧制第五高等学校、東京帝国大学法科卒業、法学士。1908 年皇国殖民合資会社第 1 回移民船笠戸丸の輸送監督、サンパウロ駐在代理人として渡伯。同会社では香山六郎の上司。パウリスタ新聞『日本ブラジル交流人名事典』(五月書房、1996 年)、43 頁。

<sup>19</sup> 「殖民者の長短」『聖報』1923 年 2 月 23 日第 71 号第 1 面。

もイグアッペ植民地より群出することであろう。と、イグアッペ移民とノロエステ移民の性格の違いを比較しつつ、ノロエステ植民者の活動ぶりにプロレタリアートの思想を抱かせ、共産主義を実現すべくノロエステ線とソロカバナ線の間接地帯の太古林に斧を振るって、そこに吾々の旧道徳・旧習慣に囚われぬ新しき生命ある人間界を建設したい、と論調している。この論にはノロエステ沿線の将来に夢を膨らませた香山の持論が展開されており、『聖報』の将来的希望をも包含させていたものと解釈できる。

1925 年 5 月 8 日より、中央紙であった他の 2 社同様活字印刷となった。創刊後 5 年、他社から約 10 年遅れの活字印刷導入であった。導入にあたって「在伯同胞は聖州新報を読み！同紙は恒に移殖民の真の伴侶である」とアピールし、ノロエステ地方唯一の地方紙は『聖報』であることを強調していた。さらに同じ活字印刷であるなら、購読料が 25 ミルの中央紙『日伯』や『時報』より 5 ミルも安価で、情報を即時に伝達できると、3 日から 1 週間遅れで配達されて来る他紙との相違を明らかにし、「早くて安くて身近な新聞」を強調しつつ購読者拡大に腐心していた。

移民 25 周年に当たる 1933 年の発行部数は 5,300 部にも増大し、地方紙としての基盤を確立していた。しかし、1930 年代には国策移民の大量流入により、リンスやアリアンサに新たな地方紙が創刊されたことや、地方紙に甘んじられない社主・香山の姿勢から、1934 年、活動拠点をバウルーからサンパウロ市に移転し、紙名も“NOTÍCIAS DE SÃO PAULO”と改名した<sup>20</sup>。当時サンパウロ州で日本人などの外国人が新規事業を展開する際には、企業のトップはブラジル人でなければならないという規制があったため、『聖報』も名目上の社長を 2 世である子供たちに変更せざるを得なくなった<sup>21</sup>。この点は『日伯』や『時報』が、創刊当初からサンパウロ市に位置していたことの強みとの相違点であった。ポルトガル語の挿入に関しては、1925 年 12 月 18 日第 299 号の第 1 面に、活字印刷になったのを祝

<sup>20</sup> アリアンサに『アリアンサ時報』（1930 年）が、リンスに『ノロエステ民報』（1932 年）などが創刊された。

<sup>21</sup> 第一面には 1934 年 11 月 13 日、サンパウロ市タバチンゲイラ街 96 番地（アセンブレア街 16 番地と同日）郵函 2765 に本社移転。創刊 905 号（聖市第 1 号）、Director : Dario. P. Almeida, Proprietário : Rocio Kowyama の記載がある。  
Dario. P. Almeida（ダリオ・P・アルメイダ）は、香山の三女静子の夫にあたるブラジル人。

して“Progredindo（前進）”を掲載したのが最初で、同年 12 月 12 月 18 日第 299 号の第 1 面に、購読者への感謝の言葉を“Aos Leitores（購読者の皆様へ）”と記している<sup>22</sup>。しかし、ポルトガル語版を挿入せよとの命令には背けず、1937 年 8 月 23 日第 1,279 号からの日刊紙への変更時に、改めて「NOTÍCIAS DE S. PAULO」と第 3 面に表記し始めた<sup>23</sup>。1941 年、外国語新聞禁止令の発令を契機に、「日本人移植民のための日本語新聞」を信条とした香山は、1941 年 7 月 30 日、自主的に廃刊とした<sup>24</sup>。現存紙は 7 月 26 日第 2,235 号までである。この背景には、ブラジルで生活している以上、ブラジルの規制には従わなければならないとする遵法精神の他に、あくまでも日本人であるというプライドと、移民の目線による新聞であるという道義的意識が優先していたこと、更にはポルトガル語版を掲載するには、活字やポルトガル語を解する編集人を新たに雇用しなければならないため、人件費や技術費などの増大といった経済的課題が生じることへの不安があったと思われる。この点は確固たる基盤を形成していた中央紙『日伯』や『時報』に及ばぬ点であった。1945 年 8 月 15 日の終戦宣言を聞いた香山は、翌 16 日の晩、自宅裏庭で今まで手元に保管していた全ての新聞を焼却してしまった。大きな歴史的損失であった。主要 3 紙の概要は表 5-2 のとおりである。

<sup>22</sup> 「Aos Leitores」『聖報』1925 年 12 月 18 日第 299 号第 1 面。

O “Semanário de São Paulo” deixará a circular próxima semana, afin de resurgir em 1º de janeiro vindouro com uma edição maior. Porisso, saudando desde já a entrada do novo ano. O “Semanário de São Paulo” agradecendo, despede de seus prezados leitores de 1925.

「購読者の皆様へ」

『聖州新報』は来週休刊し、来年 1 月元旦に増補版を発刊いたします。茲に 1925 年に賜りました読者の皆様方の御厚意に対し衷心より厚く御礼申し上げます。新年のご多幸をお祈りいたしております。（日本語訳は筆者）

<sup>23</sup> 外務省「各国ニ於ケル新聞・雑誌取締関係雑件 伯国ノ部 外字紙禁止問題」『外務省記録目録戦前期第 2 巻』A. 3. 5. 0. 6-16。1939 年 7 月 21 日の桑島大使より有田外務大臣宛書簡第 133 号によれば、「外国ノ新聞其ノ他刊行物ハ今後ハ総テ解釈付ニアラサレハ発行不可能トナレル次第ニテ一般外字新聞殊ニ邦字紙ハ今後其ノ経営上多大ノ支障ヲ来スヘキモノト認メラル（略）」とある。

<sup>24</sup> 前掲書 23)、1941 年 8 月 3 日、「石射大使より豊田外務大臣宛書簡第 314 号の 2」。その中に「（聖州新報ハ廃刊、南米新報ハ休刊ヲ偽装セリ）ニ対シテ、其ノ可能性ノ範圍内ニテ 8 月 31 日以後葡語版ヲ発行シ得ル様準備方申聞ケ置キタルカ邦字版廃止後ニ於ケル在留民ニ対スル報道方法ニ対シテハ研究中ナリ」とある。

### 3-2 主要日本語新聞総論

#### 3-2-1 対抗意識が垣間見られる発刊

サンパウロ市に拠点を置いていた『日伯』と『時報』は、片や官憲官憲探索系、片や海外興業系とそのカラーを異にしていたこともあり、『日伯』を動的表現紙とするなら『時報』は静的表現紙と対比できるほど、紙面上での対立を見せている。『日伯』創刊 1 年後に『時報』も創刊した点や、輪湖俊午郎が、『日伯』を創刊して 1 年後には『時報』の編集長に収まっていたことから、対抗意識が伺える。

一方、黒石は 1921 年 9 月 7 日、バウルーに『聖報』が創刊される際、香山六郎からの創刊案内記事の掲載依頼を許可し『時報』に掲載させていた<sup>25</sup>。いずれはライバルになると予測できる同業者の創刊記事を、快く掲載させた黒石の思う処は何だったのか。推測の域は出ないが、当時のノロエステ地方では、『日伯』の購読者が『時報』のそれを上回っていたといわれており、「敵の敵は味方である」といった心理であろうか、黒石は新たな対抗馬『聖報』の創刊支援をした形を取ったといえる。

しかし、創刊を祝福してはいるものの、素人の創刊による 200 部足らずの手書きの新聞であったことから、『時報』はその成り行きを伺って安穩としていたようだ。ところが、創刊 2 年目で『聖報』購読者が 800 人を超えると危機感を覚えたのか、『時報』は 1924 年、リンス支部を開設し、俊敏な情報発掘に留意するようになった。『時報』が 1928 年 1 月から第 4 面に「ノロエステ欄」を設けていることから、『時報』のノロエステ重視の姿勢を見て取ることができる。このようなことから総合的に判断すると、『時報』と『聖報』との間には「組織対個人」、「中央紙対地方紙」といった勢力構図が描け、表面的には友好的関係を取り繕うことが可能であったといえる。

<sup>25</sup> 「聖州新報発刊予告」『時報』1921 年 5 月 6 日第 187 号第 3 面。

表 5-2 主要日本語新聞概要

|             | 日伯新聞<br>Nippak-Shimbun   | 伯刺西爾時報<br>NOTÍCIAS DO BRASIL   | 聖州新報<br>SEMANARIO DE SAO PAULO  |
|-------------|--|--|---|
| 創刊時期・場所     | 1916 年 8 月 31 日<br>サンパウロ市エルネスト・デ・カストロ街 18、郵便 375   | 1917 年 9 月 7 日 RUA<br>CONSELHEIRO FURUTADO No. 39<br>C.Postal 1082 SAO PAULO                   | 1921 年 9 月 7 日<br>パウルー市ノロエステ街 11、郵便 58  |
| 社主出身地、渡伯事情  | 創刊者：2 名<br>金子保三郎（生没不詳）愛知県、自由渡航者、輪湖俊五郎（1890～1965）長野県、アメリカからの再移住者（元ロッキーマガジン記者）<br>1919 年 9 月より三浦鑿造（1882～1945）、高知県、ブラジル海軍の柔道指導者として着伯。 | 黒石清作（1870～1961） 福岡県<br><br>移住組合代理人神谷忠雄の招聘により渡伯。<br>編集長に日伯新聞創刊者の一人であった輪湖俊五郎（1920 年迄）            | 香山六郎（1886～1976） 熊本県<br><br>1908 年笠戸丸自由渡航者<br>徴兵忌避による渡伯。   |
| 創刊目的・特徴     | 「邦字新聞は、ブラジル邦人に目と口を与えるもの」移民の定住を論じ、植民地解説を説く。三浦時代、「同胞自決」の考えから、サンパウロ市を中心に領事館や日本の情報と都会の移民生活の報道とに特化。                                     | 「ブラジル移住者のための邦字新聞」として、移民の道徳的教化が目的。ブラジル移住組合（後の海外興業）の機関紙的性格を持つ。創刊当初より活字新聞。                        | 日本移民の増加著しいノロエステ地方の要地パウルーで「在伯同胞は聖州新報を読め！同紙は恒に移植民生活の真の伴侶である」と日本移民の目線で移民の声をいち早く報道することに特化。ノロエステに根付いた地方紙となる。 |
| 現存最古紙面の印刷技術 | 1924 年 2 月 22 日版（第 361 号）6 ページ、7 段組み、グーテンベルク式ルビなし活字印刷（但し創刊時～1919 年 11 月 14 日迄は石版刷り）  | 1917 年 9 月 7 日版（第 2 号）4 ページ、7 段組み<br>ルビ付き活字印刷<br>1500 部  | 1923 年 2 月 23 日版（第 71 号）4 ページ、7 段組み 当初は石版からジンコ版（亜鉛版）：手書きのため読解困難。1925 年 5 月 8 日より活字印刷                    |
| 現存最古紙面購読料   | 1924 年 2 月 22 日版（第 361 号）によれば、年間 18 ミル 前金払い<br>週 1 回、金曜日発行   | 1917 年 9 月 7 日（第 2 号）版によれば、年間 10 ミル 前金払い<br>週 1 回、金曜日発行  | 1923 年 2 月 23 日版（第 71 号）によれば、年間 15 ミル 前金払い<br>週 1 回、金曜日発行   |
| 現存最古紙の一面記事  | 「同朋自決」日本移民が渡伯以来十有七年、移民政策の成績が上がらず。移民奨励など政府の眼中にはない。（1924 年 2 月 22 日）   | 「目的を達する方法は簡易」一旦、農と目的を立てた上は終生この目的のために努力することを決心し、事業の発展を図らねばならぬ。（1917 年 9 月 7 日）                  | 「殖民者の長短」 吾 4 万同胞移植者をノロエステ、ソロカバナ、アララクワラ、イグアッペ及マツグロソの 6 ヶ所に大別し、管見してみる。（1923 年 2 月 23 日）                   |
| 購読料         | 25 ミル（1925 年 1 月 1 日）  | 25 ミル（1925 年 1 月 1 日）  | 20 ミル（1925 年 5 月 8 日）活字版更   |
| 発行部数        | 7000 部（1933 年） 1936 年 4 月から週 3 回発行、15000 部（1939 年）   | 8200 部（1933 年）<br>1931 年より週 2 回発行  | 5300 部（1933 年）。1935 年 12 月には 10000 部。1935 年より週 3 回発行  |
| 日刊紙         | 1937 年 8 月 25 日（第 1187 号）  | 1937 年 8 月 23 日（第 1376 号）  | 1937 年 8 月 23 日（第 1279 号）   |
| ポルトガル語記事導入  | 1928 年 12 月 21 日（第 607 号）8 面（NIPPAKU SHIMBUN）<br>[NOTAS E INFORMAÇÕES]   | 1928 年 6 月 22 日（第 558 号）20 面<br>[O SOLO É A PATRIA, CULTIVALO É ENGRANDECELA]（田園は我が故郷、耕すは国の栄え） | 1925 年 5 月 8 日（第 177 号）1 面<br>活字新聞切り替えと同時に、タイトルに[SEMANÁRIO DE SÃO PAULO]                                |
| 廃刊          | 1939 年 5 月 27 日（第 1716 号）  | 1941 年 8 月 9 日（第 2500 号）で一<br>時終刊、1946 年 12 月 21 日（第 2545 号）で復刊 1952 年 12 月 18 日（第 3340 号）廃刊。  | 1941 年 7 月 30 日、ただし現存の最終版は 7 月 26 日付紙（第 2235 号）。  |
| 特記事項        | 1931 年 3 月 26 日、三浦社主国外追放。1939 年 7 月、再度三浦国外追放。日伯子供新聞（1939 年 1 月 1 日～5 月 27 日）週 1 回 21 号発行。  | 発刊当初よりポルトガル語講座案内あり。1924 年リンス支部開設。1934 年 9 月「子供の園」創刊。   | 1934 年 11 月 13 日、サンパウロに本社移転。紙名を Noticias de São Paulo と改称。創刊 905 号が聖市第 1 号となる。                          |

注：新聞社住所は紙上通りに表記。各新聞、香山六郎『回想録』、前山隆『風狂の人三浦鑿』他より作成

次に『日伯』と『聖報』との関係を探ってみよう。『日伯』創刊者の金子は『聖報』の香山とは親しかった。1921年半ばにサンパウロ市で玩具製造をしていた金子は、香山の『聖報』創刊時の技術支援を惜しまなかったほどであった<sup>26</sup>。金子は意志半ばにして三浦に『日伯』を完全に売却せざるを得なかったが、新聞作りへの思い入れが消え去ったわけではなかったのだ。彼は石版よりジンコ版の方がきれいに刷り上がるという、エスタード紙のグラビア工場まで香山を案内し、ジンコ版の購入を勧めていた<sup>27</sup>。『日伯』も『聖報』も中央紙と地方紙という違いこそあれ、個人的発想による創刊であったから、この2社の間には「個人対個人」、「中央紙対地方紙」といった勢力構図が描ける。香山は三浦の入伯後の生活を批判的に見ていたこともあって、三浦とは相容れないものがあつたのだ。また、三浦の『日伯』にとって『聖報』創刊は、ノロエステ方面の購読者を失うことに繋がりがねなかったことなどから、三浦は1931年、『時報』同様、従来アラサツバにあったノロエステ支社をリンスへ移転させ、「社告」でその旨を購読者に周知させるなど購読者確保策を講じていた<sup>28</sup>。アラサツバ支社時代のターゲットは、奥ノロエステのアリアンサ移住地にあつたのだろうが、ノロエステのほぼ中心地リンスに支社を構えたということは、ノロエステの情報発信中心地として発展し続けるプロミッソンにターゲットを絞ったことを意味した。

『日伯』と『時報』の対立構図は、「個人対組織」、「中央紙対中央紙」といった形で描けた。その極限の事例は、ノロエステでの購読者争奪より、『日伯』社主三浦鑿への人間性にかかわる問題・三浦の国外追放事件であった。三浦の公人・私人を問わぬ常軌を逸した報道を、真っ向から非難したのは『時報』社主黒石だった。2度に亘った三浦の国外追放事件は、黒石と日本官憲による徹底した三浦排除策だったのである。1931年の第一次国外追放時には、『聖報』社主香山は、周囲の空気を読んで、同業社主としてではなく古き友人として三浦追放解除請願書にサインしていたとい

<sup>26</sup> 香山六郎、前掲書10)、325頁。

<sup>27</sup> 香山六郎、前掲書10)、320-321頁。

<sup>28</sup> 「社告 アラサツバにあったノロエステ支社は、この度リンス市オズワルド・クルス街へ移転しました。」「『日伯』1931年10月8日第749号第7面。

う<sup>29</sup>。紙上では激論を交わしても、一個人としては「同行相哀れむ」の感があつたようだ。

このようにして『日伯』、『時報』、『聖報』の3紙は、ノロエステを巡って販路拡大抗争に凌ぎを削っていたのであった。例えば、1924年当時のノロエステの日本人人口は、3,705 家族 19,188 人、地主 1,131 人であった。全ての家族が新聞を購読したとして、3,705 部がノロエステの日本語新聞の許容数であったはずで、すでに『聖報』が650 部程販売していることから、残りを『日伯』と『時報』で折半したとしてもそれぞれ1,500 部程度にしかない。とはいえ、中央紙である2社の発行部数の3分の1以上を占めるノロエステの購読者数は、2社にとって経営上魅力ある数字であるから、購読者の減少は社運にも影響を及ぼしかねない事態に繋がったのであった。『聖報』がノロエステ地方の日本人移民たちに及ぼした影響が、そのまま中央紙の勢力拡大にも影響を与えたという点で、『聖報』創刊の意義の重要性を知らされる。

### 3-2-2 移民の目線との関わり

新聞編集に関して、『日伯』は創刊当初より「新聞はブラジル邦人に目と手を与えるもの」と言い切って、移民の目線より上層から定住論を唱え、植民地建設促進を説いていた。この考えは、三浦に経営権が移譲された後も受け継がれ、三浦は社説「同胞自決」の中で、日本移民が渡伯以来17年経とうとしている現在においても、日本政府の移民政策の成績は上がらない。ブラジルへの移民奨励策など政府の眼中にはないと辛辣に日本政府を批判し、目先の収益に翻弄され単なる出稼ぎ意識から脱却しない初期移民たちに、ブラジルへ定着するための農業生産計画を志すことを促していた<sup>30</sup>。この考え方は、ノロエステ地方に集住し始めていた日本人移民に、独立自営農としての着実な道を選択する際の指標となった。

一方、『時報』は、伯刺西爾移民組合の機関紙として創刊されていた関係もあり、移民の生活の質の向上を目論む意図が強く、「ブラジル移民のための邦字新聞」としての使命感からか、創刊時よりポルトガル語講習案

<sup>29</sup> 香山六郎、前掲書10)、362-364頁。

<sup>30</sup> 「同胞自決」『日伯』1924年2月22日第361号第1面。



内をしたり、二世教育問題や衛生問題などを常に掲載し、移民にブラジル社会で生きるための示唆を与えていた点に、上から目線の証を見る。

『聖報』は、ノロエステに創刊した経緯から地元紙であることを全面に押し出し、平易な言い回しで地域社会の中の日常的出来事（結婚、誕生、死亡、開・閉店）やノロエステを中心とした請願運動の先鋒を切るなど、常に身近な問題を速やかに移民の目線で掲載するコミュニティ紙に徹することに努めていた。例えば、1924～25年に発生したコーヒー干害の際、プロミッソンの上塚たちによる「コーヒー干害被救済低利子貸付金問題」の日本政府への請願運動時には、地元紙の強みを存分に発揮した情報と活動経過を頻繁に紙上に掲載し、85万円の貸付金配分を巡っては中央紙である『日伯』や『時報』社の反論に、より具体的に対応・報道することで、ノロエステ独立自営農民の結束を見事に掌握していた。この事例は香山自身の生活と密着していたこともあり、移民の目線での論説が目線の高かった他紙との相違を明確にし、ノロエステの購読者の信頼を得ていたともいえる。

#### 第4節 新聞の目指したものとその影響

##### 4-1 新聞の構成内容から見えるもの

1923年6月～8月にかけてバウル市には、従来の週刊誌を日刊紙にした外字新聞<sup>31</sup> “Correio de Baulu” と “O Bauru o Tempo” が創設されたばかりであった<sup>32</sup>。1917年当時、ブラジル最大の新聞社であったエスタード紙は、その8月の発行部数1,604,995部。うちサンパウロ市内552,150部、田舎方面268,789部。一日平均約5,300部という数字を示しており、日本語新聞とは比較にならない規模を誇っていた。

これら外字新聞と比較して、バウル市には1920年代中頃には既に日本語新聞が3紙を下らなかったということは、関東大震災直後の1924年以

<sup>31</sup> 当時のブラジルでは、日本語新聞を『邦字新聞』、日本語以外の文字で書かれた新聞を外字新聞と称していた。

<sup>32</sup> 『聖報』1923年6月29日第89号第3面および8月31日第98号第3面。“Correio de Baulu”の主宰はマノエル・サンデン氏。現在輪転機購入準備中と記事にあり。

降における日本人移民の増加と大きく関わっていたと考えられる<sup>33</sup>。それ程日本人が日本語そのものと日本語で発信される情報に飢えていたばかりでなく、新聞をとおして日本的な発想の構築と維持を願い、新聞により親しみ、そこから得られるさまざまな情報や情操の涵養を望んでいた証であったといえよう。

創刊当初の新聞は、概ね週 1 回、2～6 ページで発刊されていた。新年、紀元節や天長節、皇室関係慶弔儀、自社の創立記念日など、特別な行事の際には紙面数が 40 ページに及ぶこともあった。この大部分は広告で占められていた。特に目立ったのが、発展の勢い著しかったノロエステ地方らしく、土地の売買広告で、広告スペースの半分以上を占めていた。農業生産の拡大と独立自営農民としての飽くなき土地所有願望を把握したうえでの広告であった。また、これらの広告をとおして、広告内容の掲載地域や広告掲載者・団体などを知ること、その新聞の流通範囲も概観できた。一方、広告料は各新聞社にとって購読料とともに重要な収入源だったことは明白である。土地売買広告は、1924 年当時が出現度は高かった。コーヒー干害が発生する以前の土地売買ブームを反映したもので、『日伯』、『時報』にも頻出していたが、『聖報』の場合、ノロエステ地方の同一地の広告を数回に亘って掲載していた土地売買人もいたほどであった。『聖報』第 110 号（1925 年 5 月 8 日）から第 209 号（1925 年 12 月 18 日）までの 7 カ月間に、ノロエステ線ペンナポリスの国崎重次が同一地域の売買広告を 29 回掲載していたのは、その典型例であったといえよう。

紙面構成は、3 社ともほぼ共通し、第 1 面に社説もしくは論説文、時局ニュースなどを掲載していた。1920 年代中頃からは、アメリカ合衆国における移民入国禁止問題、日本政府の移住政策論、1930 年代は世界恐慌の波紋、満州事変や日中戦争、日本の国際連盟脱退、ブラジルにおける日本人移民排斥問題などに多くの紙面が割かれていた。

第 2 面には、内外通信、特に日本との通信事項、経済情報。3 面目には、移民社会関連ニュース、例えば、日本人会の結成、日本語学校建設、各地の動き紹介。4 面目は文化欄で、衛生問題や相撲、陸上競技大会、運動会

<sup>33</sup> 拓務大臣官房文書課「拓務省統計概要」第 3 回（1932 年 1 月）23 頁によれば、1924 年から 1930 年にかけて、ブラジル本邦人渡航者員数は、6.9 万人を上回った。

といったスポーツ関連記事、短歌、俳句、創作詩、連載小説、読者登壇など労働に疲れた人々の精神を涵養させ購読意欲を掻き立てる工夫が凝らされていた。これらの記事をとおして、日本国内に見られた村落共同体的社会活動が、ブラジル日本人移民社会にも踏襲されていたことがわかる。

#### 4-2 販路拡大から見えてくるもの

新聞の販路拡大はどのようになされていたのであろうか。『聖報』を中心に明らかにしたい。サンパウロ市からノロエステ地方に送付されてくる新聞は、パウリスタ線、ソロカバナ線でバウルーまで運搬されてくる。バウルー以遠の地にはさらに鉄道で運搬されて行く。バウルー近在の日本人集住地には、駅前の旅館やホテル、雑貨店、日本人会や青年会など、日本人が集まる施設が取次店となり、私書箱（郵便、Caixa Postal）が設置されていた。植民地内の場合は世話役の家を取次所とするのが通例であった。所用で集住地に駄馬や徒歩などで出かけてくる人々が、自宅近くの住民たちの新聞や郵便物などを纏めて持ち帰り、途中該当者に届けて行く。特別な新聞配達員がいたわけではなかった。そこには信頼と相互扶助の精神に支えられた村落共同体的活動が存在していた。

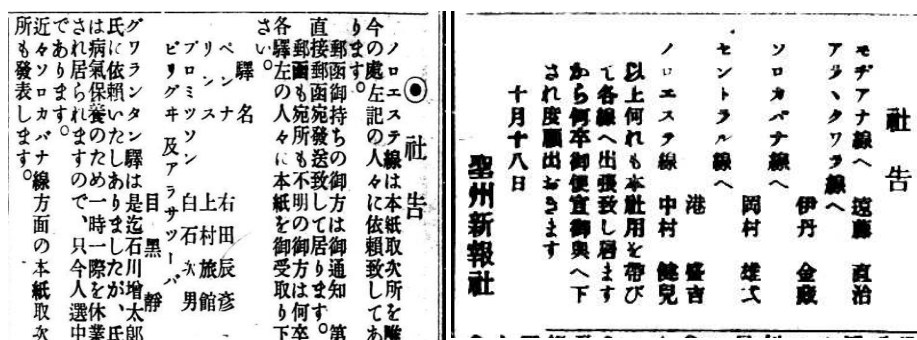
バウルーで発行されている『聖報』であっても、遠隔地のソロカバナ線ブレジョン耕地に届く迄に3日間程は要する。ところが、サンパウロから輸送されてくる『日伯』や『時報』は、発送からバウルー駅到着までに2日～3日、遠隔地の住民に届く迄に1週間近く要することになり、新聞が情報の伝達手段であるとはいっても瞬時性は欠かざるを得なかった。ブラジルの住所表記に「Caixa Postal(私書箱、郵便)」とか「Rua××、k m △△(××道路△△k m)」というのがあるのも、住民の居場所を合理的に示すための一方策だった。

『聖報』がバウルーに創刊したのは、バウルー領事館が近在するので日本国内外を問わずニュースをいち早く受信できるだけでなく、ノロエステのハブであった利点から地元のニュースも即刻住民に届けられるという、情報の受・発信地としての立地条件を最優先し、情報の提供者であると同時に需要者であるという双方向性理解を可能にしたこと、社主である香山

自身が開拓の実体験者であったことから、迅速公正な情報伝達の重要性を心得ていたからであった。

時に情報収集は、新聞社員の奥地巡回時に実施された。巡回者である社員の役割は、旅館やホテルのない奥地の巡回先で、移民の家に宿泊させて頂きつつ購読料金の回収作業、新規購読者の勧誘・獲得、パウルーやサンパウロなど都会の情報、時には日本や世界の情勢などを伝達することが主ではあったが、逆に奥地の情報を収集する絶好の機会でもあった。したがって社員が奥地巡回に出る際、新聞社は「社告」を掲載し、巡回先での宿泊所確保を兼ねた依頼をしていた。該当地域の住民、特にその地域の世話役の家では巡回者の訪問を待ち望み、心からのもてなしをすることで新聞社および巡回員へのねぎらいと協力の姿勢を示したのであった（図 5-4）。情報の提供者と享受者が一体となることで、情報の相乗効果が期待されたのである。この情報の相乗効果は、新聞のみならず各社の刊行した各種年鑑類にも凝縮されていた。これら年鑑類は、現在もブラジル移民研究の貴重な史料として活用されている。

図 5-4 取次店依頼通知（左図）と社員出張連絡・協力依頼（右図）



『聖報』1925年7月10日第186号（左）、1932年4月5日第650号（右）

## 第5節 小括

移民としての人の国際移動の基本は、その理由の如何を問わず個人の意志に起因する。移民先における情報収集の難しかった初期移民たちは、その媒体としてのメディアの存在を願った。一方、メディアの創造者たちは、情報に飢えていた移民たちに、時には政論紙として、また時にはコミュニ

ティ紙として情報を瞬時に正確公平に、時として隠蔽性・誇張などの要素を加味して提供することで、移民たちに新しい人間関係により構築された村落共同体的日本人移民社会への定着と発展・繁栄を願い、広範なノロエステ地方内の個々の社会を結ぶメディアネットそのものを構築した。読者層の拡大と新聞各社の経済的基盤確立は、同時並行的に進行していたのである。特に視座とした『聖報』は、地元の問題を最重要テーマとして常に報道することで、購読者との親近感を増し、信頼感を深化させてこの両者を達成していた。

この観点から『聖報』はノロエステと共に成長発展したといえる。単なるメディアの伝達手段から地域密着型地方紙としての基盤を確立させたばかりでなく、ノロエステ日本人移民社会の情報の要として、生産活動における共同化の重要性を認識させ、各種産業組合の基を築く示唆を与えていた。このことは、1924 年、ノロエステ地方に発生した「請願運動」に如実に現われている<sup>34</sup>。この結果、該社会の独立自営農民たち中心とした移民たちは、結束することの重要性を体験し、戦前のノロエステ地方の大発展を促し、その後の農業生産活動における日本人移民のブラジル社会における評価を高めていったのである。

<sup>34</sup> 1924 年末、ノロエステ地方に発生したコーヒー干害により、困窮した独立自営農民たちが、上塚の提唱した「請願運動」に賛同し、当時の田付七太在ブラジル特命全権大使を動かし、「コーヒー干害被救済低利資金」85 万円を日本政府から拠出させることに成功した事例。いわゆる「八五低資問題」。日本政府がブラジル農業移民に対して救済資金を貸し出した唯一の事例であった。

## 第6章 ブラジル移民知識人香山六郎の言動 ー移民俳句と日本語新聞を通してー

### 第1節 初期移民の文芸活動

1908 年に開始された日本人のブラジル移民は、第二次世界大戦前 18.8 万人に達した。1908～1924 年の初期移民時代、彼らの多くはコーヒー農園契約労働者としての家族移民であった。彼らは契約労働が終わると耕地請負農や借地農、さらには自作農へと転換していくのが通例であった。この開拓生活のなか彼らは紙と鉛筆一本で短歌や俳句・川柳・詩などの短詩系移民文芸を創作していた。これらの創作活動は現在のブラジル日系人社会にも脈々と受継がれてきている。なぜ彼らは、遠く日本を離れたブラジルにおいても移民文芸を創作したのだろうか。彼らが創作活動を起こす発端となった契機や、文芸活動を支援する何かが存在していたのではないだろうか。

本章では、第二次世界大戦直後頃までの短詩系移民文芸のなかで、特に親しまれていた移民俳句を事例とし、彼らの文芸活動の精神的支柱と後方支援策を探求することで、初期移民の日本観とはどのようなものであったのかを考察する。考察にあたり、第 1 回ブラジル行移民船・笠戸丸の自由渡航者であった香山六郎(以後、香山)を主要対象者とした。香山は移民生活体験者でもあり、初期移民知識人として日本語新聞『聖州新報』(以後、『聖報』)を創刊し、ブラジル日本人移民の在り方を論じていた人物であったからである。

移民知識人について佐々木剛二は、移民としての主体性や情緒的経験を強く保持しながら、大多数の移民とは異なった客観性や合理性への志向性を持ち、積極的に移民社会とそれをめぐる状況に介入する人々と定義づけ、さらに移民社会内部における農民層と知識層との差異も論じていた<sup>1</sup>。本章では、この移民社会とのかかわりや、その社会に内在する社会的差異の存在を示唆した移民知識人の一人が香山であったと捉える。

---

<sup>1</sup> 佐々木剛二「統合と再帰性ーブラジル日系社会の形成と移民知識人」『移民研究年報』17 号(日本移民学会、2011 年)、23-24 頁。

では、なぜ香山でなければならないのか。香山について清谷益次は「終生文学青年的信条を持っていた」と評し、「日本語新聞を創案した日本人のなかで、移民たちと共に生活する経験を有したのは唯一香山だけであろう。その言動には泥臭さを感じさせるものがあるが、それは移民の心情的・肉体的労苦を、自らの体感として理解していたからではなかったか」とも述べている<sup>2</sup>。清谷は戦前、香山を社主とする『聖報』の社員であったこと、戦後はサンパウロ新聞社員として『聖報』時代の古機材を利用し新聞編集に携わっていたこと、さらには短歌を通して香山と交わりを持っていたことなどから、香山のよき理解者の一人であった。すなわち、移民知識人としての経験と移民生活者としての体験の双方を兼備した人たちの文芸活動に、初期移民の日本観が表象されるとするならば、この 2 つのコンセプトを兼備した初期移民知識人は香山以外に存在しないのである。

## 第 2 節 初期移民俳句と移民知識人

香山は 1886 年 1 月、熊本県玉名郡高瀬町で父・香山俊之、母・伊喜の次男として誕生した。幼少時に両親を亡くしたため、母方の叔父・土屋員安の後見により、彼は日本大学・大学部商科付属殖民科に籍を置くまでに成長した<sup>3</sup>。香山の青少年期は日清・日露戦争の勝利に沸いていた時期で、多くの少年同様、彼も軍将校になることを夢見ていた。しかし、海軍での身体検査不合格により夢は消え去り、香山は徴兵検査を忌避するための最終手段として日本脱出を試みるに至っていた<sup>4</sup>。

1908 年 4 月、香山はペルーへのゴム採取移民副監督として渡航するはずだったが、出航延期となったため、急きょブラジル行第 1 回移民船・笠戸丸に自由渡航者として乗船した。日本出港時、香山は皇国殖民合資会社の水野龍との契約により、同船していた同県人で熊本済々黻の同窓生でもあった同会社サンパウロ代理人上塚周平（以後、上塚）の書

---

<sup>2</sup> 清谷益次「新聞は移民にとっての何であったか」『人文研』No2（サンパウロ人文科学研究所、1998 年）、7-8 頁。

<sup>3</sup> 半澤典子「香山六郎と聖州新報（一）」『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要史学編』13 号（京都女子大学、2014 年）、12-22 頁。

<sup>4</sup> ジェニー脇坂「海外雄飛」『清書原稿 A』（私家本、1976 年）、430 頁。

記生として働くことになっていた<sup>5</sup>。

上塚と共にサントス港に着いた香山は、その時の様子を

「サントスに笠戸丸着きぬ星ふる夜」、

「吾が骨を埋めよ青山秋の晴れ」と詠んでいる<sup>6</sup>。この句と同時期に上塚（雅号は瓢骨）の詠んだ

「涸れ滝を見上げて着きぬ移民船」と

「ブラジルの初夜なる焚き火祭かな」の句は、ブラジル俳句界では広く知られているが、香山の句はほとんど知られていない<sup>7</sup>。これらの句には、50 余日もの航海の末、移民たちを無事にブラジルに到達させた達成感と、この事業にかかわった人々への上塚と香山両人の感謝の気持ちが表出している。読者にも安堵感を与えるこれらの佳句は、ブラジルの情景を読み込んだブラジル移民俳句の先駆けと位置づけられる。

地球儀を見ればわかるように、ブラジル・サンパウロ州は日本の対蹠点に位置する。そのため、笠戸丸がサントス入港した 6 月のサンパウロ州は、コーヒーの収穫晩期の秋になる。香山の初句には、長い航海の末に秋の夜空に星がきらめくサントス港に到着した時の安堵感以外に、これで徴兵は回避できたという精神的束縛からの解放感や安堵感も表現されているようだ。2 句目には、ブラジル到着時の晴れ晴れとした自分の気持ちと秋晴れが掛け合わせて表現され、「吾が骨を埋めよ」の 7 文字で永住も覚悟の内であったことを暗示している。事実、香山は 90 歳で没するまで帰化もせず一度も母国を訪問せずにブラジルの土と化している。これはブラジル到着直後の句であったから、彼が本音でブラジルへの永住を考えていたとは断言できないが、自由渡航者であったことから香山の目的は、いわゆる家族移民の出稼ぎ的渡航とは基本的に異な

<sup>5</sup> 上塚周平（1876-1935）は熊本県下益城郡出身。東京帝国大学法科卒業。1908 年皇国殖民合資会社の現地代理人。1918 年にイタコロミー植民地、続いてリンズに第二上塚植民地を建設。生涯妻帯せず質素に暮らし移民の生活を見守ったことから「移民の父」と称される。なお、熊本県立済々黉高等学校同窓会（一般財団法人多士会館）によれば、上塚は 1896 年 3 月（第 6 回）、香山は 1906 年 3 月（第 16 回）の卒業生であった。上塚の在校時代の校名は熊本県尋常中学校、香山の時代は熊本県立中学済々黉と称していた。

<sup>6</sup> ジェニー脇坂『香山毒露俳句集』（私家本、2008 年）、1 頁。

<sup>7</sup> 栢野桂山「俳諧小史」『ブラジル日系コロニア文芸』上巻（サンパウロ人文 科学研究所、2006 年）、155 頁。



っていたと考えるのが妥当であろう。佐々木は香山のような渡航者を「学術的・批評的」な機能を持った広義の「移民知識人」と定義し、前述の契約移民・家族移民とは異なった移民層であると記述している<sup>8</sup>。

香山が自由渡航者意識から移民意識へ転換する契機となったのは、1908年9月、モジアナ線のズモント耕地からの脱耕9家族27名が配耕された、ノロエステ線サン・ジョアキン耕地での通訳兼監督の体験にあった<sup>9</sup>。この9家族と香山こそがノロエステ線最初の日本人入植者、すなわちノロエステ線日本移民の先駆者なのである。この先駆者としての自負、移民をリードしつつ常に移民と共に生きようとする移民知識人としての姿勢が、その後の香山のブラジル生活の精神的支柱になっていたといえよう。「日の丸旗を柳行李の底に秘む移民」、

「神戸出た事などわめきカフェ摘む」、

「家族移民のカフェ耕地に郷愁なし」の3句は、香山が移民監督・通訳をしていた時の句で、彼自身というより移民たちの行為を傍観するなかで創作された句である<sup>10</sup>。香山は出稼ぎ目的でブラジルに來た移民たちが、柳行李の底に潜めてきた日章旗を日々意識することで、日本人としてのアイデンティティを確認する行為を温かく受け止め、彼らとの労働のなかに喜びと充実感を表現している。また、香山は神戸出港時の移民たちの不安と希望の混じり合った複雑な心境を、広大な耕地で声張り上げながらコーヒー摘みをしている現在の彼らの姿に重ね合わせて「わめき」と表現し、さらに、彼らの厳しくとも明るく暮らしている様子に安堵し「郷愁なし」と言い切っている。これらの句は、初期移民が直面する生活への不安や希望を表現しているのであるが、それはすなわち香山自身の移民先駆者であり、また、移民知識人であるとの移民意識の表出であったともいえよう<sup>11</sup>。

1912年、移民会社の倒産により失職した香山は、上塚らと共にサン

---

<sup>8</sup> 佐々木剛二、前掲書1)、25-26頁。

<sup>9</sup> 香山六郎『在伯日本移殖民25周年記念鑑』（聖州新報社、1934年）、32-33頁。

<sup>10</sup> ジェニー脇坂、前掲書6)、1-2頁。

<sup>11</sup> 渡部南仙子「香山毒露翁」間嶋稲花水『ブラジル俳句百年』（ブラジル俳文学会、2008年）、53頁。

パウロ市内で玩具の製造販売などをしていた<sup>12</sup>。その時、夫を亡くし 3 人の子供を連れて帰国すべきか迷っていた笠戸丸移民で、ノロエステ移民先駆者の一人であった熊本県出身・橋口重正の未亡人・タニを引き留め、翌年結婚をしている。日本を離れて 6 年目で香山 28 歳、徴兵失効まで 4 年を残していた。

1914 年以降、請負農民となった香山は、ソロカバナ線モンソン植民地でバッタの大群に農作物を食い荒らされる蝗害により移民生活の辛酸を嘗めていた。「植民地棉のモンソン今パスト」という句は、1910 年代のモンソン植民地の栄華を理解するうえで貴重な一句となっている<sup>13</sup>。

1918 年、香山はモンソン植民地から、上塚の計画によるノロエステ線エイトール・レグール駅（1920 年にプロミッソン駅と改名）のイタコロミー植民地内に土地を購入し、初めて自分の家を建て自営農を目指していた。「椰子蔭に鋤おき妻と午餉する」、

「サボテンの蔭に野風呂の据へてあり」の 2 句の季語には、サボテンや椰子樹といったブラジルらしい植物が用いられ、現地の情景が描写されている<sup>14</sup>。ここからは戸主として家族と共にブラジルでの日々の労働の苦しさ・楽しさを味わっている香山の満足した姿が彷彿される。しかし 1921 年正月、上塚の植民地建設事業幹部から外され、この地を去った香山は、日本人移民に日本語で情報を提供する新聞発行人になる決意を固めていた<sup>15</sup>。

### 第 3 節 新聞俳句と新聞俳壇

#### 3-1 新聞俳句

1921 年 9 月、香山はノロエステ鉄道の起点バウルー市の駅に近いビラ・ファルコン地区で、日本語新聞『聖報』を創刊する。その創刊予告文「何者にも媚びず何物にも惶れず恒に同胞の見方となり相談相手となる新聞である」を、サンパウロ市に本社を置く『伯刺西爾時報』社（以

<sup>12</sup> ジェニー脇坂「病床」『清書原稿 A』(私家本、1976 年)、752-753 頁。

<sup>13</sup> ジェニー脇坂、前掲書 6)、50 頁。パスト (pasto) は放牧地や荒地の意味。

<sup>14</sup> ジェニー脇坂、前掲書 6)、1-2 頁。

<sup>15</sup> ジェニー脇坂「訣別」・「決意」『清書原稿 A』(私家本、1976 年)、546、553 頁。

後、『時報』、1917 年創刊）に掲載した<sup>16</sup>。すでに同年 1 月にはバウルー領事館が開設されており、主要日本人移植民地はサンパウロ市内から 300 km 以遠のノロエステ地方に建設され始めており、バウルーは情報収集に好都合の場所であった(図 6-1)。

図 6-1 サンパウロ州鉄道沿線の主要日本人移植民地概図（戦前）



筆者作成（2016 年 6 月）

〔出典〕外務省通商局『移民地事情』第 1 巻（不二出版、1999 年）、  
伊丹金蔵『在伯同胞発展録』（日伯新聞社、1941 年）、  
半澤典子「開拓鉄道沿線図」（個人所蔵、2010 年）

メディアとしての新聞にとって政治・経済面だけでなく、文化面の充実が購読者拡大策として重要であった。この時代には、初期移民が個人的に日本から持参若しくは取り寄せたわずかな書籍などのほか、すでに日本語新聞がマス・メディアとして存在していた。移民たちは、廉価で

<sup>16</sup> 「予告」『時報』、1921 年 4 月 29 日 第 186 号。

継続性のある日本語新聞を単に生活情報を得る手段としてだけでなく、文字を用いて自己の文芸表現を可能とした紙上文芸ネットワークとして活用した。一方、日本語新聞は、彼らに文芸表現の場を提供することで購読者拡大を図るというように、両者は相互補完関係を保っていた。

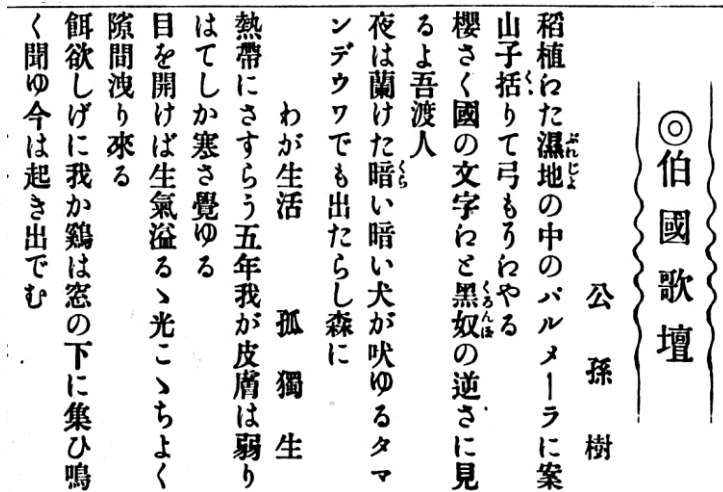
細川周平によれば、ブラジルの日本語新聞に俳句が初めて出現したのは、アメリカ合衆国からの再移民・星名謙一郎が 1916 年 1 月創刊した週刊『南米』であったという<sup>17</sup>。ブラジル日本移民史料館に現存する同紙の最古号（1918 年 1 月 12 日第 103 号）には、懸賞応募俳句が数句掲載されている。その代表的なものは「大苦戦臥薪嘗胆御国のため（英雄）」、「虎の尾をふむ斥候や夜の風（英雄）」という句である。それらはブラジルの情景を詠んだわけではなく、日本を回想して対外戦争での兵士たちの士気をたたえるような戦争回想句である。以後の俳句には「味噌汁や舅加減を嫁に説き（一声）」という祖国回想句のようなブラジルに無縁な句も詠まれている。それらは 19 世紀末から 20 世紀初頭のハワイ移民の句と符合するものであったようだと細川は分析している<sup>18</sup>。移民先・移民年代は異なっているとしても、移民にとって日本への郷愁を表現するには、俳句がもっとも簡便な短詩系文芸であった証といえよう。

星名の新聞創刊直後の同年 8 月、『時報』に先立ち新たな日本語新聞『日伯新聞（以後、『日伯』）』がサンパウロ市内に創刊されると、それらは懸賞金付短歌や俳句の応募を行い、購読者拡大策を講じていた。事実、香山はモンソン植民地時代から『時報』の「伯国歌壇」に、「稲植えた湿地（ブレジョ：brejo）の中のパルメーラ（palmeira：椰子の木）に案山子括りて弓もそえやる」という短歌を投稿している（図 6-2）。この「伯国歌壇」は『時報』最初の短歌掲載紙面であったから、香山はすでに短歌を嗜み、その基本を踏襲しつつ、その中にブラジルの自然や人間生活をカタカナ交じり文体で意図的に表現していたといえよう。そうすることで日本への郷愁だけでなく、ブラジルで生きていく意志を自己暗示させていたともいえる。このような意図は、俳句に

<sup>17</sup> 細川周平『日系移民文学 I - 日本の長い旅 [歴史]』（みすず書房、2012 年）、297、299 頁。

<sup>18</sup> 細川周平、前掲書 17）、299 頁。

図 6-2 公孫樹(香山の雅号)の短歌が掲載された「伯国歌壇」



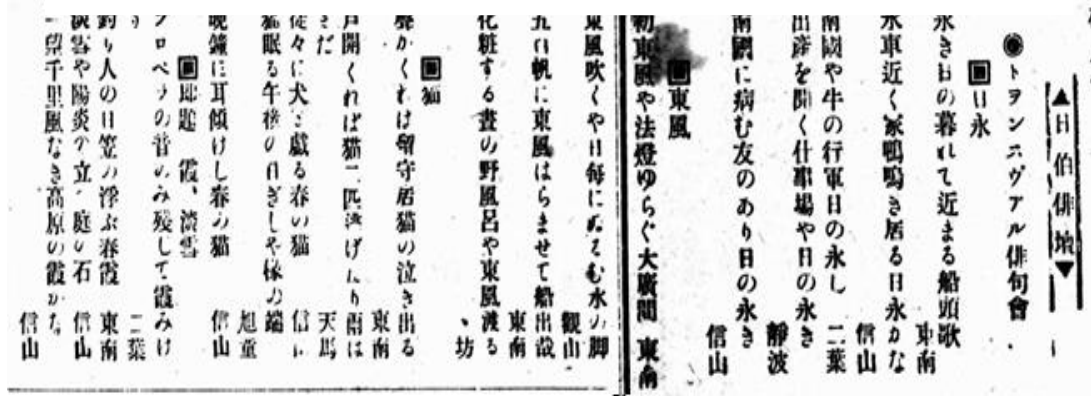
も同様であった。

1924 年、『時報』の「伯国歌壇」に對抗するかのよう、『日伯』が「日伯詩壇」を起ち上げた。その時、同紙は選者無しの『日伯俳壇』も立ち上げ、トランスヴァル俳句会が初めてまとまった俳

『時報』1917 年 9 月 28 日第 5 号第 1 面より抜粋

句を掲載した(図 6-3)。トランスヴァル俳句会とは、モジアナ線セラナ駅にあったトランスヴァル耕地の通訳・監督を務めていた斉藤幸(雅号：信山、長野県生まれ、1895～1976 年。1918 年渡航)が、耕地住民を集めて開いた句会のことである。新聞紙上への俳句掲載を通して耕地住民の親睦と結束、作句者の創作意欲の向上、句会の発展をねらったのであろう。1924 年 10 月 10 日付『日伯俳壇』には、兼題に「日永」・「東風」・「猫」、即題(席題)に「霞」・「淡雪」を掲げ、8 人ほどの作句者による俳句が 18 句ほど掲載されている。

図 6-3 トランスヴァル俳句会の登場した「日伯俳壇」



『日伯』1924 年 10 月 10 日第 392 号第 4 面より抜粋

句題はすべて日本の季語であるが、「南国や牛の行軍日の永し(二葉)」や「一望千里風なき高原の霞かな(信山)」など、ブラジルの生活風景を描写した句もみられた。これらは素人俳句かもしれないが、ブラジル生活を素直に読んでいたから、俳句を愛する新聞購読者には創作意欲をかき立てる刺激になり、新聞社側からすれば素人俳句の掲載は、購読者人口増大策として成功であった。この活動の中にすでに移民の文芸活動の精神的支柱となった新聞俳句の萌芽と、その活動の後方支援をするメディアとしての新聞の存在が読み取れる。このように『時報』の短歌に対して『日伯』は詩や小説への特化、さらには新聞俳句の掲載により、互いに投稿者の差別化と購読者拡大をもくろむという戦略に出ていた<sup>20</sup>。

『日伯』や『時報』に遅れて創刊した『聖報』は、中央2紙への対応策として地方都市での創刊である優位性を生かそうと、1925年の手書き新聞から活字新聞への移行を機に文芸欄充実を目指した「移植民文芸宣言」を発し、独特の「文芸欄」を掲載した。この欄には俳句だけでなく短歌、詩、川柳、童謡など、その時の投稿内容に即した文芸作品が選択・掲載された。『時報』の「伯国歌壇」や『日伯』の「日伯詩壇」とは構成の異なった、一見あいまいそうに見える『聖報』の企画は、投稿者にいつでも自由に投稿しやすい環境を設定していたといえよう(表6-1)<sup>21</sup>。例えば文芸欄のネーミングは、1925-26年の2年間だけでも「聖州詩園」(1925.5.22)、「聖州詩壇」(同.6.19)、「聖州歌園」(同.7.31)、「聖州歌壇」(同.12.11)、「聖州文芸」(1926.1.29)、及び「聖州詩壇」(同.4.2)、そして「聖州歌壇」(同.4.9)というように目まぐるしく変化し、この傾向は1927-28年にかけても同様だった<sup>22</sup>。これは読者から集まる文芸作品が詩や短歌・俳句というように不定であったためで、読者の意識を文芸欄にとどめようとする香山ら編集人の苦勞の跡とみることができる。

<sup>20</sup> 「日伯詩壇」『日伯』、1924年2月22日第361号。

<sup>21</sup> 『聖報』1928年10月26日第445号の文芸欄に「椰子によする」5句を見る。

<sup>22</sup> 1928年11月10日以降、詩歌壇名は消えていく。それまでの投稿者名もペンナ、ビリグイ、プロミッソン、福寿といった地域にほぼ固定化されていた。



### 3-2 新聞俳壇

日本の俳人を選者に立て、日本の俳句形式による投句に選者の添削・選評を加えて成立した本格的な新聞俳壇は、1929 年の『日伯』が木村圭石を選者とした「日伯俳壇」が最初であった(表 6-1)<sup>23</sup>。単なる自由

表 6-1 日本語新聞と移民文芸(1910-1930 年代)

| 新聞名    | 発行期間                 | 創刊者            | 移民文芸(俳句)  |  | 移民文芸(短歌他) |   |
|--------|----------------------|----------------|-----------|--|-----------|---|
| 週刊・南米  | 916-18年              | 星名謙一郎<br>鹿野久一郎 | 1918年     | 俳句(戦争句、懸賞付き俳句)、「大苦戦臥薪嘗胆御国のため」(英雄)。   |           |   |
| 日伯新聞   | 916-39年              | 金子保三郎<br>輪俊午郎  | 1924年     | トランスバール俳句会「南国や牛の行軍日の永し」(二葉)。   | 1924年以前   | 詩や移民小説中心。『日伯詩壇』創設・継続。   |
|        |                      |                | 1928年     | アリアンサ陸軍俳句会「三日月やマモナの露の垂り落つる」(掬二)  | 1924年     | 「詩 都会小曼陀羅帳 珈琲店」(若男)。移民小説等の「創作」欄設置継続。「日伯歌壇」開設・継続。                        |
|        |                      |                | 1929年7-8月 | 圭石「我等の俳句」を3回掲載、「日伯俳壇」(選者:圭石)「草は皆枯れ尽くしたるカンボ哉」(満水)。  |           |   |
| 伯刺西爾時報 | 1917-41年<br>1946-52年 | 黒岩清作           | 1935年以前   | 「文芸欄・学芸欄」あり、随筆・雑詠・詩の掲載、探偵小説。   | 1917年     | 「伯国歌壇」「稲植えた湿地の中のパルメーラ案山子括りて弓もそえやる」(公孫樹)「あかあかと月は昇りぬ故郷の浜辺思はずる広野のはてに」(如星)。 |
|        |                      |                | 1935年     | 「時報俳壇」(選者:念腹)「病みつきし老樹のさまや冬の蝶」(山田空外)。「時報俳壇」:念腹が開始。第1回全伯紙上俳句大会特選:「置き換へし蜜蜂の巣や冬木立」(小坂桜雲)。「なきがらを守りて明けし冬夜かな」(間崎榮)。 | 1918年     | 「元旦の机がざらん花もがなと向日葵の花の太きを切りぬ」(香山)。  |
|        |                      |                |           |  | 1938年以降   | 「文芸」欄に常に短歌コーナー。   |
| 聖州新報   | 921-41年              | 香山六郎           | 1923年     | 「文芸欄・山彦」<br>「大空に雲の影飛ぶ青野原」(MS生)   | 1925年     | 移植移民文芸宣言「日本移植移民文芸を興せ第1回」(K生)。「百頭の牛引きて行くパイアノは水乞ふひまも唄へり恋か」(公孫樹)。          |
|        |                      |                | 1933-35年  | 「聖報文芸壇」欄に念腹の「俳句集閑」および「写生俳句問答」。「聖報俳句:念腹選」。「冬越せし茄子花咲きぬ春の雨」(麗骨)。  | 1931-33年  | 「聖報文芸欄-聖報歌壇」鈴木南樹「柳郷雑詠」:「芭蕉積む鎌倉丸は白き船白き服着し船の人々」(南樹)。                      |
|        |                      |                | 1937年     | 「文芸」欄に「聖報俳壇」復活し「三水会便り」掲載。「レンソすすぎカンナの花に被せけり」(素骨)。「パイネイラの花散る夕流れ星」(素骨)。「墓石をしかと踏まえし蠟燭哉」(素骨)季題分類実施。(植物分類例の不足)     | 1937年     | 最初の移民歌集『移り来て』発刊   |

[用語解説] カンボ (campo): 草原、レンソ (lenço): ハンカチーフ、パルメーラ (palmeira): 椰子、パイアノ (baiano): バイーア州の人、黒人

[参考資料] 栢野桂山「俳諧小史」『ブラジル日系コロニア文芸上巻』(サンパウロ人文科学研究所、2006 年)、池上岑夫・金七紀男他『現代ポルトガル語辞典』(白水社、1996 年)、『日伯新聞』・『伯刺西爾時報』・『聖州新報』各紙

<sup>23</sup> 木村圭石(本名:貫一郎)は1867年愛知県生まれ。1896年東京帝大工学部卒。工業技師として新潟水力電気会社に赴任していた際、佐藤念腹を知り彼の結婚媒酌人を務める。1926年家族で第一アリアンサに入植し、翌年には1924年に移民してきていたアララギ派の歌人岩波菊治(雅号:掬二)宅で第1回俳句会を開き、「おかぼ会」を結成し、短歌俳句総合誌「おかぼ」を発刊。1932年チエテ移住地にチエテ俳句会を結成し、コロニアの俳句王国建設に貢献。1937年サンパウロで「三水会」を結成し俳誌『南十字星』を発刊したが、同誌は1938年6月、圭石の死により3号で休刊となった。栢野桂山「俳諧小史」『ブラジル日系コロニア文芸』上巻(サンパウロ人文科学研究所、2006年)、34、160頁。

参加の「俳句欄」ではなく、日本の俳句形式による撰者の添削・選評を伴う「俳壇」であったため、投句者は150名に及ぶほどその反響は大きかったようだ。1931年当時、文芸欄に決め手を欠いていた香山の『聖報』にも俳句愛好者の一人・橋浦昌雄が、佐藤念腹という人物の指導の良さを「佐藤健二郎（雅号：念腹）君は、俳句界ホトトギス派の俊英である。[…] 同氏の俳壇を聞き 53 歳初めて作句を志す。[…] 拙句に就て同君の添削を受くるに頗る得るところあり、[…] 同好の士幸ひに諒とせられよ」（『聖報』1931年6月5日 No. 579「文芸」）と評した投稿記事が掲載されている<sup>24</sup>。

佐藤念腹（本名：謙二郎、1898-1979年、以後、念腹）は、新潟県北蒲原郡笹神村の生まれ。高浜虚子の俳句結社ホトトギスに所属し、1921年ホトトギス初入選する。1927年、念腹はホトトギス派俳句普及の目的をもってサンパウロ州第2アリアンサに国策移民（家族移民）として入植した。しかし、サントス港から入植目的地のアリアンサへ向かう途中、ソロカバナ線の列車正面衝突事故に遭遇し、念腹の弟が即死し本人も家族も負傷するというハプニングに見舞われた<sup>25</sup>。農業の担い手となるはずであった弟を亡くした状態での入植であったことから、彼は虚子の餞の句「畑打って俳諧国を拓くべし」を生涯の使命として、農牧畜業の傍らブラジル各地にホトトギス派の俳句を浸透させる俳句普及活動に徹したのであった。この念腹の名声を『聖報』も取り込んで文芸欄を充実させようとしたのであろう。香山は1933年に念腹を選者とする「聖報文芸壇 聖報俳句」を新設している（図7-4）。同年9月1日付同紙には、念腹が投稿者の質問に答えたり俳句の添削指導をしたりしている一文がある。

<sup>24</sup> 佐藤念腹（本名：謙二郎）：特に戦後の活躍が目覚ましい。1954年、バウルー市に移転し、1979年、同市で死没。俳誌「木陰」を主宰し、『木陰雑詠選集』、『念腹句集』他、多くの俳句関連著書がある。パウリスタ新聞編『日本・ブラジル交流人名事典』（五月書房、1996年）、113-114頁。

<sup>25</sup> 外務省「アリアンサ農園行移民列車衝突事件」『本邦移民関係雑件伯国ノ部』、J.1.2.0.J2-1（外交史料館、1927年）。  
「アリアンサ行殖民の特別列車正面衝突の大悲惨事」『聖報』1927年5月27日 第282号。死者5名、負傷者26名。在伯邦人未曾有の椿事。



私共は客観写生を高唱して居ります。季題を詠ずる文学としての俳句は […] 客観写生でなければ

なりません。主観の句は

[...] 低級になるか旧套に墮するのが常であります。

これは 400 年の俳句の歴史が最も雄弁に語って居ります (聖報文芸壇)<sup>26)</sup>。

しかし、念腹の指導欄はわずか 2 年足らずで廃止となった。その原因は、香山と念腹とのブラジルの俳句に対する考え方の相違に起因するものであった。

その後『時報』も 1935 年に初めて「時報俳壇」を創設し、念腹を選者に 40 名の投句者からなる第 1 回全伯紙上俳句大会を行っている (図 6-5)。図 6-5 念腹指導「時報俳壇と時報俳信」1930 年代初頭には、全ブラジルの俳句会は 40 以上、俳句人口は 400 人ほどであった<sup>27)</sup>。

図 6-4 「聖報俳句(4) 佐藤念腹選」



『聖報』1933 年 9 月 22 日第 795 号第 4 面より

図 6-5 念腹指導「時報俳壇と時報俳信」



『時報』1935 年 7 月 24 日第 1102 号第 4 面より抜粋

<sup>26)</sup> 「聖報文芸壇 俳句繁閑 (8) 念腹選」『聖報』1933 年 9 月 1 日 No. 789。

<sup>27)</sup> 移民 70 年史編纂委員会『ブラジル日本移民 70 年史』(ブラジル日本文化協会、1980 年)、253 頁。

## 第4節 ブラジル俳句界の繁栄と分裂

### 4-1 俳句界の繁栄

俳句を好む移民たちは同志を募り、その表現と鍛錬の場として句会を作るのが一般的である。初期移民による移民俳句は、開拓途上の困難に打ち負けた挫折感、それを克服した時の歓喜と達成感、生活のなかに自然に溶け込んでくるブラジル風物の発見と喜び、時に恐怖といったさまざまな感覚を受容しながら、日本の俳句の基本を踏襲しつつ創作されていた。上塚と香山が自由に作句し新聞紙上に掲載していた 1920 年代初頭においては、ブラジルの日本人移民社会に通ずる表現であれば、その俳句の意図するものは読者に理解されていた。そのような中から仲間意識による俳句会が生まれ、1924 年 10 月に結成されたトランスヴァール俳句会がその嚆矢とされる<sup>28</sup>。移民開始以来 15 年間、彼ら初期移民たちには俳句の達人など存在せず、自由に俳句を楽しんでいたといえよう。

移民俳句が隆盛を極めるようになった背景には、日本の俳句結社で鍛錬を受け、国策移民としてブラジルに渡ってきた俳人たちの活躍があったことは否めない<sup>29</sup>。1926 年、家族で第一アリアンサに入植した木村貫一郎（雅号：圭石）、翌年の念腹がそうであった。上塚や香山らより 20 年遅れての国策移民であった念腹は、俳句もホトトギス派俳句に徹底させようと厳しく規制したのである。すでに初期移民たちは自己の農業基盤を確立しようとしていた時期であったため、彼らは一方で日本俳句を歓迎しつつも、念腹の俳句に対する厳しい規制には疑問を持つようになっていた。その疑問はある意味で念腹という国策移民がホトトギス派俳句を正統派と自称し、初期移民の楽しんでいた従来のブラジルの俳句を邪道として徹底的に排除しようとした行為に対する、初期移民知識人たちによる反発であったと受け止められる。

念腹は俳句活動を展開するにあたって、ホトトギス派の花鳥風詠と五・七・五の定型句の鉄則を守る客観的俳句であるべきと強く指導した。その結果、俳句愛好者は自作句が選者の添削指導でより良い俳句へ

<sup>28</sup> 細川周平、前掲書 17)、300 頁。

<sup>29</sup> 1924 年以降の日本国政府の移民政策により、渡航費補助を受けてブラジルに渡航した農業移民。それ以前の初期移民に対比させた呼称。

と変化することに喜びと満足感を感じ、さらに俳句活動に力を入れるようになっていた。前述した 1931 年 6 月 5 日の橋浦の『聖報』への投稿記事などは、その好例といえよう。

1929 年以降、圭石も念腹も初期移民たちから俳句指導者として尊敬されて俳句会を結成し、新聞俳壇でもその選者として優遇された。特に念腹は、日本の俳句をブラジルに定着させる原動力になった人物として「念腹先生」と称されるようになった。

#### 4-2 俳句界の分裂と香山の俳句観

『聖報』は、移民たちからは尊敬され始めていた念腹の指導を、1933 年に受け入れて「聖報俳壇」を新設したにもかかわらず、2 年足らずでそれを中止した。なぜ中止になったのか、その理由として、第 1 に、念腹によって移入された日本のホトトギス派俳句の厳格さ。第 2 に、日本の俳句界の分裂構図がブラジル俳句界にも反映。第 3 に、初期移民知識人・香山の国策移民・念腹への潜在的区別意識など、香山と念腹の俳句観の相違などがあげられる。

第 1 について、香山は、ブラジル俳句において花鳥諷詠と客観写生は当然であるが、明確な四季のないブラジルで日本の季語を強調するのはブラジルの風土にそぐわないと疑問を呈した。日本の国土面積の 23 倍もあるブラジルでは地域による自然環境は異なり、日本とほぼ同面積のサンパウロ州内でも日本の四季と同じような気候の見られる地域は限られている。現に香山らの活動の中心地であったバウルーは、サンパウロ市から北西へ 300km も離れた内陸部に位置し、サンパウロ市周辺とは異なる亜熱帯性の気候地域になる。このような地域で、日本の季語に類似する自然の様相を詠ませようとするのは無謀であると、香山は念腹に反発したのだ。香山は、ブラジルの自然に適応した生活から新たなブラジル季語を見出すことに、ブラジル俳句の特性と意義を求めたといえよう。そのためには、ブラジル俳句はカナ交じりや字余り、時には無季でも致し方ないと理解したといえる。さらに香山は、ホトトギス派俳句会に厳然として存在した句会の主宰と弟子といった縦のつながり・すなわち師弟関係も断ち切り、自由に作句することを移民たちに望んだ。そ

こには他からの強制を嫌い、自由な作句を好んだ香山の個性が表出していた。結果、香山は念腹の指導を拒否し、念腹は香山の俳句を田舎の新聞記者、田舎者（いなかもん）の泥臭い月並俳句でしかないとして無視した。実際、念腹を選者とした時期の「聖報俳壇」に香山の俳句は全く見られず、圭石を選者とする 1937 年 1 月の三水会吟行では「日本の蓮移して花の咲かぬなり」を詠み、「聖報俳壇・三水会便り」の中にも「ハンモック片足垂れてふるる土（素骨）」が登場する。素骨は当時の香山の雅号であった。以後、毎回のように『聖報』の「三水会便り」には素骨の句が掲載されていることから、香山や圭石の俳句観と念腹の俳句観の相違が認識される<sup>30</sup>。

第 2 について、香山と念腹の俳句観の相違は、日本の俳壇が正岡子規（1867 -1902 年）の死後、虚子を中心とする「ホトトギス定型律派」と水原秋櫻子を中心とする「新興俳句運動派」に分裂したことに由来する。1931 年、虚子の客観的写生俳句に対し、秋櫻子は自由律や無季俳句も尊重する主観的写生俳句の新興派俳句運動を展開し、ホトトギス派は分裂した。この分裂の系図がブラジル俳句界にも影響を及ぼしたのである。圭石は秋櫻子派に属し、ブラジルの俳句普及のためには「誰でもどのような俳句でもよい」とする主観的写生俳句論を主張し、念腹の客観的写生俳句と子弟関係に基づく作句に異論を唱えたのであった<sup>31</sup>。結果、1933 年に圭石と念腹は決別した。この分裂問題で香山は、圭石の俳句思想へと俳句観を変化させたといえる。

第 3 について、香山には上塚と共に第 1 回移民船乗船者として、日本の俳句をブラジルに導入した最初の移民知識人の一人であるとする潜在的プライドが存在していたと考えられる。20 年後の農業移民・念腹が、日本定型句を強要する姿勢を許容できない香山の心理的葛藤、たとえ田舎臭くともブラジルの俳句を立ちあげてきたのは初期移民知識人であるといった心理が働いていたといえる。

#### 4-3 季題収集

<sup>30</sup> 「三水会便り」『聖報』1937 年 1 月 26 日、第 1192 号、4 頁。

<sup>31</sup> 「我等の俳句」『日伯』1929 年 7 月 18 日、第 633 号。8 月 8 日、第 636 号。

1934 年 10 月、サンパウロに『聖報』社を移転していた香山は、1937 年にサンパウロ総領事市毛孝三（雅号：暁雪）が主導し、圭石を選者とした俳句会「三水会」に入会している。三水会とは、毎月第 3 水曜日に句会を開催しようではないかとの市毛総領事の提案から名づけられた句会名で、誰でも自由に参加できることをその信条としていた<sup>32</sup>。その活動のなかで、サンパウロ市内に存在した句会の「三水会」と「落穂会」の選者がどちらも圭石であったことから、香山は 2 つの句会の合同を提案し圭石と市毛総領事両者の合意を取り付けていた。市毛総領事は「2 つの句会の会員が一席でやれば賑やかでもあり、張合いも出るのでそうしよう」と推奨した<sup>33</sup>。結果、2 つの句会は合同し、サンパウロ市内の日本クラブで定例句会を開くようになった。香山は、市毛総領事はサンパウロ市のブラジル文芸界に「日本俳句は世界の最短詩である」と紹介した最初の外交官であった、と評している<sup>34</sup>。

その会の俳句集『南十字星』第 2 号(1938 年 3 月 10 日発行)に、香山の 6 句が掲載されている。おもな句は「霸王樹の蔭に野風呂の据えてあり」、「綿の芽は殻をかつげり花曇り」、「酒倉や裏にはマモン熟れてあり」などである<sup>35</sup>。これらの句は、香山の戦前の俳句を知るうえで貴重な資料となっている。1 句目の霸王樹とはサボテンのことであるが、サボテンと野風呂の取り合わせには、日本俳句では発想できない野趣味豊かな大胆さがある。2 句目は、殻となってしまった親豆、すなわち母国日本を栄養源として、今ブラジルの大地に育つ綿の芽、すなわち日本人移民がおり、その将来を不安視する移民の心境を花曇りでまとめ上げた比喻を交えた佳作であった。3 句目の酒倉とは、ブラジルのサトウキビを原料としたアルコール飲料のピンガ (pinga) の貯蔵庫を指し、マモン (mamão : パパイアの果実) を柿に置き換えれば、酒倉の裏に柿の実が熟れている日本の情景そのものになる。酒倉とマモンを通して日本

<sup>32</sup> 三水会の理念が誰でも自由に参加できることをその信条としたため、発会当初参加を予定していた念腹は入会しなかった。三水会は戦前には『南十字星』、戦後は『叢』、『花筏』などの句誌を発行していた。

<sup>33</sup> ジェニー脇坂「聖市の俳句会」『清書原稿 A』(私家本、1976 年)、1017 頁。

<sup>34</sup> ジェニー脇坂、前掲書 33)、1019 頁。

<sup>35</sup> 3 句ともジェニー脇坂、前掲書 6)、37-38 頁。

への強い郷愁を詠い上げたと受け止められる。これらの句を通して香山は、母国日本を懐かしみ尊重する気持ちに変わりはないが、自分たちはブラジルの自然を愛しブラジルに根付く日本人として生きていくのだといった前向きの姿勢を表象していた。それは初期移民知識人として、また、ブラジルを愛する日本人移民としての香山の素直な言動の表象であった。

三水会は、サンパウロ市郊外でたびたび吟行を行っていた。吟行をするたびに、香山は日本とブラジルの自然の花鳥風物の違いを認識するようになり、「俳句も日本の伝統的季題ばかり尊重しては、ブラジル本来の生活俳句は生まれない」と考えるようになっていった<sup>36</sup>。この考えを理解した市毛総領事は 1937 年末、ブラジル自然俳句の季題分類を研究しようと総領事官邸に香山素骨、海外興業社員・中野陽水、総領事館領事の加藤芭川と同領事館農業技師の北村豊次等 4 人を集め、日本と同程度の面積のあるサンパウロ州に限定した季題収集の研究を始めている。その季題分類表にはブラジル季題の一部として 61 種類が収集されていた（表 6-2）<sup>37</sup>。なお、参考資料として表 6-2 中のカタカナ表記のブラジル季題を日本名に訳し一覧表とした（表 6-3）。

季題の動物欄には日本には馴染みのない動物名が見られ、それらは食料となるもの・人間に害を与えるもの・観賞用などに区分できる。例えばマンジューバはカタクチ鰯を指し、ドウラードやランバリー等の魚と共に貴重な蛋白源となっていた。また、マラリア蚊や草虱・砂蚤などは農作業中に被害にあうため移民たちから恐れられていた。プレギッサやアララなどは、癒し系の動物であった。

植物欄の季題には、表現は違っても日本でも見られたり栽培されたりしている花や実が多く、移民たちが生活の糧として日本から持参したり取り寄せたりした種を大切に育て、食用や観賞用に栽培していた様子がわかる。

---

<sup>36</sup> ジェニー脇坂、前掲書 33)、1023 頁。なお『聖報』1937 年版によると、吟行はサンパウロ市郊外の森や植物園・公園などで行われ、参加者は 10 名前後であった。

<sup>37</sup> 香山六郎『移民 40 年史』（私家本、1949 年）、331 頁。

表 6-2 ブラジル季題分類(1937 年当時)

| 月   | 動物                                      | 植物                                 | 行事・生活  | 天文・時候                              |
|-----|---|------------------------------------|--|------------------------------------|
| 1月  | マンジューバ、蚊、マラリア蚊、でで虫                      | 蓮の花、マンガ、アバカテ、合歓の花、マモーナ、ジャンプ、キアボの花  | お年玉、独楽回し、ブラジル雑煮、除草、ハンモック、蚊帳、瓜なます、ソルベッチ               | 元日、初日<br>薫風、短夜<br>極月               |
| 2月  | タライーラ                                   | カーナの花、コッケイロ、パイネイラ、病葉、花糸瓜、吊り蘭       | カーナバル、珈琲熟る、汗、行水                                      | タ立、木下<br>闇、秋近し                     |
| 3月  | 蟹、蟻螂、油虫、ウルブー                            | 朝顔、鶏頭、アバカテ、胡瓜                      | カーナバル、珈琲熟る山視、視察、鰯焼く                                  | 秋めく、<br>夕焼け                        |
| 4月  | 鯛                                       | アーリオ、珈琲の実、今年米、ミーリオ、棉、草の花           | 獵始(15日)、天長節(29日)、山立て、棉摘み、豚追ひ、豚追ひ出す、パモーニャ             |                                    |
| 5月  | ツカーノ、アンタ                                | コウベ、苔、蜜柑、椰子の葉、木の実、熟柿、種キアボ、棉の花、珈琲の花 | 入植、移民、移民列車、棉摘み、豚追ひ出す、山立て、稲刈り、夜学                      | 正秋、秋空、<br>秋の電、霧                    |
| 6月  | タツ、猪、山豚、クツツナ(山猫)、ピラーニャ、パクー、ドウラード、梟、鰐    | 蜜柑、草の実、熟柿                          | サン・ジョアン、サン・ペードロ(29日)、移民列車、山伐り、カーナ刈り、マンジョカ掘る、珈琲採集、モコト | 秋の水、夜<br>長の灯                       |
| 7月  | ドウラード、アンタ、山猫、ツカーノ                       |                                    | 瓢箪忌(6日)、山伐り、マンジョカ掘る、珈琲採集、おでん                         | 冬野原、風<br>邪、冬夜、冬<br>の蝶、寒月、<br>霜の朝   |
| 8月  | 鰐                                       | イペー                                | 終獵、山焼、珈琲採集、牛渡し、牛追ひ、冬休み、耕地替え、カフェ摘み、外套、春の風邪、毛布         | 冬木立、<br>冬木空                        |
| 9月  | 鰐、ウルブー                                  | 茄子の花、青芝、花珈琲                        | 山焼、山崩し、珈琲植え、ムダンサ(転耕)、配耕、ぶらんこ                         | 春の雨、<br>春泥、春寒                      |
| 10月 | ランバリー、蛇、蜥蜴、草虱、サビア                       | むかご、シュシュ、パラナ松、ピニオン、珈琲の花(花珈琲)、青蜜柑   | 珈琲植え、ムダンサ(転耕)、配耕、棉撒、茶摘                               |                                    |
| 11月 | 仔牛、仔馬、仔山羊、タマンズーア、蜚、蛙、プレギッサ、ランバリー、砂蚤、アララ | 蘭、椰子の花、白百合、ジャボチカバ、マラクジャ            | 慰霊祭(1日)、簾女忌(21日)、棉撒、茶摘、除草、汗、昼寝、夏休み、ふらここ              | 木立、青野原、<br>若葉径 春名<br>残、開け易<br>し、涼し |
| 12月 | 鰐の子、仔蛇、蜚、蟻、蝸牛                           | 棉の花、ねむの花、コスモス、仙人掌、西瓜(メランシア)        | クリスマス(25日)、除草、年の暮、棉の間引き                              | 初夏、青嵐師<br>走                        |

\* 複数月に表記されている用語はその時期に卓越した季語。太字表記は季題研究掲載季語。

〔出典〕 香山六郎 『移民40年史』(私家本 1949年)、331頁、  
香山六郎 『聖州新報』(聖州新報社、1937-1938年版)

表 6-3 ブラジル季題の日本語名（1937 年当時、三水会俳句より）

|    | カタカナ表記 | ブラジル語     | 日本語名        |    | カタカナ表記 | ブラジル語      | 日本語名        |
|----|--------|-----------|-------------|----|--------|------------|-------------|
| 1  | マンジューバ | manjuba   | カタクチ鰯       | 17 | ジャンブ   | jambu      | キク科の植物      |
| 2  | タラグイーラ | taraguira | (動)カラードスイフト | 18 | キアボ    | quiabo     | オクラ         |
| 3  | ウルブー   | urubu     | 黒禿鷹         | 19 | カーナ    | cana       | サトウキビ       |
| 4  | ツカーノ   | tucano    | (鳥)オオハシ     | 20 | コッケイロ  | coquero    | 椰子          |
| 5  | アンタ    | anta      | (動) 猯       | 21 | パイネイラ  | paineira   | トックリ木綿      |
| 6  | ピラーニャ  | piranha   | (魚)ピラニア     | 22 | アーリョ   | alho       | にんにく        |
| 7  | パクー    | pacu      | 淡水魚の名前      | 23 | ミーリョ   | milho      | とうもろこし      |
| 8  | ドウラード  | dourado   | (魚)ドラード     | 24 | コウベ    | cobe flor  | カリフラワー      |
| 9  | ランバリー  | lambari   | (魚)ヒメハヤ     | 25 | イペー    | ipê        | ブラジルの国花     |
| 10 | アララ    | arara     | コンゴウインコ     | 26 | シュシュ   | shushu     | 糸瓜          |
| 11 | ビッショ   | bicho     | 砂虱          | 27 | ピニョン   | pinhão     | 松の実         |
| 12 | プレギッサ  | preguiça  | (動)ナマケモノ    | 28 | ジャボチカバ | jaboticaba | 木ぶどうの実      |
| 13 | タツー    | tatu      | (動)アルマジロ    | 29 | マラクジャ  | maracujá   | パッションフルーツ   |
| 14 | マンガ    | manga     | (果実)マンゴー    | 30 | ソルベッチ  | sorvete    | アイスクリーム     |
| 15 | アバカテ   | abacate   | (果実)アボガド    | 31 | パモーニャ  | pamonya    | トウモロコシ粉の練菓子 |
| 16 | マモーナ   | mamona    | (植)トウゴマ     | 32 | マンジョカ  | mandioca   | キャッサバ、タピオカ  |

参考資料：池上岑夫・金七紀男他『現代ポルトガル語辞典』（白水社、1996 年）  
香山六郎『聖州新報』（聖州新報社、1937-88 年版）

行事・生活欄の季題には、日本の生活習慣に沿った天長節などと共にカタカナ表記の季題である「カーナバル」・「サン・ジョアン」・「サン・ペードロ」などが散見され、カトリックの国らしい宗教的祝祭が日本人移民の生活にも何らかの影響を及ぼしていたといえる。二世の誕生・成長に従いブラジルの生活習慣は自ずと個々の生活領域にも反映されるようになり、その重要性を増してきたことがわかる。コーヒーの収穫時期に合わせるようにコーヒー農園に配耕されていた彼らのブラジル生活スタート時点の活動は、特に印象深いものであったから、移民列車・入植のような言葉が季題として尊重されていたといえよう。さらに、移民たちがコーヒー園労働者から借地農や自営農となる前後の苦しみや喜びは、コーヒー採集やカフェ摘み・ムダンサ（転耕）・山伐り・山 焼



き・山崩し・コーヒー植え・除草など多数の季題によって表現されている。これらの季題からは、移民後 30 年も経過するなかで移民たちが日本の生活様式や生活文化を維持・変容させながら、次第にブラジルの生活様式や生活習慣に順応していかざるを得なかったその覚悟も読めてくる。俳句からも移民たちの文化変容を理解することができるのである。

戦前にブラジルの季題を収集し分類したこの表は、ブラジル日本人移民が作成した最初の分類表であった。このことから、日本語を用いたブラジル生活俳句を創作・推進するための、市毛総領事を中心とした香山たち移民知識人の業績は、戦後の 1950 年代まで貴重な資料となっていた。季題収集作業においても香山はパイオニアの一人だったのである。

## 第 5 節 ヴァルガス政権下での日系社会と俳句

1930 年、ブラジル南部から進出してきたジェツリオ・ヴァルガスは、統一国家の建設を目指し革命を起こした（ヴァルガス革命）。1934 年 7 月、ヴァルガスは連邦政府の州政府に対する優位性を示した新憲法を制定し、ブラジル人による国民国家建設を掲げた。この法律に連動してブラジル政府は、外国からの移民数を過去 50 年間ににおける入国者数の 2% の限度を超えてはならないと規定した、いわゆる「外国移民 2% 割当法」を成立させた<sup>38</sup>。在ブラジル日本人たちは、これを「排日法」と受け止めた。この法律を熟慮した香山は、1934 年 10 月末、サンパウロへの移転決意を表明し実践している<sup>39</sup>。50 歳を迎えようとしていた香山は、14 年住み慣れたバウルーを後にしてサンパウロへ進出するその意気込みを「歳五十我に天下の春が待つ（素骨）」と俳句にしたためていた<sup>40</sup>。この句には、香山のサンパウロ進出にあたっての気持ちが凝縮されていた。すなわち「我に天下の春が待つ」の心境に意味がある。従来は田舎の新聞人でしかなかった自分にも、既存の中央紙である『日

<sup>38</sup> 亜米利加局第二課「第 67 回帝国議会説明参考資料」議 AM-4、A. 5. 2. 0. 1-3（外務省、1934 年）、368-369 頁。この法律を日本政府は「外国移民二分制限法」と称している。

<sup>39</sup> 「バウルー市から聖市へ本社移転に就て」『聖報』1934 年 10 月 23 日 第 904 号。  
なお、聖市とはサンパウロ市の略記。

<sup>40</sup> 間嶋稲花水『ブラジル俳句百年』（ブラジル俳文学会、2008 年）、53 頁。素骨は香山の俳号。

伯』や『時報』と対等に経営競争することで、中央の在ブラジル日本人知識人の仲間入りが果たせるという香山の内なる野望が垣間見られるからである。三水会への参加もその一つだったといえよう。

しかし、1937年11月のヴァルガス独裁政権による新国家体制(Estado Novo)下での外国語新聞・雑誌発行取締規制公布により、『聖報』紙上から聖報俳壇・三水会俳句の華やかな一面は陰を潜めるようになってしまった。その後1941年の外字新聞発行禁止令<sup>42</sup>によって、日本人移民の文芸活動は完全に停止させられ、香山も『聖報』の廃刊を、また、黒石の『時報』も停刊を余儀なくさせられた<sup>43</sup>。1941年12月8日の日米開戦以後、サンパウロ州保安局(Polícia Política Social)は1942年に敵性国民取締り令を公布し、日本語で記されたものの頒布、3人以上の集会の禁止や通行許可証なしの外出禁止・転居の禁止などの制限を加えたため、俳句会は開催不能となり俳句会誌も発行停止となった。この取締令とほぼ同時にブラジルは、日本を含む枢軸国との国交を断絶、在外公館は閉鎖された。結果、1942年7月に日本政府代表は帰国し、日本移民を棄民とまで思わせる危機感を在ブラジル日本人に抱かせた。1945年6月のブラジルの対日参戦、さらには同年8月15日の日本の敗戦などを香山は、在ブラジル日本人の一人として否応なく受け入れざるを得なかったのである。

## 第6節 小括

現在、ブラジル俳句の集大成者は佐藤念腹であったといわれるが、本章では、念腹以前にすでに初期移民たちによって、俳句や短歌などの短詩系文芸が創作されていたことを明らかにし、彼らの日本観の考察を試みた。1908年のブラジル到着当初から香山は、日本への郷愁(saudade: サウダーデ)や敬意の念(respeito: ヘスペイト)を終生変わらず持ち続けていた。彼の俳句全般の底流には常にこれらの観念が存在していた

<sup>42</sup> 外務省「各国に於ける新聞・雑誌取締関係雑件伯国の部」(外交史料館、1941年)、A.3.5.0.6-16。

<sup>43</sup> 「廃刊の辞」『聖報』1941年7月3日、第2236号。『時報』は同年8月末をもって停刊したが、1946年12月に復刊した。『日伯』は、社主三浦鑿のブラジル国外追放により1939年に廃刊となっている。

ことから、香山の日本人精神（大和魂）が晩年まで少しも揺らいでいなかったといえよう。しかし、当初香山にとって心地よい刺激であったはずの俳句は、1927 年以降、念腹主導のホトトギス派俳句が日本から流入されてからは、念腹の強硬な指導姿勢と相まって、念腹は香山及び三水会を中心とした仲間たちの反目の対象ともなっていた。従来の香山たちの俳句を念腹に月並みな土臭い俳句と断じられた時、日本俳句のルールをそのままブラジルに導入しようとした念腹に対し、香山たちは真っ向から対立していた。それは初期移民知識人としてのプライドを持ち、日本語新聞というメディアを発信していた香山にとって、ブラジルに根付かせた日本俳句の源泉を保守しようとする抵抗であった。ホトトギス派俳句会の厳格な規制は、香山やその仲間にとって受け入れがたいものであったのである。

ブラジルに生きる日本人として香山は、祖国愛の精神を失わず、日本俳句の基本を理解しつつもブラジルの風土に合致したブラジル俳句を創作して、日本俳句を越えたブラジル俳句の完成を願った日本人であった。1937 年に市毛総領事のもとで、「ブラジル季題」を収集・提示していた行為に、その姿勢が読み取れる。すなわち、香山の日本観とは、ブラジル俳句の原点は日本にあるが、ブラジル俳句はその地に生きる者の生活句であって、日本語は、俳句創作上の最良の表現手段であったと自己認識し、さらに、日本では敬遠されるカタカナ混じりや字余りなど自由な作風も、本格的に俳句を学んでいない多くの移民たちには許容しやすかったことを他者に知らしめたかった点にある。なぜなら、ブラジル・ポルトガル語を十分に理解できない移民たちにとって、唯一自己表現が可能な言語は日本語しかなかったからである。

本章では初期移民たちの日本観を、ブラジル行第 1 回移民船笠戸丸の乗船者で自由渡航者であった香山六郎の言動をとおして解明しようとした。その解明のために、短詩系移民文芸で特に親しまれていた移民俳句を事例とした。移民俳句と日本語新聞とのかかわりをとおして、第二次世界大戦までの初期移民の文芸活動の精神的支柱と後方支援策の探求を試みてきた。

初期移民たちは、俳句を創作し新聞紙上に投稿する行為により、自己

の存在をアピールし、日本人としての仲間意識の確認と安堵間の認識、自己表現力の鍛錬と向上を望んでいたのだった。これらがブラジルに生きる日本人移民の精神的支柱の一つになっていたのである。さらに、新聞俳句や新聞俳壇・俳句会などへの投稿と自由参加は、ブラジル俳句創作の後方支援策となっていたのであった。これらは相互補完関係を保ち、日本語を介在してブラジルに生きる初期移民たちの日本人としてのアイデンティティの確認を表象していた。

香山の俳句は、次女のジェニー脇坂の手によって纏められてきた。これがジェニー脇坂『香山毒露俳句集』である。終戦直後、香山自身の手によって『聖報』が焼却されてしまったため、俳人香山素骨の実態は今までほとんど知られていなかった。今回の研究をとおして、筆者は1937－1938年の『聖報』紙上の聖報俳壇や三水会便り他の中に、36句もの香山素骨の句を確認することができた。ジェニー脇坂自身まだ発掘・整理・分析が進んでいない香山の文芸資料の収集と早期分析への協力が、今後の課題となる。

## 第7章 コーヒー干害低利資金貸付問題と移民政策 —1920-30年代のブラジル・サンパウロ州を中心に—

### 第1節 初期移民による請願運動と日本政府

前章では、ノロエステ地方の初期移民たちが、日本の文芸活動をブラジルに取り込みブラジル化する過程での苦労と混乱を、俳句を通して解明した。本章では初期移民たちが農業面でどのような活動をし、ブラジル農業開発に貢献する基盤を構築してきたのか、彼らの結束を示す事例を通して解明する。

すなわち、サンパウロ州ノロエステ地方の初期日本人移民たちが、コーヒー栽培を基幹とした独立自営農民へ移行したばかりの時期に、霜害、干害など自然災害から被るダメージは、彼らの農業経営を揺るがす事態にもつながった。1924年末の大干害時には、同州ノロエステおよびソロカバナ地方の独立自営農民たちが、日本政府へ救済資金を求める請願運動を展開した。これに対し日本政府は1926年3月末、コーヒー干害救済低利資金85万円の貸付けを決定した。日本政府が在ブラジル日本人移民に低利資金貸付を行ったのは、この事例だけであった。

サンパウロ州内の初期移民はコーヒー園労働者が中心であり、移民の主目的は生活資金確保のための一時的出稼ぎの傾向を帯びていた。彼らは契約期間を満了もしくは満了以前であっても、収入次第で新たな土地への移動をいとわなかった。彼らがもっとも集中したのが、サンパウロ州北西部に当るノロエステ地方であった。この地方には1920年代には自己の農園を所有しようとした独立自営農民が集中した。

1924年末、サンパウロ州ノロエステ地方を中心に発生した大干害に際し、同地方の独立自営農民たちは結束して日本政府へ救済資金の請願運動を展開した。これに対し日本政府は、1926年末から日本人移民、主として独立自営農民に対して「コーヒー干害被救済低利資金85万円(以下、八五低資)」を直接貸付けた。在ブラジル日本人独立自営農民による請願運動は1922年と1930年にも存在したが、日本政府が資金貸付に応じたのは、この事例だけであった。

なぜ、どのようにして独立自営農民は干害救済を日本政府に請願し、要求を勝ち得たのか、また、なぜ日本政府は「八五低資」にだけ対応したのか。この課題を解明することで日本政府の移民政策の一端を知ることができるのではないかと、また、請願運動の経験が、独立自営農民たちに、ブラジル社会で生き抜くためのどのような方策を創出させたのかを理解することができるのではないかと考えた。

「八五低資」に関する記述は、香山（1934）に初見する<sup>1</sup>。ノロエステ鉄道の起点であったバウルー在住の香山には、1924 年当時のコーヒー大干害は地元の出来事であったことから、より詳細に実態を把握し、『聖報』にも随時関連記事を掲載し、地域住民との情報交換を密にしていた。竹崎（1940）は、上塚周平（以下、上塚）と上塚司の書簡を分析しながら日本政府への請願運動の経緯を詳述しており、上塚と日本との関わり方を知る手がかりとなる<sup>2</sup>。清谷（1999）は当時の主要日本語新聞であった『日伯』と『時報』および『聖報』の請願運動に関する 3 社の論調を比較し、ノロエステに拠点を置く『聖報』の地域重視型の推進論、サンパウロ市に拠点を置き、『聖報』の論調に対立する『日伯』と慎重論を唱える『時報』の論調を詳述している<sup>3</sup>。しかし、当時の論調の多くは日本政府の関係文書の確認が容易でなかったこともあり、情報公開が可能となった現代社会でのより正確な史実表記には及ばない。

本章では、帝国議会説明参考資料や衆議院委員会議録など外務省関係史料、サンパウロ州内の主要日本語新聞などを参考にし、なぜ日本政府は資金貸付を行ったのか、その背景には何があったのか、日本政府の移民政策の一端と、資金貸付を受けた自営農民たちが、以後どのような農業経営を模索していたのか、解明を試みようとするものである。

## 第 2 節 八五低資問題の発端：コーヒー干害と土地売買

外務省通商局 1923 年 2 月時点でのサンパウロ州における外国人農場所  
有状況調べによると、農場総数 79,169 のうち日本人所有の農場数は

<sup>1</sup> 香山六郎『在伯日本移植民 25 周年祈念鑑』（聖州新報社、1934 年）、597 頁、625 頁。

<sup>2</sup> 竹崎八十雄『上塚周平』（上塚周平刊行委員会、1940 年）、317-319 頁、350-354 頁。

<sup>3</sup> 清谷益次『新聞は移民にとって何であったか(二)』（サンパウロ人文科学研究所、1999 年）、3-5 頁。

1,167 でサンパウロ州全体の 1.5%、農場面積は 1,074 万 8,987ha でわずかに 0.4% (43,239ha) にすぎず、1908 年の移民開始から 15 年経過した日本人の農業経営は確立していたとは言い難い<sup>4</sup>。その日本人農場の主作物はコーヒーであった。コーヒーは幼木を植栽してからおよそ 3 年で成木となり結実する。幼木や成木の開花時に霜害に見舞われると、霜害の程度にもよるが、新芽は枯死し 2.3 年は結実しない。霜害のあと干害が発生すると凶作となるのが一般的であったから、コーヒー栽培農民は収入源確保のため、米、トウモロコシ、綿花などを間作した。

サンパウロ州では 1918 年 6 月、1921 年 9 月、1923 年 7 月と数年おきに霜害が発生していた。特に 1923 年 7 月には 2 度も大霜害に見舞われ、これに関連した干害が深刻になるのは 1924 年後半からであった<sup>5</sup>。この状況は当時のノロエステ沿線の日本人概況からも判別できるものであった(表 7-1)。

表 7-1 ノロエステ沿線日本人概況

| 項目(単位)        | 1924年(A) | 1927年(B) | B/A  |
|---------------|----------|----------|------|
| 家族数(家族)       | 3,705    | 6,603    | 1.78 |
| 人数(人)         | 19,198   | 34,688   | 1.81 |
| 土地所有面積(アルケール) | 29,235   | 29,924   | 1.02 |
| 地主数(人)        | 1,131    | 1,508    | 1.33 |
| コーヒー樹数(千本)    | 9,258    | 21,457   | 2.32 |
| コーヒー収穫高(俵)    | —        | 474,652  | —    |

出典：香山六郎『ノロエステ日本人年鑑』（聖州新報社、1928 年）

（注） 1 アルケール≒ 2.5ha, 1 俵=60 kg

まず 1924 年と 1927 年とを比較したとき、家族数やその人数は約 1.8 倍に増加したが、地主数は 1.3 倍にとどまり、土地所有面積は横ばい状態であることがわかる。このことはノロエステ地方への日本人移民の移動は多かったが、家族数の増加に比べて地主数が伸び悩んでいることを示し、独立自営農民数が急増しているわけではないことがわかる。一方、コーヒー樹は 1924 年に比べて 1927 年には 2.3 倍と倍増している。これは 1924 年当時の幼木が収穫可能な成木になったことや、新たに幼木が植栽されて増

<sup>4</sup> 通商局「サンパウロ州における外国人農場所有状況（1923 年 2 月現在）在バウルー帝国領事館多羅間鉄輔代理副領事報告」『通商公報』（外務省、1923 年）。

加したと見ることができる。これらから 1924 年から 1927 年の間に何らかの自然災害があったと推察され、新聞記事や当時の在サンパウロ領事館斎藤和総領事(以下、斎藤総領事)の本国への打電などを総合して、これがすなわちコーヒー大干害による結果であると判断できる。斎藤総領事の本国への打電は以下のものであった。そこにはノロエステ地方の在ブラジル日本人農民の生活困窮ぶりが報告されており、現地日本語新聞の報道を裏づけている。

最近 6-7 か月に亘るサンパウロ州内地の大旱魃は 30 年来見ざる所にして[…]、珈琲は至る所新旧樹を問わず凋落の色を呈し、蕾の儘枯死墜落するものあり、来年の収穫は[…]半作又は三分の一作に止まる可しと予想せらる(通商局第 3 課、1924 年)<sup>6</sup>。

1924 年のノロエステ地方のコーヒー収穫高は表示されていないが、斎藤総領事の本国への打電の一文「半作又は三分の一作にとどまる可し」から推計して、その収穫量は約 20 万俵ほどとなる。1924 年のコーヒー干害が、ノロエステ地方の独立自営農民の経済的困窮をもたらしていたことは明らかであったといえる。

この 1924 年のコーヒー大干害の誘因となった 1923 年 7 月の大霜害以前、サンパウロ州内の日本語新聞には、好景気に沸くノロエステ沿線を中心とした土地売却広告が頻出する。独立自営農民の基本的経営は、自分の土地を所有し契約農民(コロノ)を雇用してコーヒー栽培をすることであったから、彼らは次期の収穫を見込んで土地購入に躍起となっていたのだ。この動きを土地ブローカーは見逃すはずはなく、土地売り広告を頻繁に紙上掲載していたといえる(図 7-1)。

図 7-1 には、ノロエステ沿線の土地売買人の名前と駅からの距離、土地の価格が掲載されている。それによると、ノロエステの玄関口に当たるパウルーからビリグイに至る約 200km 間の、駅前を除いた半径 20km 圏内の

---

<sup>5</sup> 「旱魃」『聖報』1923 年 12 月 14 日第 113 号。

<sup>6</sup> 通商局「在サンパウロ斎藤総領事電報. 1924 年 11 月一旱魃とその影響(伯国)」『通商公報』(通商局第 3 課、1924 年)。



図 7-1 北西線土地売一覧 『聖報』1923 年 7 月 13 日第 91 号より抜粋

| 北西線土地売一覧 |      |       |     |
|----------|------|-------|-----|
| 人名       | 賣出地  | 駅との距離 | 価格  |
| 屋比久五郎    | グワイヤ | 一四三   | 三〇〇 |
| 富田強      | グワイヤ | 一五〇   | 二五〇 |
| 上田田次     | ガルサ  | 五〇    | 三五〇 |
| 石川増太郎    | グワイヤ | 二二〇   | 三五〇 |
| 国崎重次     | グワイヤ | 二二〇   | 三五〇 |
| 河尾利市     | ペンナ  | 二二〇   | 三〇〇 |
| 矢野熊太     | リリス  | 二二〇   | 三〇〇 |
| 蔭山勲      | ペンナ  | 一七〇   | 二〇〇 |
| 鈴木昌吉     | リリス  | 二〇〇   | 二〇〇 |
| 山根寛一     | リリス  | 二八〇   | 三〇〇 |
| 鎌倉伴太郎    | リリス  | 二二〇   | 二〇〇 |
| 相馬連      | グワイヤ | 二二〇   | 三〇〇 |
| 佐藤次郎     | ペンナ  | 二二〇   | 三五〇 |
| 村崎重      | プロモ  | 二八〇   | 二〇〇 |
| 上塚内平     | リリス  | 二八〇   | 二〇〇 |
| 柳卯太郎     | プロモ  | 一四〇   | 三〇〇 |
| 宮本茂      | プロモ  | 一六〇   | 三〇〇 |
| 宮崎八郎     | ペンナ  | 一七〇   | 二〇〇 |
| 林田鎮雄     | ペンナ  | 五〇    | 三〇〇 |

価格の単位はレイス。ポルトガル語では、「千=ミル」といい、  
1 ミル=1000 レイスとなる。土地の表示価格は 1 アルケール当たり。

比較的利便性の高い土地が、1 アルケール(約 2.5ha)当り 300 ミルレイス程度で 売り出されていたことがわかる。当時の 1 円は約 3,500 ミルレイス前後(横浜正金銀行リオデジャネイロ支店調べ、以後、正金リオ支店)であったから、10 銭で 2.5ha の森林が購入できたことになる。『聖報』紙上に頻出した国崎重次をはじめとする土地売り広告掲載者は、独立自営農民であると同時に土地ブローカーであった。彼らは一方で土地の売買に焦り、もう一方ではコーヒー干害での収入減による土地代金の未払いなど、困窮状態をどのように立直すかと思案し焦燥していたのだ<sup>7</sup>。

独立自営農民にとって自然災害の到来はわかっているにもかかわらず被害が出ることは分かっている「土地を持とう！いつかは売れるから」という独立への絶ちがたい夢と野望が、彼ら自身を苦しめていたといえよう。サンパウロ総領事館でもこの窮状を把握し日本政府へ打電してはいたが、日本人移民の生活支援対応策までには至らず、実情把握の甘さを露呈していたことは前述(通商局 1924)の通りである。

<sup>7</sup> 「如う切り抜けるか」『聖報』1925 年 5 月 15 日第 178 号。

### 第3節 日本人移民地側の対応—上塚周平と請願運動

この悲惨な現状の中で立ち上がったのが上塚であった。上塚は 1876 年 7 月熊本県下益城郡杉上村に生れ、1907 年東京帝国大学（以下、東京帝大）法科を卒業している<sup>8</sup>。東京帝大法科卒業後、皇国殖民合資会社のサンパウロ支店代理人として、1908 年の第 1 回ブラジル行き笠戸丸移民とともにブラジルに渡航した。

1918 年以降、上塚はノロエステ沿線に、国家に頼らない民間人の協力によって、プロミッソン駅周辺とリンス駅周辺に大植民地を建設し入植者を募っていた。ほぼ同時期の 1923 年～1925 年には打ち続く霜害、大雨、干害などにより疲弊した日本人移民救済の必要性を察し、1925 年 7 月『聖報』紙上に、「各駅における日本人土地所有面積等申出」と題する一文を掲載し、各鉄道沿線の日本人移民に対し、救済請願のための基本調査として、駅毎の所有土地面積、家族数、抵当権設定中の土地面積とその借金額、借金事情などを詳細に記述させ申請するよう指示を出していた<sup>9</sup>。上塚はこの文書をもって同年 8 月、当時の田付七太在ブラジル特命全権大使（以下、田付大使）に面会している<sup>10</sup>。この文書に呼応したのが、ノロエステ沿線の日本人移民および星名謙一郎（以下、星名）を中心とするソロカバナ線の一部の独立自営農民たちだった<sup>11</sup>。

このような上塚の行為に関し、第 1 に、なぜ上塚はこのような行動をとったのか。第 2 に、何時からこのような計画を立て実践したのか。第 3 に、

<sup>8</sup> 青柳郁太郎『ブラジルに於ける日本人発展史（上巻）』（ブラジルに於ける日本人発展史刊行委員会、1941 年）、359 頁。

<sup>9</sup> 「各駅に於ける日本人所有土地面積の申出」『聖報』1925 年 7 月 10 日第 186 号。

<sup>10</sup> 「上塚氏出聖」『聖報』1925 年 8 月 28 日第 193 号。田付七太（1867-193 年）は岐阜県大垣町生れ。1896 年 7 月、東京帝大法科大学法律科卒。1923 年 5 月、初代ブラジル特命全権大使。1926 年、サンパウロ州奥地の干害被害を巡視し、低利資金による独立自営農民救済に奔走。1927 年外交官退官後、海外移住組合連合会理事長就任。（外務大臣官房人事課「高等官略歴」『外務省年鑑』（クレス出版、1926[2001]年）、135-136 頁。

<sup>11</sup> 星名健一郎（1866 年-1926 年）、愛媛県北宇和島郡生れ。ハワイのサトウキビ農園労働者、邦字新聞記者を経て 1916 年、ブラジル最初の日本語新聞・週刊『南米』を鹿野久一郎と創刊。「八五低資」の請願運動にソロカバナ線から参加した。1926 年 12 月、ソロカバナ線アルバーレス・マッシュャード駅で銃殺されたため、ソロカバナ沿線への貸付は同年内に実施された。

上塚の行為を後押しする人物が存在していたのではないかなどの3点からの説明を試みる。

第1について、田付大使報告から、上塚は1918～24年にかけてノロエステ線にエイトール・レグール植民地(プロミッソン駅、別称上塚植民地、面積2,923アルケール、土地所有家族247)と上塚第二植民地(リンス駅、面積3,000アルケール、土地所有家族104)と2か所の大植民地を建設し、日本人移民を入植させ、独立自営農民を育成しつつあったことが外務省資料から読み取れる<sup>12</sup>。当時ノロエステ日本人会長であった上塚は、大干害に遭遇し生活困窮状態に陥っていた入植者たちの状態を見逃すことができず立ち上がったと考えられる。なぜなら、独立自営農民の土地代金返済が滞れば、大金を貸与しての植民地建設者であり、その土地売却により建設資金の返済をしていた土地ブローカーでもあった上塚自身、運営資金の回収困難をまねき困窮することになるからだ。

第2について、上塚と三隅棄蔵(以下、三隅)と青木新(以下、青木)との関わりに注目する。三隅は上塚と同じ熊本県下益城郡生まれで、東京帝大当時は同室生活の仲間でもあった。1917年の上塚の再渡伯時にはサンパウロ領事館参事として勤務しており、上塚の生活を支援していた<sup>13</sup>。1918年当時のサンパウロ州の霜害状況を認識し、上塚の植民地建設候補地調査に協力していた最上の友として知られている<sup>14</sup>。一方、青木も熊本市出身で、1907年に東京帝大法科大学政治科を上塚とともに卒業していた同窓生であり同郷人でもあった。1923年12月から1925年2月にホルル総領事として転任するまで、在リオデジャネイロ帝国大使館参事であった<sup>15</sup>。その任期は田付大使の特命全権大使在任期間(1923年8月～1926年8月)と重なり、1924年当時の田付大使によるノロエステ地方巡回時

<sup>12</sup> 外務省「ノロエステ沿線視察報告の件」『本邦移民関係雑件(伯国)』(外交史料館、1924年)、3.8.2. 285-5-4。

<sup>13</sup> 外務大臣官房人事課「高等官略歴」『外務省年鑑』(クレス出版、[1922]1999年)、316-317頁。

<sup>14</sup> 竹崎八十雄『上塚周平』(上塚周平伝刊行会、1940年)、285-287頁。

<sup>15</sup> 外務大臣官房人事課「高等官略歴」『外務省年鑑』(クレス出版、[1926]2001年)、6-7頁。

には代理大使をも務めていた。したがってコーヒー大干害についての実情を把握していた人物であったといえる<sup>16</sup>。

1924 年 7 月、サンパウロ州内でイジドロ將軍をリーダーとした不平軍人たちによる反乱（サンパウロ革命またはイジドロ革命）が発生した<sup>17</sup>。当初サンパウロ市内で政府軍と交戦していたが、7 月 18 日以降、革命軍の一部がバウルーに入り、パウリスタ・ソロカバナ・ノロエステ各線と通信機関等も破壊して、パラナ州方面へ退却した。この反乱によりノロエステ・ソロカバナ各鉄道沿線の日本人移民は、軍人たちに輸送手段である馬車や自動車を略奪され、農地も荒らされ大被害をこうむった。同年 8 月の幣原喜重郎外務大臣（以下、幣原外務大臣）宛て多羅間鉄輔在バウルー総領事の報告（通公第 54 号、1924 年 8 月 23 日）や同年 12 月の田付大使報告（機密第 43 号、1924 年 12 月 18 日）には、反乱の経過と日本人の被害状況が詳述されている<sup>18</sup>。

このような自然災害と人的災害による窮状の打開策を上塚が青木に相談し、日本政府へ何らかの資金援助の請願を試みようとして「土地所有面積等申出」書類作成上の助言を得ていたと考えることはできるのではないか。1921 年から 22 年にかけて日本政府は、海興のブラジルでの営業開始にあたり、農業移民への低利資金融通策を計画していたが、横浜正金銀行の判断により時期尚早として失敗に終わった経緯がある<sup>19</sup>。この失敗を認識していた上塚は、熊本県人という同郷意識や、東京帝大卒という同窓意識による信頼関係をもとに、直接貸付要請をする方策を創出したのであろう。ノロエステ日本人会長の上塚にとって同窓生、同郷人の官僚の存在は大きな力となっていたのである。1926 年 1 月、田付大使のノロエステ沿線の視察が、在サンパウロ赤松祐之総領事（以下、赤松総領事）を同行して実施されたのは、これらの要請を受けてのことであつたとも考えられよう。その時の様子は『聖報』1926 年 1 月 15 日から 29 日に 3 週連続で確認す

<sup>16</sup> 外務省、前掲書 12)、1924 年。

<sup>17</sup> サンパウロ革命:1924 年 7 月 4 日、革命軍の首謀者イシドロ・ディアス・ロペス將軍の名前からイシドロ革命ともいう。外務省『各国内政関係雑纂(伯国)(別冊サンパウロ革命反乱』(外交史料館、1924 年)、1. 6. 2. 1-4-2。

<sup>18</sup> 外務省、前掲書 17)、1924 年。

<sup>19</sup> 外務省「横浜正金銀行在伯本邦移民低利資金融通に関する件」『本邦移民関係雑件仮綴 別冊伯国の部』(外交史料館、1921 年)、3. 8. 2. 285-5。

ることができる。ここには単に特命全権大使および臨時代理大使と移民という関わりばかりでなく、東京帝大卒業という同窓意識も重要なポイントとなっていたといえよう。

85 万円の低利貸付資金とその行使方法が検討された後の 1926 年 8 月 13 日、リオデジャネイロ発信、14 日外務省受信、9 月 20 日に外務省記録係が接受した幣原外務大臣宛電信がある。電文には「幣原外務大臣殿 ノロエステ、ソロカバナ在留民 [救済資金ニ関スル御高配ニ対シ深甚ナル謝意ヲ表ス]」と記され、「在伯居留民旱害貸付ノ経過」と称する 5 項目に亘る経過報告が添付されていた<sup>20</sup>。この電文から、打電の主体はノロエステ・ソロカバナ在留民であること、コーヒー干害に苦しんでいた彼らが、リオデジャネイロの日本大使館を介して、幣原外務大臣に直接救済資金貸与決定に対する謝意を表していたことなどがわかると同時に、安堵した彼らの歓喜の様子も伝わってくる。さらに 1927 年 5 月、上塚が発起人となって「田付大使銀の胸像寄付金募集」を『聖報』を通して呼びかけた際、半年間でノロエステ地方を中心に 472 人から 9 コントス 666 ミルレイスが集まり、胸像を作製し寄贈していた事例（『聖報』1927 年、第 302 号）なども、彼らが田付大使への謝意を表した好例であろう。

第 3 について、上塚は日本政府を動かすために、かねてから親交のあった官僚や政治家に書面や電報で度々支援の依頼をしていた<sup>21</sup>。内田康哉（以下、内田。内閣総理大臣：1921 年 11 月、1923 年 8-9 月、外務大臣：1918 年 9 月-1923 年 9 月）をはじめ清浦圭吾（内閣総理大臣：1924 年 1-6 月）、安達謙蔵（以下、安達。逓信大臣：1925 年 5 月-1927 年 4 月、内務大臣：1926 年 12 月-1927 年 3 月、1929 年 7 月-1931 年 12 月）などが熊本県人だった。さらに上塚の従弟の上塚司が、1920 年 5 月から 1924 年 4 月まで衆議院議員であったことや、1925 年には高橋是清（以下、高橋）商工大臣秘書官や大臣官房秘書課長などを務めていたことから、政官界との強いパイプ役として上塚の最有力支援者となっていた<sup>22</sup>。『内田康哉関

<sup>20</sup> 外務省電文「リオデジャネイロ発信 幣原外務大臣宛」9 月 20 日接受（外交史料館 1926 年）、3. 8. 2. 285-5。

<sup>21</sup> 竹崎八十雄、前掲書 14）、319 頁。

<sup>22</sup> 遠山茂樹・安達淑子『近代日本政治史必携』（岩波書店、1961 年）。香山六郎『回想録』（サンパウロ人文科学研究所、1976 年）、350 頁。

係資料』によれば、内田と高橋（内閣総理大臣：1921 年 11 月－1922 年 6 月、大蔵大臣：1918 年 9 月－1922 年 6 月）は相前後して内閣総理大臣と大蔵・外務などを務めており、内田と上塚司との接触はありえたと考えられる<sup>23</sup>。また、「内田康哉日記」には 1926 年 3 月 9 日、当時大蔵大臣秘書官であった上塚司との行動が記載されている<sup>24</sup>。その時期は上塚たちの救済資金請願時期とも一致する。さらに同年 3 月 19 日の衆議院予算委員会において、竹内作平大蔵政務次官（以下、竹内大蔵政務次官）が追加予算として 85 万円の救済資金を計上し採択されている。ここに竹内大蔵政務次官と上塚司大蔵大臣秘書官、上塚司と上塚周平という官僚と移民と親戚縁者の結びつきの構図を描くことができる。

#### 第 4 節 日本政府による資金貸付とその背景

コーヒー価格の下落は、ブラジルのコーヒー政策と為替相場の大暴落に起因する点が大きかった。『日刊海外商報』（以下、『海外商報』）によれば、1924－25 年のコーヒーの平均相場は 10 kg 当り 40 ミル 200 レイスの高値であったが、1925 年下半期以降次第に下落し、同年末には 27 ミルになってしまった<sup>25</sup>。1926 年 1 月の田付大使と赤松総領事によるノロエステ地方視察には、このコーヒー農家救済問題が関連していたと考えられよう<sup>26</sup>。

1926 年 3 月 19 日、帝国議会衆議院予算委員会の席上、竹内大蔵政務次官は下記のような趣旨説明を行い、在ブラジル日本人移民の経済的地歩確立こそ緊急の課題であるとして、85 万円の救済資金要求を提案し（説明文 A）、3 月 22 日の同委員会で可決された（説明文 B）。

説明文 A： 伯刺西爾ニ於ケル本邦独立農業者ハ、主トシテ「サンパウロ」州ニ於テ珈琲及棉花ノ栽培ヲ為シテ居リマスガ、彼等ハ年賦金ヲ以テ土地ノ購入ヲ致シマシタトコロ、一昨年突発致シマシタ氾濫ト大旱魃ノ為メ、

<sup>23</sup> 小林道彦他『内田康哉関係資料集成第 1 巻史料編 1』（柏書房、2012 年）、83 頁、111 頁。

<sup>24</sup> 小林道彦他、前掲書 23）に同じ。

<sup>25</sup> 通商局「サンパウロ州政府の珈琲調整策」『日刊海外商報』No. 466、（外務省、1926 年）。

<sup>26</sup> 「田付大使の殖民地行脚」『聖報』1926 年 1 月 15 日第 212 号。  
「大使・総領事の旅－ノロエステ奥へと」1926 年 1 月 29 日第 214 号。

収穫オヨビ収穫物ノ処分ニ手違ヒヲ生ジ、年賦拂込ノ資金ニ窮スルニ至ッタノデアリマス、仍テ此際相当金額ノ貸付ヲ為シ、以テ我ガ在留民ノ経済的地歩ヲ確保セシムルコトハ最モ緊急ノ事ナリト認メマシテ、是ガ経費八十五万円ヲ要求致シマシタ(以下略)。(帝国議会衆議院予算委員会、1926 年第 17 回)<sup>27</sup>。

説明文 B: 討論ハ終結致シマシタ、(中略)次ニ原案ニ付テ採決イタシマス、原案ニ賛成ノ諸君ハ起立ヲ願イマス〔賛成者起立〕多数デアリマス(中略)其如クニ決セラレマシタ(帝国議会衆議院予算委員会、1926 年第 19 回)<sup>28</sup>。

これらから、竹内大蔵政務次官の上程案を帝国議会は緊急問題として受け止め、85 万円の拠出を決定したことが明らかとなった<sup>29</sup>。なお、この 85 万円は、1926 年度特別会計歳入歳出予算追加案中の、災害関係経費総額 1,265 万 9,579 円の 6.7%ほどにすぎなかった(帝国議会衆議院予算委員会、1926 年第 17 回)。

このようにして日本政府は、85 万円を長期低利子で貸付けることになったが、貸付問題は 1922 年にも計画されたが実践されなかった経緯があった。すなわち、1922 年当時ノロエステ沿線日本人移民は、コーヒー園労働者から半独立農または小規模独立農として自立する基盤整備期にあった。1921 年の霜害でコーヒーの幼木は完全に枯死し、独立予期の自営農民たちは再植を余儀なくされていた。同時に彼らは経営資金を外国人高利貸から借り、その返済に困窮していた。日本政府は農民救済の立場から 30 万円の救済資金供与策を講じようとしたが、農業基盤の整備されていない農民への資金供与は、還元性のない単なる救済策にすぎないとの正金リオ支店の判断から中止されていた<sup>30</sup>。1926 年の場合は、経営拡大のため次期の収穫を見込んで土地購入に焦燥した農民たちが、1924 年の大干害

<sup>27</sup> 帝国議会衆議院予算委員会「帝国議会衆議院予算委員会議録(速記)17 回-竹内作平大蔵政務次官上程案(抜粋)」『帝国議会衆議院委員会議録 50』(臨川書店、[1926]1988 年)、416 頁。

<sup>28</sup> 帝国議会衆議院予算委員会「帝国議会衆議院予算委員会議録(速記)19 回-藤澤幾之輔委員長言(抜粋)」(臨川書店、[1926]1988 年)、495 頁。

<sup>29</sup> 「低利資金が 85 万円出た」『聖報』1926 年 4 月 16 日第 225 号。

<sup>30</sup> 外務省「伯国本邦移民に対する長期低利資金融通に関する現地調査の結果報告の件」『日本外交文書大正 11 年第 1 冊』(第一法規、[1922]1976 年)。

により主作物も間作物も収穫が見込めなくなり貧窮状態に陥っていた。そこで日本政府は、田付大使のノロエステ再訪をもとに、長期低利資金貸付を望んでいた現地の意向どおり、農業基盤確立のための低利資金貸付策を創出せざるを得なかったのだ<sup>31</sup>。1922 年と 1926 年の生産基盤確立過程の相違が救済資金創出の明暗を分けていたことになる。

さらに、日本政府による低利資金貸付策の背景には、国内事情との関連があったことは否めない。すなわち、1923 年 9 月の関東大震災による日本国内の経済混乱打開策の一つとして内務省は、1924 年にブラジルへの震災移民 110 家族に対し、一人当たり渡航費 200 円の全額補助を行い、国策移民を輩出させていた<sup>32</sup>。これら出移民のブラジル側受入れ先としてもっとも有望だったのが、約 2 万人の日本人が約 900 万本のコーヒーを栽培していたノロエステ地方だったのである。

当時のノロエステ地方の独立自営農民のほとんどは、1921 年のサンパウロ州による渡航費補助打ち切り通告以前に、ブラジルに渡航していた初期移民で、サンパウロ州政府の渡航費補助を受けた者か自費渡航者であり、日本政府からの補助は受けていなかった<sup>33</sup>。その彼らの手によりノロエステ地方の開拓前線は伸延し、日本政府からの支援のないまま植民地建設は進んでいた。この植民地建設事業では、東京帝大時代の同窓生菊地恵次郎の資金援助による上塚の上塚第二植民地建設もほぼ軌道に乗った時だった。

北アメリカにおける排日移民法成立(1924 年 7 月)以前に建設されていたこれらの植民地は、日本人だけの集団地すなわち日本疑似社会を形成していた。ブラジル政府の干渉はまだ及ばなかったから、この日本疑似社会の拡大発展は、日本政府にとっては日本の勢力拡大そのものになると目論んだのであろう。日本政府はアメリカの排日移民法の解決の矛先をブラジルに求め、ブラジルへの移民政策を初期移民支援方策に部分修正したと考えられる。日本政府は積極的に救済請願をする初期移民たちの要望を受け

<sup>31</sup> 『聖報』前掲書 26)、No. 212、No. 214。

<sup>32</sup> 外務省領事移住部『我が国の海外発展 移住百年の歩み(資料編)』(外務省、1972 年)、629 頁。

<sup>33</sup> 外務省「サンパウロ州コーヒー耕地行日本移民に対する契約不更新の件」『日本外交文書大正 11 年第 1 冊』(第一法規、[1922]1976 年)、293-299 頁。



入れることで、国策として送出される移民たちの受け皿になる期待感を、彼ら独立自営農民に持たせたといえよう。

国策移民とは、日本政府の提供する移民政策に、内国人が自らの意志で同意し、移民の条件に適合して初めて国外への移動が許された日本人を指した。しかし、ノロエステの事例は異なっている。初期移民である独立自営農民たちによる日本政府への救済請願運動は、日本国内の政官界や学閥、同郷会（県人会）などの組織的集団を巻き込んで日本政府を動かした。積極的で能動的な日本国外から日本国内に向けられた移民政策、すなわちヒトの送出ではなく期限付きのモノの送出であったのだ。このようにコーヒ一千害低利資金貸付問題の背景には、日本政府による消極的で受動的な移民政策が潜在していたのである。

## 第5節 貸付と償還

1926年6月22日、バウルー領事館において赤松総領事とノロエステ植民代表による貸付資金85万円の行使についての協議があり、新たに創設した各駅借款団と領事館との直接交渉により、債務団69団体、被救済者口数400口に対する貸付業務が開始された<sup>34</sup>。

ところが、被救済者の所有地は何れも他の債権者の抵当対象となっており、政府の救済貸付に対する第一抵当権取得が困難となる問題が発生してしまった。そのため貸付実施は遅延してしまったが、同年11月、貸付実行案に被救済者も合意し、正金リオ支店を介して85万円が送金されてきた。その貸付条件の概略は、1)貸主名義者は横浜正金銀行、2)償還方法は1926年末より4ヶ年賦で1929年12月末日までに還付、3)利子は年5分とし他に横浜正金銀行の手数料年5厘、4)貸付地域は被害のもっとも甚大であったサンパウロ州ノロエステ、ソロカバナ両鉄道沿線の居住本邦農業者に限定、5)貸付条件は自己の全所有地価格の3割以内の借財者に限り、借財額を限度として貸付ける、6)抵当物は各人の所有地として貸付金を登

<sup>34</sup> 通商局「伯国在留民干害貸付(85万円)」『第52回議会調書』(外務省、1926年)、議TS-11.3.4、28-30頁。

記所渡しとし、救済貸付に対する第一抵当権を設定、7) 被救済者の債務団形成と連帯責任制などを明記したものであった<sup>35</sup>。

1926 年 11 月 3 日からの 5 日間、バウルー領事館は借入申込書受付を実施した<sup>36</sup>。世話人とは債務者側の互選によって決定した地域の代表者で、バウルーはじめアラサツバなど 30 地域とソロカバナ線 7 名が該当した<sup>37</sup>。そのうち世話人の多い駅は、もっとも開発分譲が進んでいたノロエステ沿線のペンナ駅からプロミッソン駅に集中していた。貸付決定後ただちにリンス駅上塚第二植民地亀井仙蔵日本人会長がバウルー領事館に出向し、救済資金申請書を提出していることなどから、この地域が請願運動の中心であったと考えられる<sup>38</sup>。

債務団 69 団体、被救済者口数 400 口に対する 85 万円の低利貸付資金は、ノロエステ線関係借款団に 76 万円、ソロカバナ線星名グループに 9 万円と配分された。貸付は 1926 年末から開始され 1927 年 2 月 26 日に終了している。貸付時期が遅れたのは、1926 年 12 月 13 日、ソロカバナ線被救済者団代表星名が横死し、その事務処理があったためとされている<sup>39</sup>。結果、12 月 26 日バウルー領事館員 2 名がソロカバナ線プレジデnte・プルデnteへ出向し、翌 27 日、直ちに資金貸出しを実行している。

一方、ノロエステ沿線では、1927 年 1 月 21 日にバウルーから貸出登記署名が開始された。この低利資金貸付は予定より遅延したこともあって、貸出し対象から除外されたり、書類未整備により時間切れとなった農民がいた一方、借入れ資金を銀行に預ける者も輩出するなどの状況が発生していた<sup>40</sup>。

1927 年 2 月までにノロエステ地方借款団 69 団体への資金貸付は終了し、同年末から返還が開始された。返還初年度は、同年内に償還すべき元金 21 万 2,300 円の 98%に当たる 20 万 7,148 円、延滞金は総額の 2.5%にあたる 5,331 円、1927 年分利子の 98%に当たる 3 万 8,845 円弱が返還され、

<sup>35</sup> 通商局、前掲書 34) に同じ。

<sup>36</sup> 「低利資金借入申込書受付日」『聖報』1926 年 10 月 29 日第 253 号。

<sup>37</sup> 「各駅における救済資金貸付受付日及世話人一覧表」『聖報』1926 年 10 月 15 日第 251 号。

<sup>38</sup> 「上塚第二植民地から救済資金申請」『聖報』1926 年 11 月 19 日第 255 号。

<sup>39</sup> 通商局、前掲書 34) に同じ。

<sup>40</sup> 「低利資金の貸し出しまでの批判」『聖報』1927 年 2 月 4 日第 266 号。

未納額は総額 958.4 円の 1.7%弱とほぼ順調な返還状況であった<sup>41</sup>。返還者は、借款団 69 団体 400 人のうち 6 団体 23 人ほどで、中にはソロカバナ線ガルサ植民地やノロエステ線平野植民地の一部の人たちのように、全額返済をした人たちや、直接、正金リオ支店へ送金した人たちもいた<sup>42</sup>。一方、干害からすでに 2 年を経過し、新たなコーヒー生産も可能な時期を迎えていたこともあって、借款団の農業経営も回復し始め、請願運動時代など過去の夢であると、刹那的気分を享受していた借款団も存在したようだ<sup>43</sup>。以後、元利償還総額 60 万 6892.83 円は大蔵省へ納入されたが、1928 年度に入金すべき 8471.40 円は未償還であった<sup>44</sup>。

この頃ブラジルは世界恐慌の影響もあり、1929 年以來のブラジル政府のコーヒー生産調整策失敗によるコーヒー恐慌に陥っていた。サンパウロ州の金融事情も悪化し、八五低資債務者たちにも年度末返還に支障をきたす状態が発生していた<sup>45</sup>。ノロエステ地方の独立自営農民たちは、経済恐慌とコーヒー恐慌、大霜害というトリプルパンチに見舞われてしまっていたのだ。結果、1930 年末の元金償還額は、前年の 10 分の 1 以下の 4,109 円足らず、1930 年度分の元金返済額と元利皆済額の総計も 1 万 498 円で前年の 12 分の 1 以下、1927 年度の約 25 分の 1 にまで激減していた<sup>46</sup>。

この返済困難な状況下の 1931 年 6 月 28～30 日にかけて再び大霜害が発生した。この霜害により、サンパウロ州日本人所有コーヒー樹 4,120 万本の 31%に当たる 1,293 万本が被害を受け、さらにその被害樹のうちの約 90%にあたる 1,157 万本が、ノロエステ・ソロカバナ両線沿線に集中していた<sup>47</sup>。この異常事態に、リオデジャネイロ駐在有吉明大使も正金リオ支店も債務者に返済を強要することができず、債務者の償還能力の回復する

<sup>41</sup> 通商局「伯国在留民干害貸付」『第 55 回議会調書』議 TS15.3.3.6、(外務省、1928 年)、45-46 頁。

<sup>42</sup> 「低資回収便り」『聖報』1927 年 12 月 2 日第 309 号。

<sup>43</sup> 「ノロ線雑感」『聖報』1928 年 3 月 2 日第 411 号。

<sup>44</sup> 通商局「伯国在留民干害貸付」『第 57 回議会調書』議 TS19、(外務省、1929 年)、186-191 頁。

<sup>45</sup> 通商局「在伯邦人独立農救済問題」『第 59 回議会調書』議 TS24、(外務省、1930 年)、67-72 頁。

<sup>46</sup> 通商局、前掲書 45)。

<sup>47</sup> 通商局「珈琲干害貸付金(所謂八五低資)」『第 60 回議会調書』議 TS28、(外務省、1931 年)、358-362 頁。

まで、その償還の延期を認めざるを得なくなった。また日本政府も、償還は結局、ブラジル国内の景気好転による債務者の支払能力の回復を待つしかないと判断せざるを得なくなっていた<sup>48</sup>。結果、元金償還は総額 85 万円の 73.3%止りとなってしまった。この時点で 1926 年 12 月に作成された「伯国在留民旱害貸付(85 万円)」の契約文に記された「1927 年より 4 ケ年賦毎年 4 分の 1 ずつその年の 12 月末日に償還すること。1930 年 12 月末日をもってすべて償還済みとすること」は完全に達成不能となった。1933 年になっても徴収額残金は 29 万円台を下ることはなく、延滞利子 2.2 万円余、合計 31 万円強が焦げ付き状態であった<sup>49</sup>。

## 第 6 節 事後処理と独立自営農民の動き

世界恐慌とコーヒー恐慌、大霜害以外に独立自営農民に混乱を引き起こす要因となったのが、1930 年のヴァルガス革命であった。新国家体制（エスタード・ノーボ：Estado Novo）を唱えたヴァルガスは 1933 年、経済不況打開策として生産階級救済に乗出し、4 月 7 日付連邦令第 22,626 号により「支払猶予並高利取締令」を公布し、農村抵当物・農産物を保障する契約や農業経営上の債務などについては、年 6%を超過してはならないと規定した<sup>50</sup>。また 12 月 1 日付連邦令第 23,533 号によって農村経済再建目的の「農債半減令」を発表し、生産者階級救済に乗出すとともに、これらの法律運用のための経済建直局を創設した<sup>51</sup>。

「農債半減令」の概略は、1933 年 6 月 30 日以前の契約又は借換え・書換えされた一切の農業債務で物権的担保を有するもの、および農業者の銀行などの総債務額が債務者の所有財産より少なければ、一律 1933 年 12 月 1 日現在高の 50%に減額するというものだった<sup>52</sup>。この適用範囲がブラジル国内で契約した日本人債務者にも及ぶことがわかり、サンパウロ総領事

<sup>48</sup> 通商局、前掲書 47) に同じ。

<sup>49</sup> 通商局「珈琲干害貸付金(所謂八五低資)」『第 65 回議会調書』議 TS37(外務省、1933 年)、233-236 頁。

<sup>50</sup> 「支払猶予並高利取締令」1933 年 4 月 7 日付、連邦令第 22,626 号。

Decreto No. 22,626 de 7 de Abril de 1933.

<sup>51</sup> 亜米利加局「旱害貸付金整理方針」『第 67 回議会調書(下巻)』議 AM4. A. 5. 2. 0. 1-3、(亜米利加局第 2 課、1934 年)、424-429 頁。

館では各駅の地方債務者団と協議の結果、この半減令適用を承認することになった。未納額はブラジル政府に肩代わりさせ、残り半額は貸付当時の換算率で 1935 年より向う 5 ケ年の年賦償還法によって償還することなどを決定した。大蔵省は事実上これを黙認し、未償還元本に対して政府取分の 5 % の利子徴収と、償還遅延の場合は担保権を実行することを条件として、バウルー領事館に善処を委ねた<sup>53</sup>。このように大蔵省は農債半減令を適応させることで、可能な限り未償還元本 29 万円余と延滞金利子 2 万円余を完済させようとしていたのである。

1937 年 3 月、経済建直局の全債権者団に対する審査が確定した。その状況は、債務団 69 のうち農債半減令の適用対象 52 団、不適用 3 団、書類不備による請願不能 1 団、半減令以前に債務完済 13 団であった。ところが実際は、適用対象となっても半減許可が下りたのは 18 団にすぎなかったのである。債務団の思惑は完全に外れた。結果、債務者の抵当権解除は困難となり、日本政府への残り半分の完済をしようにも、ブラジル政府の半減許可に相当する金額を、サンパウロ州銀行へ預託し、その預託金はブラジル政府からの半減公債引換証受領と同時に当該預託者へ返還されるということになり、手続きがさらに複雑になってしまった<sup>54</sup>。執務報告書内の八五低資整理問題報告書には、日本政府は 1938 年 12 月中に開催予定の政府貸付金処理委員会にその対応を付議することとしていたが、その後の報告書にはこの問題は掲載されていない。

八五低資問題が低迷する中で、上塚を中心とするノロエステ独立自営農民たちは、単に集団として日本政府からの救済を期待するのではなく、理想の植民地を建設するには独立自営農民が結束する必要性を感じ、農業生産活動上での協同化を望むようになっていた。精米工場の共同経営や農産物出荷時に必要な自動車を利用した農業資材の共同購入、生産物の共同出荷などは農業経営上不可欠の基盤事業であったからである。八五低資のような長期低利貸付資金は、山積する課題を解決する上でもっとも重要な農

---

<sup>52</sup> 「伯国臨時政府の農債半減令公布」1934 年 12 月連邦令第 23,533 号。

Decreto No. 23,533 de 1º de Dezembro de 1933

<sup>53</sup> 亜米利加局、前掲書 51)。

<sup>54</sup> 亜米利加局「八五低資整理問題」『執務報告』（クレス出版、[1937]1994 年）、33-35 頁。

業経営資金であったのである。上塚は、従兄弟の上塚司に充てた書簡の中で、コーヒーモノカルチャーからマルチカルチャーへとその生産方式を変化させ、さらに農産物の加工業を起業する旨を綴っている<sup>55</sup>。事実、1930年代のノロエステ地方は、綿花栽培や畜産業も取り込んだマルチカルチャーが主流となっていた。

ブラジルではすでに1907年1月、大統領令第1,637号「ブラジル同業及産業組合法」により産業組合設立に関する規定が示されていた<sup>56</sup>。この規定に基づいた日本人による、農業協同化の契機となった組合結成の先駆けは、1927年12月に設立されたコチア産業組合と、1929年12月に設立されたマイリポラン南伯中央農産組合であった。これらはサンパウロ市近郊の蔬菜栽培を中心とした独立自営農民による設立であった<sup>57</sup>。この組合設立の動きが、コーヒーに特化していたノロエステにも波及してきた。ノロエステ沿線では平野植民地(1930年)をはじめ、プロミッソン(1931年)、リンスの第二上塚植民地(1939年)やアラサツバ(1939年)などに産業組合が設立されるなど、農業協同組合を通して独立自営農民の集団化・協同化は進み始めていた<sup>58</sup>。このように長期低利貸付資金は、独立自営農民たちにとって山積する課題を解決する上で、もっとも重要な農業基盤整備資金であったのである(図6-1参照)。

## 第7節 小括

本章では、コーヒー干害への対処策として、在ブラジル独立自営農民たちが、当時の日本政府に対し積極的に請願運動を展開し、低利貸付資金を確保した事実から、1924年当時の日本政府主導の出移民政策とは異なった在ブラジル移民主導の移民政策が存在したこと、なぜ日本政府はブラジルの独立自営農民に低利資金貸付をしたのか、誰がいつどのようにして請願運動を始めたのか、その背景には何が存在したのか、資金貸付状況とそ

<sup>55</sup> 竹崎八十雄、前掲書14)、350-354頁。

<sup>56</sup> 拓務局「伯国同業及産業組合法」『拓務時報』第1巻、(日本図書センター、[1931]2001年)、77-78頁。

<sup>57</sup> 清谷益次・宮尾進『ブラジル日本移民・日系社会史年表—半田知雄編著改訂増補版』、サンパウロ人文科学研究所、1996年)、58頁、64頁。

<sup>58</sup> 「広がり行く産組戦線—今後に期待」『伯刺西爾時報』1939年10月29日第2024号。

の結果はどうであったのか、この資金貸付を通してノロエステ独立農民たちは、以後どのような経営を模索し始めたのかなどの解明を試みてきた。

この結果、日本政府は、政府主導の出移民政策を推進するためには、既にブラジルへ移民していた初期移民による日本人植民地の整備なくして、その後の国策移民の積極的奨励は困難になるとの懸念を抱き、低利貸付資金の貸与も致し方なしとの消極的方策を取らざるを得なかったことが判明した。さらに、八五低資は日本政府による在ブラジル独立自営農民救済策として成立したのではなく、すでにサンパウロ州内で独立自営農民として成長しつつあった初期移民たち自らが発した、日本政府に対する積極的・能動的支援要請手段であり、日本政府の支援は彼らの要請に基づいた消極的・受動的支援策であったことも判明した。その点、1924 年以降の日本政府による渡航補助などの支援を受けた国策化された出移民の事例とは根本的に異なるものであったといえよう。

この八五低資を実現させるために、上塚を中心とした独立自営農民たちは、田付大使をはじめとした在ブラジル日本国大使館や領事館ばかりでなく、上塚司を核とした日本国内の政官界に可能な限りの請願成就を訴えており、その団結力と推進力は強固であった。1926 年 8 月、「ノロエステ・ソロカバナ在留民」の名義で当時の幣原外務大臣宛に救済資金の配慮に感謝する電文を発信していた事例や、1927 年 5 月、上塚が発起人となって「田付大使の胸像寄付金募集」を地元紙『聖報』を通して呼びかけた際に、半年間でノロエステ地方を中心に 472 人から 9 コントス 666 ミルレイスが集まり、胸像を作成していた事例は、ノロエステを中心とした独立自営農民たちの強固な結束力の証であり、尽力を惜しまなかった田付大使への謝意を表した好例であろう<sup>59</sup>。

八五低資貸付金の返還状況は、請願者たちに配分後の返還 2 年目まではほぼ順調であったが、ブラジル経済の不安定さと自然災害が彼らの返還計画を狂わせ、4 年後の完済は不履行に終わった。この打開策として浮上してきたのがヴァルガス政権下での農済半減令であった。ヴァルガスはブラジルの新国家建設を推進する上で、日本人移民をブラジルの労働者として認識し、農済半減令を適応させて彼らの困窮をブロックしようとしたのだ。

しかし、この対応策もかえって貸与者のへの負担を増加させる結果に終わったのだった。この八五低資は、貸付金の約 30%が未償還となり抵当権の完全除去も不能であったことなどから、日本政府にとっては望まぬ事例であったといわざるを得ない。八五低資貸付金処理問題は 1938 年以来、日本政府の対応は示されていない。史料的にも新たな事実は発見されておらず曖昧になっている。

とはいえ独立自営農民たちにとっては、この低利貸付資金は債務者からの脱出の可能性をもたらし、土地所有者としての基盤確立に寄与するものであった。また、貸付時の連帯責任制から彼らは農業経営上の集団化・協同化の経営手法を学び、1927 年以降、コチア産業組合をモデルに、ノロエステ沿線にも産業組合が設立されるようになってきていた。事実、1930 年代のノロエステ地方は、綿花栽培や畜産業も取り込んだマルチカルチャーが主流となっていたのだった。

コーヒー干害低利資金貸付問題を通してクローズアップされた初期独立自営農民は、ブラジル日本人移民史の中でどのように位置づけられるのだろうか。ノロエステ独立自営農民は、1924 年以降の日本政府の積極的国策移民とは異なり、サンパウロ州の移民受入れ策をベースとしていたことに特徴があった。ノロエステ独立自営農民の初期の目的は、日本政府からの支援を受けることなく、自らの結束力と推進力をもってブラジル社会に日本疑似社会を建設することにあった。しかし、自然災害が引き金となったとはいえ、初期移民たちは結果的に日本政府からの資金貸付を受け、農業経営基盤を構築しようとした。そのような意味で、この「八五低資」問題は、積極的な民間主導を展開してきた初期移民の言動に、歴史的・経済的变化が生じ始めた事例と捉え、さらに、その行為を国策移民に準ずる「準国策移民」の行為と位置づけることはできないだろうか。この「準国策移民」という考え方については、一次史料をもとに 1932 年の満州事変や 1933 年の国際連盟脱退、1937 年の日中戦争などを見据えた、日本の戦前の移民政策全般を理解し論究して行かなければならない。これを新たな課題として捉え、更なる考察を試みていきたい。

---

<sup>59</sup> 「贈 田付大使銀の胸像寄付金額及芳名」『聖報』1927 年 10 月 14 日第 302 号。



## 終章 成果と意義、新たな課題と展望

### 第1節 本論のまとめ

本論では、1910年代半ばから土地を所有する日本人移民が集住し始めたサンパウロ州ノロエステ地方を事例に、ノロエステ地方の初期移民と日本語新聞との関わりについて研究を試みた。論述にあたり、初期移民が集住したサンパウロ州ノロエステ地方で創刊した日本語新聞『聖州新報』とその社主・香山六郎の言動を主たる研究対象とした。香山が新聞を介して発する言動を、ノロエステ日本人移民たちの言動の代弁と捉えたからである。

初期移民の独立自営農民になるための知恵と努力による自主的で発展的な行動から、移民送出の歴史の原点は政府主導ではなく、民間主導であったことを確認した。その民間主導の言動を後方から支援し、その状況を日本人移民社会に伝達する役割を担っていたのは、日本語新聞であった。ラジオなどの公共放送がなかった時代における日本語新聞は、各種刊行物の中ではもっとも公共性が高かったメディアであったから、移民たちをブラジル日本人移民社会内部に留まらず、ブラジル社会へ導く情報伝達のトンネル的役割をも果たしていたことも確認できた。

ところで、香山の新聞へのこだわりはいつ頃から存在し始めたのかを辿ると、幼少時から醸成されていたことがわかった。そこで本論の前半では、香山の出生時からブラジルの対日移民政策により『聖州新報』を廃刊せざるを得なくなった事情と、戦後間もなくの香山の言動までを個人史研究の視点から検証した（第2章－第4章）。また、本論後半では、『聖報』と香山六郎の言動が、ノロエステ地方の日本人移民たちにどのような影響を及ぼし、どのような社会的効果をもたらしたかについてメディア論、文芸論、移民政策論の視点から言及してきた（第5章－第7章）。

本論の内容を各章ごとにまとめると、以下のようになった。

第1章では、日本人のブラジル移住の歴史を概観し、1924年を境に移民送出時の契約の手法が異なっていたことから、サンパウロ州の移

民政策による契約移民時代の移民を初期移民と位置づけ、日本政府の移民政策にのっとった移民を国策移民と大別した(図 1-1)。さらに、ノロエステ地方への初期移民の集住は、1915 年から顕著になり、1924 年にはすでに全ブラジル日本人人口の 54%以上を占めるようになっていたことも立証した(図 1-2 および図 1-3)。このような実態から、本論の研究対象地域をノロエステ地方とし、同地方における初期移民の労働形態と土地所有の変遷は、その後の国策移民導入の基盤形成であったことを論証した。なお、戦前期日本とブラジルとの移民関係一覧表を作成し、概論のまとめとした(表 1-2)。

第 2 章では、香山の出生からブラジル行第 1 回移民船の自由渡航者として渡伯するまでの彼の言動の背景には、常に後見人であった土屋員安叔父が存在していたこと、香山のブラジル渡航の要因は、軍人指向の夢が破れて、徴兵を忌避したことにあつたことを検証した。

第 3 章では、移民監督や通訳として移民と行動を共にする中で、自己の社会的立ち位置を確認していたこと。家族を構成したばかりの香山は、会社の倒産により失職し、自らも請負農などの農業を体験する中から、移民の目線で新聞を創刊するまでに自己の確立を図った。その香山の姿勢を確認することができた。

第 4 章では、ノロエステ地方のバウルー市で、日本語新聞『聖州新報』を起ち上げた香山が、地元直結の新聞を強調して、八五低資問題や年鑑類の発刊など、中央紙にも劣らぬ発展を遂げたことを、第 7 章と関連付けて確認することができた。さらにサンパウロ市に進出した香山の言動の根幹にある、初期移民としてのプライドを保ちつつ行動する姿勢からは、ブラジルに生きる日本人としての在り方を模索する香山像を読み取ることができた。

第 5 章では、ノロエステ地方の発展に香山六郎を主幹とする日本語新聞・『聖州新報』が、移民の目線で情報を伝達する姿勢を貫いていたことを、中央紙であつた『日伯新聞』や『伯刺西爾時報』と比較研究した一覧表を作成した。今日までこの 3 社の特徴などを一覧表として提示している刊行物はなかったことから、2015 年 3 月には、この表が評価され、雑誌論文への掲載と、共同出版本をも刊行することができ

た。この比較一覧表が、今後の香山研究の資料として活用される可能性は高くなるものと思われる。

第 6 章では、香山は、『聖州新報』の特徴を充実した文芸活動に集約していた。俳句の普及推進活動にしても、移民の目線でブラジル俳句の創生に尽力し、移民の文化的資質の向上に寄与していたことが、新聞俳句の分析を通して伝わってきた。そこには、ブラジル移民社会構築のピオネイロとしての自負や責任感の旺盛さが溢れていた。俳句好きの市毛総領事の支援があったとはいえ、季語集作成のアイディアは香山たち民間人の発想によるものであったことに変わりはない。個人的とはいえ、政府関係者を支援者にすることができたことは、戦前期初期移民の俳句推進活動における、民間主導の一例と言えるのではないか。本章では、従来ほとんど知られていなかった文人・香山素骨の姿を発見することができた。ご高齢のジェニー脇坂女史に代わって、いつの日か『新香山素骨俳句集』なるものの創刊を試みたいとの新たな課題も発見することができた。

第 7 章では、上塚周平を中心とした初期移民たちが、コーヒー干害低利資金を日本政府から貸与された状況を、香山は『聖報』紙上に詳細に掲載し、地元新聞社主として中央紙、特に日伯紙社主・三浦鑿の辛辣な論評には、真正面から対峙する姿勢を崩さず、地元紙としての特徴を十分に発揮していたことを、日本語新聞主要 3 紙の論評をまとめた資料を作成して検証することができた。この比較一覧表は数十ページにわたっているので、今後再精査して一覧表に取りまとめたい。本章を通して戦前期ノロエステ地方の日本人移民の団結力と行動力を兼ね備えた民間主導の行為が、地域の発展をも促すことも立証できた。本章でもっとも成果があったことは、帝国議会衆議院会議録(速記録)から、コーヒー干害低利資金の貸与が 1926 年 3 月末の特別予算委員会で可決審議されていた事実を確認できたこと、貸与を受けた独立自営農民側が日本政府に送った謝礼の電文を発見したことであった。B5 版程度の電文 1 枚ではあったが、この電文の確認により、85 万円のコーヒー干害低利資金の貸し付けがバウルー領事館とサンパウロ総領事館を介して確実に実施され、独立自営農民代表が日本政府に対して謝意

を表していた事実が判明したことになり、史実を実証できた達成感を味わうことができた。

## 第2節 本論の成果と意義

本論の結果から、以下の4点を成果としてまとめる。

第1に、香山の『回想録』の原本である『清書原稿A』の収集ができたことである。拙論『香山六郎と聖州新報』（一）および（二）を、サンパウロ在住のジェニー脇坂（Genney WAKISAKA）女史に贈呈したことを契機に女史との交流が叶い、『清書原稿A』の写真撮影が許可され、収集ができたことであった。一部欠損はあったものの、それらを基にして『回想録』の見直しができた。特に『清書原稿A』の後半部分（家族の動向や知人友人の消息、グアラニー語の研究、文人香山の側面など）が大幅に削除されたり、まとめ書きされたりしており、それらを確認できたことは、香山論構築上の大きな収穫であった。さらに、ジェニー脇坂女史からは、香山の俳句集や家族の写真、家系図なども提供していただき、『回想録』を越える香山論を展開できた。香山研究の一次史料の発掘ができたといえる。

第2に、ブラジル俳句を確立しようとして、季題収集作業に取り組んでいた文人香山の姿勢を発見したことである。国策移民入伯後、日本のホトトギス派俳句をそのままブラジル日本人移民社会に普及させようとする動きに対して、日本俳句の基本は尊重しつつも、ブラジルらしい俳句観を確立しようとした香山の、俳句に対するピオネイロとしての自負心を垣間見ることができた。また、当時の市毛総領事が支援していたこともあるが、官民一体となってそれらを季語集（ブラジル季題）としてまとめ上げていた功績は、評価されるべきものであり、戦前期初期移民の俳句推進活動における、民間主導の一例とも言えるものであった。さらに、戦後さまざまな傾向の俳句団体が成立したが、香山らのブラジル季題は、彼らの季語集作成に貢献したといっても過言ではない。

第3に、コーヒー干害低利貸付資金問題について、帝国議会衆議院会議録（速記録）を調査し、1926年3月末の特別予算委員会で可決審議

されていた事実を確認することができたことである。現在に至るまで、当時の日本語新聞をはじめ関係書籍類中においても、日本政府の資金貸付決定の瞬間を示す資料の提示は見られなかった。今回の発見で、その決定的瞬間が確認できたことは、重要な歴史的事項の発見そのものであり、本論作成上、最大の収穫であった。今後の研究者の史実分析に大いに寄与できるものと信ずる。

第 4 に、上記コーヒー干害低利貸付資金問題について、日本政府からの貸与資金の分配状況の記述は『聖報』にも詳述されていたが、貸与を受けた独立自営農民側の、日本政府に対する公的謝礼文に関する記述は、今まで知られていなかった。今回、外交史料館の膨大な資料の「雑綴り」の中から、B5 版程度の電文 1 枚を発見した。この電文により、85 万円のコーヒー干害低利資金の貸し付けが確実に実施され、独立自営農民代表が日本政府に対して謝意を表していた事実も判明し、史実を実証できた達成感を味わうことができた。

この第 3 と第 4 の成果により、「八五低資問題」は、独立自営農民たちの積極的運動が功を奏した民間主導の実例として、今後の研究に寄与できるものとなるであろうことを信ずる。

以上の 4 点の成果は、本論の意義にもつながるものである。さらに、第 5 章で、ノロエステ地方の発展に香山六郎を主幹とする日本語新聞・『聖報』が情報伝達手段として、中央紙とは異なる地方紙ならではのオリジナリティを発揮していたことを、中央 2 紙と比較研究をした一覧表を作成したが(表 5-2)、この比較一覧表は、今後のブラジル日本語新聞研究に何らかの価値を持つ意義ある表になるであろうと信じている。また、

第 7 章で作成していた「コーヒー干害低利貸付資金問題」に関する『聖報』・『日伯』・『時報』3 紙の記述比較をまとめた一覧表については、前節のまとめで述べたように、今後再精査してまとめ上げるならば、国立国会図書館所蔵のアーカイブ資料「ブラジル移民の 100 年」

第4章(1)に収録されている資料を越えるものになり、その資料的価値は高まると考えられる<sup>1</sup>。

本論で明らかにしてきた日本語新聞と初期移民たちの相互依存関係、民間主導の言動を通して、戦前期ブラジル・サンパウロ州における日本語新聞の役割の多様さや、新聞人・文化人・民間主導者の一人であった香山の業績を再認識する契機となることを信じてやまない。

### 第3節 新たな課題と展望

移民の先駆者たちには敬意を表したニックネームが付けられることが多い。例えば、「移民の草分け：鈴木貞次郎」、「移民の祖：水野龍」、「移民の父：上塚周平」といった類である。ほぼ同時代にほぼ同一行動をとってきていながら、香山にはそのようなニックネームは付けられていない。1968年の日本政府からの叙勲を断った経緯がある。移民の目線を尊重してきた香山の、戦前の新聞人としての美学を貫く精神が、そのような行為を望まなかったのであろう<sup>2</sup>。一方、ブラジルの日本語新聞創刊者をグループ化してみると、『南米』の星名謙一郎や『日伯』の金子保三郎、『時報』の黒石清作たちは皆、アメリカからの転住者であった。日本から直接ブラジルに渡航してきた人物は香山と『日伯』の三浦であるが、三浦は『日伯』の創刊者ではない。

このように分類してみると、香山はブラジルに渡航後、一度も日本へ戻ることなく家庭を築き、子供たちの多くが戦後もサンパウロ人文科学研究所の前身である土曜会などブラジル各界で活躍しているという、初期移民の中では、ブラジル社会に根を張ったファミリア(familia:家族)の先駆であったといえよう。これらの事象を総括した時、香山に「移民新聞の父」といったニックネームを与えても不思議はないように思われる。香山の父親が『不知火新聞』を刊行していたことや、少年期には、家庭の貧困のために九州日日新聞で活字拾いの

---

<sup>1</sup> 国立国会図書館「電子展示会「ブラジル移民の100年」－資料の収集から電子展示会の提供まで－」月報、第576号第4章(1)、(国立国会図書館、2009年)。

<sup>2</sup> 外山脩『ブラジル日系社会百年の水流』初版、(トッパンプレス印刷、サンパウロ、2006年)18頁。

仕事をしていた経験があること、さらには、移民船笠戸丸内で 3 回ほどではあったにせよ『船内新聞』を発行していたこと、ブラジ到着後、大朝新聞の通信員をしてブラジル事情を紹介していた事実や、1921 年に『聖報』を創刊していたことなどを総合すると、香山の一生は新聞との関わりによって語られてきているといえる。今後さらに研究を深め、香山に「移民新聞の父」なるニックネームを付与する根拠を見つけ出し、香山を再認識する機会を創出するのも、今後の課題の一つとなりうるであろう。

その他、香山六郎研究はまだ多くの課題を残したままであるとって過言でない。それらを挙げると以下ようになる。

第 1 に、本研究では完全に掌握できなかった『清書原稿 A』の収集と分析作業は、今後の重要な課題として残されている。第 2 に、晩年の香山のホームワークとなっていたグアラニー語の研究は、特殊であるがゆえに時間を要する課題である。第 3 に、日本語(外国語)使用禁止令が出されるまでの『聖報』文芸欄を精査し、香山の俳句の有無を確認して、いつの日か『新香山素骨俳句集』なるものを発刊したいとの新たな願望も存在する。第 4 に、「コーヒー干害低利貸付資金問題」の日本語新聞 3 紙の比較表作成も大きな課題として存在する。第 5 に、第 7 章の中で「準国策移民」という新語を使ったが、彼らの行為は、民間主導による移民社会に国家主導の移民政策が投入される過渡期の現象と捉えるべきであろう。民間主導論の確立と並行して、その妥当性を検証する必要がある。

これらの諸課題を将来的に解決する過程の中で、香山六郎と『聖州新報』の真価はさらに高められてゆくと考えるものである。

## 謝 意

『回想録』に関しては、元サンパウロ人文科学研究所顧問の故宮尾進先生との交信が拙論構築の参考となっていた。『清書原稿 A』の写真撮影やバウルーの地図探索などに関しては、サンパウロ市在住の尾身千

枝子氏、伊藤信比呂氏、外山脩氏、バウルー市在住のシンチャ・ユミ長沢氏などのご協力を得た。また、ブラジル俳句の研究に関しては、ブラジル俳文学の故間嶋稲花水先生をはじめとするブラジルの俳友の協力を得ることができた。もっとも嬉しかったことは、故香山六郎氏の次女でサンパウロ在住のジェニー脇坂女史（92 歳）から、記述確認と資料・許諾書の提供を快諾して頂いたばかりでなく、「あなたを信じます。父も喜んでくれるでしょう。」との温かい励ましのお言葉を頂いたことであった。この一言が私の研究の大きな支柱となっていた。また、ジェニー脇坂女史の夫君・脇坂勝則氏からもご助言をいただくことができ、光栄の至りであった。



1934 年当時の香山夫妻と次女のジェニー・秋子  
(寄贈者：ジェニー脇坂女史)



2016 年は、香山六郎没後 40 年、生誕 130 周年の記念すべき年であった。また、ジェニー脇坂女史が、日本政府から春の叙勲により瑞宝双光章を授与された記念の年でもあった。このような記念すべき時期に香山論を展開できたことを誇りに思う。しかし 2017 年 11 月、脇坂勝則氏は急逝された。本論をジェニー脇坂女史およびファミリー脇坂一同に捧げたい。

末筆ではありますが、6 年間にわたってご指導ご鞭撻くださいました坂口満宏教授、地図作成をご指導くださいました飯塚隆藤様はじめ関係諸氏のご厚意・ご協力に対し、深甚なる謝意を表します。

## 参 考 文 献

- ・青柳郁太郎『ブラジルに於ける日本人発展史・上巻』（ブラジルに於ける日本人発展史刊行委員会、1941年）。
- ・亜米利加局「旱害貸付金整理方針」『第67回議会調書(下巻)』議 AM4. A. 5. 2. 0. 1-3、(亜米利加局第2課、1934年)。
- ・亜米利加局「4新憲法ノ特徴」『第67会帝国議会説明参考資料』、帝国議会関係雑件説明資料関係第1巻(調書) A. 5. 2. 0-1-3、(通商局、1934年)。
- ・亜米利加局「八五低資整理問題」『執務報告』（クレス出版、[1937]1994年）。
- ・安良田済『戦時下の日本移民の受難』（O MARTÍRIO do Imigrante Japonês durante a Guerra do Pacífico）（トッパンプレス印刷、2011年）。」
- ・アンドウ・ゼンパチ「日本移民の社会史的研究」『研究レポート』第2号（サンパウロ人文科学研究所、1967年）。
- ・アンドウ・ゼンパチ『ブラジル史』（岩波書店、1983年）。
- ・飯田耕二郎「移民の魁・星名謙一郎のブラジル時代」『大阪商業大学論集』第151・152号（大阪商業大学、2009年）。
- ・飯野正子「移民研究の現状と展望」公開講座「日本人と海外移住」（海外移住資料館、2016年2月）。
- ・池上岑夫・金七紀男他『現代ポルトガル語辞典』（白水社、1996年）。
- ・石川友紀『日本移民の地理学的研究』（榕樹書林、1997年）。
- ・伊丹金蔵編．『在伯同胞発展録』（非売品、1931年）。
- ・移民研究会『日本の移民研究－動向と文献目録Ⅰ（明治初期－1992年9月）』（明石書店、2008年）。
- ・移民研究会『日本の移民研究－動向と文献目録Ⅱ（1992年10月－2005年9月）』（明石書店、2008年）。
- ・臼井勝美・高村直助他『日本近現代人名事典』（吉川弘文館、2001年）。
- ・内山勝男「笠戸丸便第一回伯刺西爾行移民名簿」『かさ丸』（竹村殖民館、1958年）。
- ・江頭隆生『海を跳んだキナセン：伝録－上塚周平』（上塚周平済々黌顕彰会、2008年）。
- ・大江志乃夫『徴兵制』（岩波新書、1981年）。
- ・大高利夫『20世紀日本人名事典』（紀伊国屋書店、2004年）。
- ・Osamu Toyama, *Cem anos de águas corridas*(São Paulo:Toppan Press, 2009)．
- ・海外移住事業団『海外移住者名簿（戦前）』（海外移住事業団、1965年）。

- ・外務省「伯國殖民条例ノ制定」『通商彙纂』明治41年第1号（通商局、1908年）。
- ・外務省「外務省記録 海外旅券下付表 明治41年3月分 熊本県」（外交史料館飯倉分館）。
- ・外務省「横浜正金銀行在伯本邦移民低利資金融通に関する件」『本邦移民関係雑件仮綴 別冊伯国の部』（外交史料館、1921年）、3.8.2.285-5。
- ・外務省「伯国本邦移民に対する長期低利資金融通に関する現地調査の結果報告の件」『日本外交文書大正11年第1冊』（第一法規、[1922]1976年）。
- ・外務省「サンパウロ州コーヒー耕地行日本移民に対する契約不更新の件」『日本外交 文書大正11年第1冊』（第一法規、[1922]1976年）。
- ・外務省「ノロエステ沿線視察報告の件」『本邦移民関係雑件（伯国）』（外交史料館、1924年）、3.8.2.285-5-4。
- ・外務省『各国内政関係雑纂（伯国）（別冊サンパウロ革命反乱）』（外交史料館、1924年）、1.6.2.1-4-2。
- ・外務省．電文「リオデジャネイロ発信 幣原外務大臣宛」9月20日接受（外交史料館、1926年）、3.8.2.285-5。
- ・外務省「アリアンサ農園行移民列車衝突事件」『本邦移民関係雑件伯国ノ部』、J.1.2.0.J2-1（外交史料館、1927年）。
- ・外務省「新聞取締関係」「桑島大使より有田外務大臣宛」第133号、1939年7月20日付『各国に於ける新聞雑誌出版物取締関係雑件伯国の部』単巻A.3.5.0.6-16。（外交史料館、1941年）。
- ・外務省領事移住部『我が国の海外発展－移住百年の歩み（資料編）』（外務省、1972年）。
- ・外務省『日本外交文書』大正10年、11年、12年、13年、（外務省、1974年、1976年、1978年、1980年）。
- ・外務省『日本外交文書』昭和期Ⅱ、第2部第2巻〔昭和8年〕（外務省、1997年）。
- ・外務省移住局「〔移民〕と言う呼称の代わりに〔移住者〕とするの件」『本邦移住法規並びに政策関係雑件』j0007、（外交史料館、1995年）。
- ・外務省外交史料館日本外交史辞典編集委員会『新版日本外交史辞典』（山川出版、1992年）。
- ・外務大臣官房人事課「高等官略歴」『外務省年鑑』（クレス出版、1926[2001]年、[1922]1999年）。
- ・Caio Shiomi, *DAITAN NA*『勇気のある者』（Associação Assistencial Cultural e Esportiva de Andradina. Associação Cultural Nipo-brasileira de Guaraçai. APC . 2007）。
- ・加藤陽子『徴兵制と近代日本 1968-1945』（吉川弘文館、1996年）

- ・ 栢野桂山「俳諧小史」『ブラジル日系コロニア文芸』上巻（サンパウロ人文 科学研究所、2006 年）。
- ・ 北杜夫『輝ける碧き空の下で』第一部（上）・（下）（新潮社、1982 年・1988 年）。
- ・ 清谷益次・宮尾進『ブラジル日本移民・日系社会史年表－半田知雄編著改訂増補版』（サンパウロ人文科学研究所、1996 年）。
- ・ 熊本県人会『在伯熊本県人発展史－実態調査－』（熊本県人会、1984 年）。
- ・ 皇国殖民合資会社「明治 41 年 4 月 27 日、笠戸丸、6 月 18 日サントス港着第 1 回伯刺西爾移民渡航者名簿－非移民名簿」。
- ・ 香山六郎『のろえすて日本人年鑑』（聖州新報社、1928 年）。
- ・ 香山六郎『25 周年紀念鑑』（聖州新報社、1934 年）。
- ・ 香山六郎『移民四十年史』（私家本、1949 年）。
- ・ 香山六郎『香山六郎回想録－ブラジル第一回移民の記録－』（サンパウロ人文科学研究所、1976 年）。
- ・ 国立公文書館「徴兵令改正ノ件」『公文類聚 1904 年』（国立公文書館デジタルアーカイブ）2. A. 11. 0-976。
- ・ 国立国会図書館「電子展示会「ブラジル移民の 100 年」月報第 576 号第 4 章（国立国会図書館、2009 年）。
- ・ 小林道彦・高橋勝浩他『内田康哉関係資料集成』第 1 巻資料編 I（柏書房、2012 年）。
- ・ 今野俊彦・藤崎康夫『移民史 I 南米編』（新泉社、1984 年）。
- ・ 斉藤広志「移住者と協同組合－「文化移植」に関する一研究」『神戸大学国際経済研究年報』第 9 巻（神戸大学、1959 年）、109-147 頁。
- ・ 斉藤広志『新しいブラジル－新版』（サイマル出版社、1983 年）。
- ・ 坂口満宏「アメリカ西北部日本人移民年表（1）－『大北日報』に見られる日本人キリスト教会－」『キリスト教社会問題研究』第 34 号、第 39 号、第 42 号（同志社大学キリスト教社会問題研究会、1986 年、1991 年、1993 年）。
- ・ 坂口満宏「誰が移民を送り出したのか」『立命館言語文化研究』21 巻 4 号（立命館大学、2010 年）。
- ・ 坂口満宏「日本におけるブラジル国策移民事業の特質」『史林』97 巻 1 号、2014 年。
- ・ 佐々木剛二「統合と再帰性－ブラジル日系社会の形成と移民知識人」『移民研究年報』17 号（日本移民学会、2011 年）。
- ・ サンパウロ人文科学研究所編・発行『ブラジル日本移民・日系社会史年表』（1996 年）。
- ・ ジェニー脇坂『清書原稿 A』（私家本、1962 年）。
- ・ ジェニー脇坂『香山毒露俳句集』（私家本、2008 年）。

- ・ジェニー脇坂「戸籍謄本（写し）・1941年9月」（私家版、2016年）。
- ・「支払猶予並高利取締令」1933年4月7日付、連邦令第22,626号。  
Decreto No.22,626 de 7 de Abril de 1933.
- ・白木繁彦『エスニックメディア研究』（明石書店、2004年）。
- ・白木繁彦「エスニシティとメディア・研究－昨日・今日・明日－」（マイグレーション研究会、2014年）
- ・白石元治郎「第五編伯刺西爾共和国」東洋汽船『南米事情』（東洋汽船株式会社、1908年）。
- ・鈴木貞次郎『伯国日本移民の草分け』（非売品、1967年）。
- ・鈴木譲二『日本人出稼ぎ移民』（平凡社、1992年）。
- ・住田育法「軍政下ブラジルの記録映画に描かれたヴァルガスのカリスマ性」京都ラテンアメリカ研究所『紀要』第11号（京都外国語大学、2011年）。
- ・済々黷同窓会名簿委員会『済々黷 100周年記念済々黷同窓会会員名簿』（熊本済々黷同窓会名簿委員会、1982年）。
- ・Satomi Miura, “La presencia de la prensa de los Nikkei en el contexto de México antes de la Segunda Guerra Mundial” *Asociación Latinoamericana de Estudios de Asia África XIII*. (Congreso Internacional de ALADDA, 2010)。
- ・拓務局「伯国同業及産業組合法」『拓務時報』第1巻、（日本図書センター、[1931]2001年）。
- ・拓務大臣官房文書課「拓務省統計概要」第3回（1932年1月）
- ・竹崎八十雄『上塚周平』（上塚周平伝刊行会、1940年）。
- ・田中館秀三「地理学上より見たるブラジル移民（其二）」『地学雑誌』第45巻第10号（1933年）、498-507頁。
- ・通商局「移民取扱業願ニ関スル件第798号」（1903年10月）、「移民取扱業許可申請書」、「総代届」（1903年8月）、「皇国殖民株式会社定款」、「開業届」（1904年3月）、「保証金納付ノ件」（1904年4月）『皇国殖民株式会社業務関係雑件』単巻．（外交史料館、1903年、1904年）. 3.8.2.0-196。
- ・通商局「伯刺西爾移民募集地方別予定表御届」、「業務代理人許可出願之件」、「出張所設置移籍廃止等届出ノ件」『皇国殖民合資会社業務関係雑件（二）』（外交史料館、1908年）3.8.2.0-217。
- ・通商局「伯国サンパウロ州政府ト本社トノ間ニ締結セル契約書譯文」、「移民出発期日延期願出之件」、「期日延期ノ為ニ生スル移民費用ニ関スル件」、「答申書」『皇国殖民合資会社伯刺西爾国移民取扱一件』（外交史料館、1908年）、3.8.2.0-243。

- ・通商局「伯國殖民条例ノ制定」『通商彙纂』明治41年第1号（外務省、1908年）。
- ・通商局「本邦移民ニ関スル伯国サンパウロ市発行新聞紙ノ評論(1)」『通商彙纂』（博文館、1908年）。
- ・通商局「皇国殖民合資会社伯刺西爾国移民取扱1件 明治41年」（外交史料館、1908年）、3.8.2.0-243。
- ・通商局「皇国殖民会社伯国代理人ニ関スル件」公第47号・『皇国殖民合資会社業務関係雑件（二）』（外交史料館1909年）、3.8.2.0-217。
- ・通商局 在伯臨時代理公使藤田敏郎「ジャタイ耕地」『伯国サンパウロ州巡回報告書第9回』（外務省、1911年）
- ・通商局「開業届」（1914年12月）、「廃業届」（1917年12月）『南米殖民株式会社業務関係雑件』3.8.2.0-292、『移民取扱人関係雑件』海外興業関係.3.8.20-300。
- ・通商局『移民地事情』第2巻（復刻版）（不二出版、〔1922〕1999年）。
- ・通商局「外国人農場所有状況」『通商公報』第41巻第1,050号（不二出版、〔1923年〕1997年）。
- ・通商局「サンパウロ州における外国人農場所有状況（1923年2月現在）在バウルー帝国領事館多羅間鉄輔代理副領事報告」『通商公報』（外務省、1923年）。
- ・通商局「在サンパウロ齊藤総領事電報、1924年11月一旱魃とその影響（伯国）」『通商公報』（通商局第3課、1924年）。
- ・帝国議会衆議院予算委員会「帝国議会衆議院予算委員会議録（速記）17回－竹内作平大蔵政務次官上程案（抜粋）」『帝国議会衆議院委員会議録50』（臨川書店、〔1926〕1988年）。
- ・帝国議会衆議院予算委員会「帝国議会衆議院予算委員会議録（速記）19回－藤澤幾之輔委員長言（抜粋）」（臨川書店、〔1926〕1988年）。
- ・通商局「サンパウロ州政府の珈琲調整策」『日刊海外商報』第466号（外務省、1926年）。
- ・通商局「伯国在留民干害貸付（85万円）」『第52回議会議調書』（外務省、1926年）、議TS-11.3.4。
- ・通商局「伯国在留民干害貸付」『第55回議会議調書』議TS15.3.3.6、（外務省、1928年）。
- ・通商局「伯国在留民干害貸付」『第57回議会議調書』議TS19、（外務省、1929年）。
- ・通商局「在伯邦人独立農救済問題」『第59回議会議調書』議TS24、（外務省、1930年）。
- ・通商局「珈琲干害貸付金（所謂八五低資）」『第65回議会議調書』議TS37、（外務省、1933年）。

- ・通商局『在外本邦人国勢調査職業別人口票』（外務省、1931年）。
- ・通商局 南亜米利加通商局長赤松氏談話「南亜米利加諸国ト日本移民」『別冊伯国之部 本邦移民ニ関スル外国官民ノ言動並新聞論調』移民課公第21号、外交史料 3.8.2.285.5-5。（外交史料館、1992年）。
- ・遠山茂樹・安達淑子『近代日本政治史必携』（岩波書店、1961年）。
- ・土井権大『南米伯国の富源』（南米協会、1908年）。
- ・外山脩『百年の水流』（初版）（トッパンプレス社、サンパウロ、2016年）（改訂版、2012年）。
- ・Teiichi, Suzuki, *Mobilidade dos imigrantes japoneses no estado de São Paulo, 1915-1955*, ( Imigração Japoneza no Brasil, 1964) ブラジル日系人実態調査委員会、資料編（同委員会、1964年）。
- ・内務省社会局「移植民保護奨励に関する内務省案」（外交史料館、1922年） j . 1. 2. 0-47。
- ・永田稔『ブラジルに於ける日本人発展史』下巻（ブラジルに於ける日本人発展史刊行会、1953年）。
- ・永田稔「南米一巡」『日系移民資料集南米編第4巻』（日本図書センター、1998年）。
- ・中野順夫「ブラジルにおける日系農業史研究ーサンパウロ近郊における日本人野菜生産販売概史」（サンパウロ人文科学研究所、2016年）。
- ・南川文里『アメリカ多文化社会論』（法律文化社、2016年）。
- ・西川大二郎『ある日本人農業移民の日記が語るーブラジルにおける日本農業移民像』（サンパウロ人文科学研究所、2007年）。
- ・二宮正人「ブラジル日本移民の歴史概略」『アメリカ大陸日系人百科事典』（2002年、明石書店）。
- ・日本大学百年史編纂委員会『日本大学百年史』第1巻（学校法人日本大学、1997年）。
- ・日本ブラジル交流誌編集委員会『日本ブラジル交流史ー日伯関係 100年の回顧と展望ー』（日本ブラジル修好 100周年記念事業組織委員会、1995年）。
- ・日本移民 80年史編纂委員会『ブラジル日本移民 80年史』（移民 80年祭典委員会・ブラジル日本文化協会、1991年）。
- ・根川幸男『ブラジル日系移民の教育史』（みすず書房、2016年）。
- ・ノロエステ連合日伯文化協会『日本移民百周年記念 ノロエステ記念史』（Federação das Associações Culturais Nipo-Brasileiras da Noroeste, 2008）。
- ・パウリスタ新聞『日本・ブラジル交流人名事典』（五月書房、1996年）。
- ・パウリスタ新聞「中尾熊喜」『日本・ブラジル交流人名事典』（五月書房、1996年）。

- ・パウリスタ新聞「鈴木貞次郎」『日本・ブラジル交流人名事典』（五月書房、1996年）、135頁。
- ・バストス日系移民八十年史編纂委員会『バストス日系移民八十年史』（バストス日系文化体育協会、2010年）。
- ・「伯国臨時政府の農債半減令公布」1934年12月連邦令第23,533号。  
Decreto No. 23,533 de 1º de Dezembro de 1933
- ・秦郁彦『日本官僚制総合辞典 1968-2000』（東京大学出版会、2001年）。
- ・原口邦紘「移民の歴史—日本人海外発展の展開」『歴史と地理』430（山川出版社、1991年）。
- ・半澤典子「香山六郎と聖州新報（一）」『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要史学編』第13号（京都女子大学大学院、2014年）。
- ・半澤典子「香山六郎と聖州新報（二）」『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要史学編』第14号（京都女子大学大学院、2015年）。
- ・半澤典子「ブラジル・ノロエステ地方における日本語新聞の果たした役割」立命館国際言語文化研究所『立命館言語文化研究』第26巻第4号（立命館国際言語文化研究所、2015年）。
- ・半澤典子「ブラジル・ノロエステ地方における日本語新聞」河原典史・日比嘉高編『メディア—移民をつなぐ、移民がつなぐ』（クロスカルチャー出版、2016年）。
- ・半澤典子「香山六郎と聖州新報（三）」『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要史学編』第15号（京都女子大学大学院、2016年）。
- ・半澤典子「コーヒー干害低利資金貸付問題と移民政策—1920-30年代のブラジル・サンパウロ州を中心に—」、日本移民学会『移民研究年報』第23号（日本移民学会、2017年）。
- ・半田知雄『ブラジル日本移民史年表』（サンパウロ人文科学研究所、1976年）。
- ・半田知雄『移民の生活の歴史—ブラジル日系人の歩んだ道』（サンパウロ人文科学研究所、1970年）。
- ・日比嘉高「北米日系移民と日本書店—サンフランシスコを中心に—」立命館言語文化研究所編『立命館言語文化研究』20巻1号（立命館大学、2008年）。
- ・深沢正雪「第2章 日系メディア史」『ブラジル日本移民百年史』第3巻 生活と文化編(1)（ブラジル日本移民百年史編纂委員会、風響社、2010年）。
- ・藤田敏郎「海外在勤四半世紀の回顧」石川友紀『日系移民資料集南米編』第17巻（日本図書センター、[1931年]1999年）
- ・ブラジル日本移民70年史編纂委員会『ブラジル日本移民70年史（1908～1978）』（ブラジル日本文化協会、1980年）。



- ・ブラジル日本移民史料館『皇国殖民合資会社「明治 41 年 4 月 27 日、笠戸丸、6 月 18 日サントス港着第 1 回伯刺西爾移民渡航者名簿－非移民名簿」』（国立国会図書館憲政資料室 PDF 版、2007 年）。
- ・ブラジル日本移民史料館他『目で見える日本移民の百年〈ブラジル日本移民百年史・別巻〉』（風響社、2008 年）。
- ・ブラジル日本文化福祉協会他『戦前期活躍した移民船』（ブラジル日本移民史料館、2011 年）。
- ・ブラジル力行会名鑑刊行委員会『ブラジル力行会名鑑』（ブラジル力行会、1982 年）。
- ・細川周平「日本語への鎮魂」『毎日新聞・夕刊』（毎日新聞、2008 年 12 月 19 日）。
- ・細川周平『日系移民文学Ⅰ－日本の長い旅〔歴史〕』（みすず書房、2012 年）
- ・細川周平『日系移民文学Ⅱ－日本の長い旅〔評論〕』（みすず書房、2013 年）
- ・前山隆『非相続者の精神史－或る日系ブラジル人の遍歴』（お茶の水書房、1980 年）。
- ・前山隆『ドナ・マルガリータ』・渡辺－移民・老人福祉の五十三年』（お茶の水書房、1996 年）。
- ・前山隆『異文化接触とアイデンティティー－ブラジル社会と日系人』（お茶の水書房、2001 年）。
- ・前山隆『風狂の記者－ブラジルの新聞人三浦鑿の生涯』（お茶の水書房、2002 年）。
- ・間嶋稲花水『ブラジル俳句百年』（ブラジル俳文学会、2008 年）。
- ・水野龍「笠戸丸航海日記」内山勝男『日本移民 50 周年記念 かさと丸』（日本移民 50 年祭委員会、1958 年）。
- ・宮尾進「コロニア文学の不毛性について（試論）」『研究レポートⅦ－日本移民 70 年記念論集－ブラジル日系社会のいぶき』（サンパウロ人文科学研究所、1978 年）。
- ・森幸一『目で見えるブラジル日本移民の百年』（共著）、（風響社、2008 年）。
- ・森幸一「ブラジル日本移民・日系研究の回顧と展望」丸山浩明編『ブラジル日本移民百年の軌跡』（明石書店、2010 年）。
- ・森本豊臣「日本における移民研究の動向と展望」『移民研究年報』第 14 号（日本移民学会、2008 年）。
- ・文部科学省
  - 「明治 19 年勅令第 15 号第 1 次中学校令」（1886 年 4 月 10 日公布）
  - 「明治 32 年勅令第 28 号第 2 次中学校令」（1899 年 2 月 7 日公布）
- ・米山裕・河原典史編『日系人の経験と国際移動』（人文書院、2007 年）。

- ・柳下宙子「外交館所蔵ブラジル日本移民関係史料の概要と今後の研究の可能性」丸山浩明『ブラジル日本移民百年の奇跡』（明石書店、2010年。）
- ・立命館言語文化研究編集委員会『立命館言語文化研究』26巻4号（立命館大学国際言語文化研究所、2015年）
- ・領事移住部『わが国民の海外発展（資料編）』（外務省、1972年）。
- ・若槻泰雄『排日の歴史』（中公新書、1972年）。
- ・輪湖俊五郎「パウルー管内の邦人」石川友紀『日系移民資料集第2期 南米編第25巻〈昭和戦前期編2〉』（日本図書センター、1999年）。
- ・早稲田国際学院「早稲田国際学院報」第5号・第10号（早稲田国際学院、1937年・1938年）。
- ・渡部南仙子「香山毒露翁」間嶋稲花水『ブラジル俳句百年』（ブラジル俳文学会、2008年）。

## 新聞関係

### 東京朝日新聞

- ・「伯西移民開始」1908年2月26日第4面。
- ・「伯国移民出発延期」1908年4月8日第2面。
- ・「日本農民歓迎（伯国近信に拠る）」1910年10月7日第2面。

### 大阪朝日新聞

- ・「伯西移民出発（神戸）」1908年4月29日第2面。

### 熊本日日新聞

- ・「新聞の歩み」熊本日日新聞・新聞博物館（2013年）。

### ニッケイ新聞

- ・「日系人口は190万人で統一を」2016年4月23日。

### 聖州新報

- ・「殖民者の長短」1923年2月23日第71号第1面。
- ・「雑信」1923年7月6日第90号1頁。
- ・「北西線土地売一覽」1923年7月13日第91号。
- ・「本紙百号に就いて」1923年9月14日第100号第1面。
- ・「旱魃」1923年12月14日第113号。
- ・「ソロカバナ線と田付大使」1924年5月23日第134号。
- ・「グアラニー語五つ六つ」1925年5月8日第177号。
- ・「如う切り抜けるか」1925年5月15日第178号。
- ・「各駅に於ける日本人所有土地面積の申出」1925年7月10日第186号第3面。。
- ・「上塚氏出聖」1925年8月28日第193号。
- ・「田付大使の殖民地行脚」1926年1月15日第212号。

- ・「大使・総領事の旅-ノロエステ奥へと」1926年1月29日第214号。
- ・「低利資金が85万円出た」1926年4月16日第225号。
- ・「各駅における救済資金貸付受付日及世話人一覧表」1926年10月15日第251号。
- ・「低利資金借入申込書受付日」1926年10月29日第253号。
- ・「上塚第二植民地から救済資金申請」1926年11月19日第255号。
- ・「低利資金の貸し出しまでの批判」1927年2月4日第266号。
- ・「アリアンサ行殖民の特別列車正面衝突の大悲惨事」1927年5月27日第282号。
- ・「贈 田付大使銀の胸像寄付金額及芳名」1927年10月14日第302号。
- ・「低資回収便り」1927年12月2日第309号。
- ・「ノロ線雑感」1928年3月2日第411号。
- ・「先端的報道機関として本誌は断然週2回発行」1931年9月7日第591号第1面。
- ・「植民俚謡正調」1931年9月25日第596号第4面。
- ・「悲しき退社」1932年3月15日第644号第3面。
- ・「聖報文芸壇 俳句繁閑(8) 念腹選」1933年9月1日No.789。
- ・「聖報俳句(4) 佐藤念腹選」1933年9月22日第795号。
- ・「社告」1934年9月28日第897号。
- ・「社告」1934年10月23日第904号第3面。
- ・「バウルー市から聖市へ本社移転に就て」1934年10月23日 第904号。
- ・「社告」1934年12月11日第912号第3面。
- ・「三水会便り」1937年1月26日第1192号第4面。
- ・「祖国日本から：在東京早稲田国際学院 夫陽」1937年3月30日第1219号第4面。
- ・「祖国便り」1938年3月8日第1435号第4面
- ・「祖国便り」1938年3月15日第1441号第4面。
- ・「日本男児此处に在り、挙る二世の意気、香山夫陽君勇んで応召」1938年12月28日第1678号第3面。
- ・「母国出征軍人慰問団」1941年7月12日第2231号。
- ・「在伯日本人の行方(3)」1941年7月12日第2231号。
- ・「廃刊の辞 香山六郎」1941年7月30日第2236号。

#### 伯刺西爾時報

- ・「社告」1917年9月14日第3号第5面。
- ・「エスタード紙上の伯刺西爾時報」1917年9月14日第3号第5面。

- ・「伯国歌壇」1917年9月28日第5号。
- ・「聖州新報発行予告」1921年4月29日第186号第2面。
- ・「霜害予防は刻下の大急務」1924年5月9日第343号。
- ・「時報俳壇と時報俳信」1935年7月24日第1102号。
- ・「広がり行く産組戦線－今後に期待」1939年10月29日第2024号。

#### 日伯新聞

- ・「同胞自決」1924年2月22日第361号第1面。
- ・『日伯俳壇』1924年10月10日第392号第4面。
- ・「我等の俳句」1929年7月18日、第633号。
- ・「我等の俳句」1929年8月8日、第636号。
- ・「3分の2は伯国人を使え」1930年12月18日第702号第2面。
- ・「ブラジルには新聞がどれ丈？」1931年7月30日第739号3面。
- ・「社告ノロエステ支社移転」1931年10月8日第749号第7面

（注）新聞記事に関しては、特に関連性の高いもののみとした。

## 初出一覧

序 章 新稿を執筆

第 1 章 新稿を執筆

第 2 章 新稿を執筆

- 第 3 章 論文：「香山六郎と聖州新報（一）」、  
京都女子大学大学院文学研究科研究紀要史学編第 13 号、  
2014 年、1-28 頁。
- 第 4 章 論文：「香山六郎と聖州新報（二）」、  
京都女子大学大学院文学研究科研究紀要史学編第 14 号、  
2015 年、17-39 頁。
- 第 5 章 論文：「香山六郎と聖州新報（三）」、  
京都女子大学大学院文学研究科研究紀要史学編第 15 号、  
2016 年、17-54 頁。
- 第 6 章 論文：「ブラジル・ノロエステ地方における日本語新聞の果たした役割」、  
立命館大学「立命館言語文化研究」第 2 巻第 4 号、2015 年  
3 月、87-101 頁。
- 第 7 章 論文：「ブラジル移民知識人香山六郎の言動—移民俳句と日本語新聞を通して」  
マイグレーション研究会「日本観研究、」2018 年 3 月発刊  
本掲載決定。
- 第 8 章 論文：「コーヒー干害低利貸付資金問題と移民政策」  
日本移民学会「移民研究年報」第 23 号、2017 年 6 月、  
75-93 頁。
- 終 章 新稿を執筆

【巻末資料】 香山六郎・ブラジル日本移民関係年表

| 西暦   | 元号  | 月日     | 香山・聖州新聞関係   | 出典                                | 日本・ブラジル関係史、世界情勢   | 出典                     |
|------|-----|--------|---|-----------------------------------|---|------------------------|
| 1882 | 明15 | 7月11日  | 村崎タニ熊本県天草郡深瀬村字下平で誕生。  | 船坂(イン)                            |   |                        |
| 1886 | 明19 | 1月5日   | 熊本県玉名郡高瀬町にて父香山俊之・母伊喜の次男として香山六郎誕生。兄弟は長姉志乃、次姉米、長男俊雄の4人。両親は当時「松ノ屋」という田舎酒屋経営。父親は細川藩士の末裔。父の代に平民。             | 回想(11)<br>肥後(藩士名) 渡航(非移民)         |   |                        |
| 1888 | 明21 | 4月     | 父の福岡県庁官吏の為、福岡市東中津に移転。以後、須崎町、天神町と移転。   | 回想(12)                            |   |                        |
| 1889 | 明22 | 11月15日 |   |                                   | ブラジル共和国宣言。  | プ全(340)                |
| 1890 | 明23 | 10月5日  |   |                                   | ブラジル政府、法令第97号により支那及び日本移民の受入国許可。   | 25周(2)                 |
| 1891 | 明24 | 8月2日   | 母伊喜病没。福岡市内の薬院町、上通町と移転。  | 回想(22)                            |   |                        |
| 1892 | 明25 | 4月     | 福岡県立師範学校附属小学校1年入学。父の再婚・退職で若松市転住。同市内の小学校1年転入。  | 回想(24-25)                         |   |                        |
| 1893 | 明26 | 3月-4月  | 父の失業、小倉の篠崎村に移転。   | 回想(26-28)                         |   |                        |
| 1894 | 明27 | 8月     | 父離婚。父親と熊本春竹の叔父宅へ、長姉志乃結婚。  | 回想(35-36)                         |   |                        |
| 1895 | 明28 | 4月     | 熊本市広町瀬台尋常小学校3年入学。   | 回想(43)                            |   |                        |
|      |     | 11月5日  |   |                                   | 日伯修好通商航海条約調印。1897年2月22日公布。  | 交流(26)                 |
| 1896 | 明29 | 4月     | 春日村に転居。春日尋常小学校4年転入。   | 回想(45)                            |   |                        |
| 1897 | 明30 | 4月     | 飽田高等小学校入学。  | 回想(49)                            |   |                        |
| 1897 |     | 8月23日  |   |                                   | リオ・デ・ジャネイロ州ベトロポリスに日本公使館開設。初代代理公使兼総領事珍田捨巳。                                   | 官報(51)<br>25周(3)       |
| 1898 | 明31 | 2月-4月  | 長姉志乃の死により、九州日日新聞の活字工(日給5銭で4カ月)就労。兄と本山尋常小学校に寄宿し、熊本高等小学校(2年)に入学。  | 回想(49-50、345)                     |   |                        |
| 1899 | 明32 | 4月     | 京都一中校長土屋員安叔父の後見により兄と上洛。中立亮高等小学校3年入学。  | 回想(54)                            |   |                        |
| 1900 | 明33 | 4月     | 中立亮高等小学校3年修了し、京都第一中学校入学。  | 学友(129)                           |   |                        |
|      |     | 12月12日 | 父香山俊久、八代で死亡。  | 回想(56)                            |   |                        |
| 1902 | 明35 | 3月     |   |                                   | イタリア政府、サンパウロ州政府渡航補助によるブラジル行契約移民の渡航禁止。日本移民導入の直接的契機。                          | 年表(21)                 |
| 1903 | 明36 | 8月     | 熊本清々養入学。保証人は同校長井芹経平。  | 回想(81)                            |   |                        |
| 1904 | 明37 | 2月8日   |   |                                   | 日露戦争(～1905年7月31日)。  | 年表(21)                 |
|      |     | 3月     | 清々養修業試験落第。員安叔父の激励で再奮起。  | 回想(85)                            |   |                        |
| 1905 | 明38 | 3月     | 中位の成績で清々養5年進級決定。  | 回想(91)                            |   |                        |
|      |     | 7月     | 海軍兵学校試験不合格。人生設計上の番狂わせ。  | 回想(91)                            | ソロカバナ線バウルーまで開通  | プ全(450)                |
| 1906 | 明39 | 3月     | 熊本清々養卒業。陸軍士官候補生不受験。   | 清々(71)                            |   |                        |
|      |     | 3月27日  |   |                                   | 水野龍一経由で鈴木貞次郎と共にブラジル入国。  | 40年(20)                |
|      |     | 7月16日  |   |                                   | 後藤武夫、明穂梅吉、安田良一、隈部三郎等相繼いでサントス・サンパウロへ到着(～10月21日)。                             | 25周(5)<br>年表(23)       |
|      |     | 8月     | 叔父の大陸進出是非論に疑問を持つ。日記事件で叔父から勘当され京都を去り、東京で太田力男(後の関力男)と関当純家に同居。   | 回想(101)                           |   |                        |
|      |     | 8月     | 日本大学大学部商科附属殖民科在籍。   | 日大(525)                           |   |                        |
| 1907 | 明40 | 1月30日  |   |                                   | ブラジル新移民法公布  | 発展(265)                |
|      |     | 11月3日  |   |                                   | 水野龍一とサンパウロ州農務長官による向こう3年間に日本移民3000人の輸送契約成立。                                  | 25周(5)<br>発展(52)       |
| 1908 | 明41 | 3月     | 員安叔父の勧めで南米行きを決定。  | 回想(111)                           |   |                        |
| 1908 | 明41 | 4月9日   | ペルー行きゴム採取移民副監督の名目。しかし徴兵忌避の手段として急遽ブラジル行に変更。  | 回想(113)<br>旅費(熊本)                 |   |                        |
|      |     | 4月28日  | 第1回伯刺西爾行笠戸丸移民781名・自由渡航者13名他の神戸港出港。  | 回想(120)<br>渡航(非移民) 25周(9)         |   |                        |
|      |     | 5月3日   |   |                                   | 通訳5人男(加藤順之助、嶺島、仁平崇、大野基尚、平野運平)、シベリア経由でサントス入港。                                | 25周(6)<br>年表(25)       |
|      |     | 6月18日  | サントス港着岸。香山のブラジル生活第一歩(香山23歳)。皇国植民会社代理人上塚周平の書記。   | 回想(139)<br>渡航(非移民)                |   |                        |
|      |     | 6月27日  | 契約移民、6配耕地に送出(ズーモン、カナーン、グアタバラ、フロレスタ、ソブラード)。  | 回想(143-144)                       |   |                        |
|      |     | 7月8日   | ズーモン耕地配給の52家族引揚げ。   | 回想(148)                           |   |                        |
|      |     | 8月25日  | ズーモン農場脱耕者9家族を率いて、ノロエステ線サンジョアキン駅(後のトレード・ビザ駅)サンジョアキン耕地入植。ノロエステ線最初の日本人入植地となる。香山は移民と共にノロエステ線のビオネイロ(開拓者)第1号。 | 回想(149)<br>40年(53、132)<br>発展(347) |   |                        |
|      |     | 10月6日  | 監督廃業、皇国植民会社書記従事。  | 回想(158)                           |   |                        |
|      |     | 10月14日 | 横口重正・タニの長女ローザ芳子、サンジョアキン耕地で誕生。   | 清A(1585)                          |   |                        |
|      |     | 10月    |   |                                   | ズーモン農場脱耕者28名を引率の有川新吉、サンパウロ・パナマ線フツシナ駅付近の鉄道工夫。日本人初の鉄道工夫同誕生。                   | 25周(34)<br>40年(132)    |
|      |     | 12月20日 |   |                                   | ノロエステ鉄道変更線アラサツバ開通。  | プ全(450)                |
| 1909 | 明42 | 7月     |   |                                   | 元フロレス耕地通訳大野基尚、フロレス耕地及びズーモン耕地脱耕者23家族57名を引率、ノロエステ線イタブラ駅付近の鉄道敷設工事従事。(第2回鉄道工夫同) | 発展(346)                |
|      |     | 11月16日 |   |                                   | 野田良治二等通訳官、ベトロポリスに着任。星名謙一郎着伯。  | 外年(T11/91)<br>年表(28)   |
|      |     | 12月15日 | 皇国植民合資会社廃業、上塚や香山の失職、玩具製造、コッペイロ(家事使用人)など就労。  | 回想(159-168)                       |   |                        |
| 1910 | 明43 | 6月28日  | 旅順丸移民4家族の耕地監督兼通訳としてグアビロバ耕地に入植。10月末解雇、サンパウロ帰還。   | 回想(178)<br>25周(45)                | 旅順丸の竹村商館移民251家族945人サントス港着。この頃バウリス線バウルー支線開通。                                 | 回想(178-188)<br>プ全(450) |
|      |     | 10月11日 |   |                                   | 水野龍一、サンパウロ農務局と宣伝用コーヒー豆の請負を約し、カフェー・バウリス第一店舗を東京開店。香山長男夫蘭、日本留学時に勤務。            | 発展(307-308)            |
|      |     | 10月末   | 大野基尚に代わってモジアナ線ジャタイ耕地通訳  | 回想(184)<br>25周(54)                |   |                        |



|      |      |        |   |                                      |  |                                |
|------|------|--------|---|--------------------------------------|--|--------------------------------|
| 1911 | 明治44 | 1月8日   |   |                                      | 藤田敏郎一等書記官、臨時代理大使としてベトロポリスに就任。  | 外年<br>(T11/193)                |
|      |      | 1月21日  | 横口重正の次女静子誕生(リオデジャネイロイグアッペ植民地)。  | 回想(200)                              |  |                                |
|      |      | 1月30日  | ジャタイ事件。第2回移民、耕主側への負債返済のため青年13人とマツグロツソ州トレスラゴアス付近の鉄道工事人夫。マラリアに罹患。                         | 回想(183-194)<br>25周<br>(54、56-59)     |  |                                |
|      |      | 2月16日  | リオデジャネイロイグアッペ植民地横口重正、マラリアで死亡。   | 回想(200)                              |  |                                |
|      |      | 6月9日   |   |                                      | 大統領令第6485号によるモンソン第一植民地(1909年開設)に、鈴木貞次郎の仲介で日本人4家族入植、日本人移民初の自営農地。      | 回想(230)<br>25周(68)<br>発展(376)  |
| 1912 | 大1   | 4月28日  | 竹村植民商館通訳として、24家族を率いてグアタバラ隣接地サンタ・オリンピア耕地入植。  | 回想(217)                              | 第3回移民船(竹村植民第2回移民) 厳島丸サントス入港(移民数1432名)。                               | 回想(217)                        |
| 1913 | 大2   | 11月    | 横口重正未亡人タニと結婚。一度に1男2女の父親。  | 回想(237)                              |  |                                |
| 1914 | 大3   | 3月     | 上塚周平一時帰国。香山、松永、鈴木等と共に玩具製造開業。  | 回想(240)                              | サンパウロ州政府による4月以降日本出港の日本人移民の渡航費補助中止(第1期補助金中止)。                         | 概史(52)<br>回想(233)              |
|      |      | 8月11日  | 物産高騰で玩具製造中止。モオカ地区でのポルトガル語教師、ペンキ塗師などの貧乏生活。   | 回想(228、240)                          | 第一次世界大戦(～1918年11月)。日本国内に大戦景気起る。                                      | 回想(246)                        |
|      |      | 8月15日  |   |                                      | パナマ運河開通。移民船の航行日数短縮。  | 年表(34)                         |
|      |      | 10月30日 |   |                                      | ノロエステ鉄道貫通。現在のマツグロツソ・ド・スル州カンボグランデ近隣で連結。                               | 伯史(260)<br>発展(346)             |
|      |      | 12月    | 長女セリーナ露子誕生(サンパウロ)。  | 回想(485)                              |  |                                |
|      |      | 12月    | モジアナ線プロドウスキー駅モロー・アルト分耕地、日本人コロニア総監督村崎豊重を頼り移動。初めて農民としての仕事を体験。                             | 回想(247-250)                          |  |                                |
| 1915 | 大4   | 3月下旬   | 村崎豊重家族とノロカバナ線モンソン第一植民地ラランジェイス区入植。2アルケールの借地農。香山が移民となった瞬間。当時の日本人入植者は28家族100余名。            | 回想(255)                              | 平野運平、ノロエステ線カフェランジャに平野植民地を建設。   |                                |
|      |      | 7月14日  |   |                                      | サンパウロ日本帝国総領事館正式開設。初代総領事松村貞雄。   | 25周(75)<br>発展(142)             |
|      |      | 10月    | 第1モンソン植民地カッポン・リッコ区44番ロッテの独立自営農民となる。リオ・バルド区に大雄害発生。此の頃大阪朝日新聞からブラジル通信員に任命辞令あり。香山が新聞人になる契機。 | 回想(263,266,268)<br>清A(229)<br>年表(36) | パナマ運河経由の大阪商船南米航路開設。  | 年表(36)                         |
| 1916 | 大5   | 1月1日   | 星名謙一郎、サンパウロで週刊『南米』創刊。協力者輪瀬俊午郎。  | 回想(270)<br>発展(384)<br>40年(407)       |  |                                |
|      |      | 3月31日  |   |                                      | ブラジル移民組合組織される。竹村、東洋、森岡各移民会社の共同。1917年にサンパウロ支店開設。                      | 25周(64)<br>40年(89)             |
|      |      | 8月31日  | 『日伯新聞』創刊。金子保三郎と輪瀬俊午郎による共同。  | 回想(278)<br>発展(259)<br>40年(408)       |  |                                |
| 1917 | 大6   | 2月25日  | 長男夫陽誕生(モンソン植民地カッポン・リッコ区)。   | 回想(280)                              |  |                                |
|      |      | 6月15日  |   |                                      | 補助移民再開。若狭丸サントス港着。ブラジル移民組合サンパウロ支店長刈谷三市、黒石清作、高岡孝太郎医師、半田己子次、杉本芳之助などが乗船。 | 40年(90)<br>発展(313)<br>年表(39)   |
|      |      | 8月31日  | 『伯刺西爾時報』創刊。社主黒石清作。邦字新聞としては最初の活字新聞。上塚周平再渡伯。  | 回想(281)<br>発展(408)<br>40年(408)       |  |                                |
|      |      | 12月1日  |   |                                      | 海外興業株式会社(海興)創立。(日本)  | 25周(65)<br>発展(174)             |
| 1918 | 大7   | 5月13日  | 上塚第一植民地(イタコロミー植民地)、エイトール・レグール駅(現在のプロミッソ)に建設開始。香山は山伐請負師となる。8月初めて家を立てる。                   | 回想(278)<br>発展(359)<br>年表(41)         |  |                                |
|      |      | 7月1日   |   |                                      | リベイロン・プレットにサンパウロ総領事館分館開設。初代主任は副領事三隅兼蔵。                               | 発展(148)<br>外年(T15/265)         |
|      |      | 12月    | 香山次男エイトール、エイトール・レグール植民地で誕生。名付け親は上塚周平。   | 回想(305)                              |  |                                |
|      |      | 12月11日 |   |                                      | 海外興業株式会社、州令13325号によって営業許可となる。  | 25周(65)<br>年表(42)              |
| 1919 | 大8   | 3月21日  |   |                                      | 菊池重次郎来伯。植民地建設支援。(1920年4月まで滞在)  | 年表(89)                         |
|      |      | 4月4日   |   |                                      | 海外興業株式会社と伯刺西爾拓殖組合合併す。  | 40年(91)<br>年表(43)              |
|      |      | 7月1日   |   |                                      | 横浜正金銀行支店、リオデジャネイロに開設。  | 年表(43)                         |
|      |      | 9月26日  |   |                                      | 『日伯新聞』、金子保三郎から三浦豊に経営権移譲。11月14日から活字新聞。                                | 40年(408)<br>25周(597)<br>年表(44) |
| 1920 | 大9   | 9月8日   | 藤田敏郎サンパウロ総領事就任。   | 発展(147)<br>外年(T15/265)               | 上塚、イタコロミー植民地開設。同時に鈴木貞次郎プロミッソ駅コロゴアズール植民地開設・分譲開始。                      | 回想(292-299、309)                |
|      |      | 12月11日 |   |                                      | サンパウロ州政府農務長官ヘイトール・ベンテアードによる日本移民への補助金拒否。これによりサンパウロ州政府による第2期補助移民終了。    | 40年(91)<br>発展(318)             |
| 1921 | 大10  | 1月1日   | 上塚周平と訣別   | 回想(316)                              |  |                                |
|      |      | 1月20日  | パウルー日本領事館開設。多羅間鉄輔領事代理として就任。   | 発展(150)<br>外年(T15/266)               |  |                                |
|      |      | 5月6日   | 『伯刺西爾時報』社に香山六郎名で『聖州新報』発刊予告を掲載。  | 時報(187)                              |  |                                |
|      |      | 5月末    | エイトール・レグールを去り、パウルー駅奥ビラ・ファルコン2kmに転住。新聞社開設準備を始める。   | 回想(325)                              |  |                                |
|      |      | 9月7日   | パウルー市で『聖州新報(Semario de S.Paulo)』創刊。社主香山六郎。創刊当初は手書きのジコ版。発行部200部。                         | 回想(325)<br>25周(624)<br>40年(407)      |  |                                |
|      |      | 11月    | ビラ・ファルコン1kmに転住。パウルーでの取材が楽になる。   | 回想(327)                              | 上塚第2植民地、リンス駅に開設  |                                |
| 1922 | 大11  | 5月13日  |   |                                      | ノロエステ日本人会創立総会・プロミッソにて。会長・上塚周平。                                       | 年表(48)                         |
|      |      | 9月7日   |   |                                      | ブラジル独立100年祭。日本からは巡洋艦「浅間」他2隻参加。                                       | 年表(49)                         |
| 1923 | 大12  | 2月23日  | パウルー駅近くのノロエステ街サンタ・カーザ通り11番に転住。郵函58。   | 回想(301)<br>聖報(71)                    |  |                                |
|      |      | 5月1日   | ノロエステ同胞植民の第2期始まる。上塚新植民地売りだす。  | 聖報(81)                               | 日本公使館が大使館に昇格(南米最初の大使館)。堀口久万一時代理大使。5月28日には野田良治臨時代理大使となる。              | 官報(51)                         |



|      |        |        |   |   |  |
|------|--------|--------|---|---|--|
|      |        | 6月     |   | ノロエステ線グアインペーに第二上塚植民地開設。   | 年表(50)                                       |
|      |        | 8月16日  |   | 田付七太初代特命全權大使就任。   | 官僚(51)<br>回想(347)<br>外年(714/241)             |
|      |        | 9月1日   |   | 日本、関東大震災。此の頃パウルー市に平田旅館(社主平田崎太郎)・日本旅館(社主沖山心平)開業。   | 回想(337)                                      |
|      |        | 10月22日 |   | レイス移民法案連邦下院提出   | 40年(419)                                     |
| 1924 | 大13    | 3月28日  | 本社をパウルー市ノロエステ街からピヨタン街15-13。郵便58へ移転。   | 聖報(125-126)   | 発展(149)                                      |
|      |        | 5月26日  |   | アメリカ排日移民法成立。  | 年表(52)                                       |
|      |        | 9月     |   | 日本政府によるブラジル移民全員の船賃支給と移民会社への手数料(1人当たり35円)も政府支給となる＝国策移民の開始。                                   | 発展(177)                                      |
|      |        | 10月1日  |   | ノロエステ線にアリアンサ移住地創設。2200アルケールの登記終了。11月2日、信濃海外協会による移住地建設開始。                                    | 発展(363)                                      |
| 1925 | 大14    | 5月8日   | 印刷技術をジコ版から活字版へ変更。   | 聖報(177)   |  |
|      |        | 7月10日  | 上塚周平による珈琲被害救済のための「日本人土地所有面積等の申出」『聖報』に掲載される(請願運動の開始)。  | 聖報(186)   |  |
| 1926 | 大15・昭1 | 1月29日  | 田付大使ノロエステ・奥ソロカバナ訪問(随行者は赤松総領事、江越信胤技師、原田書記主等)。  | 聖報(214)   |  |
|      |        | 3月22日  |   | 珈琲被害被害救済者低利貸付金85万円議会で通過。横浜正金銀行リョ支店を介して貸付準備となる。  | 帝国(51)                                       |
|      |        | 4月7日   | 次女ジェニー秋子、パウルーにて誕生。母タニ43歳。   | 回想(347)   |  |
|      |        | 12月12日 | 星名謙一郎、アルバーレス・マッシャード駅にて暗殺される。  | 聖報(259)   |  |
| 1927 | 昭2     | 2月26日  | 八五低賃貸付金ノソロカバナ線・ノロエステ線沿線希望者に貸付終了。  | 聖報(273)   |  |
| 1928 | 昭3     | 4月8日   | 香山六郎『のろえて日本人年鑑』聖州新報社発行。   | 聖報(416)   |  |
|      |        | 7月20日  | 印刷機をミネルバ式ビッチトップ型カラブラネッタ式シリンドルに交換。   | 聖報(432)   |  |
|      |        | 8月30日  | プロミッソン入植10年祭。   | 聖報(437)   |  |
| 1929 | 昭4     | 3月25日  |   | 法令3708号持分会社法による有限責任ブラジル拓殖組合(ブラ拓)創立。海外移住組合現地事業組織。  | 年表(63)                                       |
| 1930 | 昭5     | 1月15日  | リンス支社開設。  | 聖報(507)   |  |
|      |        | 3月7日   | 新聞をゼルマニア型に変更。   | 聖報(514)   |  |
|      |        | 4月29日  | 『アリアンサ時報』創刊。アリアンサ移住地、社長宮尾厚、主筆中川権三郎。1937年アラサツ・バに転移し『日伯共同新聞』と改名。  | 40年(409)<br>年表(66)  |  |
|      |        | 7月30日  | 香山六郎『ノロエステ、ソロカバナ、パウリスタ三線邦人年鑑』聖州新報社発行。   | 三線(表紙)<br>年表(67)  |  |
|      |        | 11月3日  |   | ジェツリオ・ヴァルガス政権掌握。国家主義時代到来。   | 年表(66)                                       |
| 1931 | 昭6     | 1月1日   |   | G   | 年表(67)                                       |
|      |        | 3月12日  |   | ブラジル連邦共和国司法大臣による三浦警国外追放令。6月1日、大統領令により追放取消となり、カナリア諸島・バルマス港よりブラジルに帰国(第1次国外追放事件)。              | 年表(68)                                       |
|      |        | 8月11日  |   | 改正新内国人雇用令公布。個人、企業、協会、組合、会社で5人以上雇用する商業者は、その3分の2以上ブラジル人を雇用すべし。                                | 70年(73)<br>議会(67回)<br>年表(68)                 |
|      |        | 9月7日   | 本社をピヨタン街からモンセニョール・クラーク街4-35に移転。『聖州新報』創刊10周年記念号発行。以後、週2回5,300部発行。  | 聖報(591)   |  |
| 1932 | 昭7     | 1月14日  | 『日本新聞』創刊。社主翁長助成、主筆中西周南。沖縄県人らによる『旧南米新報』を買収し創立した。   | 40年(409)<br>年表(69)  |  |
|      |        | 6月25日  | 『北西民報』創刊。社主梶本明、ピリグイ駅。   | 40年(409)<br>年表(70)  |  |
|      |        | 7月16日  | サンパウロ護憲革命勃発により、在サンパウロ邦人有志が赤十字後援団を組織し、革命支持の為の金品募集を4邦字新聞社後援の下に開始。   | 年表(71)  |  |
| 1933 | 昭8     | 6月18日  | 在伯日本移民25周年記念祭。サンパウロ市ピラ・マリアーナ地区日本病院建設予定地で実施。招待された笠戸丸移民は60名。  | 年表(73)  |  |
|      |        | 11月    |   | 外国移民二分制限法の制定  | 伯史(283)<br>40年(425)                          |
|      |        | 12月1日  |   | 連邦令第235335号により、農賃半減令公布。此の日以前の農民の負債を半減させる。八五低賃も対象となる。その後3回の訂正により1934年5月12日付令第24233号により正式に公布。 | 年表(74)                                       |
| 1934 | 昭9     | 2月11日  |   | 水野龍と上塚周平勲六等旭日章伝達式。  | 発展(360)<br>年表(76)                            |
|      |        | 4月23日  |   | 日伯産業組合中央会創設。  | 年表(77)                                       |
|      |        | 7月16日  |   | ブラジルで1934年憲法公布。1934年憲法第151条補項第6号により外国移民二分制限法公布。日本は過去の入国数124,457人により、その割り当て数は2,489人となった。     | 伯史(283)<br>25年(598)<br>40年(427)<br>概史(65,71) |
|      |        | 8月20日  | 香山六郎著『在伯日本移民25周年記念鑑』パウルーの聖州新報社にて発行。   | 25周(奥付)   |  |
|      |        | 11月13日 | 『聖州新報』サンパウロ進出。呼称もNoticias de S.Pauloと変更。創刊905号目がNoticias de S.Paulo発刊第1号。週2回発行。住所：アセンブレア街16番地。社長は養女静子の夫でブラジル人のダリオ・プラテス・アルメイダ。(『聖州新報』隆盛期)。 | 聖報(905)<br>40年(206)<br>回想(379-382)  |  |
| 1935 | 昭10    | 1月20日  |   | 『日伯』創刊20周年記念日本訪問団。(2年半にわたる三浦の日本幽閉)、1937年5月30日、サントス着。  | 風狂(371)                                      |
|      |        | 12月    | サンパウロ市アッセンブレア街、ブラジル人経営雑誌社「農業の友」社の家屋へ移転。   | 回想(381)   |  |
| 1936 | 昭11    | 7月6日   | 上塚周平死亡(享年60歳)、墓碑銘揮毫は香山が市毛総領事に依頼。  | 回想(399)<br>年表(84)   |  |
|      |        | 12月    | 長男の夫婦、日本留学。早稲田国際学院入学、聖州新報への日本語通信開始。   | 学報9号、清A(1109)   |  |
| 1937 | 昭12    | 1月1日   | 夫陽、国際学院1年B組、4月からはA組。  | 祖国便り・聖報(1219)   |  |
|      |        | 3月     |   | 聖報(1115)  |  |
|      |        | 7月18日  | 此の頃から日支事変関係記事ばかりとなる。  | 外国語新聞・雑誌発行取締り規制公布。  | 年表(85)<br>取締(133)                            |
|      |        | 8月3日   | 『聖報歌壇』の歌集『移り来て』発刊。女性記者須貝富美子の活躍。香山の雅号は「素骨」。  | 聖報(1121)<br>40年(334)<br>回想(387)   |  |



|      |     |        |  |                                   |  |                               |
|------|-----|--------|--|-----------------------------------|--|-------------------------------|
|      |     | 8月23日  | 『聖州新報』第1279号、『伯刺西爾時報』第1376号より日刊紙となる。『日伯新聞』は25日の第1187号から日刊紙となる。 | 聖報(1129)<br>回想(388)               |  |                               |
|      |     | 12月29日 | 父香山六郎の後見人であった土屋貞安叔父の死去。台湾から俊雄伯父も駆け付けた。                         | 祖国便り・聖報(1435)                     |  |                               |
| 1938 | 昭13 | 1月3日   | 香山夫婦、熊本第6師団に脚気のため入隊できず。  | 聖報(1435)                          | 南米向けポルトガル語放送開始   | ラジオ                           |
|      |     | 1月8日   | 夫陽、緊急召で熊本第6師団歩兵第13連隊入隊。  | 聖報(1678)                          |  |                               |
|      |     | 12月26日 | この頃、夫陽の除隊、東京のカフェパウリスタの通訳として働く。その後、ラジオ東京・ポルトガル語放送のアナウンサーとなる。    | 清A(1110)                          | 三浦監国外退放(第2次国外退放事件)、『日伯新聞』第1716号で発刊停止となる。   | 日伯(1716)<br>風狂(420)<br>年表(90) |
| 1939 | 昭14 | 5月27日  |  |                                   | 9月3日、第二次世界大戦始まる。新聞・雑誌の記事検閲始まる。主要記事へのポルトガル語訳添付義務、ポルトガル語欄併設指示。                             | 取締(133)<br>年表(91)取締(133)      |
|      |     | 9月1日   |  |                                   |  |                               |
|      |     | 9月13日  | 『聖州新報』紙面2頁の日刊紙。9月21日から1頁目がポルトガル語版(1940年1月13日まで)。               | 聖報(1948、1680)                     |  |                               |
|      |     | 9月25日  | 『聖州新報』本社をコンデ・デ・サンジョアキン街93番地に移転。発行人を長女の香山セリーナ露子に変更。             | 聖報(1959)                          |  |                               |
| 1940 | 昭15 | 7月25日  |  |                                   | 旧日伯新聞が『ブラジル朝日』と改称、ポルトガル語版で発刊。  | 年表(93)                        |
| 1941 | 昭16 | 1月     | 香山夫婦・実子夫妻帰伯  | 清A(1111)                          |  |                               |
|      |     | 5月30日  |  |                                   | 在伯外字新聞発行禁止令。   | 取締(178-1)                     |
|      |     | 7月30日  | 『聖州新報』廃刊宣言、第2236号。   | 聖報(2236)<br>取締(314-2)<br>40年(409) |  |                               |
|      |     | 8月2日   |  |                                   | 石村大使から豊田外務大臣への新聞廃刊延長不可電報。  | 取締(314-2)                     |
|      |     | 8月9日   |  |                                   | 『伯刺西爾時報』休刊、第2550号。1946年12月21日復刊。   | 時報(2550)<br>40年(409)          |
|      |     | 8月29日  |  |                                   | 伯國郵政総務局外字新聞搬送取換中止通達  | 取締(369)                       |
|      |     | 8月31日  |  |                                   | 『日本新聞』廃刊。  | 40年(409)<br>年表(95)            |
|      |     | 12月    |  |                                   | 『ブラジル朝日』停刊。  | 40年(409)<br>年表(95)            |
|      |     | 12月8日  |  |                                   | 太平洋戦争(〜1945年8月15日)。  | 年表(95)                        |
| 1942 | 昭17 | 1月19日  |  |                                   | サンパウロ州保安局、敵性国民取締り令公布・告示。公衆の場での自国語使用禁止、無断旅行・転居禁止、自国語記述物頒布禁止。                              | 年表(96)                        |
|      |     | 1月29日  |  |                                   | 国交断絶、在外公館閉鎖。日独伊三國人に対する取締り強化。   | 年表(96)・交流(70)                 |
|      |     | 2月2日   |  |                                   | サンパウロ市内コンデ・デ・サルゼーダス街から日本人立ち退き命令(第1次立ち退き命令)。  | 年表(96)                        |
|      |     | 7月3日   |  |                                   | 日本政府代表引揚げ。1600名の日本人、交換船グリップス・ホルム号でリオ港出港。取り残された日本人移民間に寒気意識顕在化。                            | 年表(96)<br>交流(70)              |
|      |     | 9月6日   |  |                                   | コンデ界隈、10日間の期限付第2次立ち退き命令。スペイン領事館内に日本人権益部設置。   | 年表(96-97)                     |
|      |     | 12月    |  |                                   | ラジオ東京の海外向け短波放送中断。  | ラジオ                           |
| 1943 | 昭18 | 不明     | 香山の次男エイトール、バストスで結婚。妻秀子。  | 清A(1112)                          |  |                               |
|      |     | 8月     |  |                                   | サントスから日本人24時間内立ち退き命令   | 発見(下)                         |
| 1944 | 昭19 | 不明     | 香山の長女セリーナ露子、尾関興之助とサンパウロで結婚。                                    | 清A(1108)                          |  |                               |
| 1945 | 昭20 | 6月6日   |  |                                   | ブラジル政府、日本に宣戦布告。スウェーデン公使館内に在留邦人検疫部設置  | 年表(99)・交流(53)                 |
|      |     | 8月16日  | 終戦の玉音放送(日本時間8月15日)。香山『聖州新報』保存版全てを焼却処分。                         | 回想(421)                           |  |                               |
|      |     | 9月4日   |  |                                   | GHQ指令第2号5-5項により外国語の海外放送中止命令  | ラジオ                           |
| 1946 | 昭21 | 10月12日 | 『サンパウロ新聞』創刊、邦字新聞刊行第1号。年内に『南米時事』、『伯刺西爾時報』復刊(12月23日)。            | 年表(103)                           |  |                               |
| 1947 | 昭22 | 1月1日   | 『パウリスタ新聞』刊行。週3回発行。1951年1月1日、日刊紙。                               | 年表(103)                           |  |                               |
|      |     | 3月29日  |  |                                   | 日本戦災同胞救援会誕生。ブラジル名はComite de Socorro da Vitima da Guerra do Japao。香山は幹事(顧問関係)となる。副会長矢崎節夫。 | 年表(104)<br>回想(427)            |
| 1949 | 昭24 | 1月1日   | 『日伯毎日新聞』創刊。サンパウロ市。   | 年表(106)                           |  |                               |
|      |     | 11月30日 | 香山六郎編著・発行『移民四十年史』刊行。サンパウロ市二〇街145番地。                            | 回想(434)                           |  |                               |
| 1950 | 昭25 | 5月2日   | 香山タニの実弟村崎豊重、胃潰瘍で死亡。  | 清A(1448)                          |  |                               |
| 1951 | 昭26 | 8月1日   | 香山六郎『ツビー語単語集』刊行。ツビー語・ポルトガル語・日本語対訳。                             | 回想(435)                           |  |                               |
| 1952 | 昭27 | 4月28日  |  |                                   | 日本とブラジルの国交回復。リオデジャネイロ大使館、サンパウロ総領事館昇格。戦後初代大使君塚慎義任   | 年表(114)                       |
|      |     | 4月     | 此の頃から香山の病状悪化。全盲・聴力減退。  | 回想(※天がき、435)。清A(1391-1398、1498)   |  |                               |
| 1955 | 昭30 | 5月20日  | 香山の次女ジェニー秋子、脇坂勝則とサンパウロで結婚。                                     | 清A(1113、1547-1553)                |  |                               |
|      |     | 12月17日 |  |                                   | サンパウロ日本文化協会設立。ブラジル日系人の中央機関となる。初代会長山本喜重司。   | 年表(122)                       |
| 1956 | 昭31 | 4月28日  | 香山70歳、笠戸丸神戸出帆48年目の記念日に『回想録』執筆開始。                               | 回想(※天がき)                          |  |                               |
| 1958 | 昭33 | 6月18日  | 日本移民50年祭、三笠宮ご夫妻ご臨席。香山の妻タニとローザ芳子(笠戸丸移民二世残存者トップ)、三笠宮に面会。         | 清A(1586-1591)                     |  |                               |
|      |     | 7月15日  | 香山、「直筆ノート」34冊脱稿。   | 清A(1594)                          |  |                               |
| 1962 | 昭37 | 3月末    | 次女の脇坂ジェニーによって「直筆ノート」の「清書ノート」転記終了。                              | 清A(1597)                          |  |                               |
| 1971 | 昭46 | 7月     | 香山の秘書桜庭マス江により「清書原稿A」転記作業1594頁分実施。                              | 回想(※天がき)                          |  |                               |
| 1973 | 昭48 | 11月2日  | 香山タニ死亡(享年91歳)。   | 脇坂(イン)                            |  |                               |
|      |     | 11月30日 | ツビー語研究所発刊。国立国語研究所へ寄贈。  | 清A(1597)                          |  |                               |
| 1976 | 昭51 | 4月6日   | 香山六郎死亡(享年90歳)。   | 脇坂(イン)                            |  |                               |

下記(注)により筆者作成



## 注【典拠文献の表記方法について】

### 1. 元号の表記方法

| 元号 | 略記号 | 表記方法      |
|----|-----|-----------|
| 慶応 | 慶   | 慶応3年 ⇒ 慶3 |
| 明治 | 明   | 明治5年 ⇒ 明5 |
| 大正 | 大   | 大正7年 ⇒ 大7 |
| 昭和 | 昭   | 昭和9年 ⇒ 昭9 |

### 2. 典拠文献の表記方法

| 典拠文献   | 表記方法   |
|--|--------|
| 香山六郎『回想録』香山六郎回想録刊行委員会.1976年。                                     | 回想     |
| 香山六郎『回想録 清書原稿A』ジェニー脇坂.1962年。                                     | 清A     |
| サンパウロ人文研『ブラジル日本移民・日系社会史年表』同人文研.1996年。                            | 年表     |
| 香山六郎『在伯日本移民25周年記念鑑』聖州新報社.1934年。                                  | 25周    |
| 香山六郎『ノロエステ、ソロカバナ、パウリスタ三線邦人年鑑』聖州新報社.1930年。                        | 三線     |
| 青柳郁太郎『ブラジルに於ける日本人発展史上巻』ブラジルに於ける日本人発展史刊行委員会.1941年。                | 発展     |
| 香山六郎編著・発行『移民四十年史』1949年。  | 40年    |
| 山本・須田『ブラジルの日系人口推計』SOCIEDADE PAULISTA DE CULTURA JAPONESA.1957年。  | 人口     |
| 移民70年史編集委員会『ブラジル日本移民七十年史』ブラジル日本文化協会.1980年。                       | 70年    |
| 日本ブラジル交流史編集委員会『日本ブラジル交流史』日本ブラジル中央協会.1995年                        | 交流     |
| 第51帝国議会衆議院予算委員会議録  | 帝国     |
| 帝国議会説明参考資料(略称:議会議録)  | 議会     |
| 外務省『各国に於ける新聞・雑誌取締関係雑件伯国の部単巻』外務省記録目録A.3.5.0.6-16. 1940年。          | 取締     |
| 外務大臣官房人事課『外務省年鑑 大正15年』クレス出版.1999年。                               | 外年     |
| 秦郁彦『日本官僚制総合辞典1868-2000』東京大学出版会.2001年。                            | 官僚     |
| 巻島得寿『日本移民概史』海外興業.1937年   | 概史     |
| 佐藤常蔵『ブラジル全史』トッパンプレス.1984年  | ブ全     |
| 前山隆『風狂の記者 ブラジルの新聞人三浦鑿の生涯』お茶の水書房.2002年。                           | 風狂     |
| 京都府第一中学校校友会『学友会誌』第8号1900年。                                       | 学友     |
| 熊本清々賛同窓会名簿委員会『清々賛創立100周年記念清々賛同窓会会員名簿』同委員会.1982年。                 | 清賛     |
| 日本大学百年史編集委員会『日本大学百年史第1巻』日本大学.1997年。                              | 日大     |
| 熊本県『外国旅券下付表及び進達』外務省.1908年4月9日                                    | 旅券     |
| 皇国植民合資会社『第一回伯刺西爾移民渡航者名簿』海外興業株式会社.1908年                           | 渡航     |
| 『肥後世襲士籍』1862(文久2)年   | 肥後     |
| 聖州新報   | 聖報     |
| 日伯新聞   | 日伯     |
| 早稲田国際学院学報  | 学報     |
| ジェニー脇坂(日本国籍名はジェニー秋子香山)との国際電話インタビュー:2015年10月25日                   | 脇坂(イン) |
| ラジオ東京(短波放送)okalab.hotcom-web.com/radio.tokyo.html 2016年5月15日アクセス | ラジオ    |

### 3. 典拠文献該当頁・号数の表記方法

| 典拠文献該当頁・号数         | 表記方法        |
|--------------------|-------------|
| 香山六郎『回想録』210頁      | 回想(210)     |
| 香山六郎『回想録』210頁～215頁 | 回想(210-215) |
| 外務省年鑑大正15年、135頁    | 外年(T15/135) |
| 新聞雑誌取締に関する雑件第133号  | 取締(133)     |
| 『聖州新報』第472号        | 『聖報』(472)   |